

# 松崎地区内陸工業用地造成整備事業 埋蔵文化財調査報告書 2

— 印西市松崎 I 遺跡 —

平成16年 3 月

千 葉 県 企 業 庁  
財団法人 千葉県文化財センター

# 松崎地区内陸工業用地造成整備事業 埋蔵文化財調査報告書 2

いんざい まつざき  
— 印西市松崎 I 遺跡 —



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第471集として、千葉県企業庁の松崎地区内陸工業用地整備事業に伴って実施した印西市松崎Ⅰ遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器集中地点や縄文時代の炉穴・土坑群、さらには弥生時代終末期から古墳時代前期の住居跡、古墳時代前期の方墳が多数発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年 3月25日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水 新次

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県企業庁による松崎地区内陸工業用地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市松崎字坂東1,006-1ほかに所在する松崎Ⅰ遺跡(遺跡コード327-002)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節、第3節以下の遺物に関する記述及び第3章第2節以下を栗田則久が、第2章第2節及び第3章第1節を山岡磨由子が担当し、それ以外の部分は内田龍哉が担当した。なお、弥生土器・土師器の実測については木島桂子が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、印西市教育委員会、千葉県企業庁ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「小林」〔白井〕
- 8 遺跡付近航空写真(図版1)は、京葉測量株式会社によって撮影されたものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。なお、測量は日本測地系による。

# 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	2
第2節	遺跡の位置と環境	3
1	遺跡の位置と環境	3
2	松崎Ⅰ遺跡と周辺の遺跡	3
第2章	検出した遺構と遺物	9
第1節	旧石器時代	9
1	概観	9
2	第1文化層	13
3	第2文化層	16
4	第3文化層	47
5	第4文化層	51
6	その他の遺物	65
第2節	縄文時代	68
1	炉穴	68
2	土坑	89
3	遺構外出土遺物	95
第3節	弥生時代～古墳時代	117
1	竪穴住居跡	117
2	方墳	147
3	土坑	153
4	遺構外出土遺物	154
第4節	奈良・平安時代	154
1	竪穴住居跡	154
第5節	中・近世	156
1	掘立柱建物	156
2	地下式坑	156
3	土坑	156
4	溝状遺構	160
第3章	まとめ	161
第1節	旧石器時代	161
第2節	縄文時代	163
第3節	弥生時代末から古墳時代前期	164
報告書抄録		巻末

## 挿図目次

第 1 図	グリッド名称例	3	第 34 図	第 5 地点遺物分布・出土遺物	50
第 2 図	松崎 I 遺跡の位置と周辺の遺跡	4	第 35 図	第 6・7・8 地点遺物分布	52
第 3 図	上層確認トレンチ及びグリッド配置図	6	第 36 図	第 6 地点遺物分布	53
第 4 図	上層遺構配置図	7	第 37 図	第 7 地点器種別分布	54
第 5 図	上層遺構配置図 (部分拡大図)	8	第 38 図	第 7 地点母岩別分布	55
第 6 図	下層確認グリッド配置及び本調査対象 範囲	11	第 39 図	第 8 地点遺物分布	57
第 7 図	基本土層図	12	第 40 図	第 6・7・8 地点出土遺物 (1)	58
第 8 図	折れによる遺存部位の表示	13	第 41 図	第 6・7・8 地点出土遺物 (2)	59
第 9 図	第 1 地点遺物分布	14	第 42 図	第 9 地点遺物分布	60
第 10 図	第 1 地点出土遺物	15	第 43 図	第 9 地点出土遺物	62
第 11 図	第 2・3 地点遺物分布	17	第 44 図	地点外及び単独出土遺物分布	66
第 12 図	第 2 地点器種別分布	18	第 45 図	地点外及び単独出土遺物	67
第 13 図	第 2 地点母岩別分布	19	第 46 図	炉穴 (1)	70
第 14 図	第 3 地点器種別分布	20	第 47 図	炉穴 (2)	71
第 15 図	第 3 地点母岩別分布	22	第 48 図	炉穴 (3)	73
第 16 図	第 2・3 地点出土遺物 (1)	26	第 49 図	炉穴 (4)	74
第 17 図	第 2・3 地点出土遺物 (2)	27	第 50 図	炉穴 (5)	76
第 18 図	第 2・3 地点出土遺物 (3)	28	第 51 図	炉穴出土縄文土器 (1)	78
第 19 図	第 2・3 地点出土遺物 (4)	29	第 52 図	炉穴出土縄文土器 (2)	79
第 20 図	第 2・3 地点出土遺物 (5)	30	第 53 図	炉穴出土縄文土器 (3)	80
第 21 図	第 2・3 地点出土遺物 (6)	31	第 54 図	炉穴出土縄文土器 (4)	81
第 22 図	第 2・3 地点出土遺物 (7)	32	第 55 図	炉穴出土縄文土器 (5)	82
第 23 図	第 2・3 地点出土遺物 (8)	33	第 56 図	炉穴出土縄文土器 (6)	83
第 24 図	第 2・3 地点出土遺物 (9)	34	第 57 図	炉穴出土縄文土器 (7)	84
第 25 図	第 2・3 地点出土遺物 (10)	35	第 58 図	炉穴出土縄文土器 (8)	85
第 26 図	第 2・3 地点出土遺物 (11)	36	第 59 図	炉穴出土縄文土器 (9)	86
第 27 図	第 2・3 地点出土遺物 (12)	37	第 60 図	炉穴出土縄文土器 (10)	87
第 28 図	第 2・3 地点出土遺物 (13)	38	第 61 図	炉穴出土縄文土器 (11)	88
第 29 図	第 2・3 地点出土遺物 (14)	39	第 62 図	SK259出土土製品	89
第 30 図	第 2・3 地点出土遺物 (15)	40	第 63 図	土坑 (1)	91
第 31 図	第 2・3 地点出土遺物 (16)	41	第 64 図	土坑 (2)	93
第 32 図	第 4 地点遺物分布	48	第 65 図	土坑出土縄文土器	94
第 33 図	第 4 地点出土遺物	49	第 66 図	SK107出土土製品	94
			第 67 図	遺構外出土縄文土器 (1)	97

第 68 図	遺構外出土縄文土器 (2)……………98	第 94 図	SI120・121……………132
第 69 図	遺構外出土縄文土器 (3)……………99	第 95 図	SI122 (1)……………134
第 70 図	遺構外出土縄文土器 (4)……………100	第 96 図	SI122 (2)・123……………136
第 71 図	遺構外出土縄文土器 (5)……………101	第 97 図	SI124・125……………138
第 72 図	遺構外出土縄文土器 (6)……………102	第 98 図	SI126~129……………140
第 73 図	遺構外出土縄文土器 (7)……………103	第 99 図	SI130~132……………142
第 74 図	遺構外出土縄文土器 (8)……………104	第 100 図	SI133・134……………144
第 75 図	遺構外出土縄文土器 (9)……………105	第 101 図	SI135・140・141……………145
第 76 図	遺構外出土縄文土器 (10)……………106	第 102 図	SI142……………146
第 77 図	遺構外出土縄文土器 (11)……………107	第 103 図	SM001・004……………147
第 78 図	遺構外出土縄文土器 (12)……………119	第 104 図	SM002・003 (1)……………149
第 79 図	遺構外出土縄文土器 (13)……………110	第 105 図	SM003 (2)……………150
第 80 図	遺構外出土縄文土器 (14)……………111	第 106 図	SM005・006……………151
第 81 図	遺構外出土縄文土器 (15)……………112	第 107 図	SM007……………152
第 82 図	遺構外出土縄文土器 (16)……………113	第 108 図	SK256……………153
第 83 図	遺構外出土土製品……………114	第 109 図	遺構外出土土器……………154
第 84 図	遺構外出土石器 (1)……………115	第 110 図	SI102……………155
第 85 図	遺構外出土石器 (2)……………116	第 111 図	SB001・002……………157
第 86 図	SI001・002……………118	第 112 図	SK001~007, SX001……………159
第 87 図	SI101・103……………120	第 113 図	SK002・004出土板碑……………160
第 88 図	SI104・107……………121	第 114 図	溝状遺構出土遺物……………160
第 89 図	SI108~110……………123	第 115 図	松崎 I・II 遺跡出土石器……………162
第 90 図	SI111・112……………125	第 116 図	松崎 I・II 遺跡弥生時代後期~古墳時代 前期集落変遷図 (1)……………167
第 91 図	SI113・114……………127	第 117 図	松崎 I・II 遺跡弥生時代後期~古墳時代 前期集落変遷図 (2)……………168
第 92 図	SI115~117……………129		
第 93 図	SI118・119……………131		

## 表 目 次

第 1 表	第 1 文化層第 1 地点出土石器組成表……………15	第 7 表	第 2 文化層第 3 地点出土石器組成表……………46
第 2 表	第 1 文化層第 1 地点出土石器属性表……………16	第 8 表	第 3 文化層第 4 地点出土石器属性表……………51
第 3 表	第 2 文化層第 2・3 地点母岩別石材特徴 ……………25	第 9 表	第 3 文化層第 5 地点出土石器属性表……………51
第 4 表	第 2 文化層第 2 地点出土石器属性表……………42	第 10 表	第 3 文化層第 4・5 地点出土石器組成表 ……………51
第 5 表	第 2 文化層第 3 地点出土石器属性表……………45	第 11 表	第 4 文化層第 6 地点出土石器属性表……………62
第 6 表	第 2 文化層第 2 地点出土石器組成表……………46	第 12 表	第 4 文化層第 6 地点出土石器組成表……………63

第13表	第4文化層第7地点出土石器属性表……63	第17表	第4文化層第9地点出土石器属性表……64
第14表	第4文化層第7地点出土石器組成表……63	第18表	第4文化層第9地点出土石器組成表……64
第15表	第4文化層第8地点出土石器属性表……64	第19表	地点外及び单独出土石器属性表……68
第16表	第4文化層第8地点出土石器組成表……64	第20表	遺構外出土石器 ……………116

## 図版 目 次

図版1	松崎 I 遺跡付近航空写真	図版25	SK259・SK260出土土器
図版2	松崎 I 遺跡航空写真	図版26	SK260出土土器
図版3	第1文化層第1地点 第2文化層第2・3地点 第4文化層第6・7・8地点	図版27	SK270出土土器
図版4	第1文化層第1地点, 第2文化層第2・3地点(1)出土遺物	図版28	遺構外出土縄文土器(1)
図版5	第2文化層第2・3地点(2)出土遺物	図版29	遺構外出土縄文土器(2)
図版6	第2文化層第2・3地点(3)出土遺物	図版30	遺構外出土縄文土器(3)
図版7	第2文化層第2・3地点(4)出土遺物	図版31	遺構外出土縄文土器(4)
図版8	第2文化層第2・3地点(5)出土遺物	図版32	遺構外出土縄文土器(5)
図版9	第2文化層第2・3地点(6)出土遺物	図版33	遺構外出土縄文土器(6)
図版10	第2文化層第2・3地点(7)出土遺物	図版34	遺構外出土縄文土器(7)
図版11	第3文化層第4・5地点, 第4文化層第6・7・8地点(1)出土遺物	図版35	遺構外出土縄文土器(8)
図版12	第4文化層第6・7・8地点(2)出土遺物	図版36	遺構外出土縄文土器(9)
図版13	第4文化層第9地点, 单独出土遺物	図版37	遺構外出土縄文土器(10), 縄文時代土製品・石器(1)
図版14	SK112・SK113・SK189	図版38	縄文時代石器(2)
図版15	SK203・SK206・SK207	図版39	SI001・SI002・SI101
図版16	SK252・SK258・SK259	図版40	SI103・SI104・SI107
図版17	SK260遺物出土状況・SK260・SK261	図版41	SI108・SI109・SI110
図版18	SK266・SK270遺物出土状況・SK270	図版42	SI111・SI112・SI114遺物出土状況
図版19	SK102・SK107・SK110	図版43	SI114・SI115・SI116
図版20	SK199・SK200・SK212	図版44	SI117・SI118・SI119
図版21	SK217・SK227・SK228	図版45	SI120・SI121・SI122遺物出土状況
図版22	SK232・SK253・SK254	図版46	SI122・SI123・SI124
図版23	SK264・SK265・SK267	図版47	SI125・SI126・SI127
図版24	SK258・SK259出土土器	図版48	SI128・SI129・SI130
		図版49	SI131・SI132・SI133
		図版50	SI134・SI135・SI140
		図版51	SI141・SI142・SM001
		図版52	SM002・SM002遺物出土状況・SM003



- 図版53 SM003遺物出土状況・SM003遺物出土状況・SM004
- 図版54 SM005・SM006・SM007
- 図版55 SK256・SI102・SB001
- 図版56 出土土器(1)
- 図版57 出土土器(2)
- 図版58 出土土器(3)・出土板碑

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

松崎地区内陸工業団地は、北総広域都市圏における中核都市として昭和44年から整備が進められている千葉ニュータウンの市街地に隣接している。松崎工業団地は、千葉県の「ふるさと5か年計画」や「千葉県工業振興立地ビジョン」において、中核的な工業団地として位置づけられ、千葉県と千葉県企業庁によって整備が進められている。

千葉県企業庁は、周辺の自然・文化・環境等の保護に最大の注意を払い、開発に先立って千葉県教育委員会に埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて照会した。これに対し、千葉県教育庁生涯学習部文化課（現教育振興部文化財課）は、千葉県企業庁と協議を重ね、予定地内に所在する埋蔵文化財について、やむを得ず記録保存することとし、発掘調査を実施することとなった。遺跡名は、松崎遺跡群のⅠからⅦ遺跡とした。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが行うこととなり、平成5年から現在に至るまで調査が進められ、旧石器時代から中・近世にわたる貴重な遺構や遺物が多数検出されている。

本書で報告する松崎Ⅰ遺跡の発掘調査は、平成5年8月24日から平成14年1月31日まで、断続的に4年次にわたって実施した。上層については、遺跡規模42,912㎡を対象とし、4,260㎡の確認調査、26,267㎡の本調査を実施した。下層については、1,960㎡の確認調査及び拡張、736㎡の本調査を行った。調査の結果、旧石器時代の遺物集中地点、縄文時代の炉穴や遺物包含層、弥生時代末から古墳時代前期の集落と方墳、中・近世の掘立柱建物跡などを検出した。

発掘調査及び整理作業に係る各年度の組織、担当者及び作業内容は以下のとおりである。

(発掘調査)

カッコ内の番号は第3図の地点を示す。

#### 平成5年度(1)

期間 平成5年8月24日～平成5年9月30日

組織 印西調査事務所長 田坂 浩

担当者 副所長 及川淳一

内容 上層確認調査1,030㎡、下層確認調査412㎡

#### 平成6年度(2)

期間 平成6年4月5日～平成6年7月20日

組織 印西調査事務所長 谷 匂

担当者 分室長 藪 淳一、研究員 猪股昭喜

内容 上層本調査2,300㎡

## 平成12年度（2）

期 間 平成12年4月3日～平成13年2月15日  
組 織 北部調査事務所長 石田廣美  
担当者 主席研究員 池田大助, 上席研究員 森本和男, 研究員 城田義友  
内 容 上層確認調査2,160㎡・本調査595㎡, 下層確認調査264㎡・本調査72㎡

## 平成13年度（2）・（3）

期 間 平成13年4月5日～平成14年1月31日  
組 織 北部調査事務所長 石田廣美  
担当者 主席研究員 池田大助, 調査室長 萩 淳一, 上席研究員 木下圭司  
内 容 上層確認調査1,070㎡・本調査23,372㎡, 下層確認調査1,284㎡・本調査664㎡

## （整理作業）

### 平成13年度

期 間 平成14年2月1日～平成14年2月28日  
組 織 北部調査事務所長 石田廣美  
担当者 調査室長 萩 淳一  
内 容 記録整理の一部

### 平成14年度

期 間 平成14年4月1日～平成15年3月29日  
組 織 資料部整理課長 石田廣美  
担当者 主席研究員 内田龍哉, 上席研究員 小林信一  
内 容 記録整理の一部から原稿の一部

### 平成15年度

期 間 平成15年4月1日～平成15年7月31日  
組 織 調査部副部長兼整理課長 深澤克友  
担当者 主席研究員 内田龍哉  
内 容 原稿の一部から報告書刊行

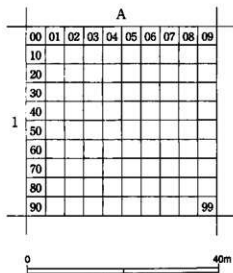
## 2 調査の方法

松崎遺跡群（I～Ⅴ遺跡）は、遺跡の面積も多く、多年度にわたる調査が予定されていたことから、遺跡群全体を対象として、公共座標（国家標準直角座標第Ⅱ系）に基づく40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドは、北西を起点として西から東に向かってA・B・C…、北から南に向かって1・2・3…とした。ただし、数字とアルファベットの区別が紛らわしいI・O・Vは使用しなかったため、抜けている。大グリッドはさらに4m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…とした。これにより、各小グリッドは、例えば2H-33, 2K-99のように呼称することとした（第1図）。

発掘調査は、まず、調査対象面積の10%を限度としてトレンチ及びグリッドを設定して、遺構の種類や

時期、その広がりを把握するために上層の確認調査を行った。その結果、松崎Ⅰ遺跡では、縄文時代以降の多くの遺構が確認され、遺構の認められない部分を除いた範囲が本調査対象となった。遺構の調査は、土層観察用のベルトを遺構の種類ごとに適宜設定して掘り下げ、遺物の出土状況や平面図等の記録を作成した。なお、遺構番号については、調査段階の番号を踏襲し、原則的に整理段階での修正は行っていない。

上層確認調査終了後、調査対象面積の4%を限度として、2m×2mのグリッドを設定し、下層(旧石器時代)の確認調査を行った。その結果、石器が出土したグリッドについて周囲を拡張し、遺物集中の広がりを確認した上で、本調査範囲を決定した。



第1図 グリッド名称例

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と環境(第2図)

松崎遺跡群の所在する印西市は、千葉県北部に広がる北総台地の北端に位置する。松崎Ⅰ遺跡は、印西市の南側に所在し、八千代市及び佐倉市の行政境に近い。遺跡は、印旛沼から流れる新川によって樹枝状に開析された通称松崎谷の最奥部にあたる台地上に立地する。台地上の標高は、約25m前後、現水田面との比高差は約15mほどである。

### 2 松崎Ⅰ遺跡と周辺の遺跡

松崎Ⅰ遺跡周辺では、旧石器時代から中・近世にかけての遺跡が多く所在することは古くから知られているが、特に千葉ニュータウン開発関係の発掘調査が大規模に展開され、印西市及び周辺の遺跡の様相が徐々に解明されてきている。以下で、発掘調査成果をもとに、時代別に周辺の主な遺跡の状況を概観する。

旧石器時代の石器群は、松崎遺跡群の中では松崎Ⅰ遺跡のほかⅡ(2)・Ⅲ(3)・Ⅳ(4)・Ⅴ(5)・Ⅵ(6)遺跡で検出され、複数の文化層が確認されている。特に、松崎Ⅱ遺跡では、Ⅸ層の石器群が環状ブロックを呈する可能性があり、注目される。本遺跡に隣接する千葉ニュータウンの調査でも多くの旧石器時代の遺跡が所在する。本遺跡と支谷を挟んで西側の台地上に所在する船尾白幡遺跡(12)では、Ⅲ層からⅤ層にかけての石器群があり、Ⅲ層の細石刃ブロックのまとまりがみられる。さらに西側に位置する向新田遺跡(17)では、第2黒色帯上部に属するブロックが検出されている。手賀沼水系と印旛沼水系の分水嶺には、木刈峠遺跡(30)や一本桜南遺跡(28)が位置する。木刈峠遺跡では、3枚の文化層に25ブロックに及ぶ石器群、一本桜南遺跡では、10層に及ぶ文化層に31ブロックの石器群が出土している。ほかに、泉北側第2遺跡(32)では環状ブロックが検出され、南西ヶ作遺跡(26)や六角遺跡(27)でも石器の出土が確認されている。新川を挟んだ八千代市おおびた遺跡(25)では、有舌尖頭器やナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると、比較的多くの遺跡が調査されている。松崎遺跡群の中では、早期の竪穴住居跡や炉穴とともに遺物包含層も比較的多く検出されており、本遺跡の様相が松崎遺跡群全体を示しているようである。周辺をみても、炉穴群と貝層が確認された船尾貝塚(11)をはじめ、多くの早期の遺跡が確



第2図 松崎1号トンネルの位置と周辺の道跡 (1/25,000)

佐倉市

認められている。一本桜南遺跡では、竪穴住居跡3軒のほか炉穴16基などが調査され、特に燃糸文期から条痕文期にかけての竪穴住居跡は類例が少なく注目される。船尾白幡遺跡でも炉穴とともに燃糸文期から条痕文期にかけての遺物が多く出土している。ほかに宗南北遺跡(34)で燃糸文期、船尾町田遺跡(13)で条痕文期の土器が認められる。八千代市側を日に向けて、栗谷遺跡(22)で炉穴22基、上谷遺跡(24)で炉穴31基が検出され、堀堀遺跡(26)、向堀遺跡(21)、役山東遺跡(23)等でやはり炉穴が確認されている。印旛村トヶ前遺跡(9)では、炉穴のほか条痕文系土器を主体とした遺物を大量に含んだ包含層がみられる。

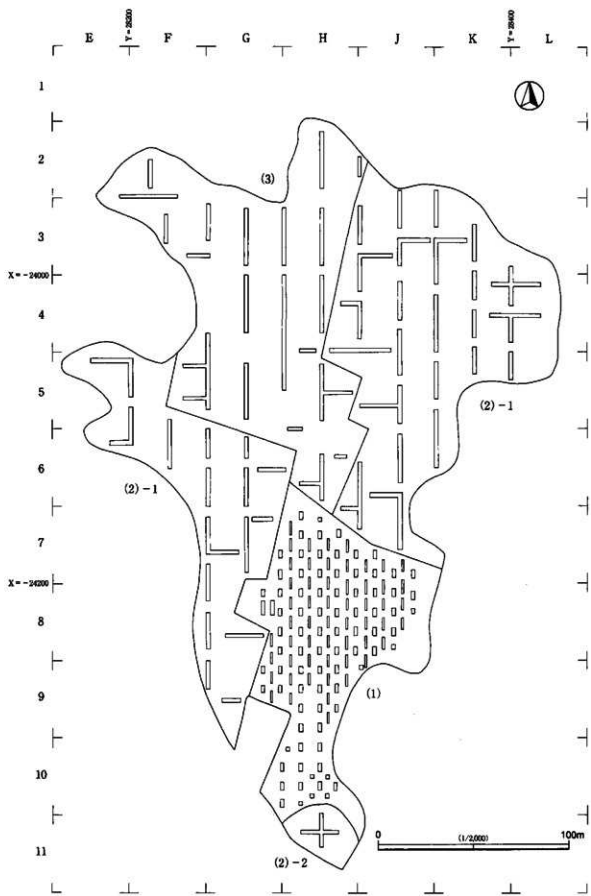
前期は少ないが、八千代市仲ノ台遺跡で黒浜期の竪穴住居跡10軒、一本桜南遺跡で石器製作跡、宗南北遺跡で関山期の炉が見つかっている。中期以降についてもそれほど多くない。阿玉台式期の土器を含む佐山貝塚(18)、加曾利EⅠからEⅢの土器が検出された別所大山遺跡(33)、晩期と思われる土坑が確認された南西ヶ作遺跡などがある。他に戸神谷の低湿地から大量の加曾利B式土器を出土した西根遺跡(14)は現在整理中であり、注目される。

弥生時代から古墳時代前期では、弥生後期の遺跡が多く所在する。中期の遺跡としては、40軒程の竪穴住居跡を伴う環濠集落である原原窪遺跡(19)があげられる程度である。後期になると、松崎Ⅰ遺跡のように後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれる集落が多くなるとともに、集落規模も大きくなっていく。向新田遺跡では、竪穴住居跡83軒が検出され、北関東系や東海系の土器がみられる。船尾町田遺跡でも21軒の竪穴住居跡とともにS字口縁や北陸系の土器が出土している。一本桜南遺跡では、古墳時代前期のみであるが、60軒の竪穴住居跡が検出され、砂鉄が保管されたような状態で出土した壺の存在が注目されている。他にも、鳴神山遺跡(15)、船尾白幡遺跡や八千代市栗谷遺跡、上谷遺跡、堀堀遺跡など多くの遺跡が調査されている。

古墳時代中期の遺跡はほとんどないが、後期になると集落や古墳などがみられるが調査例は少ない。古墳の調査例として、船尾町田遺跡があげられる。30m級の前方後円墳を含む3基の古墳が調査され、いずれも箱式石棺を埋葬施設とし、7世紀中頃の終末期古墳と想定されている。松山2号墳では、5体分の人骨が出土した切石積み箱式石棺や、須恵器・鉄鏝などが確認され、6世紀後半から7世紀初頭までの年代が考えられている。

奈良・平安時代になると、大規模な集落が形成される例が多い。鳴神山遺跡では、竪穴住居跡202軒、掘立柱建物跡43棟などが調査されている。8世紀初頭に集落が形成され、10世紀前半に衰退するが、この中には、「弘仁九年…」の紀年銘墨書土器やムラの祭祀を示す長文墨書土器などを含む1,000点に及ぶ墨書・刻書土器が注目される。近くに所在する、大規模な集落と多量の墨書土器が検出された船尾白幡遺跡や低地での祭祀を示すような遺構や墨書土器を出土した西根遺跡を含めて、この区域が古代船尾郷の拠点的な集落を形成していると思われる。印旛沼低地を挟んだ南岸の台地上にも、上谷遺跡や栗谷遺跡など大規模な集落が所在する。

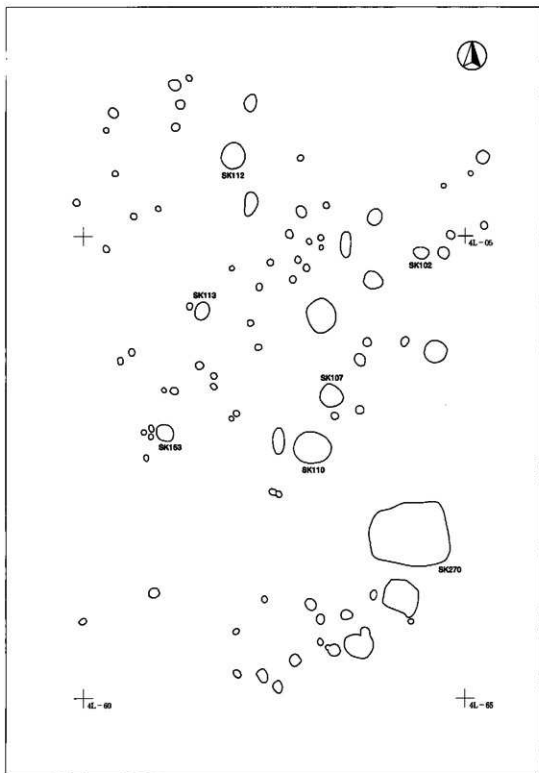
中・近世では、結禪寺塚群、大塚塚群、並塚塚群など塚の調査が比較的多く行われている。他に、白井谷奥遺跡(16)では墓域や地下式坑など、白井城に付属する城あるいは砦とされる船尾城跡(10)からは中世陶磁器類が検出されている。



第3図 上層確認トレンチ及びグリッド配置図







第5図 上層遺構配置図(部分拡大図)

## 第2章 検出した遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代

#### 1 概観

松崎Ⅰ遺跡は、印旛沼水系である新川下流域左岸の奥まった台地上に位置する。新川の支流によって開析されたこの舌状台地は北側へ向かって張り出しており、谷を挟んで東側には松崎Ⅱ遺跡が立地する。標高は25m～26mであり、現在の水田面との比高差は13m～15mほどである。

松崎Ⅰ遺跡における旧石器時代の調査は、平成5・6・12・13年度にわたって行われ、調査対象面積42,912㎡のうち、4%強にあたる1,960㎡について確認調査及び拡張を行い、遺物の出土に伴って736㎡の本調査を行った。その結果、遺物総数460点、4層の生活面が確認され、それぞれが特徴のある石器組成を示している。生活面は4層に大分されるが、石器の分布状況から9か所の集中地点が確認された。そのうち遺物をもっとも集中しているのは、この台地上の東に位置する約100㎡の平坦な区域で、296点の遺物が2か所の集中地点から出土している。また、この地点から北東にあたる台地縁辺部でも100㎡弱の広がりの中に111点の遺物を包含する。

遺物の出土分布は調査範囲の北側にのみ集中し、特に北東側で8か所、北西側縁辺部に1か所存在し、南半部では確認されなかった。また、集中地点から離れて、文化層の異なった4点の遺物が単独で散在している。

谷を挟んで東側に位置する松崎Ⅱ遺跡においては、出土した石器の組成や半円弧を描く分布の状況などから、出土遺物の主体（遺物出土数134点）がⅨc層からⅩ層にあると認識されるが、本遺跡ではⅨc層からⅩ層に生活面を有する地点は12㎡の範囲から30点が出土したのみであった。

遺物は、立川ローム層最下部であるⅩ層からソフトロームのⅢ層にかけて出土し、石器の組成・形態・石材などの特徴から4層に大別され、年代の古い順から層区分を行った。

#### 第1文化層

第1地点1か所である。Ⅸ層からⅩ層上部にかけて遺物が出土し、生活面はⅨc層からⅩ層上部にあると判断される。遺物は、約12㎡の範囲内から遺物全体の6.5%である30点を数え、頁岩剥片の接合資料などが出土している。

#### 第2文化層

第2・3地点である。Ⅶ層からⅨ層にかけて遺物が出土し、生活面はⅦ層からⅨa層にあるものと推定される。当遺跡における遺物総数の64%である296点が出土し、何らかの加工痕、使用痕が観察された石器は139点を数えた。剥片剥離工程が再現できる接合資料や、東北産と推定される良質な硬質頁岩製の石器が多数出土している。この硬質頁岩は徹底的に再利用・再加工され、20mmに満たない石器の縁辺にも二次加工痕や使用痕が顕著にみられる。

#### 第3文化層

第4・5地点である。

調査時には土層断面図は作成しなかったが、生活面はⅦ層からⅨa層のいずれかに求められるものと推

察される。第2文化層第2・3地点と第3文化層第4地点との関係を見てみると、両地点間の遺物に接合関係がなく、硬質頁岩以外の石材組成の相違や調査時の所見、平坦な台地上における0.4mのレベル差などを踏まえて、別文化層として記載した。しかし、第2地点と製作技法が共通すると思われる硬質頁岩製の石器が出土することから、第2地点～5地点が同一文化層に属する可能性は大きい。

出土遺物数はわずかに14点だが、良質な硬質頁岩や珪質凝灰岩を用いた削器、搔器、ナイフ形石器など、多様な器種が確認された。

#### 第4文化層

第6・7・8・9地点である。

第4文化層は松崎I遺跡における旧石器出土の最上層である。第6・7・8地点は本遺跡の北東隅に位置し、170m西方には第9地点がある。この第6・7・8地点と第9地点の間には石器の接合関係は確認されず、同時に形成されたものとの確証はない。だが、土層投影図および使用される石材、石器組成などから同一文化層に属する地点と判断した。土層断面へ遺物を投影したところⅢ層上部からⅤ層に包含されたが、安定したレベルはⅣ層下部に求められる。本遺跡におけるⅣ層はかなりソフトローム化しており、Ⅵ層まで混入する地点も確認できるほどであるから、Ⅴ層に投影された遺物はソフトローム化したⅣ層部分に含まれていたものと推定される。なお、Ⅴ層であるが、地点別垂直分布図(第36図)に示した通り、ソフトローム化した上部と硬質の下部に二分された。

第6・7・8地点は東側が谷であるため、北を上を設定すると右側に向かって緩やかに傾斜している。東西12.1m、南北9.1mの範囲に111点の遺物が集中し、西側から順に第6地点、第7地点、第8地点と区分した。また、実測した遺物の記述をそれぞれの地点ごとに記したが、実測図は第6・7・8地点をまとめて掲載した。

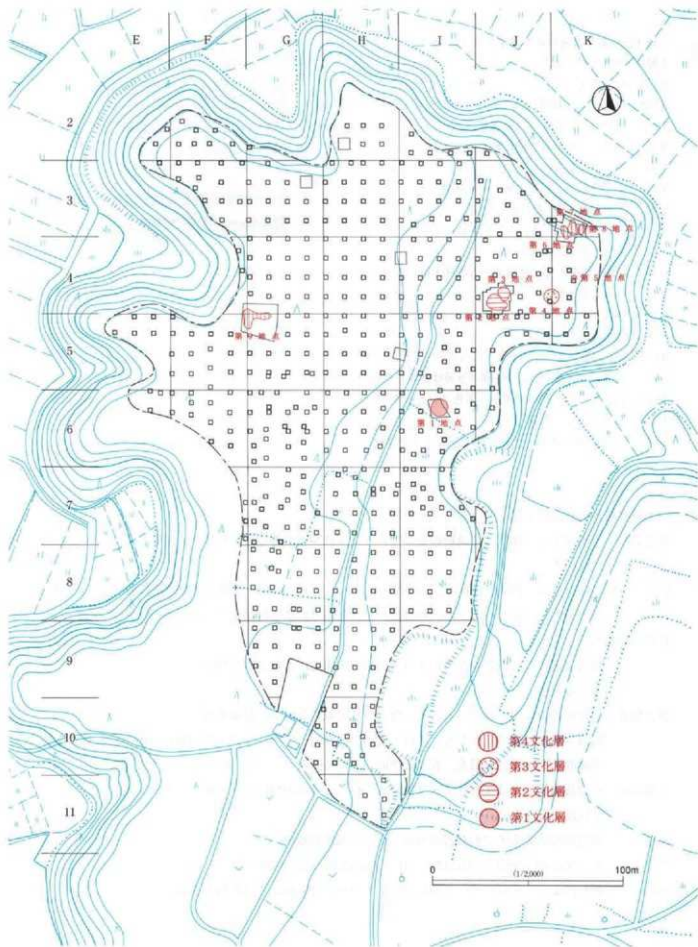
遺物は、礫・礫片が目立ち、出土遺物数116点のうち実測を要しない石片が97点と多い一方、時代示準となるような角錐状石器とその調整剥片の接合資料が出土している。

#### その他の遺物

この他、集中地点に含まれなかった石器は「地点外及び単独出土遺物」として取り上げた。帰属する文化層、出土層位など不明瞭な点が多い。

下総台地における立川ローム層の区分は武蔵野台地に対比するが、火山灰の供給源からより距離を置くため、ATバミスを含むⅥ層は降水量が武蔵野台地におけるⅥ層よりも、薄く不安定となっている。このため地表面の影響を受けやすく、Ⅵ層より上部の層であるⅣ層からⅤ層については自然の攪乱によってローム層がソフト化される傾向がみられる。下総台地では特に、白井市、印西市、八千代市においてその傾向が強く、当松崎I遺跡でもⅣ、Ⅴ層の分層は困難である。地点によっては第2黒色帯にもソフトロームの混在がみられる。なお、Ⅸ層であるが、Ⅸa、Ⅸb、Ⅸc層の分層が不明確な地点も多い。この点については、下総台地の標準土層\*と照らし合わせて、Ⅸ層中の出土位置に応じてⅨa、あるいはⅨcという層序名を用いた。

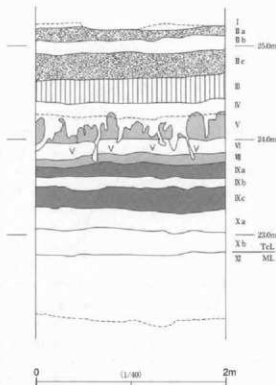
\*島立 桂・新田浩三・渡邊修・1992「下総台地における立川ローム層の層序区分—平成2・3年度職員研修会から—」『研究連絡誌』第35号(財)千葉県文化財センター



第6図 下層確認グリッド配置及び本調査対象範囲

以下に松崎 I 遺跡の基本層序を記す。

- I 層：黒色土層。表土。  
 II a 層：暗褐色土。  
 II b 層：黄褐色土。新期テフラを含む。  
 II c 層：暗褐色土。縄文時代遺物包含層。  
 III 層：ソフトローム層。黄色味を帯びる。  
 IV 層：ソフト化したハードローム層。  
 V 層：第 1 黒色帯。IV、V 層の分層困難。  
 VI 層：明黄褐色。AT を含み、堅緻。  
 VII 層：第 2 黒色上部。AT パミスが混入する。黒色・朱色スコリアが混じる。  
 IX a 層：第 2 黒色帯下部。VII 層よりも黒味が強い。AT パミスの混入が少ない。  
 IX b 層：第 2 黒色帯下部。IX a、IX c より明色な間層。スコリアを含み若干軟質。  
 IX c 層：第 2 黒色帯下部。IX a 層に比べ黒色・朱色スコリアが大きい。IX a、IX b、IX c 層の分層は困難である。  
 X a 層：褐色ローム。堅緻で黒色・朱色スコリアが多い。  
 X b 層：白味が強く、軟質である。  
 XI 層：武蔵野ローム層。上層に比べ、青みを帯び軟質。



第 7 図 基本土層図

#### 凡例

出土遺物属性表の凡例は以下のとおりである。

挿図番号 実測図として掲載した遺物の番号であり、写真図版の番号と一致する。文化層ごとに 1 から順に付けた。

打面 C は自然面、P は点状打面、L は線状打面、1 は平坦剥離、2 以上は複剥離打面で、( ) 内はネガティブバルブを有する剥離面数、- は欠損等による打面無し・計測不可を示す。

#### 打面・剥離角

打角は剥片の打面とポジティブバルブが作る角度、剥離角は石核の打面とネガティブバルブが作る角度。

背面構成 素材の情報が失われている石器に関しては記載しないが、背面構成のわかるものに関しては、観察される範囲で記入した。I は主要剥離面と同一方向、II は主要剥離面と逆方向、III は主要剥離面と直交または斜交、IV は節理面、V は原稜面。

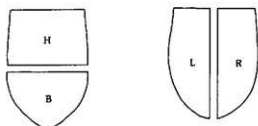
末端形状 F は直線状、H は鱗番状、S は階段状、O は石核の内側に力が向かった為にアーチ状または L 字状になったもの。

調整角 削器の刃部、ナイフ形石器の刃潰しなどの調整剥離角。

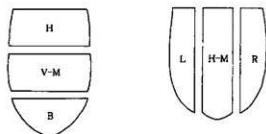
使用痕 N (Nicked edge) は刃こぼれ、H (Heated marks) は被熱痕。

折れ 折れによって残存している部位を示す。以下、背面側から見た折れを表す。

H：頭部  
B：尾部  
L：背面側から見て左部  
R：背面側から見て右部

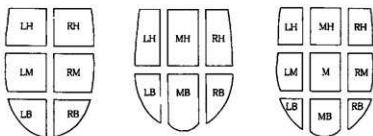


中間部の表し方  
V-M：垂直方向の中間部  
H-M：水平方向の中間部



以下、アルファベットの組み合わせによって遺存部位を表す

LH：左頭部  
LM：左中間部  
LB：左尾部  
RH：右頭部  
RM：右中間部  
RB：右尾部  
MH：中間頭部  
MB：中間尾部  
M：9分割された中間部



第8図 折れによる遺存部位の表示

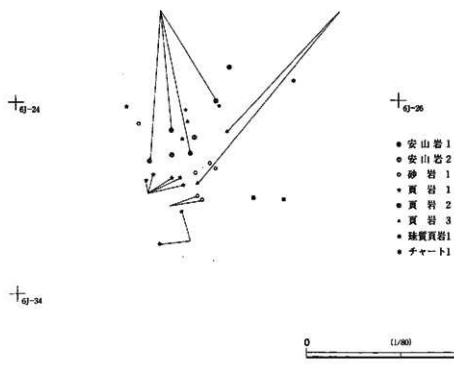
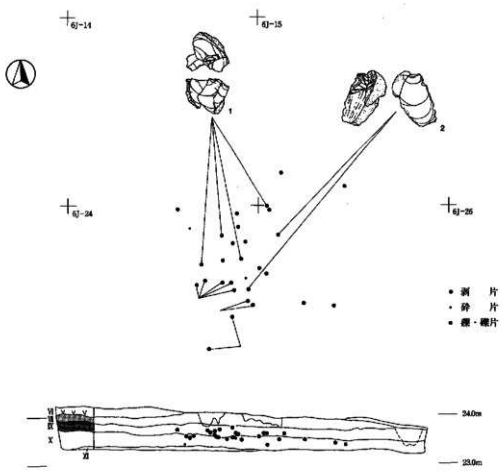
## 2 第1文化層

第1地点（第9・10図、第1・2表、図版3・4）

**平面分布** 本遺跡調査範囲の中央東側に位置する。第1地点以南からは旧石器時代遺物が出土していないため、本地点が松崎I遺跡における遺物集地点の最南部といえる。東側の谷に向かって緩やかに傾斜しているが、遺物の出土した第2黒色帯はほぼ水平に推移する。遺物の分布は小範囲にまとまり、南北に3.1m、東西に3.9mの中に30点の遺物が出土した。礫1点を除くと、剥片と碎片のみで構成される。接合資料は4個体だが、このうちの2個体は節理で破碎しているため、特に実測はしなかった。石材には偏りがあり、総出土数の2/3にあたる20点が頁岩で占められる。

**垂直分布** 遺物は土層断面図のIX層からX層上部にかけて投影され、分布の高低差は0.4mを測る。IXa、IXb、IXc層は明確には分層されないが、投影図及び出土時の所見から、生活面は下総台地の標準土層であるIXc層からX層上部と判断される。

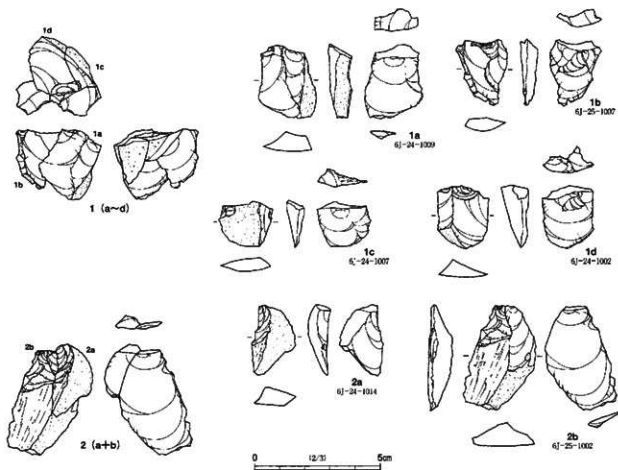
**母岩別資料の分布** 総出十点数30点のうちの11点を頁岩1が占める。2m×3mの範囲にまとまっているが、人為的な作業の結果とはいえないがたい石片が多い。「頁岩」という堆積岩の持つ特長のひとつに節理で割られやすいという性質があるが、これに自然の力が加わって破碎されたものと思われる。頁岩1・2・3を合わせて20点、安山岩1・2、チャート1は1点ずつ、珪質頁岩1は2点、砂岩1は3点出土している。**出土遺物** 器種・石材ともに偏りがみられる。安山岩1・2、砂岩1、頁岩1・2・3、珪質頁岩1、チャート1の8母岩に分類された。石片数では頁岩1が11点と、約1/3を占める。次に多い頁岩2であるが、



第9図 第1地点遺物分布

同母岩 5 点のうち 4 点が接合した。挿図番号 1 (以下、数字で示す) は自然面が茶褐色であり、剥離された風化面はザラついた感のある灰色がかった褐色であるが、ガジリ部分は漆黒である。打面と作業面を入れ換えながら剥片剥離が行われるが、作出された剥片には二次加工痕及び使用痕は看取されない。

2 は頁岩 3 の接合資料である。自然面は明黄褐色、剥離面は明灰色で、発達した明褐色の節理面を持つ。2a の末端には黒いガジリ部分がみられる。1 が打面・作業面置換型の剥離作業を行っているのに対し、2 は同一打面からの連続した剥片剥離作業が行われている。安山岩 1, 2 も石核の出土はない。



第10図 第1地点出土遺物

第1表 第1文化層 第1地点出土石器組成表

母岩	器種	剥片	碎片	總・個数	母岩断山上点数	点数比	母岩別重量 (g)	重量比
安山岩	1	1			1	3.33%	1.50	0.94%
安山岩	2	1			1	3.33%	3.00	1.90%
砂岩	1	3	2		5	16.67%	31.12	19.31%
頁岩	1	11			11	36.67%	77.84	48.31%
頁岩	2	5			5	16.67%	20.12	12.49%
頁岩	3	4			4	13.33%	15.86	9.84%
持貫頁岩	1	2			2	6.67%	5.70	3.59%
チャート	1			1	1	3.33%	5.89	3.69%
合計		27	2	1	30	100.00%	161.14	100.00%



第2表 第1文化層 第1地点出土石器属性表

属性番号	遺物番号	部材	母岩番号	最大縦 断	最大幅 断	厚さ 断	打面	打 角 鈍角	背面構成	左面 形状	調整角	使用痕 磨痕	折れ	欠損
1d	6j-15-1001	鏃	チャート	1	22.88	21.15	11.27	3.89						
	6j-15-1002	剥片	安山岩	1	17.25	23.35	4.48	1.52	1	107	I + V	S		
	6j-24-1001	剥片	頁岩	1	30.60	30.57	9.59	5.71	1	130	I + Ⅱ	F		
	6j-24-1002	剥片	頁岩	2	24.21	21.12	10.89	3.58	2	106	I + V	H		
	6j-24-1003	剥片	頁岩	3	16.82	19.23	2.51	0.58	1	115	Ⅱ	S		
1c	6j-24-1004	剥片	頁岩	1	25.46	27.63	7.70	4.06	-	-	V	S		H-M
	6j-24-1005	剥片	頁岩	1	34.38	28.84	6.87	6.24	-	-	I + V	F		
	6j-24-1006	剥片	安山岩	2	26.84	20.32	8.25	3.00	1	121	I + Ⅱ + Ⅲ	H		
	6j-24-1007	剥片	頁岩	2	17.99	21.98	7.21	1.85	1	104	I + V	H		
	6j-24-1008	剥片	頁岩	2	27.11	26.21	12.54	7.16	1	124	I + V	F		
1a	6j-24-1009	剥片	頁岩	2	28.92	23.21	6.25	5.00	1	113	I + V	S		
	6j-24-1010	剥片	頁岩	1	24.41	34.95	10.19	5.22	2	115	I + Ⅱ	S		
	6j-24-1011	剥片	頁岩	1	23.62	17.89	5.96	1.83	1	133	I + V	S		
	6j-24-1012	剥片	頁岩	1	32.27	31.81	8.90	6.43	-	-	I + Ⅱ + Ⅲ + V	S		R
	6j-24-1013	剥片	玢岩	3	20.50	26.25	11.52	8.00	C	-	Ⅱ + V	F		R
2a	6j-24-1014	剥片	玢岩	3	27.54	17.23	8.80	2.63	-	-	Ⅱ + Ⅲ + V	O		
	6j-24-1015	剥片	玢岩	1	43.99	53.89	20.46	35.83	C	-	I + Ⅱ + V	H		
	6j-24-1016	剥片	玢岩	1	12.51	23.44	3.44	0.58	L	-	I	F		
	6j-24-1017	砂岩	砂岩	1	12.62	8.91	6.01	0.60	C	78	I + Ⅱ + V	-		H
	6j-24-1018	剥片	頁岩	1	18.71	18.89	4.13	0.93	C	115	I + Ⅱ	H		R
2b	6j-24-1019	剥片	砂岩	1	43.99	14.45	13.30	8.17	-	-	I + V	S		B
	6j-24-1020	剥片	砂岩	1	19.58	14.84	12.70	4.20	C	78	I + Ⅲ + V	-		H
	6j-24-1021	砂岩	砂岩	1	10.00	8.35	8.35	0.70	-	-	I + V	F		B
	6j-25-1001	剥片	頁岩	1	26.83	10.89	13.24	2.89	-	-	I + Ⅱ + Ⅲ	F		
	6j-25-1002	剥片	頁岩	3	41.55	28.23	8.94	7.37	1	118	I + Ⅲ + V	S		
1b	6j-25-1003	剥片	砂岩	1	33.21	18.36	22.28	17.45	-	-	I + Ⅱ + V	S		
	6j-25-1004	剥片	頁岩	3	25.96	24.52	8.96	5.28	2	112	I + Ⅱ + V	S		
	6j-25-1005	剥片	珪質頁岩	1	21.38	19.96	6.21	2.00	P	-	I + V	Ⅱ		
	6j-25-1006	剥片	珪質頁岩	1	23.23	30.57	5.87	3.79	1	116	I + V	Ⅱ		
	6j-25-1007	剥片	頁岩	2	26.49	20.43	6.86	2.52	1	118	I + Ⅱ + V	Ⅱ		

## 3 第2文化層

第2・3地点(第11~31図, 第3~7表, 図版3~10)

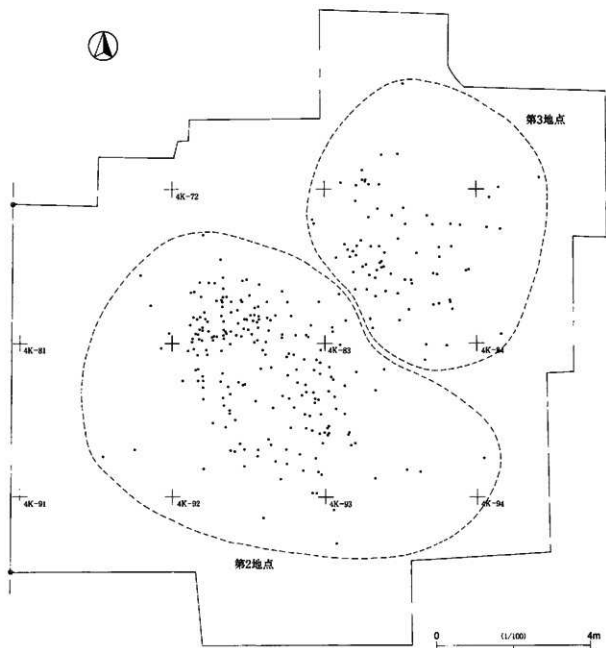
平面分布 遺跡調査範囲東部の台地上に位置し, 4K-63-64, 4K-71-74, 4K-81-84, 4K-92-93グリッドにわたって東西12m, 南北11.8mの範囲内に遺物が集中する。分布密度の状態から2か所の集中地点に分け, 4K-72-82グリッドを中心とした南側を第2地点, 4K-73に分布の中心を持ち第2地点の北東に位置する集中域を第3地点とした。母岩の消費状態や遺物の分布状況などから, 第2, 第3地点とも石器製作, 石器使用の場である可能性が高い。また, 原石の大きさまで復元でき, 剥片剝離の手順を追うことのできる接合資料が複数出土している。

第2地点の遺物出土範囲は東西11.5m, 南北8.5mであり, 出土遺物数は216点である。これは当遺跡の中でもっとも遺物の集中する地点であり, 実測を要する遺物も107点と群を抜く。使用痕・二次加工痕を有するもの, 接合関係をもつものが多数出土したために実測点数は出土石器のほぼ半数に及んだ。第2地点北側の高密度分布域にはチャート, 頁岩の剥片, 石核が密集し, ほぼ原石に近い状態まで接合した。また, 当遺跡で唯一の敲石は集中区の北西隅から出土し, これを取り囲むように23点接合の頁岩, 14点接合のチャートが出土している。

第3地点の出土遺物は80点で32点を実測した。ホルンフェルスの点数比が40%を超え, 西側ではホルンフェルス1が復元される。

硬質頁岩は第2, 第3地点でまんべんなく分布する。この硬質頁岩は原石の産地が東北地方と推定される良質なもので, 15mmに満たない小剥片にも二次加工痕や使用痕の認められるものがある。

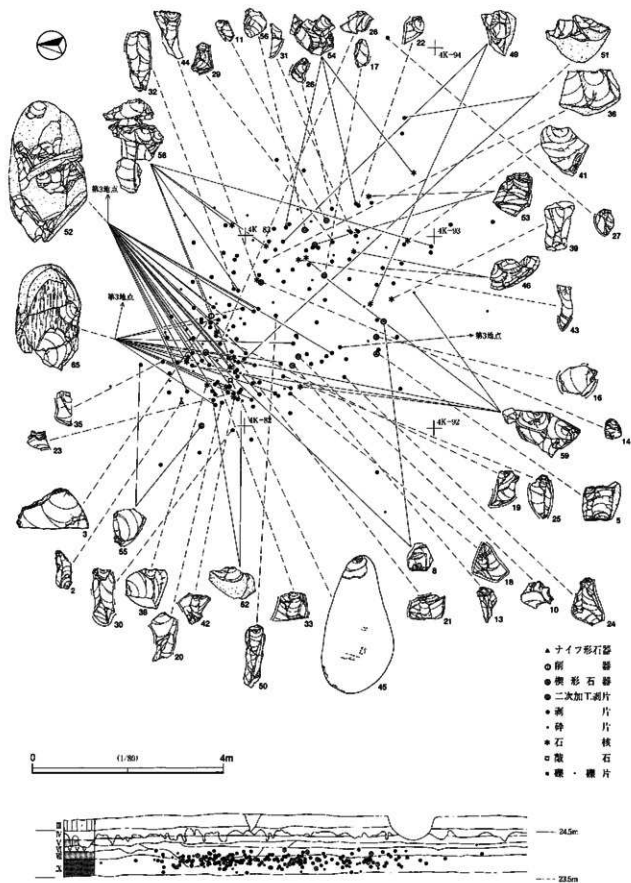
垂直分布 第2地点の分布の高低差は0.34m, 第3地点では0.48mである。当地点においてもIXa, IXb, IXc層は分層されていないが, IX層上部が下総台地の標準土層のIXa層に相当するものと考えられる。土層



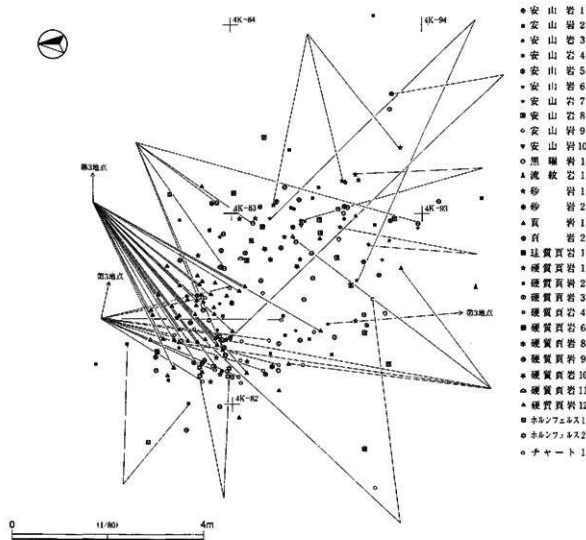
第11図 第2・3地点遺物分布

断面への投影では、Ⅴ層（第3地点では一部Ⅵ層）からⅩ層に包含され、Ⅴ層下部からⅩ層上部に分布の中心を持つ。生活面はⅤ層からⅩ層のいずれかにあると推定される。

**母岩別資料の分布** 平面分布の項でも述べたが、ここでは小さく分けた母岩資料についての分布状況を見る。安山岩1～10、黒曜石1、流紋岩1、砂岩1・2、頁岩1・2、珪質頁岩1、硬質頁岩1～12、ホルンフェルス1・2、チャート1の計30母岩に分類された。安山岩1は第2地点から石核2点が約4m離れて出土した。安山岩2～7は第2地点、第3地点にかけて分布する。安山岩8は第2地点東南の12m四方に7点散在し、南側に楔形石器・石核が出土している。安山岩9・10も第2地点南側に分布する。第2文化層で唯一の黒曜石1は第2地点西側から出土する。砂岩1は敲石、砂岩2は礫である。頁岩1・2、チ



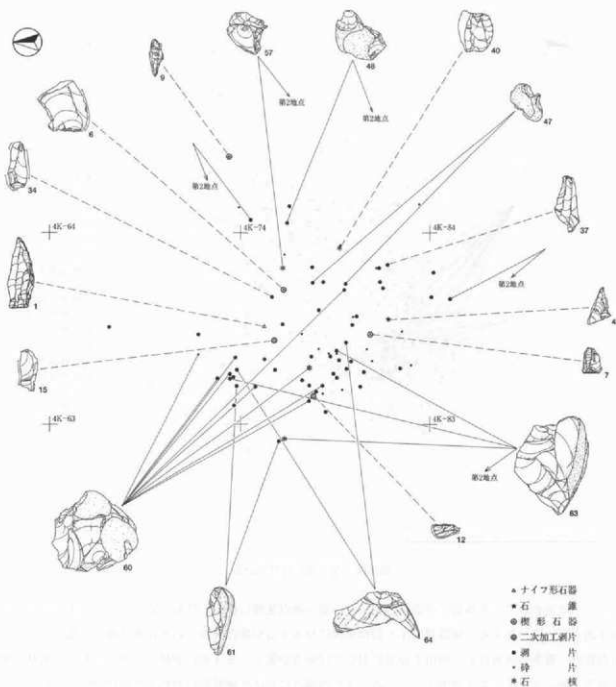
第12図 第2地点器種別分布



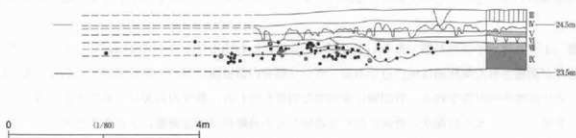
第13図 第2地点母岩別分布

チャート 1 は分布の中心を砂岩 1 の散石と同じく、第 2 地点北側に持つ。珸質頁岩 1 は 5 点出土しているが、第 3 地点に 4 点分布する。硬質頁岩 1～12 は全体に分布するが接合資料・石核は第 2 地点に集中する。出土点数の一番多い硬質頁岩 9 の出土分布においては 36 点が第 2・第 3 地点全体に広がっており、石核は第 2 地点北側にまとまって 3 点出土している。また当地点における硬質頁岩の出土点数は 122 点で 41% だが、重量は 364.17 g で 18% である。使用痕・二次加工痕が小片にも看取される。これは搬入された良質の硬質頁岩の利用価値の高さを示すものである。なお、ホルンフェルス 1～3 の分布の中心は第 3 地点の北西側にある。

出土遺物 1～2 はナイフ形石器である。1 は安山岩 5 で、いわゆる「トロトロ安山岩」である。自然面は黄褐色だが剥離された風化面は灰白色である。ガジリ部分の新鮮面は黒い。同母岩は 2 点あるが接合はしない。剥片剥離時の打面が残る。背面側に規則的な剥離が行われ、数片の石刃状の剥片が剥がされているものと看取される。また打面から背面に向かう連続した小剥離痕は頭部調整によるものと考えられる。右側縁には腹面を打面とした小剥離痕が並び、刃潰し状の調整が施されている。2 は濃褐色で脂肪光沢のある良質な硬質頁岩である。横長剥片の打面に刃潰しが施される。剥片剥離時の打角が 76 度であり、ブラ



- ナイフ形石器
- 石 鏟
- 楔 形 石 器
- 二次加工割片
- 割 片
- 砕 片
- 石 核



第14図 第3地点器種別分布

ンティングの必要がなかったためか打面が残されている。中～下半部は急角度に調整される。右上部から先端は連続した小剥離でやや丸みを持たせながら丁寧に加工される。

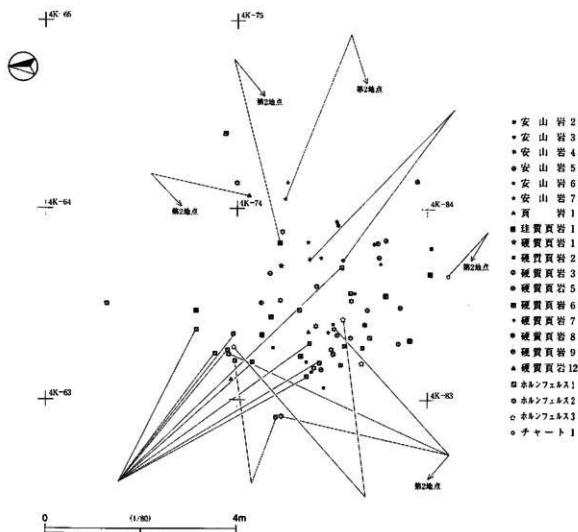
3は頁岩2の削器である。自然面は黒色、風化面は黒灰色である。末端は階段状剥離である。厚みの均一な板状の剥片を利用して、正面上部に背面、腹面の両方向から小剥離加工される。

4は石錐である。自然面は灰色、剥離面は光沢のある褐色の硬質頁岩6である。細い末端部分を持つ剥片を利用して、錐の先端部を作出している。右の縁辺中ほどには使用痕とみられる刃こぼれ状の微細剥離が観察される。

5～9は楔形石器である。5の安山岩を除けば他4点は硬質頁岩である。5は黒色緻密質安山岩製で石刃状剥片の上半部を利用している。正面下縁辺は連続した小剥離で整えられる。6は両極に調整が施される。右側縁は63度の刃部をなし、刃こぼれ痕が看取される。7は厚みのある直方体の楔形石器である。下縁部に直線的な微細剥離がある。8は2片接合した状態で両極石核である。自然面が残っているため、剥離が不規則になっている。9は両極打法を用いて剥離された剥片であるが、下方からの剥離痕が3面あるため楔形石器と分類した。上半部と下半部では厚みと幅が入れ替わる。縁辺には連続した微細剥離痕がみられる。

10～17は二次加工剥片である。小片が多い。10(硬質頁岩2)は、不規則に割れた面を打面にして剥離された剥片である。右側面に残された剥離痕は主要剥離面側からの加撃によるものである。末端は折れて欠けている。11(硬質頁岩2)は末端部分に小剥離痕が並び、使用痕とも考えられたが、75度の調整角度があるため二次加工によるものとみなした。背面上部には剥片剥離方向からの小剥離や、11同様の剥片を作出したとみられる剥離痕が残る。頭部調整を行いつつ剥片剥離作業がなされたものと認識される。12(硬質頁岩2)は二次加工痕とともに使用痕も看取される。背面上部及び左上部に連続した小剥離痕が並び、縁辺から末端にかけては使用による刃こぼれ状の微細剥離痕が通る。11、12とも20mmに満たない小片が利用されている。13(硬質頁岩3)の打面付近は褐色だが、末端に近づくにしたがって淡い黄灰色に変わる。端部には調整痕があり、尖端が意識されたものと思われる。14(硬質頁岩6)は右縁辺に小剥離痕を持つ。剥片剥離時の衝撃により打面が砕けたものと思われる。最大長は16mmであり、爪ほどの大きさである。15(硬質頁岩6)は両極打法を駆使して剥離された剥片である。厚みを持ち、右側面が長方形となる。背腹両面から細かく削ぐように二次加工が施され、中央部と下部にのみ自然面が残る。対縁には刃こぼれが看取される。16(硬質頁岩9)は厚みのある横長剥片を素材とする。鋭角の縁辺全体には使用痕がみられるが末端の折れにより断絶される。左端部の鈍い光沢も使用に伴うものか。打面のリングが隆起した同心円を描くことから、円錐体(コーン)を打面にして剥片剥離されたものと思われる。17(硬質頁岩9)は細かく調整された小打面から穿たれた剥片である。左上部を腹面側から正面側に向かって調整した後、下半部を背面から腹面に向けて刃潰しのような急角度の剥離を施している。右下縁辺部に微細剥離痕が看取される。

18～35は使用痕のある剥片である。18の黒曜石を除き17点のすべてが硬質頁岩である。18は第2文化層において出土した唯一の黒曜石である。白っぽい筋状の縞がわずかに入るが夾雑物は混在せず、透明度は高い。信州産と思われる。全周に刃こぼれ状の使用痕が通る。19～22は硬質頁岩1である。19は剥片の左側縁下半部から末端部にかけて使用による微細剥離痕が通る。20は打面にバルブを持つ小剥離痕が複数みられ、両側縁に刃こぼれが看取される。下端の折れは剥片剥離時、台石による跳ね上がりによるものと思



第15図 第3地点母岩別分布

われる。21は石刃状の剥片下部か。末端は深いヒンジ・フラクチャーとなっており急角度で背面側に達する。上縁及び左側縁に使用痕が観察される。22の左右縁辺は45度～50度だが左側縁のみに使用痕が残る。23～27は硬質頁岩2である。23は最大長が18mmに満たないが、右側縁下部、下縁辺に使用痕が残っている。24, 25は小さく整えられた調整打面から剥離された剥片である。端部を除くほぼ全周の鋭い縁辺部には微細な剥離痕が廻る。26, 27は20mmほどの小剥片である。背面上部に頭部調整による小剥離痕がみられる。28(硬質頁岩3)の打角は125度、末端はヒンジ・フラクチャーをなす。左側縁、右側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕が観察される。上面には多方向からリングが走るが、砕け、あるいは潰れの結果と思われる。29(硬質頁岩6)の自然面は残っていない。右側縁から下縁辺にかけて微細剥離痕がみられる。背面縁上に刃こぼれ状の微細な剥離痕が看取されるが、この剥片の剥離以前の使用痕と考えられる。30～34は硬質頁岩9である。30は側縁が平行に走る整美な形状の剥片に使用痕が廻る。32と同質、同様の剥離工程であるが接合はしない。31はほぼ正三角形の断面を持つ。背稜の下半部に刃こぼれが観察される。大型石刃の側縁であった部位を再生しようとした意図がうかがえる。32は、主要剥離面を含めると同一方向からの剥離痕が5面数えられ、規則的な方法で石刃作成が行われたと考えられる。下端は固定されたことによる折れの

可能性がある。左右縁辺には刃こぼれ状の微細剥離痕が看取され、特に右上縁から右側縁にかけての使用痕は顕著である。打面調整及び頭部調整は行われていない。33も下半部は欠損しているが石刃状剥片を使用している。左右縁辺に微細剥離痕があり、折れに切られる。34、35も石刃状剥片の縁辺に使用痕が観察される。34下部の剥離は剥片剥離時の跳ね返りと思われる。35（硬質頁岩12）は打面に7面（そのうちバルブが残っているものは3面）敷えられることから打面調整のあとにこの剥片が剥がされているのがわかる。階段状の末端を持ち、尖鋭な左縁辺には刃こぼれが看取される。

36、37は剥片である。36は紐質頁岩1の厚みのある剥片である。自然面は茶褐色、剥離面は黄褐色である。同一打面から規則的に剥片剥離される。右側面の自然面にはガジリがある。37の末端は緩やかに内へ向かい、剥離痕も顕著なことから、両極打法を用いたものと思われる。

38～44は石核である。38（安山岩1）は上面に薄茶褐色の自然面を残す剥離後の風化面は灰白色の、いわゆるトロトロ石である。後は比較的明瞭で、多方向からの剥離により六面体となる。39も同様であるが、自然面は残存していない。40（安山岩4）は自然面を多く残した石核である。作出された打面からは3回以上加撃されて剥片剥離作業が行われる。41（安山岩8）は自然面を残し厚みのある剥片を素材にした石核である。42は、最大長が15mmに満たない程の剥片を取り切った残核の縁辺を刃部として再利用している。42、43は硬質頁岩1で、剥片が素材となる。44（硬質頁岩11）は厚手の石刃を折った後にできた面を打面として、少なくとも3点の剥片が作出される。左側縁には背腹両面に二次加工痕が並ぶが、石刃として機能しなくなったものを再利用していると考えられる。褐灰白～灰黒、褐色と色の濃淡が目立ち、褐色部分は硬質頁岩12と区別がつかないほど近似する。また、自然面が残らず、厚みがあることから、かなりの大きさを持った原石であろうと推察される。

45は砂岩1の敲石である。自然面は黒褐色～鈍色で所々被熱により赤茶色を呈す。下端部、正・裏面には敲打痕が残る、自然面が剥がれた部位は黄土色の剥離面がのぞく。また正・裏面下半部分の使用痕が線状であることから、平坦な面を台として楔形石器などが調整された際に付いた傷である可能性がある。

46～65は接合資料を提示した。

46～50は安山岩2点の接合例である。46（安山岩4）は原礫から早い段階で剥離された礫端片と剥片剥離作業の終了した石核である。47（安山岩4）は剥片剥離時に折れたものか。48（安山岩6）は剥片の接合資料である。48aは第3地点、48bは8.3m離れた第2地点より出土する。49はトロトロ安山岩7の石核と剥片である。50（安山岩9）は稜縁がくっきりとした黒色ガラス質安山岩である。このほかには同一母岩は確認できない。自然面は残存せず、黒く透明な直径0.7mmほどの斑晶を含む。両極からの加撃痕がある。

51（頁岩2）は剥片2点の接合資料である。同一方向からの加撃により51aを含む5点以上の剥片が剥離されている。

52は頁岩1で、同母岩43点のうち石核2点を中心に計23点が接合した。接合後はほぼ原礫の大きさまで復元でき、最大長99.28mm、最大幅61.23mm、最大厚52.85mmである。自然面は淡黄灰、剥離面は灰色、新鮮面は黒色の厚みのある大型の楕円礫を素材とする。礫頂部から52a→52b→52cの順に礫表剥離後、二分割される。二個体に分かれた塊から規則的な剥離作業が行われる。礫の長軸を縦に据えた水平方向に52d+52e、52fが剥離され、下部に相当する52gが剥がされる。のち、52h→52i+52j→52kが同一面を打面にして順に剥離される。石核52iには52k剥離後も同一打面から少なくとも5点以上の剥片を剥がした痕が残る、打面と作業面を入れ換えながらの剥離工程が確認できる。次に52m～52wで構成されるもう一方の個体を



みる。こちらは分割された際に現れた面を打面にして52m→52n→52o→52p→52q→52rと順に剥離される。次に自然面を剥がすために方向を変えて52sが取られ、52uを打面にして52tが剥離されている。この後打面を変えて52u→52vが連続して剥がされる。剥離された剥片からは二次加工痕・使用痕などは看取されない。

53, 54は硬質頁岩1の接合資料である。53は打面を再生させながら剥片剥離される。53aの右縁辺下方に主要剥離面から入る二次加工痕が看取されるが、これは尖端を意識したものと考えられる。54は石核に剥片2点が接合する。頻繁に打面・作業面を入れ換えながら、石核の周囲から小剥片を剥がしていった工程が明確である。最大長でも20mmに満たない剥片54bの末端には微細剥離痕が看取される。

55(硬質頁岩2)は二次加工剥片と使用痕のある剥片の接合資料である。55a→55bの順に剥離されているが、55a剥離後に打面を整えてから55bを剥離している。

56(硬質頁岩2)は剥片と碎片の接合資料である。56aの背面はバルバースカー、または円錐体様の剥離痕である。打面付近の厚みのある部分には背面上部から主要剥離面に向けて加撃され、連続した小剥離痕が残っている。56bはその初期段階の碎片であり、主要剥離面と同方向の剥離痕が背面側に観られることから、この碎片が剥離される前に少なくとも一回以上の加撃が行われている。

57(硬質頁岩6)は石核と剥片の接合資料である。57aが剥離された後の面を打面にして57bから3面以上剥離される。

58は硬質頁岩9で、同母岩は39点あり、そのうち6点が接合する。この接合した自然面は板状に平らであり、原石はかなりの大きさを持っていたものと推定される。明度・光沢・色相には部分的に開きがあり、接合したことよりはじめて同一母岩との確認がなされた。石材の成分組成に因るものもあるが、風化の度合いによって淡黄灰、明褐色、黒褐色とさまざまである。硬質頁岩9の36点の分布範囲は東西に7.5m、南北に8.0mで、第2, 第3地点に散在するが、58の接合資料に関しては第2地点の東西4.7m、南北3.2m内に集中する。6片は58aから剥離された順に58fまでアルファベット表示したが、個体として捉えるならば58a+58b, 58cと58d~58fは異個体であり、その間には多数の剥離工程が観察される。使用痕は58cのみに看取される。58fから58eを剥離する際、自然面が垂直に加撃されたことにより58eの主要剥離面は円錐体となっている。58f上面からは3面以上剥離痕が残る。

59(硬質頁岩12)は残された自然面・接合の状態などから、原石の大きさは拳大程であったものと推察される。58と同様に、接合石片間に隙間が多く、剥離工程の詳細は掌握できない。59aは剥片剥離の初期段階で剥がされたものである。この後、原礫面を多く含む59bが剥離され、いくつかの剥片剥離が行われた後、打面を換えて59cが剥がされている。59cの両側縁、末端部分には微細剥離痕がみられる。背面上部の小剥離は頭部調整によるものと思われる。59dからは少なくとも3片の剥片が剥離されている。59eは、59bが剥離されたあとの59cや59dを含む個体とは違った工程において剥離作業が行われているが、順序は明確ではない。

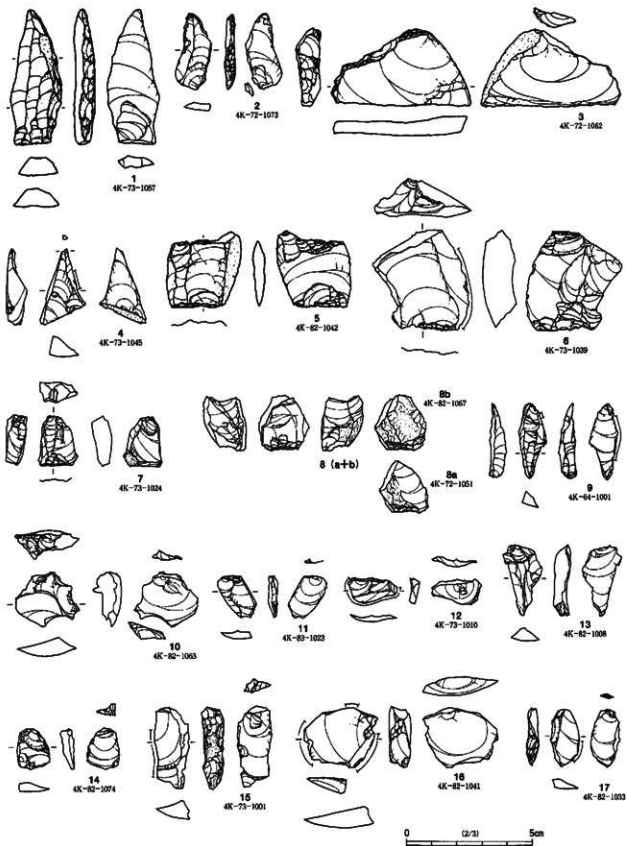
60~64はホルンフェルスの接合資料である。中でも60(ホルンフェルス1)は、同母岩とした21点のうち10点が接合し、原石の大きさが推定される。復元した最大長は62.5mm、最大幅は67.8mm、厚さは35.8mmで、厚みのある三角形状をなす。自然面は褐色、剥離面は灰黒色の地色に黄色の粉が塗されたような風合いである。剥離順にa~jとした。打面と作業面を交互に入れ換えながら剥離作業が進んでいくなかで、60a・60bが剥離されている。60aが剥がされた後の作業面を打面にして60c→60dが順に剥がされる。次に

方向を変えて、稜面である60eが剥離される。これにより現れた剥離面からは少なくとも2打以上加撃される。60fはそうした工程で剥離された剥片である。61も同一母岩であるが、60とは接合しない。剥片2点の接合資料である。60、61とも、作出された剥片には使用痕・二次加工痕は看取されない。62はホルンフェルス2である。風化面には針で突いたような細かい気泡状の凹みが無数にある。ホルンフェルス3と酷似するが、ガラス質の節理面を持たないため、別母岩とみなした。同一打面から剥離された剥片2点の接合資料である。62aの末端は、ふくらみを持って背面に廻り込むヒンジ・フラクチャーとなっている。63（ホルンフェルス2）は同母岩、4点が接合する。63bを除いた3点は第3地点に分布する。63aは比較的早い段階に剥離されている。63b、63cは同一打面から連続して剥離された剥片である。63dの石核の側面は交互に粗く打ち欠かれる。64はホルンフェルス3の剥片2片の接合資料である。ホルンフェルス2と石材の特徴は似るが結晶質の節理面が顕著である。64bの下部は大きな階段状剥離となる。

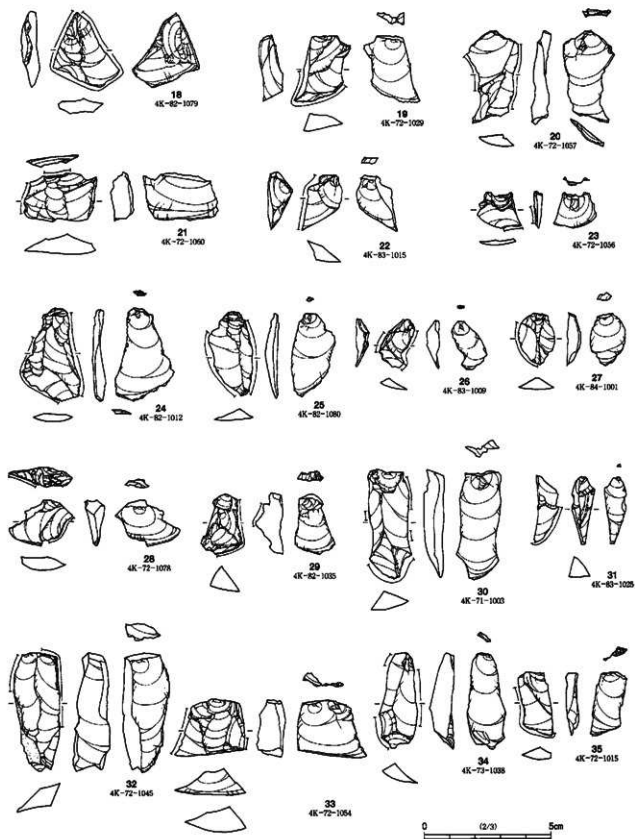
65はチャート1の接合資料で、19点のうち14点が接合した。接合後の最大長は81.3mmである。厚みがあり、発達した節理を持つ。まず稜面の65a+65bが剥離された後、節理で2分割される。はじめに剥離された65a・65bには、原稜面を加撃した際、剥離に至らず内部に留まったと思われる衝撃痕が3か所観察される。分割された2個体を塊A（65a~65j）、塊B（65j~65n）とすると、塊Aは65c剥離後に現れた面を打面にして65d、65eを含む連続した剥離作業が4回以上行われる。塊Bの65jから65mは同一打面から順に剥離される。65nは節理で分割された後に2回以上の打撃が加わり、現れた節理面から原面が削られる。その面を下面に据えて正面図のような加撃が行われている。

第3表 第2文化層 第2・3地点母岩別石材特徴

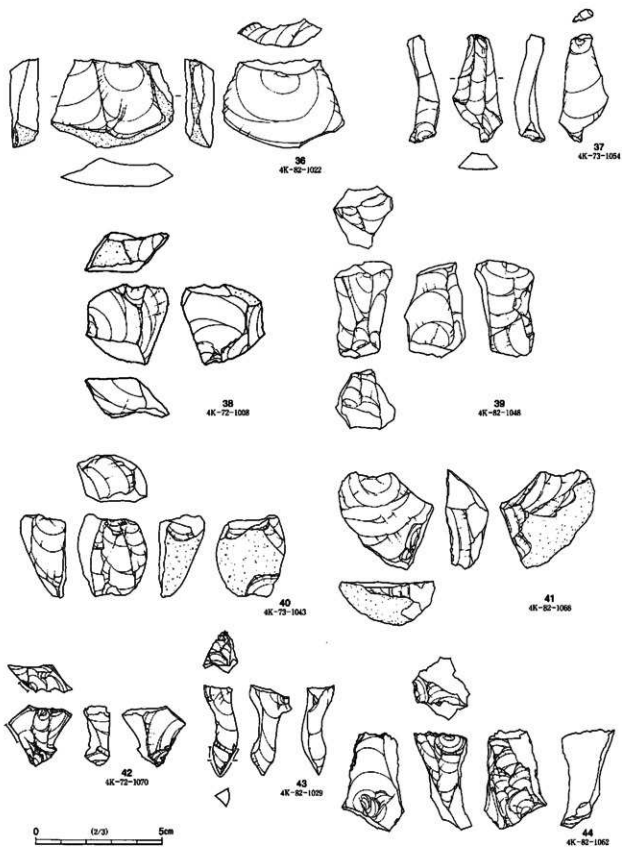
母岩	自然面	風化面	新解面	特徴・その他
安山岩 1	灰白色-茶褐色	灰白色	黒	トロロ安山岩。角がなく丸みを帯びる。粉っぽく削りやすい。
安山岩 2	なし	黄緑-暗褐色	黒	黒色燻紫質安山岩。発射をまぶしたような風化面。
安山岩 3	黄褐色	灰-灰白色	黒	トロロ安山岩。角がなく丸みを帯びる。
安山岩 4	黄味を帯びた黒褐色	褐色	黒	黒色燻紫質安山岩。黒色半透明の層層あり。
安山岩 5	黄褐色	灰白色	黒	トロロ安山岩。壁があまり全体的に丸みを持つ。
安山岩 6	黄褐色	褐色	なし	黒色燻紫質安山岩。黄褐色の塊入りあり。
安山岩 7	緑茶灰-灰色	青みのある灰色	黒	トロロ安山岩。角がなく丸みを帯びる。
安山岩 8	黒褐色	黒褐色	黒	黒色燻紫質安山岩。
安山岩 9	なし	黒灰色	なし	産地7の透明な珠晶を含む。輪縁はくっきりとする。
安山岩 10	黄灰色-多孔質	褐色	黒	産地は産成し、小さい凹みが目立つ。
流紋岩 1	なし	茶褐色	なし	緑色の層晶を含む。
黒曜石 1	なし	黒緑色-半透明	なし	白い結晶の層がわずかに入る。良質で夾雑物はほとんどない。
砂	なし	黒褐色-暗褐色	なし	磨打された部分は厚い茶褐色。
砂	なし	褐色	なし	風化が強い茶褐色。
頁岩 1	淡黄灰	灰白色	黒	脆はく脆子が細かい。
頁岩 2	茶色	黒褐色	なし	厚みがある。風化にはがれる。
珪質頁岩 1	黄褐色	黄褐色	黄褐色	風化面と自然面は二色化する。
硬質頁岩 1	なし	褐色-淡褐色	淡褐色-褐色	油跡光沢のある部分と艶のない部分が混在する。自然面は残存しない。
硬質頁岩 2	なし	黒褐色	黒褐色	均質で油跡光沢のある良質な東北産。自然面は残存しない。
硬質頁岩 3	なし	灰褐色	なし	色調に異なりあり。灰褐色、淡黄褐色、黄褐色、ミナチヤコロール色。
硬質頁岩 4	黄灰色-褐色	灰-灰褐色	なし	艶のある均質なミナチヤコロール色。良質。
硬質頁岩 5	なし	灰色-灰褐色	黒褐色	風化面と自然面との色調に隔きあり。
硬質頁岩 6	黄褐色	黄褐色	なし	硬質頁岩2と頁岩・褐色。
硬質頁岩 7	なし	淡褐色-褐色	なし	黄褐色の塊が入る。
硬質頁岩 8	褐色	赤褐色-褐色	なし	シューター状の表面。風化によるものか。
硬質頁岩 9	淡黄褐色-緑灰褐色	黒褐色	なし	塊があった茶褐色の部分あり。
硬質頁岩 10	黒褐色	黒褐色	なし	油跡光沢あり。良質。
硬質頁岩 11	なし	褐色-灰黒	なし	油跡あり。濃い部分は硬質頁岩12と区別がつかない。
硬質頁岩 12	黄緑-褐色	なし	なし	艶のある均質なミナチヤコロール色。硬質頁岩4と極めて近い。
ホルンフェルス 1	灰褐色	灰褐色	なし	細かな粒状の凹みあり。
ホルンフェルス 2	褐色	褐色・細かい気泡状の凹み	なし	表面には気泡状の凹みあり。
ホルンフェルス 3	褐色	褐色・細かい気泡状の凹み	なし	結晶質のきらきらした節理面を持つ。ホルンフェルス2とは同母岩の可能性あり。
チャート 1	黄褐色	黒褐色	黒褐色	発達した節理面を持つ。



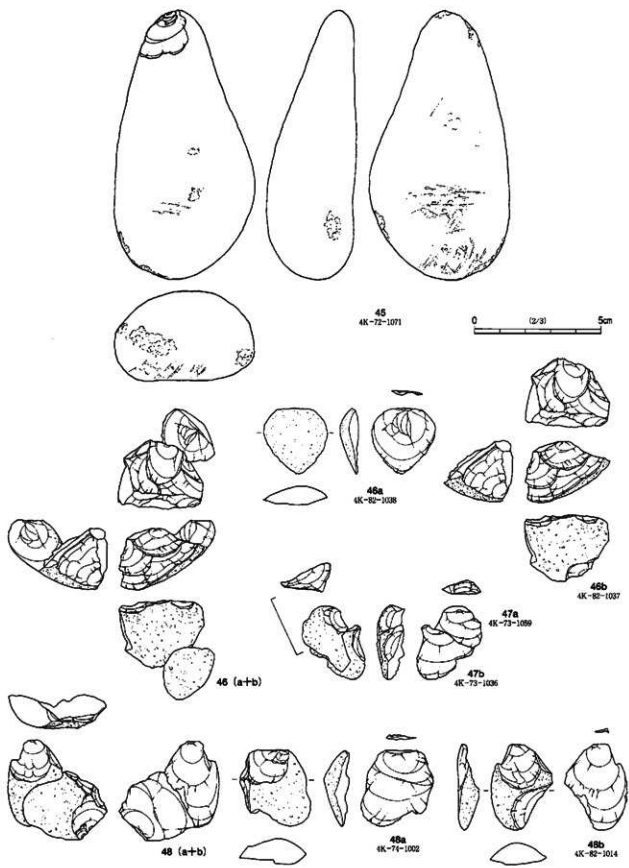
第16图 第2·3地点出土文物(1)



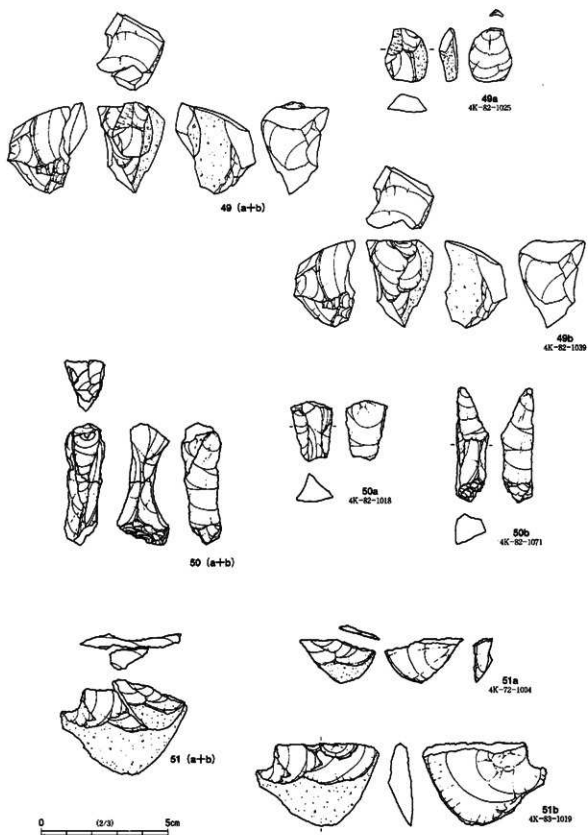
第17图 第2·3地点出土遺物(2)



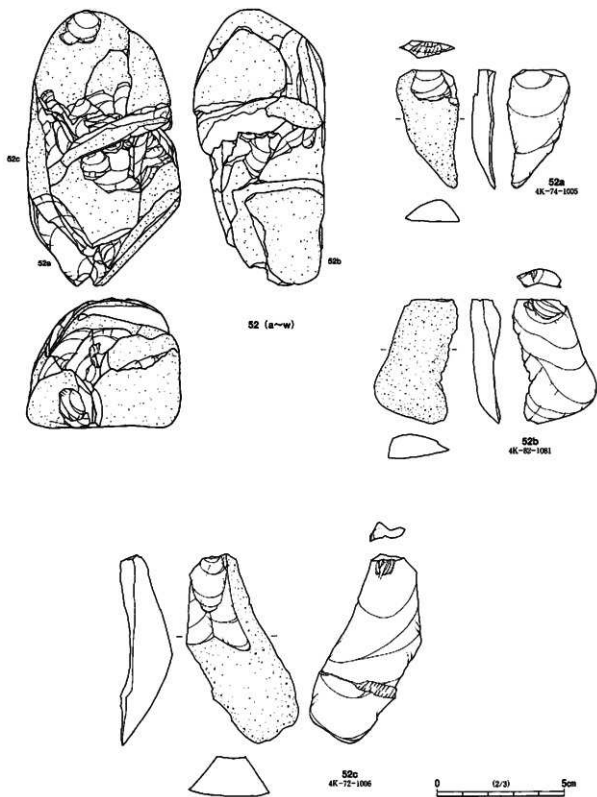
第18图 第2・3地点出土遺物(3)



第19图 第2・3地点出土遺物(4)

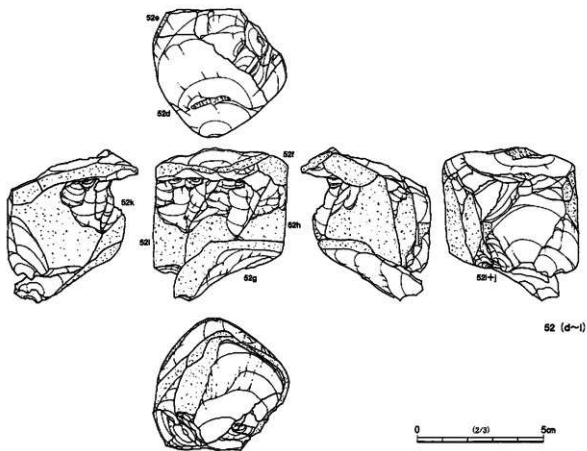


第20図 第2・3地点出土遺物(5)

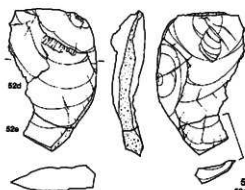


第21圖 第2・3地点出土遺物(6)

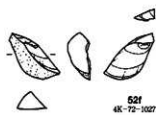




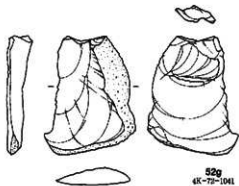
52 (d~l)



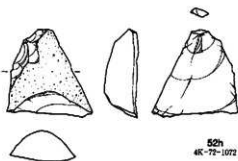
52 (d+e)  
52d 4K-72-1060  
52e 4K-82-1083



52f  
4K-72-1027

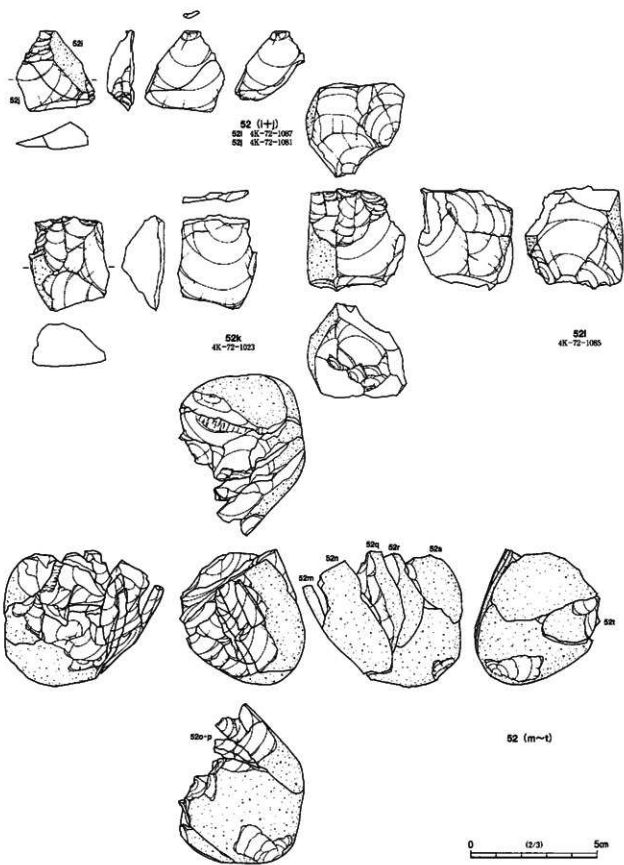


52g  
4K-72-1041

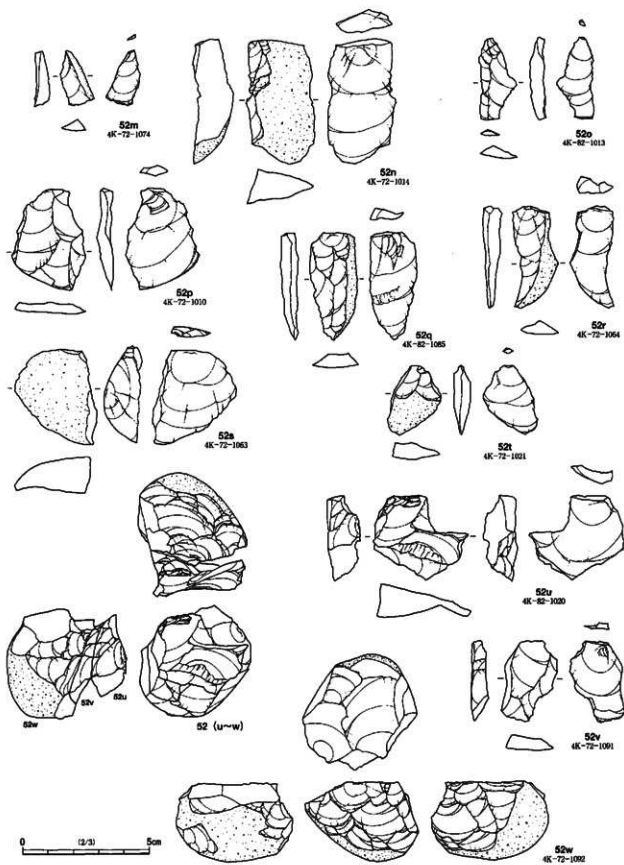


52h  
4K-72-1072

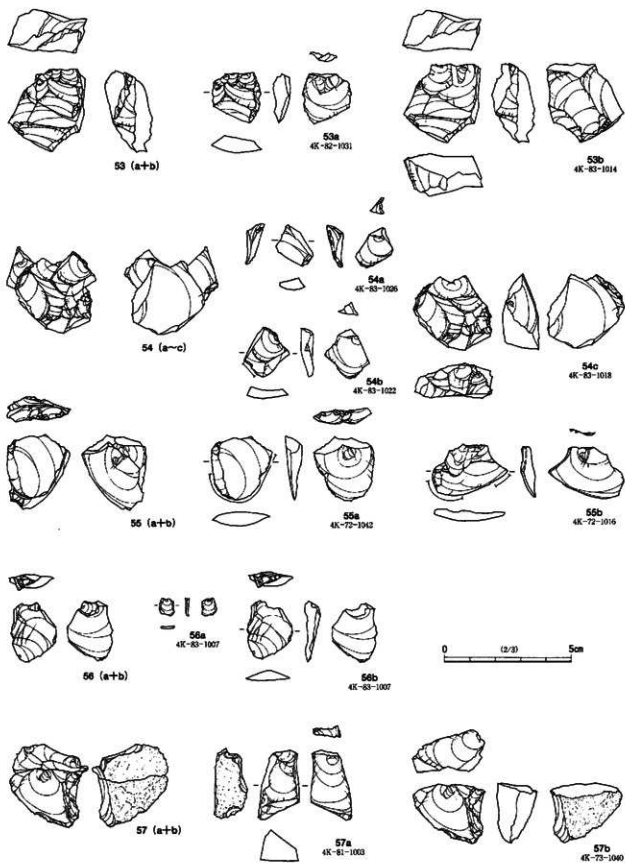
第22図 第2・3地点出土遺物(7)



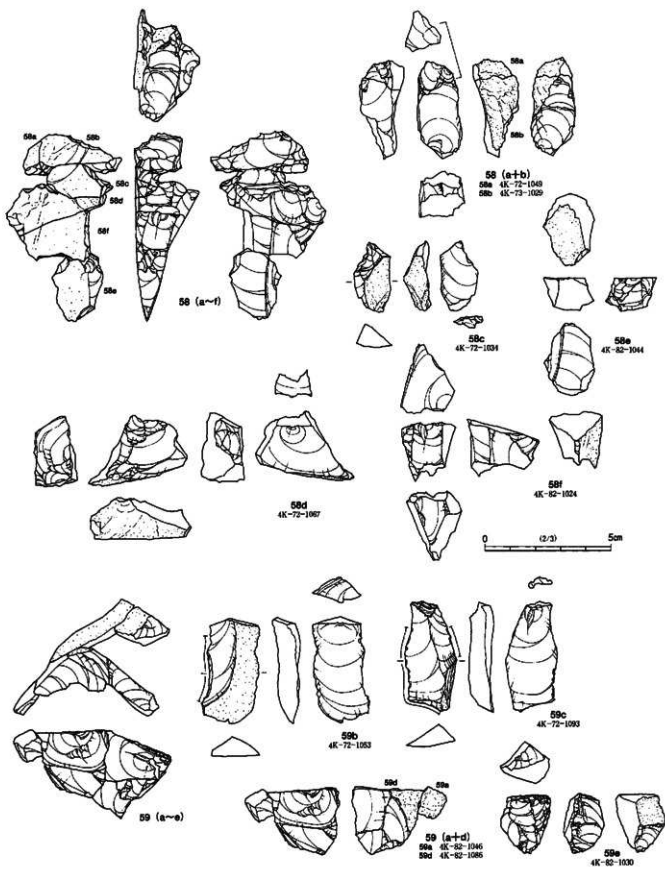
第23图 第2・3地点出土遺物(8)



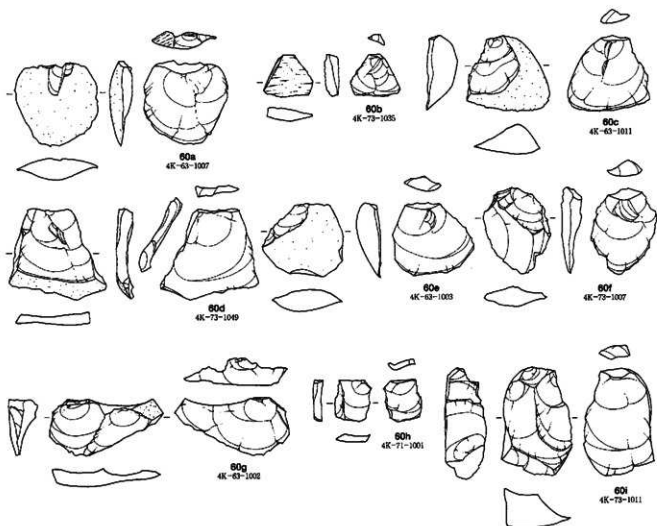
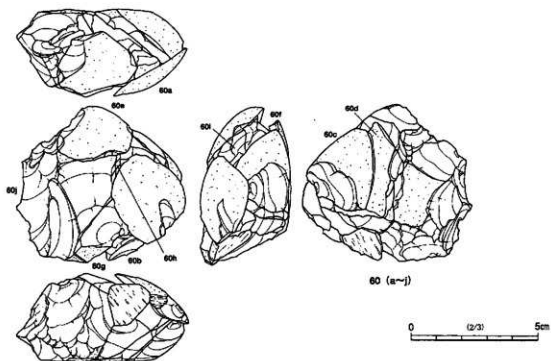
第24图 第2・3地点出土遺物(9)



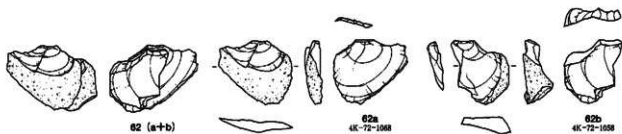
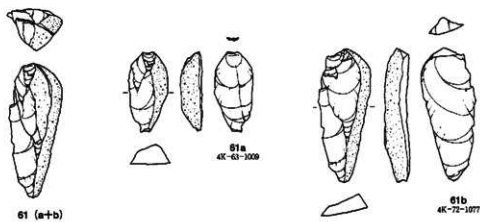
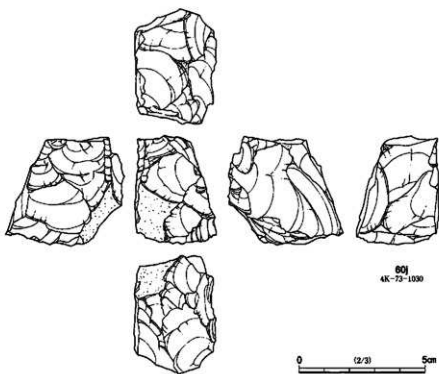
第25图 第2·3地点出土遗物 (10)



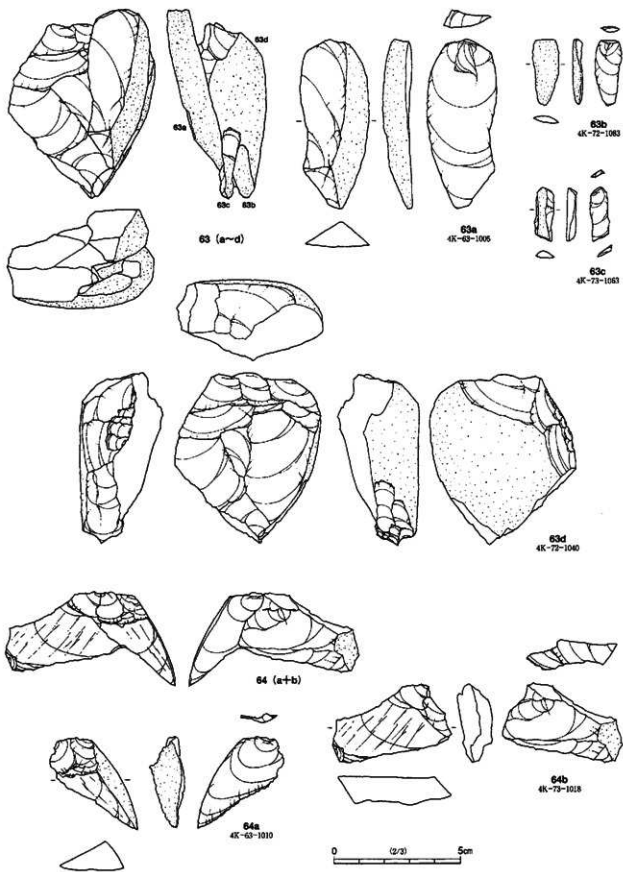
第26図 第2・3地点出土遺物(11)



第27图 第2·3地点出土遺物 (12)

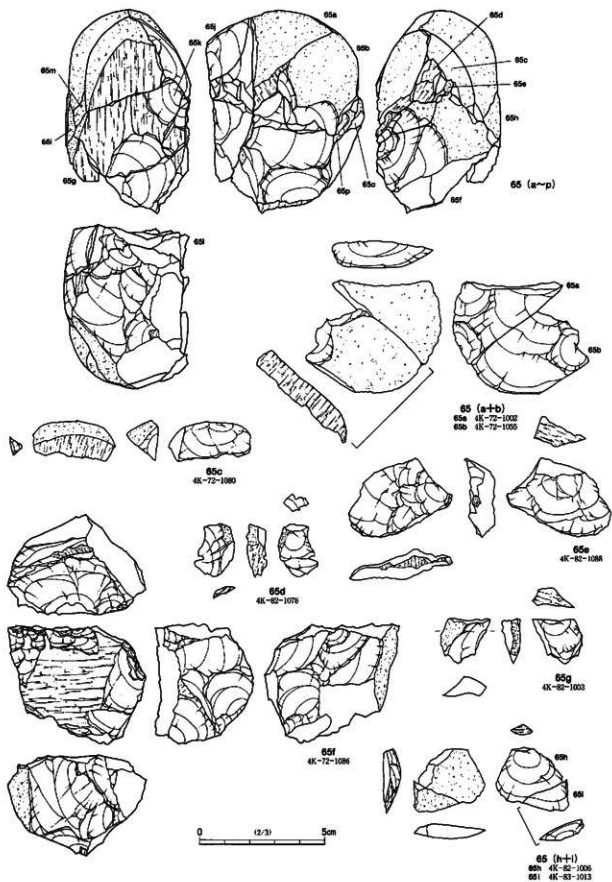


第28图 第2・3地点出土遺物 (13)

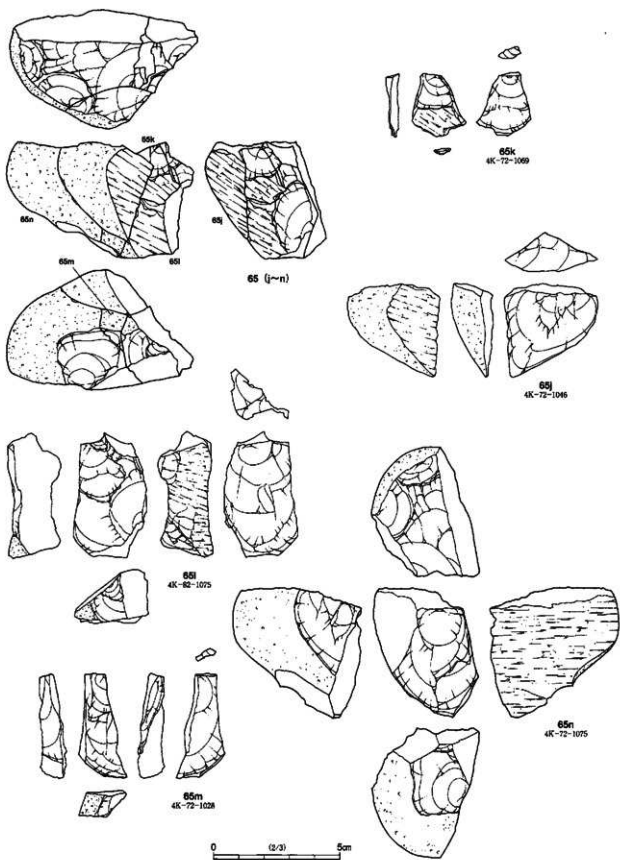


第29図 第2・3地点出土遺物 (14)





第30图 第2・3地点出土遺物 (15)



第31图 第2・3地点出土遺物 (16)

第4表 第2文化層 第2地点出土石器属性表

検出番号	遺物番号	器種	始期番号	最大径mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	打面	打角 側縁角	背縁構成	先端形状	凹陥内	使用前後 被痕	研れ	欠損
30	4K-71-3001	網片	ホルンフェルス 1	1574	1463	401	108	1	106	I + II	-			H	
	4K-71-3002	網片	硬質頁岩	9	2839	1157	1149	240	-	-	I + V	75			
	4K-71-3003	網片(シあり)	硬質頁岩	9	4324	1678	737	411	1	124	I + II + V			N	
65a	4K-72-1001	網片	ホルンフェルス 2	3110	2281	742	572	1	118	III	F	79			
	4K-72-1002	網片	チャート	1	2728	4733	1230	1549	C	V	V				
51a	4K-72-1003	網片	頁岩	2	1240	2649	683	114	1	118	I + III			H	
	4K-72-1004	網片	頁岩	2	1777	3053	786	280	2	85	I	S			
	4K-72-1005	網片	安山岩	3	2686	1482	483	170	1	105	I + III			R	
54c	4K-72-1006	網片	頁岩	1	7387	8639	2266	4218	1	115	I + III				
	4K-72-1007	網片	硬質頁岩	9	1843	1108	735	114	-	-	I	H			
38	4K-72-1008	石核	安山岩	1	3132	3681	1588	1536	-	72	-				
	4K-72-1009	網片	安山岩	7	631	450	212	006	-	-	-				
52p	4K-72-1010	網片	頁岩	1	4002	2903	673	592	1	103	I + II + III	S			
	4K-72-1011	網片	硬質頁岩	9	578	834	386	013	-	-	I + V	O		B	
	4K-72-1012	網片	頁岩	1	1724	1454	354	095	1	108	I + V	H			
52a	4K-72-1013	網片	頁岩	1	910	685	282	010	1	86	I	H			
	4K-72-1014	網片	頁岩	1	9023	2775	1634	1058	1	117	I + V	H			
35	4K-72-1015	網片(シあり)	硬質頁岩	13	2512	1425	887	126	7(3)	108	III			N	
	4K-72-1016	網片(シあり)	硬質頁岩	2	3007	2982	670	178	1	116	I	H			
55b	4K-72-1017	網片	頁岩	2	1107	849	212	014	1	80	I + III	H			
	4K-72-1018	網片	頁岩	1	1307	1422	306	031	-	-	I + III	H		B	
	4K-72-1019	網片	硬質頁岩	9	1581	1168	386	046	-	-	III	H			
52h	4K-72-1020	網片	安山岩	3	532	372	244	006	-	-	-				
	4K-72-1021	網片	頁岩	1	2747	2163	586	340	1	116	I + V	H		R	
52k	4K-72-1022	網片	頁岩	1	1198	855	333	028	1	95	I	H			
	4K-72-1023	網片	頁岩	1	3748	3248	1782	2136	2	124	I + II + III + V	H			
	4K-72-1024	網片	硬質頁岩	9	2272	3165	784	319	1	126	I + III	H		N	
52f	4K-72-1025	網片	硬質頁岩	1	3901	2705	1206	861	1	122	I + III	-		H	
	4K-72-1026	網片	頁岩	1	1418	1162	521	063	1	112	I + III	-		H	
	4K-72-1027	網片	頁岩	1	2508	1130	929	196	-	-	I + V	-		H	
60m	4K-72-1028	網片	チャート	1	4129	2129	981	003	1	114	I + III + V	O			
	4K-72-1029	網片(シあり)	硬質頁岩	1	2721	2323	956	544	2	123	I + III	H		N	
19	4K-72-1030	網片	安山岩	4	3280	1730	662	598	3(1)	105	I + V	H			
	4K-72-1031	網片	安山岩	7	1963	1846	454	121	L	-	I + V	P			
	4K-72-1032	網片	頁岩	1	1457	877	353	034	L	-	I + III + V	H			
58c	4K-72-1033	網片	砂岩	2	1573	836	740	078							
	4K-72-1034	網片(シあり)	硬質頁岩	9	2731	1434	937	248	F	-	I + V	-		H	
	4K-72-1035	網片	硬質頁岩	3	1757	1237	487	067	P	-	III	H			
52g	4K-72-1036	網片	安山岩	7	2352	1549	663	188	1	138	I + III	H			
	4K-72-1037	網片	安山岩	2	2686	1240	510	138	L	-	I + II + V	H			
	4K-72-1038	網片	安山岩	3	3507	2061	561	395	1	124	I + III + V	H			
59a	4K-72-1041	網片	頁岩	1	4671	3590	749	1236	2(1)	121	I + V	H			
	4K-72-1042	二次加工網片	硬質頁岩	2	2849	2320	634	286	3	115	I + III	H		N	
32	4K-72-1044	網片	硬質頁岩	9	1203	2391	483	068	1	122	III	-		H	
	4K-72-1045	網片(シあり)	硬質頁岩	9	4632	1834	1554	953	1	123	I + III + V	H		N	
65f	4K-72-1046	網片	チャート	1	3790	3661	1674	1832	1	99	I + V	H			
	4K-72-1047	網片	頁岩	1	1052	838	196	012	1	108	I + V	F			L
	4K-72-1048	網片	頁岩	1	993	573	318	019	1	135	I + III	H			
58a	4K-72-1049	石核	硬質頁岩	9	1278	1539	1013	122	1	65	I	H			
	4K-72-1050	網片	頁岩	1	614	872	188	005	-	-	I	S			
8a	4K-72-1051	硬質石核	硬質頁岩	4	2391	1420	951	313							
	4K-72-1052	網片	ホルンフェルス 2	4	1116	329	019	-	-	-	III	-			V-M
59b	4K-72-1053	網片(シあり)	硬質頁岩	10	4167	2358	1129	728	2	132	I + V	H		N	
	4K-72-1054	網片(シあり)	硬質頁岩	9	2203	2786	1143	531	3	113	I + III	-		N	
65b	4K-72-1055	石核	チャート	1	4382	3222	1212	1945							
	4K-72-1056	網片(シあり)	硬質頁岩	2	1331	1444	301	028	1	104	I + III	H		N	
20	4K-72-1057	網片(シあり)	硬質頁岩	1	3762	2003	731	244	7(4)	103	I + III	F		N	
	4K-72-1058	網片	ホルンフェルス 2	2	2064	2828	908	374	L	-	I + III + V	S			
52d	4K-72-1059	網片	頁岩	1	4722	3582	1303	2002	C	122	I	F			
	4K-72-1060	網片(シあり)	硬質頁岩	1	1913	2920	945	498	-	-	I + III	H		N	
3	4K-72-1061	網片	安山岩	3	3608	1858	778	251	C	114	I + III	H			
	4K-72-1062	網片	頁岩	2	3200	5580	991	1846							
52e	4K-72-1063	網片	頁岩	1	3823	3283	1456	1814	C	78	I	S			
	4K-72-1064	網片	頁岩	1	4001	1745	692	408	2	110	I + V	H		H	
62b	4K-72-1065	網片	ホルンフェルス 2	1	632	837	328	052	-	-	-				
	4K-72-1066	網片	硬質頁岩	9	1343	1157	196	033	-	-	III + III	H		B	
54d	4K-72-1067	網片	硬質頁岩	9	2640	3904	1494	1463	1	125	I + III + V	H			
	4K-72-1068	網片	ホルンフェルス 2	2	2462	2826	583	370	1	127	I + V	H			
65a	4K-72-1069	網片	チャート	1	2524	2129	489	192	1	114	I + III	S			
	4K-72-1070	石核	硬質頁岩	1	2315	2489	1032	365	70						
45	4K-72-1071	隕石	砂岩	1	10734	5588	3561	23613							
	4K-72-1072	網片	頁岩	1	3390	3425	1330	1295	1	121	I + III + V	S			
2	4K-72-1073	タイプ別石核	硬質頁岩	2	3032	1412	411	134	L	-	I + III	-			40-96
	4K-72-1074	網片	頁岩	1	2106	1471	512	092	1	118	I + III	S			
60n	4K-72-1075	石核	チャート	1	3106	9591	4244	10316							
	4K-72-1076	網片	硬質頁岩	1	1216	1461	333	042	L	-	I	H			

押掛番号	追加番号	品名	巻取番号	最大重量	最大積載	最大積載	重量	打面	行内積載角	背板構成	本端形状	調整内	使用重量	押れ	欠陥
28	4K-72-1078	鋼片(口あり)	積置貫通	3	18.15	23.91	7.53	1.82	1	132	I + Ⅱ		N		
4K-72-1079	鋼片	貫通	貫通	1	6.84	9.28	2.92	0.17	-	102	I + Ⅱ		S		
55c	4K-72-1080	鋼片	チャート	1	18.26	22.12	12.63	5.49	1	121	Ⅱ + Ⅲ + V		H	B	
4K-72-1081	鋼片	貫通	貫通	1	27.31	25.13	8.25	2.43	P	-	I + Ⅱ + Ⅲ		H		
4K-72-1082	鋼片	積置貫通	積置貫通	6	16.37	17.36	5.02	1.45	1	112	I + Ⅱ		H		
4K-72-1083	鋼片	ホルンフェルス 2	ホルンフェルス 2	25.80	10.70	3.63	0.91	1	124	I	V		F		
4K-72-1084	鋼片	積置貫通	積置貫通	12	11.98	10.85	3.30	0.36	C	78	Ⅱ + V		F		
53	4K-72-1085	石積	貫通	1	40.54	38.69	37.67	69.51	89					R	
4K-72-1086	石積	チャート	チャート	1	45.95	54.89	39.33	102.75	82						
53c	4K-72-1087	鋼片	貫通	1	29.49	27.68	10.09	5.72	1	96	I + Ⅱ + V		H		
4K-72-1088	鋼片	貫通	貫通	1	13.59	6.04	3.45	0.21	-	-	I		H		
4K-72-1089	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	8.86	8.67	3.48	0.17	-	-	Ⅱ		H	B	
4K-72-1090	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	13.36	9.32	5.73	0.57	-	-	I + Ⅱ		-		V-M
52v	4K-72-1091	貫通	貫通	1	31.83	23.49	6.89	4.27	1	107	I + Ⅱ		H		
52w	4K-72-1092	石積	貫通	1	31.13	45.98	46.43	72.45	106						
59c	4K-72-1093	鋼片(口あり)	積置貫通	12	42.38	30.98	9.24	6.47	1	139	I + Ⅱ + Ⅲ + V		H	N	
4K-72-1094	鋼片	貫通	貫通	1	7.12	12.76	2.04	0.19	1	111	I + V		H		
4K-72-1095	鋼片	貫通	貫通	1	14.28	23.09	5.25	1.41	2	108	Ⅱ + V		F		
4K-72-1096	鋼片	貫通	貫通	1	8.43	8.44	1.93	0.12	L	-	I + Ⅱ		-		L
4K-73-1020	鋼片	ホルンフェルス 1	ホルンフェルス 1	11.70	6.38	3.09	2.20	1	104	Ⅱ			-		
4K-73-1021	鋼片	貫通	貫通	1	4.34	4.05	2.97	0.04	-	-	-		-		
4K-73-1029	石積	積置貫通	積置貫通	9	31.77	20.97	15.71	9.33	1	124	I + Ⅱ + Ⅲ + V		H		
4K-73-1064	鋼片	積置貫通	積置貫通	8	18.94	8.74	5.90	0.54	-	-	I + Ⅱ		-		B
4K-81-1001	鋼片	貫通	貫通	1	30.50	10.62	3.68	0.53	-	-	I + V		F		B
4K-81-1002	鋼片	チャート	チャート	1	6.17	4.64	3.87	0.14	-	-	-		-		
57a	4K-81-1003	鋼片	積置貫通	6	26.28	17.11	11.96	4.75	2	130	I + Ⅱ		F		
4K-82-1001	鋼片	チャート	チャート	1	15.81	12.46	3.79	0.89	1	126	Ⅱ + Ⅲ		H	B	
4K-82-1002	鋼片	積置貫通	積置貫通	1	17.96	13.58	10.54	1.68	-	-	Ⅱ + Ⅲ		-		B
4K-82-1003	鋼片	チャート	チャート	1	16.27	21.26	7.20	2.39	L	120	Ⅱ + Ⅲ + V		O		
4K-82-1004	鋼片	貫通	貫通	2	16.21	24.97	6.42	1.32	2	131	I		S		L
4K-82-1005	鋼片	貫通	貫通	1	18.16	15.86	5.35	1.13	1	113	I + Ⅲ + V		H		
4K-82-1006	鋼片	チャート	チャート	1	21.25	26.15	6.54	3.77	1	114	Ⅱ + V		H		
4K-82-1007	鋼片	チャート	チャート	1	11.33	16.82	6.41	1.27	-	-	Ⅱ + V		S		B
13	4K-82-1008	二次加工鋼片	積置貫通	3	28.63	15.62	6.54	1.42	-	-	I + Ⅱ + Ⅲ	78	H	B	
4K-82-1010	鋼片	安山岩	安山岩	6	16.55	21.21	6.54	1.86	1	109	I		H		
4K-82-1011	鋼片	チャート	チャート	1	18.43	8.19	2.84	0.29	F	-	Ⅱ		F		
24	4K-82-1012	鋼片(口あり)	積置貫通	2	36.72	22.56	5.08	1.91	1(1)	110	I		H	N	H
4K-82-1013	鋼片	貫通	貫通	1	32.74	15.34	6.43	1.71	1	104	I + Ⅱ		H		
4K-82-1014	鋼片	安山岩	安山岩	6	33.84	25.11	8.92	5.76	L	-	I + Ⅱ + V		-		
4K-82-1015	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	25.19	22.28	4.08	1.55	-	-	-		-		V-M
4K-82-1016	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	12.83	16.75	3.79	0.52	2	106	I		H	L	
4K-82-1017	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	15.43	11.82	6.49	0.73	-	-	I + Ⅱ		S		B
4K-82-1018	鋼片	安山岩	安山岩	9	23.86	16.74	15.64	3.42	3	106	I + Ⅱ		H		
4K-82-1019	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	8.63	9.82	2.16	0.13	-	-	I + Ⅱ		H		B
52u	4K-82-1020	鋼片	貫通	1	33.54	37.98	32.82	11.81	1	113	I + Ⅱ + Ⅲ		H		
4K-82-1021	鋼片	積置貫通	積置貫通	3	19.96	11.61	6.18	0.94	-	-	I + Ⅱ		H		B
4K-82-1022	鋼片	建替貫通	建替貫通	1	26.91	48.82	11.63	16.32	2	116	I + V		H		
4K-82-1023	鋼片	積置貫通	積置貫通	1	8.71	6.54	2.08	0.07	1	124	I + Ⅱ		F		
4K-82-1024	石積	積置貫通	積置貫通	9	18.64	29.73	19.56	8.26	93						
4K-82-1025	鋼片	安山岩	安山岩	7	21.21	16.45	7.06	2.30	1	113	I + Ⅱ + V		S		
4K-82-1026	鋼片	積置貫通	積置貫通	10	20.29	12.36	11.54	1.14	-	-	-		-		
4K-82-1027	鋼片	積置貫通	積置貫通	8	19.95	17.61	3.81	0.77	-	-	I + Ⅱ		-		H
4K-82-1028	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	18.37	16.29	3.39	0.82	L	-	-		-		
4K-82-1029	石積	積置貫通	積置貫通	1	35.12	13.89	16.54	2.71						N	
4K-82-1030	石積	積置貫通	積置貫通	12	22.82	18.65	13.97	5.39	89						
53a	4K-82-1031	二次加工鋼片	積置貫通	1	20.04	18.67	5.93	1.82	1	116	I + Ⅱ		H	66	
4K-82-1032	鋼片	積置貫通	積置貫通	10	22.41	8.63	8.84	1.26	1	75	Ⅱ		H		
4K-82-1033	二次加工鋼片	積置貫通	積置貫通	9	22.13	11.23	4.63	0.87	4(3)	120	I + Ⅱ		H	83	N
17	4K-82-1034	鋼片	積置貫通	9	35.24	37.41	8.73	6.75	1	121	I + V		F		
4K-82-1035	鋼片(口あり)	積置貫通	積置貫通	6	23.84	15.96	10.24	1.99	3	112	I + Ⅱ		H	N	
4K-82-1037	石積	安山岩	安山岩	4	20.03	38.49	26.57	16.39							
4K-82-1038	鋼片	安山岩	安山岩	6	25.89	25.79	7.27	4.64	C	113	V		H		
4K-82-1039	石積	安山岩	安山岩	7	22.42	25.49	25.83	17.58	74						
4K-82-1040	鋼片	貫通	貫通	1	8.91	20.74	5.87	0.75	1	93	I + Ⅱ		H		
16	4K-82-1041	二次加工鋼片	積置貫通	9	23.32	29.24	8.21	6.88	2	125	I + Ⅱ		S	73	N
4K-82-1042	鋼片	安山岩	安山岩	8	29.87	39.50	6.31	5.85							
4K-82-1043	鋼片	貫通	貫通	2	17.84	30.69	4.79	1.48	1	123	I + V		H		
4K-82-1044	鋼片	積置貫通	積置貫通	9	12.86	25.43	23.71	5.37	C	126	I + Ⅱ		H		
4K-82-1045	鋼片	安山岩	安山岩	6	31.38	18.85	8.58	3.46	2	115	I + Ⅱ		H		57
4K-82-1046	鋼片	積置貫通	積置貫通	12	12.45	13.90	3.15	1.05	-	-	I + Ⅱ		-		LB
4K-82-1047	鋼片	安山岩	安山岩	6	27.15	14.75	9.08	3.24	L	-	Ⅱ + V		H		
4K-82-1048	石積	安山岩	安山岩	1	38.54	22.00	25.09	18.05							
4K-82-1049	鋼片	ホルンフェルス 2	ホルンフェルス 2	22.14	26.89	7.89	3.83	C	81	I + Ⅱ + Ⅲ + V		H			
4K-82-1050	鋼片	安山岩	安山岩	8	39.82	28.96	11.02	9.18	1	115	I + Ⅱ		H		
4K-82-1051	鋼片	貫通	貫通	2	11.96	17.82	4.99	0.56	-	-	I + Ⅱ		H		B
4K-82-1052	鋼片	積置貫通	積置貫通	1	13.86	7.56	4.52	0.25	1	98	I		H		



第5表 第2文化層 第3地点出土石器属性表

标本番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大径 mm	最大幅 mm	重量 g	打痕	打 角 傾 角	竹筴構成	先端 形状	肩線角	使用痕 被熱痕	折欠	欠損
82g	4K-63-1001	剥片	硬質頁岩	1	22.63	26.14	9.71	5.47	2	112	-	-	H	
	4K-63-1002	剥片	ホルンフェルス	1	22.63	26.14	9.71	5.47	1	110	-	-	H	
82b	4K-63-1003	剥片	ホルンフェルス	1	28.54	32.76	9.07	6.62	1	112	I + II + V	-	H	
	4K-63-1004	剥片	ホルンフェルス	1	16.56	11.51	5.30	0.94	-	-	-	-	H	B
82a	4K-63-1005	剥片	ホルンフェルス	2	67.30	26.89	12.25	20.26	2	116	I + III + V	-	F	
	4K-63-1006	剥片	硬質頁岩	1	20.56	11.61	4.52	0.71	1	112	I + III + V	-	F	
90a	4K-63-1007	剥片	ホルンフェルス	1	32.78	33.02	8.80	8.31	3	116	-	V	H	
	4K-63-1008	剥片	硬質頁岩	12	9.92	18.90	4.05	0.61	-	-	-	-	H	B
90b	4K-63-1009	剥片	ホルンフェルス	1	22.66	16.31	8.74	0.53	1	112	I + III + V	-	F	
	4K-63-1010	剥片	ホルンフェルス	3	38.41	28.67	12.59	7.40	-	-	-	-	H	
94a	4K-63-1011	剥片	ホルンフェルス	1	29.96	33.34	11.89	8.87	1	105	I + V	-	F	
	4K-64-1001	鏡形石礫	硬質頁岩	6	29.73	11.27	6.85	1.18	P	-	-	-	H	20
63d	4K-64-1002	剥片	ホルンフェルス	2	14.55	13.48	5.96	0.89	-	-	-	-	H	B
	4K-72-1040	石礫	ホルンフェルス	2	67.75	55.20	31.07	127.12	-	-	-	-	H	
61b	4K-72-1077	剥片	ホルンフェルス	1	51.63	20.02	10.47	9.53	-	-	-	-	H	B
	4K-73-1001	二次加工剥片	硬質頁岩	6	31.37	13.28	8.73	3.05	2	123	I + V	-	S	78-89
15	4K-73-1002	剥片	硬質頁岩	2	20.24	6.73	2.14	0.30	-	-	-	-	H	
	4K-73-1003	剥片	ホルンフェルス	1	7.54	10.86	5.17	0.37	2	122	III	-	H	
90c	4K-73-1004	剥片	頁岩	1	16.83	15.62	3.06	0.91	1	138	-	-	H	R
	4K-73-1005	剥片	硬質頁岩	1	23.70	10.18	7.13	1.24	1	91	I + V	-	H	
90f	4K-73-1006	剥片	硬質頁岩	2	13.94	28.67	7.83	1.56	C + I	126	-	-	H	
	4K-73-1007	剥片	ホルンフェルス	1	33.98	26.13	8.46	5.31	1	117	I + III	-	H	
12	4K-73-1008	剥片	ホルンフェルス	2	17.40	9.48	5.80	1.03	1	124	I + III	-	H	
	4K-73-1009	剥片	硬質頁岩	9	11.38	12.40	5.80	0.62	1	116	III + V	-	H	
90d	4K-73-1010	二次加工剥片	硬質頁岩	2	9.61	19.15	3.99	0.45	1	114	I + III	-	H	N
	4K-73-1011	剥片	ホルンフェルス	1	42.34	29.04	16.02	19.31	2	122	I + III + V	-	H	
64b	4K-73-1012	剥片	硬質頁岩	2	15.51	21.27	3.54	0.79	1	116	I + III	-	H	
	4K-73-1013	剥片	ホルンフェルス	1	9.22	7.00	3.58	0.21	1	90	I + III	-	H	
7	4K-73-1014	剥片	ホルンフェルス	2	30.08	23.73	10.67	8.16	2	89	I + III + III	-	H	
	4K-73-1015	剥片	ホルンフェルス	1	20.61	7.62	4.87	0.78	P	-	-	-	H	
64c	4K-73-1016	剥片	安山岩	4	29.44	33.76	10.82	10.18	1	115	I + V	-	H	
	4K-73-1017	剥片	硬質頁岩	3	13.63	11.39	3.31	0.45	1	111	I	-	H	
7	4K-73-1018	剥片	ホルンフェルス	3	45.25	23.66	11.20	15.36	1	76	I + III	-	H	
	4K-73-1019	剥片	ホルンフェルス	2	30.76	27.95	12.59	8.26	C	72	I	-	S	L
64d	4K-73-1021	剥片	ホルンフェルス	3	18.22	14.04	5.04	1.79	1	123	I + III	-	F	
	4K-73-1022	剥片	ホルンフェルス	1	6.22	10.92	4.50	0.28	1	100	I + III	-	H	
7	4K-73-1023	剥片	硬質頁岩	8	10.42	13.04	3.95	0.38	1	114	I + III	-	H	
	4K-73-1024	鏡形石礫	硬質頁岩	3	18.59	14.96	7.80	2.63	-	-	-	-	H	
60	4K-73-1025	剥片	硬質頁岩	9	12.61	9.45	2.83	0.34	1	114	I + III	-	H	
	4K-73-1026	剥片	硬質頁岩	6	17.81	11.09	3.50	0.61	-	-	-	-	H	
60	4K-73-1028	剥片	硬質頁岩	3	25.44	10.17	5.93	1.38	2UD	113	I + V	-	H	
	4K-73-1030	石礫	ホルンフェルス	1	42.89	33.25	46.78	77.26	-	-	-	-	H	
34	4K-73-1031	剥片	ホルンフェルス	1	11.67	9.92	3.18	0.30	1	102	I	-	F	
	4K-73-1032	剥片	硬質頁岩	5	33.93	13.05	6.07	1.63	1	84	I	-	F	
60b	4K-73-1033	剥片	硬質頁岩	5	14.13	17.80	5.41	0.57	1	113	I + III	-	H	
	4K-73-1034	剥片	硬質頁岩	9	16.97	11.59	8.74	1.49	-	-	-	-	H	B
47b	4K-73-1035	剥片	ホルンフェルス	1	16.23	18.45	5.08	1.65	1	113	III	-	H	
	4K-73-1036	剥片	安山岩	4	21.03	20.04	9.10	2.39	1	73	I + III + V	-	H	
36	4K-73-1037	剥片	ホルンフェルス	2	18.30	28.69	6.12	2.88	1	98	I + III	-	H	
	4K-73-1038	鏡形石礫 (Uあり)	硬質頁岩	9	37.74	15.46	9.98	2.76	1	108	I + III + III	-	H	N
57b	4K-73-1039	鏡形石礫	硬質頁岩	1	39.72	38.62	13.89	16.12	-	-	-	-	H	51-63
	4K-73-1040	石礫	硬質頁岩	6	21.17	28.29	15.26	8.56	-	-	-	-	H	
40	4K-73-1041	剥片	ホルンフェルス	2	13.98	11.62	5.30	0.67	P	-	-	-	H	
	4K-73-1042	剥片	安山岩	7	38.96	25.87	11.00	9.51	1	118	I	-	H	
4	4K-73-1043	石礫	安山岩	4	31.80	30.36	18.26	18.80	-	-	-	-	H	
	4K-73-1044	剥片	ホルンフェルス	2	16.16	17.83	5.62	1.52	1	134	III	-	H	
37	4K-73-1045	石礫	硬質頁岩	6	30.00	18.01	8.81	2.25	1	109	I + III	-	H	N
	4K-73-1046	剥片	ホルンフェルス	1	10.40	11.20	3.84	0.45	1	98	II	-	S	
60d	4K-73-1047	剥片	ホルンフェルス	2	24.53	11.23	8.28	2.01	1	135	I + III + III	-	H	
	4K-73-1048	剥片	硬質頁岩	6	14.13	15.99	2.75	0.51	1	120	I + III	-	H	
60e	4K-73-1049	剥片	ホルンフェルス	1	35.87	38.89	6.82	6.55	1	114	I + III + V	-	H	
	4K-73-1056	剥片	硬質頁岩	7	43.12	19.92	12.21	3.28	1	116	I + III	-	H	F(0)
34	4K-73-1055	剥片	安山岩	4	8.95	6.55	2.50	0.16	-	-	-	-	H	B
	4K-73-1056	剥片	安山岩	4	10.47	14.92	2.84	0.35	1	120	V	-	F	
1	4K-73-1057	ナイフ形石礫	安山岩	5	54.31	20.69	8.27	8.68	1	113	I + V	-	H	77-87
	4K-73-1058	剥片	安山岩	6	20.94	18.08	5.69	1.83	1	102	I + III	-	H	
67a	4K-73-1059	剥片	安山岩	4	24.37	21.50	9.70	3.81	2	108	III + V	-	S	
	4K-73-1060	剥片	安山岩	3	33.31	27.17	7.30	3.81	1	123	I + III + V	-	H	
63c	4K-73-1061	剥片	ホルンフェルス	2	14.56	14.98	7.31	1.40	1	86	III + V	-	H	
	4K-73-1062	剥片	硬質頁岩	2	14.51	14.18	2.06	0.23	1	101	III	-	H	R
49a	4K-74-1001	剥片	ホルンフェルス	1	17.78	13.01	4.04	0.80	1	117	III + V	-	H	
	4K-74-1002	剥片	ホルンフェルス	2	11.02	12.89	2.82	0.44	1	118	V	-	H	
52a	4K-74-1003	剥片	ホルンフェルス	1	18.22	12.53	4.17	0.80	1	108	I	-	F	L
	4K-74-1004	剥片	安山岩	6	15.07	30.82	6.15	1.51	3	121	V	-	H	
49b	4K-74-1002	剥片	安山岩	6	30.15	28.91	10.52	7.50	1	110	I + III + V	-	H	
	4K-74-1003	剥片	硬質頁岩	8	10.92	13.68	4.17	0.56	1	122	I + III	-	H	
49c	4K-74-1005	剥片	頁岩	1	47.07	24.69	9.80	9.21	4	88	I + V	-	F	
	4K-80-1011	剥片	安山岩	2	15.78	20.07	5.30	2.71	1	135	II	-	S	
65	4K-80-1012	剥片	硬質頁岩	1	30.32	12.56	6.61	1.30	1	128	I + III + V	-	H	
	4K-80-1013	剥片	チャート	1	18.42	12.14	5.10	0.75	P	-	-	-	H	R

第6表 第2文化層 第2地点出土石器組成表

種類	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工剥片	剥片	碎片	石核	磁石	磨・磨片	母岩別出土点数	点数比	母岩別重量 (g)	重量比
安山岩 1							2			2	0.92%	33.40	2.32%
安山岩 2					2					2	0.92%	7.72	0.54%
安山岩 3					3	2				5	2.30%	9.42	0.65%
安山岩 4					2		1			3	1.38%	28.91	1.94%
安山岩 5					1					1	0.46%	2.73	0.19%
安山岩 6					5					5	2.30%	17.97	1.25%
安山岩 7					4	2	1			7	3.23%	28.18	1.95%
安山岩 8			1		3	2	1			7	3.23%	51.51	3.58%
安山岩 9					2					2	0.92%	11.71	0.81%
安山岩 10					1					1	0.46%	3.38	0.23%
流紋岩 1						1				1	0.46%	0.21	0.01%
玄武岩 1					1					1	0.46%	3.10	0.22%
砂岩 1									1	1	0.46%	235.13	16.32%
砂岩 2									1	1	0.46%	0.78	0.05%
頁岩 1					26	14	2			42	19.35%	263.40	20.22%
頁岩 2		1			9	2				12	5.53%	42.58	2.99%
凝灰岩 1					1					1	0.46%	19.32	1.34%
凝灰岩 2	1			1	10	5	4			20	9.22%	63.13	4.39%
凝灰岩 3					4	3				15	7.27%	18.29	1.27%
凝灰岩 4					1	4				5	2.30%	8.24	0.58%
凝灰岩 5			2							2	0.92%	7.22	0.50%
凝灰岩 6				1	5					6	2.79%	13.37	0.93%
凝灰岩 7					2	1				3	1.38%	1.49	0.10%
凝灰岩 8					2	7	3			32	14.75%	85.08	5.91%
凝灰岩 9					2					2	0.92%	2.40	0.17%
凝灰岩 10										1	0.46%	12.65	0.88%
凝灰岩 11					3	2	2			7	3.23%	31.63	2.29%
凝灰岩 12										1	0.46%	1.88	0.09%
ホルンフェルス 1					1	1				2	0.92%	1.38	0.09%
ホルンフェルス 2					8	1				9	4.15%	19.94	1.38%
チャート 1					14	1	3			18	8.29%	1,200.54	82.25%
合計	1	1	3	9	137	44	20	1	1	217	100.00%	1,440.81	100.00%

第7表 第2文化層 第3地点出土石器組成表

種類	ナイフ形石器	削器	楔形石器	二次加工剥片	剥片	碎片	石核	母岩別出土点数	点数比	母岩別重量 (g)	重量比
安山岩 2					1			1	1.25%	2.71	0.54%
安山岩 3					1			1	1.25%	3.81	0.76%
安山岩 4					3	2	1	6	7.50%	35.19	7.02%
安山岩 5	1				1			1	1.25%	8.68	1.73%
安山岩 6					3			3	3.75%	10.93	2.18%
安山岩 7					1			1	1.25%	9.51	1.90%
頁岩 1					2			2	2.50%	10.11	2.02%
凝灰岩 1					4			4	5.00%	8.81	1.76%
凝灰岩 2			1		1		1	1	1.25%	16.12	3.21%
凝灰岩 3				1	3	1		5	6.25%	3.33	0.66%
凝灰岩 4					2			2	2.50%	4.45	0.89%
凝灰岩 5					2			2	2.50%	2.20	0.44%
凝灰岩 6		1	1	1	2		1	6	7.50%	16.16	3.22%
凝灰岩 7					1			1	1.25%	5.25	1.05%
凝灰岩 8						2		2	2.50%	0.93	0.19%
凝灰岩 9					2	2		4	5.00%	5.21	1.04%
凝灰岩 10					1			1	1.25%	0.61	0.12%
ホルンフェルス 1					13	5	1	19	23.75%	180.01	31.91%
ホルンフェルス 2					8	4	1	13	16.25%	174.79	34.85%
ホルンフェルス 3					3			3	3.75%	23.95	4.78%
チャート 1					1			1	1.25%	0.75	0.15%
合計	1	1	3	2	53	16	4	80	100.00%	901.32	100.00%

#### 4 第3文化層

第4・5地点（第32～34図，第8～10表，図版11）

**平面分布** 第4地点は当遺跡の東側に位置する。約15m北東には同一文化層と区分できた剥片1点があり，第5地点とした。第4，第5地点間における接合関係はないが，調査時の所見や石材の特徴，出土レベルなどから同一の生活面と判断した。第4地点の遺物分布は東西に5.5m，南北に6.1mである。4K-79・89，4L-70・80 グリッドから計13点が出土した。分布の中心は4K-79，4K-89にあり，北東から南西に線状の連なりとなっている。

**垂直分布** 出土遺物13点の分布の高低差は0.52mであるが，最低値を示した珪質凝灰岩1点を除けば平均値は標高24.54mとなり，0.31mの土層内に収まる。この1点の珪質凝灰岩はほかの4点と同母岩であるため，出土レベルの開きは問題ないものと認識される。調査時には土層断面図の作成はされておらず，明確な層位を示すことは困難である。ただ，調査時における所見ではⅥ層下部からⅧ層上部と記載されており，第2文化層第2・3地点と同材の石器が作出されていることから，Ⅵ層からⅩa層間に生活面が存在したのではないかと推察される。

**母岩別資料の分布** 第4地点からは流紋岩1，凝灰岩1，珪質頁岩1，硬質頁岩1～3，片岩1，チャート1がそれぞれ1点ずつと，珪質凝灰岩1が6点出土している。これらには接合関係はない。珪質凝灰岩1は2.6mのほぼ直線状に6点が出土するが，他の石材は散在する。13点中8点に何らかの二次加工痕・使用痕が観察され，出土点数に対する実測点数の割合は大きい。また，この地点から出土した硬質頁岩，凝灰岩，珪質凝灰岩は他所（おもに東北か）から持ち込まれた可能性が高く，これらの石器を用いて何らかの加工作業が行われた場であったと推察される。

**出土遺物** 1～8は第4地点から出土している。

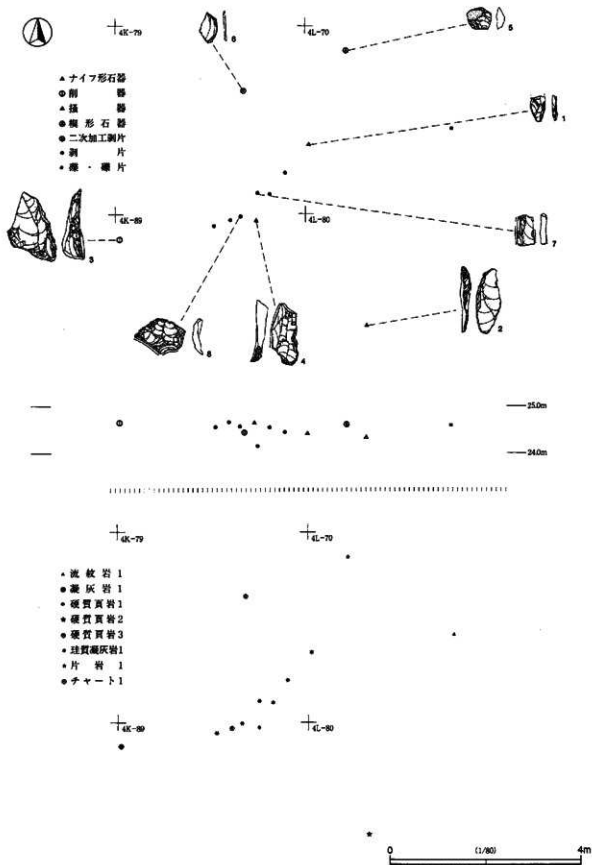
1，2はナイフ形石器である。1は淡黄灰色で器面の滑らかな珪質凝灰岩1の剥片が素材となる。石刃状剥片の打面付近に急角度の加工が施され，基部を作出している。これにより打面は残存しない。主要剥離面を打面として背面側へ抜ける二次加工が下半部に施される。上半部は欠損しているため刃部は確認できない。2には極めて良質な硬質頁岩2が用いられる。淡褐色・油脂光沢のある硬質頁岩の剥片を素材とする。木葉形に整えられた外周は大半が主要剥離面側から加工されているが，右側縁上半部の刃部には背面側から腹面に向かう加工が施されている。この調整は刃部の刃こぼれを整えようとしたものか。上端はわずかに欠けている。なお，同様の石材・加工を持つナイフ形石器は松崎Ⅱ遺跡からも出土している。

3は黄味がかった灰白色の凝灰岩を素材にした削器である。下部に最大幅を持つ剥片を利用して大まかに形が整えられた後，右側縁が細かく丁寧に加工される。自然面は残存しない。原礫はかなりの大きさだったと推定されるが，ほかに同一母岩が存在しないことから，外部からの搬入品である可能性が高い。

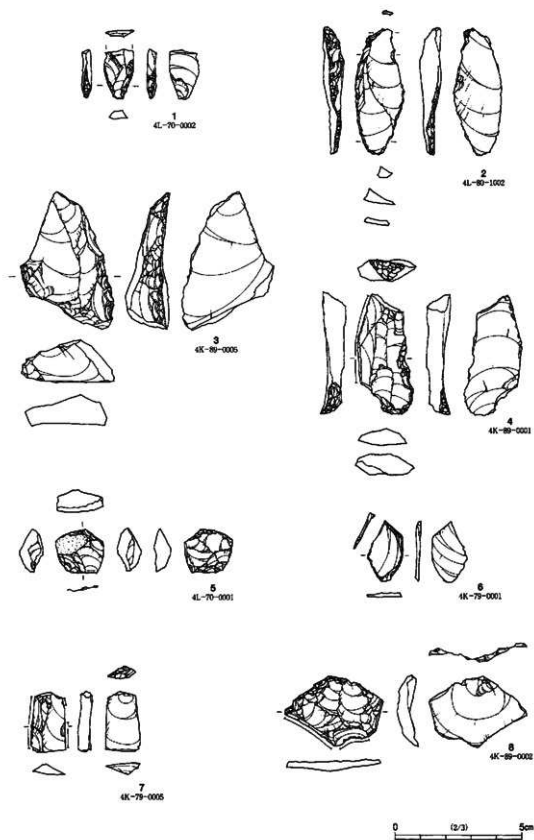
4は搔器である。茶褐色で光沢のある硬質頁岩が用いられている。石刃を素材にして周縁が加工される。主要剥離面を打面として，両側縁の一部を除きほぼ全周に調整痕が廻る。右側縁の下半部には挟入が2ヶ所，左下縁部には1ヶ所施され，それによって下端部の張り出しが顕著となっている。剥片の末端に相当する頂部にもまた急角度の小剥離によって面的な調整が行われている。左側縁上部には刃こぼれ痕が連なり，中央部には8倍のルーペでようやく確認できるほどの使用痕が看取される。

5は楔形石器である。黄灰褐色，灰褐色が筋状になった片岩の小礫を利用したもので，ほかに同一母岩はない。左右側面に古い剥離が残るが，上下縁辺は丁寧な交互剥離で調整される。





第32図 第4地点遺物分布

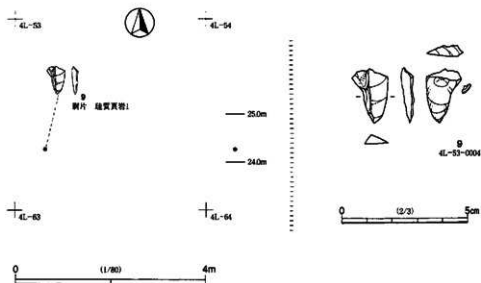


第33图 第4地点出土遺物

6は二次加工剥片である。褐色で光沢のある良質な硬質頁岩3から作られる。厚みの薄い板状の剥片の周囲に二次加工が施されている。左部の二次加工は折れた後の調整である。上端には微細剥離痕が香取される。左側縁下部および右側縁下2/3部分には、腹面を打面にして背面に向かう急角度の連続した剥離痕が並ぶが、右上縁は古い剥離面である側面からの調整である。また、この連続した小剥離は先端部から右側部にかけて丁寧に施されている。

7, 8は珪質凝灰岩1の使用痕のある剥片である。7の背面上部に小剥離痕がみられるが頭部調整によるものか。また打面には背面側から施された小剥離が7面並び、そのうちの4面には打点を確認できる。両側縁がほぼ平行に走り、厚みが均一で整美な石刃である。下部は折れて残存しない。8の背面には多方向から加撃されてきた剥離痕があり、上縁の打面付近には連続した小剥離痕が残る。石核からの剥片剥離にともなう器面の荒れを整えるために剥離された剥片であると思われる。下縁には使用の際の微細剥離痕があり、下縁右部の微細剥離痕は器厚が薄いためか、線やかに決れる。

9は第5地点で唯一出土した珪質頁岩の小剥片である。剥離面の大部分は黒色だが、黄色味を帯びた灰白色部分もある。自然面は遺存していない。打角が134度と大きく、左側縁上部はわずかに折れている。使用痕や二次加工痕は香取されない。



第34図 第5地点遺物分布・出土遺物

第8表 第3文化層 第4地点出土石器属性表

母岩番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大長さ mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 鋭角	背割構成	片割 形状	使用痕 跡熱度	研れ	欠損
6	4K-79-001	二次加工剥片	燧石頁岩	3	24.23	14.21	1.79	0.52	-	-	I	-	65-77	V-M
	4K-79-003	剥片	燧石燧石岩	1	30.25	9.98	5.13	1.09	-	-	I + II + III	-	83	V-M
7	4K-79-004	燧片	燧石燧石岩	1	18.43	7.11	2.94	0.31	-	-	I + II + III	-	-	V-M
	4K-79-005	燧片(山あり)	燧石燧石岩	1	23.64	13.98	4.52	1.42	7(4)	88	I + III	-	-	H
4	4K-89-001	燧片	燧石燧石岩	1	47.43	22.21	8.98	7.79	-	-	I + II + III	-	78-108	-
	4K-89-002	剥片(山あり)	燧石燧石岩	1	27.52	36.82	8.23	3.68	1	108	I + II + III	II	-	N
3	4K-89-003	燧片	チャート	1	19.41	20.52	5.38	1.59	7(5)	106	I	II	-	N
	4K-89-004	燧片	燧石燧石岩	1	24.41	21.83	3.31	1.09	-	-	I + III	-	-	V-M
5	4K-89-005	燧片	燧石岩	1	54.45	36.82	16.32	20.81	-	-	I + III	II	80-93	-
	4L-70-0001	燧石燧石岩	片岩	1	17.15	18.92	9.65	2.59	-	-	-	-	68-70	-
1	4L-70-0002	ナイフ形石器	燧石燧石岩	1	19.63	10.12	4.76	0.81	-	-	I + III	-	73-80	H
	4L-70-0003	燧片	燧石岩	1	58.93	77.80	45.92	219.96	-	-	-	-	-	H
2	4L-80-1002	ナイフ形石器	燧石燧石岩	2	30.89	19.12	7.98	5.43	-	-	I	-	78-93	-

第9表 第3文化層 第5地点出土石器属性表

母岩番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大長さ mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打面	打角 鋭角	背割構成	片割 形状	使用痕 跡熱度	研れ	欠損
9	4L-53-0004	燧片	燧石燧石岩	1	21.01	14.48	5.03	0.96	1	13	III + V	II	-	-

第10表 第3文化層 第4・5地点出土石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石器	燧片	燧石 燧石岩	燧石 燧石岩	二次加工剥片	剥片	燧・燧片	層別 出土点数	点数比	層別 重量 (g)	重量比
燧	燧石	1					1	1	7.4%	219.96	82.67%	
燧	燧石		1					1	7.4%	20.81	7.82%	
燧	燧石						1	1	7.4%	0.98	0.37%	
燧	燧石			1				1	7.4%	7.79	2.93%	
燧	燧石	2	1					1	7.4%	5.43	2.04%	
燧	燧石	3						1	7.4%	0.52	0.20%	
燧	燧石	1	1			1	4	6	42.86%	8.40	3.16%	
片	燧石			1				1	7.4%	2.59	0.97%	
チャート	1						1	1	7.4%	1.59	0.60%	
合計		2	1	1	1	2	6	14	100.00%	268.07	100.00%	

## 5 第4文化層

## 第6地点(第35・36・40・41図, 第11~18表, 図版3・11・12)

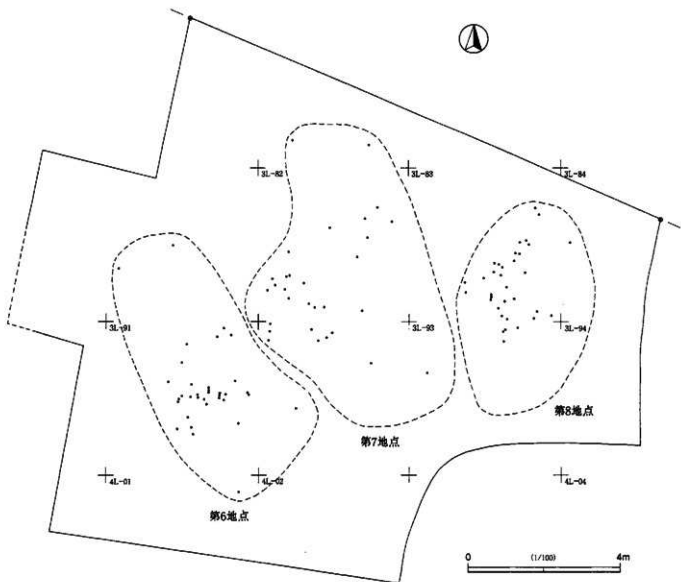
平面分布 第6地点は3L-91グリッドを中心に東西5.1m, 南北6.9mの範囲から遺物35点が出土している。

4点が他グリッドに散在しているが, 大部分は2m×3mの範囲に集中する。分布の中心からは角錐状石器が2点と角錐状石器をリダクション, または製作する際に調整した剥片が2点出土している。

垂直分布 断面図に投影された石器の分布はⅡ層からⅥ層を示す。チャートの燧片1点がⅡ層に落ちているが同一母岩のほとんどがⅣ層からⅤ層に投影されるので, 何らかの自然条件によって上部まで持ち上げられたか, 層区分の微妙なずれによるものと考えられる。Ⅳ層がソフトローム化し, 部分的に入り混じって不安定になっているためⅥ層に投影されている遺物も同一生活面の所産である可能性が高い。分布の幅は0.39mであり, 平均したレベルはⅣ層に求められ, 生活面はⅣ層下部分からⅤ層上部にあると考えられる。

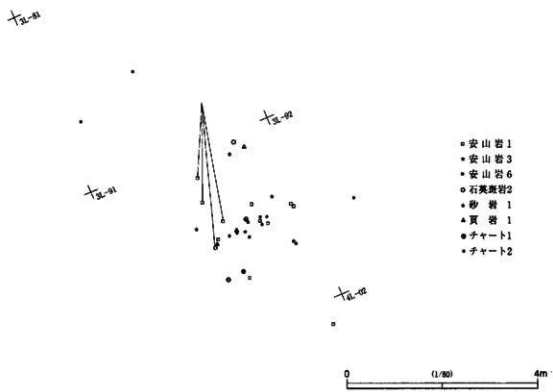
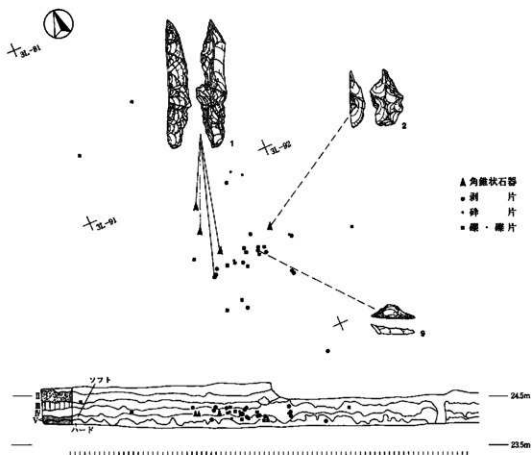
母岩別資料の分布 安山岩1は角錐状石器とその調整剥片, 剥片によって構成され, 安山岩3, 6, 石英斑岩は1点ずつ出土する。砂岩1は剥片と燧片の5点, 頁岩1は剥片1点, 燧片2点, チャートは1, 2とも燧片が散らばって出土している。まとまりを構成するのが安山岩の13点と砂岩の5点であり, 比較的散在するのはチャート燧片である。

出土遺物 1(安山岩1)は自然面, 風化面とも暗黒褐色の黒色緻密質安山岩の角錐状石器である。最大長は99.8mmである。同母岩40点のうち, 角錐状石器を構成する3片を1点と数え, それに調整剥片1点が接合している。37点の剥片・燧片は, 1を作出する際に打ち欠かれたものである。厚みがある大型剥片の



第35図 第6・7・8地点遺物分布

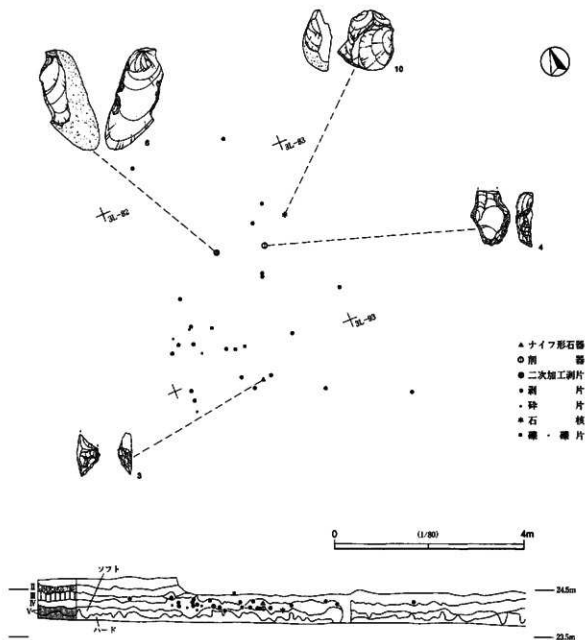
主要剥離面を未加工のまま残し、この面を打面として左側縁と右側縁下半部に調整が加えられる。3片に折れているが、折れた後の調整痕が看取されないことから、人為的な折り取りが行われたとは考えにくい。本来ならば断面を実測するところであるが、折面の情報に収斂されると判断し、引き出して面的な実測を行なった。折れの部分はいずれも主要剥離面側を起点としている。断面形はほぼ正三角形をなす。基部における調整は、背後上から左右側縁に向かって粗く打ち欠いた後、裏面から丁寧な小剥離が施され、丸みのある末端部が作り出される。先端部は剥片時の末端を主要剥離方向とは逆から加撃して刃部を形成した後、対縁を入念に調整して先端が作られている。背面中央部にわずかに自然面が残っているが、風化した剥離面である可能性もある。1aはこの角錐状石器の器形を整えるため、割合早い時期に剥離された剥片であり、打角は120度である。



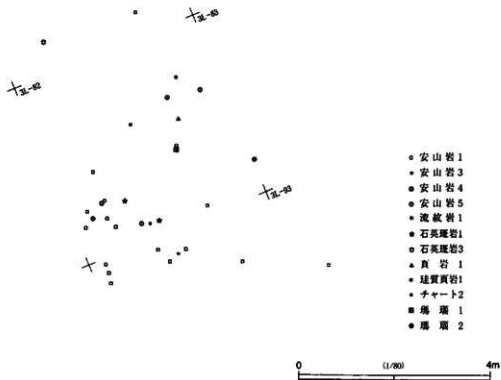
第36図 第6地点遺物分布

2 (安山岩3) も角錐状石器である。風化面は1よりも黄みの強い暗褐色の黒色緻密質安山岩である。横長の剥片を縦位に据えて、主要剥離面側を打面にして側縁を整えている。先端は右側縁からの丁寧な小剥離により断面が正三角形に整形されている。なお、右側縁は先端から中ほどに向かって順に、連続した加工が施されている。1よりもかなり小型で、最大長は45mmである。

9 は角錐状石器の調整剥片である。点状打面から剥離された剥片は横位に長い。背面末端部は下面が打面と設定されており、急角度の連続した小剥離痕が一行に並ぶ。同母岩に角錐状石器が作出されていることから、1の器形を整えるための調整剥片であると考えられる。



第37図 第7地点器種別分布



第38図 第7地点母岩別分布

#### 第7地点 (第35・36・40・41図, 図版3・11・12)

**平面分布** 3L-72・82, 3L-92・93グリッドから41点の遺物が出土している。分布範囲は東西4.2m, 南北7.0m, 分布の中心は3L-82で安山岩が主体をなすが, これは第6地点から出土している角錐状石器を製作する途中の剥片類である可能性が高い。主要な器種としては, ナイフ形石器, 削器, 二次加工剥片などが出土する。

**垂直分布** 断面図に投影された石器はⅢ層からⅤ層にかけて0.39mの範囲に分布する。第6地点同様, Ⅳ層, Ⅴ層の分層はソフト化によって不明瞭となっている部分はあるが, 安定したレベルはⅣ層下部に求められる。

**母岩別資料の分布** 安山岩1, 3~5, 流紋岩1, 石英斑岩1・3, 頁岩1, 珪質頁岩1, チャート2, 瑪瑙1・2が出土する。群を抜いて多いのは第6地点と同じく安山岩1で, 第7地点出土石器の半数以上である24点を数える。安山岩4は4点, 石英斑岩1, 瑪瑙1は2点ずつであるが, ほかはすべて1点ずつの出土である。

**出土遺物** 3は2と同一母岩のナイフ形石器である。母岩の安山岩3は, 第6地点で出土した2の角錐状石器とこのナイフ形石器の2点のみである。基部として据えた部分には主要剥離面側から背面に向けての



加工がみられる。調整の角度は61度を測り、いわゆるブランディング加工とはいいいがたい。しかし左側面は無加工でも急角度の傾斜があり、ナイフ形石器の範疇に含まれるものと認識される。上半部は折れて欠損する。

4は頁岩1の削器である。第8地点の二次加工剥片と同一母岩であるが接合関係はない。灰白色で厚みのある剥片の側縁部から末端部を加工してスクレーピングエッジが作出される。調整角は76度である。主要剥離面から背面に向けて粗く成形したのちに急角度の小剥離で丁寧に二次加工が施される。上部は折れにより残存しない。

6は珪質頁岩1の二次加工剥片である。自然面は黄褐色、剥離面は中心に向かうに従い黄褐色から緑灰色となる。平坦に剥離された打面から、縦長で厚みのある大型の剥片が剥離される。最大長は約80mm、重量は約46gである。背面にはこの6の剥離以前にも同様に剥離された痕が残るが、同一の母岩とみられる石片は存在しない。両側縁の中ほどには側縁から主要剥離面を削ぐように二次加工痕が並ぶ。単品で搬入されたものか。

10は安山岩4の石核である。自然面、風化面とも黄褐色のいわゆるトロトロ安山岩である。周囲から内へ向かって剥片剥離作業が行われるが、自然面を剥離しようとする意図はうかがえない。同母岩は剥片2点、碎片1点である。

#### 第8地点(第35・39～41図, 図版3・11・12)

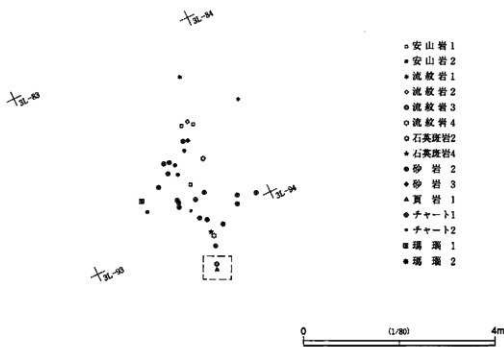
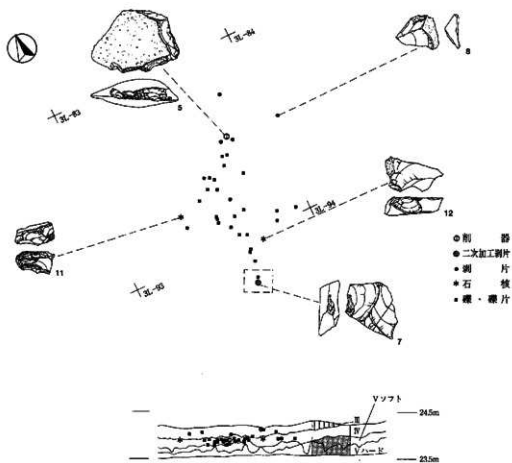
平面分布 松崎I遺跡における最東端の遺物集中地点である。3L-83・84, 3L-93グリッドから35点の遺物が出土している。出土グリッドは3区画にわたるが、遺物は東西3.3m、南北5.2mの狭い範囲にまとまっている。

垂直分布 IV層、V層のソフトローム化という不安定さを除外すれば第6地点・第7地点の土層はほぼ水平に堆積しているが、第8地点ではII層からIV層が右上がりに推移する。東の谷へと落ち込む前に0.5mほどの盛り上がりを見せる。遺物は平坦な堆積状態を示しているIII層からV層にかけて出土し、0.34mの間に収まる。安定したレベルはIV層に求められる。

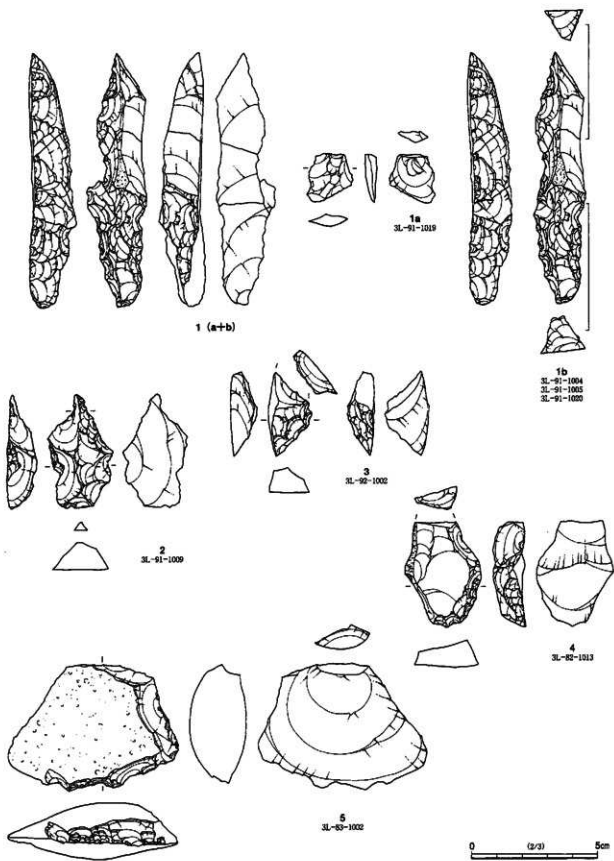
母岩別資料の分布 安山岩1・2, 流紋岩1～4, 石英斑岩2・4, 砂岩2・3, 頁岩1, チャート1・2, 瑪瑙1・2の15母岩が出土している。第6地点や第7地点で多く出土した安山岩1はわずか3点にとどまる。代わってチャート1が14点出土しているが破砕礫のみのまとまりである。流紋岩3は重量162g, 石英斑岩4は約220gを量る、子供の拳大の被熱礫である。表面は熱により赤茶色に変色している。礫は写真のみを掲載した。

出土遺物 5は流紋岩2の削器である。同一母岩はなく、単体で出土する。自然面は黄色がかった灰白色であり、剥離面は直径1mmの石英粒を含み、石基は灰色である。主要剥離面の末端は厚みを持ったヒンジ・フラクチャー、縦断面・横断面とも中ほどに膨らみをもつ凸レンズ状となる。調整は右側縁から幅広の下縁辺に及んで67度～88度のスクレーピングエッジを作出している。主要剥離面側から背面の自然面を剥ぐように加工し刃部分の縁辺を整えた後、小剥離で調整される。調整は右側面から幅広の下縁辺に及ぶ。左側縁のみ無加工である。

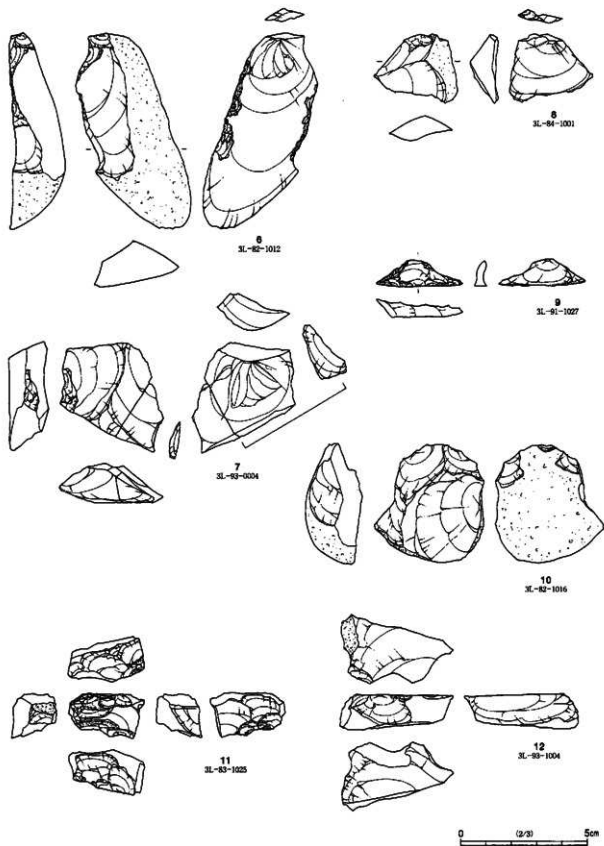
7は二次加工剥片である。4の削器と同一母岩で、厚みのある大型の頁岩剥片を素材とする。平坦な打面からの剥片剥離角は130度である。左縁辺に残る二次加工部分は折れにより途断する。また下部が折れた



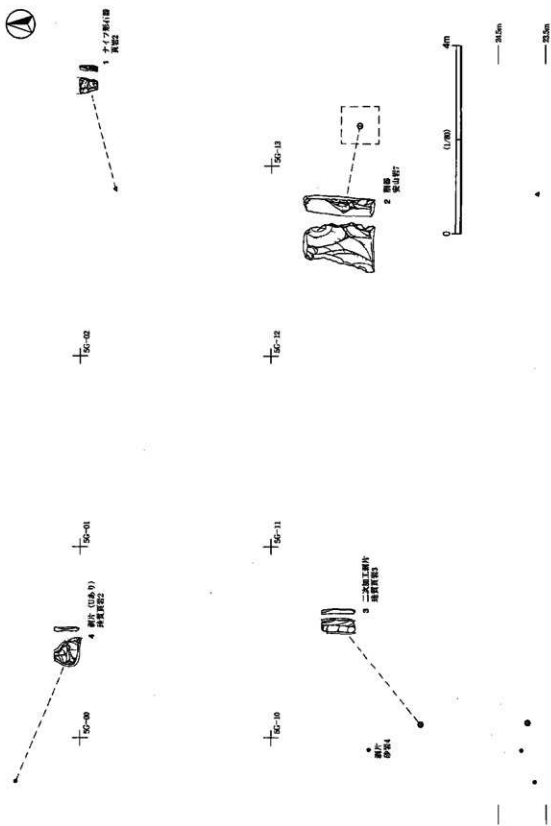
第39圖 第8地点遺物分布



第40图 第6·7·8地点出土遺物(1)



第41图 第6·7·8地点出土遗物(2)



第42図 第9 地点遺物分布

後に右側縁下部も折れていることから、尖端を意識した折り取りが行われた可能性も否めない。使用痕は看取されない。

8は流紋岩1の剥片で、剥離面は緑灰色だが自然面に近くなるにつれ薄い茶色になる。使用痕・二次加工痕はみられない。

11, 12は瑪瑙の石核である。剥離面の色は似るが、自然面の特徴が異なる為、別母岩と認識した。11の左端部に残る自然面は鮮やかなオレンジ色である。剥離面は瑪瑙?と同様、乳白色から橙色である。左上部・下縁辺には細やかな調整が施され、右側面は折れている。左半部を基部と捉えれば、刃部折れのナイフ形石器と分類することも可能か。

12は瑪瑙2の石核である。自然面は鉄錆色で気泡状に層を成す。剥離面は乳白色から橙色である。厚みのある剥片を素材にした石核で、平坦な主要剥離面を打面として小剥片が剥離される。

瑪瑙は松崎I遺跡では第7地点と第8地点から5点が出土したのみであった。

#### 第9地点 (第42・43図, 図版13)

**平面分布** 第9地点は当遺跡最西の集中地点である。遺物の出土グリッドは4F-99, 5F-19, 5G-02・10・13で、5点の遺物が東西12.7m, 南北9.1mの範囲から出土している。第6・7・8地点と母岩が共通する遺物はない。器種としては、ナイフ形石器、削器、二次加工剥片、使用痕のある剥片、剥片のそれぞれ1点ずつが散漫に分布する。出土石材・器種から第6・7・8地点と同一の第4文化層に生活面を持つものと認識した。

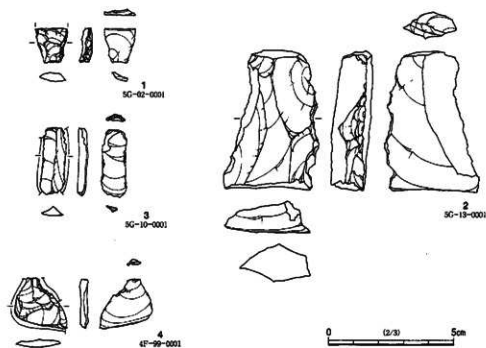
**垂直分布** 2の削器は出土位置および出土レベルが不明であるが、調査時の所見ではⅢ層～Ⅴ層に包含される。ほかの4点は0.35mの間に収まる。調査時に土層断面図が作成されていないため、出土遺物の投影は不可能である。

**出土遺物** 1は頁岩2のナイフ形石器の基部である。剥片の上部を基部に据えて、側縁に急角度のプランティングが施される。剥片の側縁から末端部に刃部の作出があったと推測されるが、折れにより欠損している。

2は安山岩7の削器である。調査時の出土レベルは計測されていない。風化面は暗褐色、ガジリ部分は黒色の緻密質安山岩である。左側縁部は調査時の欠けである。右側面には腹面側から急角度の調整が入る。素材となった安山岩は厚みの均一な大型の縦長剥片である。下半部は折れのため調整痕の観察は不可能であるが、おそらく連続したスクレーピングエッジが側縁を形作っていたものと推測される。

3は褐色の斑が混じる薄茶色の珪質頁岩3の二次加工剥片である。背後が中心を通り、両側縁が平行に走る、整った形状の石刃様剥片である。ほぼ全周に使用によるとみられる微細な刃こぼれ痕が看取されるが、末端の折れにより途断する。打面は刃潰し状の二次加工で急角度の調整が加えられている。打面調整痕の可能性も否めないが、背面からの二次加工の一部が主要剥離面に達しているため、剥片剥離後の調整と認識した。

4は灰白色をした珪質頁岩2の使用痕のある剥片である。側縁、末端の大部分に使用痕がめぐる。小さく整えられた打面から末端部が幅広になった剥片が作出されている。



第43图 第9地点出土遺物

第11表 第4文化層 第6地点出土石器属性表

标本番号	遺物番号	種類	母体番号	最大長さ	最大幅	最大厚さ	重量	打面	打角 鈍角	背面構成	尖端 形状	調整角	使用痕 調整痕	折れ	欠損	
1b (1b)	3L-91-1001	断片	チャート	2	58.51	17.79	10.71	2.95	-	-	I + V	F				
	3L-91-1002	断片	チャート	2	10.53	18.74	13.09	2.90	-	-	I + 重	-				
	3L-91-1003	断片	頁岩	1	4.67	2.87	2.39	0.03	-	-	I + 重	H			B	
	3L-91-1004	断片	石英質岩	2	4.70	5.74	2.86	0.06	2	113	I + 重	-				
	3L-91-1005	断片	安山岩	6	11.69	21.95	5.97	0.92	-	-	I + 重	H				
	3L-91-1006	角礫状石器	安山岩	1	99.77	30.08	16.52	28.50								
	3L-91-1007	断片	砂岩	1	13.36	13.66	9.87	1.39	-	-	I + 重 + V	S				
	3L-91-1008	断片	安山岩	1	19.61	16.75	5.01	1.53	1	120	I + 重 + 重 + V	H				
	3L-91-1009	角礫状石器	安山岩	3	44.73	25.01	11.03	9.15								
	3L-91-1010	断片	安山岩	1	27.90	35.59	9.66	7.98	-	-	I + 重	H				H
3L-91-1011	断片	安山岩	1	28.94	41.43	10.20	9.53	2	-	I + 重	-				H	
3L-91-1012	断片	チャート	2	20.70	14.52	9.38	2.84	-	-	I + V	S				H	
3L-91-1013	断片	砂岩	1	53.19	49.96	20.04	37.08	-	-	重 + V	S				H	
3L-91-1014	断片	安山岩	1	27.03	35.39	9.26	5.18	1	110	重 + 重 + V	H				H	
3L-91-1015	断片	チャート	1	20.09	20.15	18.26	5.97									
3L-91-1016	断片	チャート	1	18.45	19.22	15.13	4.10									
3L-91-1017	断片	砂岩	1	45.40	27.44	15.45	15.05	-	-	重 + V	S				H	
3L-91-1018	断片	チャート	2	8.95	14.47	11.48	1.14									
3L-91-1019	断片(調整断片)	安山岩	1	18.65	18.05	4.47	1.33	1	120	I + 重	H					
3L-91-1021	断片	砂岩	1	29.12	44.80	36.71	42.64	-	-	I + V	F				B	
3L-91-1022	断片	砂岩	1	20.27	20.01	13.37	3.86	-	-	V	-				H	
3L-91-1023	断片	安山岩	1	15.66	14.91	3.76	0.87	1	130	I + V	H				L	
3L-91-1024	断片	安山岩	1	6.25	10.04	2.72	0.19	L	-	I + 重	-				H	
3L-91-1025	断片	頁岩	1	24.14	25.53	7.47	3.30	1	114	I	O					
9	3L-91-1026	断片	チャート	1	28.11	24.79	17.85	10.45								
	3L-91-1027	断片(調整断片)	安山岩	1	16.54	33.74	7.20	1.28	F	-	重 + 重 + V	O				
	3L-91-1028	断片	安山岩	1	21.97	31.78	8.59	4.10	-	-	I + 重	S				H
	3L-91-1029	断片	頁岩	1	14.05	14.42	5.04	0.82	1	118	I + 重	H				
	3L-91-1030	断片	チャート	2	18.86	32.02	19.76	10.83								
	3L-91-1031	断片	チャート	2	22.28	10.39	6.75	0.79								
	3L-91-1032	断片	チャート	2	18.02	12.42	12.12	2.24								
3L-92-1006	断片	チャート	2	12.96	16.51	6.64	1.28									
4L-01-1001	断片	安山岩	1	18.82	15.88	4.25	1.04	-	-	重 + V	F				B	

第12表 第4文化層 第6地点出土石器組成表

種類	器種	内蔵状石器	剥片	砕片	鏃・鏃片	母岩出土点数	点数比	母岩別重量 (g)	重量比
安山岩	1	1	9	1		11	33.33%	61.33	27.41%
安山岩	3	1				1	3.03%	9.15	4.09%
安山岩	4		1			1	3.03%	9.92	4.41%
石英燧石	2			1		1	3.03%	9.06	4.02%
砂	1		3		2	5	15.15%	100.02	44.70%
頁	1		1	2		3	9.09%	4.15	1.85%
チャート	1				3	3	9.09%	23.52	10.51%
チャート	2				8	8	24.24%	24.60	10.99%
合計	2		14	4	13	33	100.00%	223.75	100.00%

第13表 第4文化層 第7地点出土石器属性表

母岩番号	遺物番号	器種	母岩番号	最大径mm	最大径mm	最大径mm	重量g	打痕	打角 或偏角	背面形成	実施 形式	調整内	使用痕 調整痕	折れ	欠損
6	35-72-1001	剥片	石英燧石	3	25.71	33.11	30.92	8.63	C	87	削+V	H			
	35-72-1002	剥片	安山岩	1	11.28	18.28	3.15	0.64	C	96	削	H			
	35-82-1002	鏃片	石英燧石	1	31.51	28.27	12.92	10.52				H			
	35-82-1005	鏃片	安山岩	1	19.31	26.07	6.79	2.95	1	118	I+削+V	S			
	35-82-1006	鏃片	安山岩	5	33.76	30.75	11.11	11.80	1	109	V	H			
	35-82-1007	砕片	安山岩	1	13.54	11.55	2.71	0.33	1	114	I	H			
	35-82-1008	鏃片	チャート	2	18.12	16.71	15.91	5.59				H			
	35-82-1009	鏃片	石英燧石	1	34.61	47.88	38.94	38.94				H			
	35-82-1010	剥片	安山岩	1	17.48	8.91	3.32	0.36	-	-	I+削+V	H			
	35-82-1011a	剥片	安山岩	1	18.41	34.61	27.46	4.86	3	303	削	H			
	35-82-1011b	剥片	燧石	1	12.92	19.78	6.68	0.94	1	130	I+削	H			
	35-82-1012	二次加工剥片	燧石	1	78.22	45.50	21.96	46.33	1	118	I+V	H	75		
10	35-82-1012	二次加工剥片	燧石	1	41.36	29.16	12.73	15.89	-	-	I	F	76		
	35-82-1014	鏃片	安山岩	4	36.53	54.79	31.03	61.19	C	69	削+V	S			
	35-82-1015	剥片	流紋岩	1	35.06	31.64	9.13	7.01	4	120	I+削+V	H			
	35-82-1016	石核	安山岩	4	46.52	43.94	21.27	43.92		67		H			
	35-82-1017	剥片	安山岩	1	21.09	24.67	8.57	2.87	1	125	I+削	H			
	35-82-1018	剥片	安山岩	1	17.90	5.77	2.68	0.25	L	-	I	F			
	35-82-1019	剥片	安山岩	4	10.15	9.63	2.85	0.26	-	-	I	F			
	35-82-1020	剥片	安山岩	1	10.85	9.69	2.28	0.23	1	78	I	F			
	35-82-1021	剥片	安山岩	4	18.39	32.49	7.62	3.00	1	109	V	H			
	35-82-1022	剥片	安山岩	1	27.46	26.05	12.24	6.98	4	123	削+削+V	H			
	35-82-1023	剥片	安山岩	1	10.81	7.36	6.05	0.28	-	-	削+V	-			
	35-82-1024	剥片	安山岩	1	17.38	10.43	4.95	0.58	C	124	I	H			
35-82-1025a	剥片	安山岩	1	16.55	12.36	5.05	0.92	1	88	削+V	H				
35-82-1025b	剥片	安山岩	1	7.41	10.74	2.71	0.19	-	-	I	H				
35-82-1018	剥片	燧石	2	16.18	15.04	5.50	0.97	1	86	削+削	F				
35-92-0003	剥片	安山岩	1	25.38	17.12	5.63	1.74	-	-	削+V	F				
3	35-92-1002	ナイフ形石器	安山岩	2	32.50	17.28	10.40	5.07	-	-	削+削	H	61-67		
	35-92-1003	剥片	安山岩	1	18.82	23.42	6.15	1.72	1	117	I+削	H			
	35-92-1004a	剥片	安山岩	1	5.36	12.87	3.71	0.22	1	113	I+削	H			
	35-92-1004b	剥片	安山岩	1	4.42	7.74	3.63	0.10	-	-	I+削	F			
	35-92-1005	剥片	安山岩	1	12.69	21.33	5.85	1.13	1	115	I+削+削	H			
	35-92-1007	剥片	安山岩	1	16.95	34.32	9.33	3.48	1	124	I+削	O			
	35-92-1008	剥片	安山岩	1	14.75	27.09	6.17	1.71	1	115	I+削+削	H			
	35-92-1009	剥片	安山岩	1	17.78	27.11	5.88	2.29	1	127	I+削	H			
	35-92-1010	剥片	安山岩	1	16.44	20.60	5.19	1.22	1	128	I+削+削	F			
	35-92-1011a	剥片	安山岩	1	17.95	36.90	7.77	2.95	-	-	I+V	S			
	35-92-1011b	剥片	燧石	1	18.32	13.71	2.56	0.63	2	108	I+削	S			
	35-92-0002	鏃片	流紋岩	3	36.63	29.90	10.81	11.68				H			
35-92-1001	剥片	安山岩	1	18.63	22.22	5.90	1.59	1	132	I+削+削	F				

第14表 第4文化層 第7地点出土石器組成表

母岩	器種	ナイフ形石器	削片	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	鏃・鏃片	母岩別 出土点数	点数比	母岩別 重量 (g)	重量比
安山岩	1				18	6			24	58.54%	39.09	12.66%
安山岩	3	1						1	2.44%	5.07	1.62%	
安山岩	4				2	1	1	4	9.70%	108.37	34.66%	
安山岩	5				1			1	2.44%	11.80	3.77%	
流紋岩	1				1			1	2.44%	7.01	2.24%	
流紋岩	3							1	2.44%	11.68	3.74%	
石英燧石	1							2	4.88%	49.46	15.82%	
石英燧石	3				1			2	4.88%	8.65	2.77%	
頁	1		1					1	2.44%	15.09	5.02%	
燧石	1			1				1	2.44%	46.53	14.98%	
チャート	1							1	2.44%	5.59	1.79%	
燧石	1				2			2	4.88%	1.57	0.50%	
燧石	2				1			1	2.44%	1.87	0.59%	
合計	1	1	1	1	26	7	1	41	100.00%	312.68	100.00%	



第15表 第4文化層 第8地点出土石器属性表

群別番号	遺物番号	器種	母形番号	最大長さ mm	最大幅 mm	最大厚さ mm	重量 g	打面	打 典 別性格	背割線状	左端 形状	両側角	使用痕 跡部位	折れ	欠損
5	3L-83-1001	削片	流紋岩	1	42.07	31.97	13.46	11.15	1	124	I + II + V			H	
	3L-83-1002	削片	流紋岩	2	48.25	67.06	22.68	69.67	1	123	I + V				
	3L-83-1003	削片	安山岩	1	27.82	46.86	11.64	12.60	2	111	I + II + III + V				
	3L-83-1004	削片	安山岩	1	20.40	35.66	10.13	4.70	1	118	I + III				
	3L-83-1005	削片	石炭層岩	2	28.80	21.30	10.20	7.09							
	3L-83-1006	削片	砂岩	3	43.44	41.07	11.31	27.01							
	3L-83-1007	削片	チャート	1	22.09	21.98	21.71	9.28							
	3L-83-1008	削片	安山岩	2	42.96	25.63	14.48	10.26							
	3L-83-1009	削片	チャート	1	22.05	19.71	9.96	3.31							
	3L-83-1010	削片	チャート	1	30.66	24.87	18.31	8.61							
	3L-83-1011	削片	チャート	1	15.42	14.82	15.31	2.72							
	3L-83-1012	削片	砂岩	2	26.18	22.37	16.06	11.30							
	3L-83-1013	削片	チャート	1	37.26	29.03	24.65	26.25							
	3L-83-1014	削片	チャート	1	31.90	28.36	22.57	20.03							
	3L-83-1015	削片	砂岩	2	49.31	34.93	24.80	41.03							
	3L-83-1016	削片	チャート	1	46.37	34.82	29.96	38.94							
	3L-83-1017	削片	安山岩	1	19.80	26.10	8.62	3.00	1	104	I + III + V	H		L	
	3L-83-1019	削片	チャート	1	16.13	12.09	7.97	1.24							
	3L-83-1020	削片	チャート	1	27.17	22.02	20.66	13.08							
	3L-83-1021	削片	安山岩	2	31.87	19.66	18.11	10.70							
3L-83-1022	削片	チャート	1	35.91	30.78	21.29	20.69								
3L-83-1023	削片	チャート	1	23.37	16.84	12.62	6.79								
3L-83-1024	削片	安山岩	2	29.79	22.02	14.84	7.96								
11	3L-83-1025	石核	燧石	1	18.76	29.66	16.91	8.52		98					
	3L-83-1026	削片	安山岩	2	11.99	7.57	7.33	0.4							
	3L-83-1027	削片	チャート	1	17.61	17.64	12.62	4.21							
3L-83-1028	削片	チャート	2	8.28	7.30	8.42	0.82								
3L-83-1029	削片	チャート	1	32.55	30.73	31.15	29.61								
8	3L-84-1031	削片	流紋岩	1	27.56	33.01	10.96	5.62	1(1)	118	I + III + V	H			
	3L-92-0203	削片	流紋岩	3	61.25	61.25	26.53	182.31					H + P		
7	3L-90-0204	二次加工削片	頁岩	1	44.42	39.70	16.68	22.86	1	130	I + III	-	67		H
	3L-90-1032	削片	チャート	1	33.48	16.52	16.37	6.76							
3L-90-1033	削片	流紋岩	4	76.23	57.87	33.50	173.72								
12	3L-93-1034	石核	燧石	2	13.76	44.05	24.10	14.63		72					
	3L-93-1035	削片	石炭層岩	4	71.90	57.78	43.86	219.80							

第16表 第4文化層 第8地点出土石器組成表

器種	群別	前部	二次加工削片	削片	石核	彫・削片	母形別 出土点数	点数比	母形別 重量 (g)	重量比
安山岩	1			3			3	8.57%	20.20	2.00%
安山岩	2					4	4	11.43%	29.34	2.80%
流紋岩	1			2			2	5.71%	16.77	1.60%
流紋岩	2	1					1	2.86%	69.67	6.60%
流紋岩	3					1	1	2.86%	162.31	15.90%
流紋岩	4					1	1	2.86%	173.72	17.10%
石炭層岩	2					1	1	2.86%	7.09	0.70%
石炭層岩	4					1	1	2.86%	219.80	21.63%
砂岩	2					2	2	5.71%	52.13	5.13%
砂岩	3					1	1	2.86%	27.01	2.60%
砂岩	1		1				1	2.86%	22.86	2.20%
チャート	1					14	14	40.00%	191.49	18.64%
チャート	2					1	1	2.86%	0.52	0.05%
燧石	1				1		1	2.86%	8.52	0.84%
燧石	2				1		1	2.86%	14.63	1.44%
合計	1	1	1	5	2	26	35	100.00%	1,016.16	100.00%

第17表 第4文化層 第9地点出土石器属性表

群別番号	遺物番号	器種	母形番号	最大長さ mm	最大幅 mm	最大厚さ mm	重量 g	打面	打 典 別性格	背割線状	左端 形状	両側角	使用痕 跡部位	折れ	欠損
4	4F-99-0001	削片(ハナリ)	陸奥頁岩	2	30.50	20.04	3.20	0.98	2	113	I + III	H			
	5F-19-0001	削片	砂岩	4	16.80	11.00	8.10	1.66	-	-	I + III	S			
3	9C-10-0001	二次加工削片	陸奥頁岩	3	26.54	9.53	3.62	0.87	-	-	II + III	H			B
	9C-02-0001	ナイフ形石器	頁岩	2	13.22	12.25	4.74	0.61	1	96	I		64		B
2	9C-13-0001	削片	安山岩	7	56.53	38.43	16.23	33.50	3	-	I + III		73-96		H

第18表 第4文化層 第9地点出土石器組成表

器種	群別	ナイフ形石器	前部	二次加工削片	削片	母形別出土点数	点数比	母形別重量 (g)	重量比
安山岩	7		1			1	30.00%	33.90	89.21%
砂岩	4				1	1	30.00%	1.66	4.37%
頁岩	2	1			1	1	30.00%	0.61	1.61%
陸奥頁岩	2				1	1	30.00%	0.98	2.56%
陸奥頁岩	3		1	1	1	3	30.00%	0.87	2.29%
合計	1	1	1	1	2	8	100.00%	38	100.00%

## 6 その他の遺物 (第44・45図, 第19表)

### 地点外および単独出土遺物

遺物の集中地点以外から出土した石器を取り上げた。確認調査の際に単独で出土したもの、及び縄文時代遺構に混入していた遺物である。石器の帰属する文化層や出土地点には不明確な部分もあるが、調査時の所見に鑑みて出土層を記入した。また出土層位に関係なく、器種別に挿入番号を付けた。

1は、縄文時代遺構(3K-66)から土器などとともに出土した石槍である。自然面は明黄灰色、剥離面はザラついた感・光沢を併せ持つ褐色の珪質頁岩である。板状に剥離された均一な厚みの剥片を素材とする。まず、主要剥離面側の両側縁が粗い加工によって大まかに形作られた後、背面側から丁寧な周縁加工が施され、アーモンド形の整美な形状となっている。また、剥片剥離時の自然面打面が残り、このバルブ付近の厚みは基部として生かされ、末端は尖端を形成している。

同様の加工を持つ石槍は、有吉遺跡第4文化層・南河原坂第3遺跡D・E地点(千葉市緑区)からも出土し、IV層中期に多出する器種と認識される。

2は、3G-27グリッドから出土した小型のナイフ形石器である。黒灰色で黒い筋が縦横に走るチャートを素材とする。基部には78度のブランディングが施される。右側縁部の刃潰し加工は連続して行われ、直線的な側縁を形作る。折れにより素材剥片の打面および刃部は残存しない。調査時の所見ではIX層出土となっている。1、2とも谷によって緩やかに挟まれた台地の縁辺に所在する。

3は当遺跡の台地西端から出土した、東北産と推定される良質な硬質頁岩を用いたナイフ形石器である。刃部は主軸に対して斜交し、打面付近を基部に据えて主要剥離面側からブランディングが施されている。

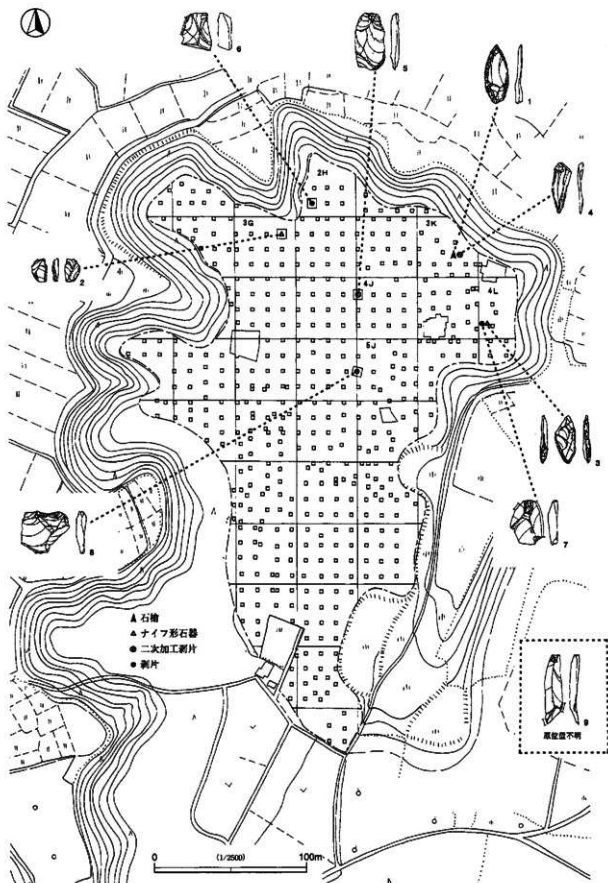
4は青緑灰色のチャートが素材となる。左側縁と右側縁下半部に刃潰し状の調整を施した二次加工剥片である。1と同様、3K-66グリッドから出土した。

5は、北側のほぼ中央部にあたる4J-20グリッドから出土している。風化面が黄褐色を呈する黒色緻密質安山岩の二次加工剥片である。上下の厚みに差のない板状の剥片を素材とする。背面右下端部に弧状に二次加工痕が残る。左側面は自然面である。背面の上部には剥片剥離方向からの小剥離痕を5枚以上数えることができ、打面を整えるための調整が行われた痕と推定される。調査時の所見ではV層からの出土と記されている。

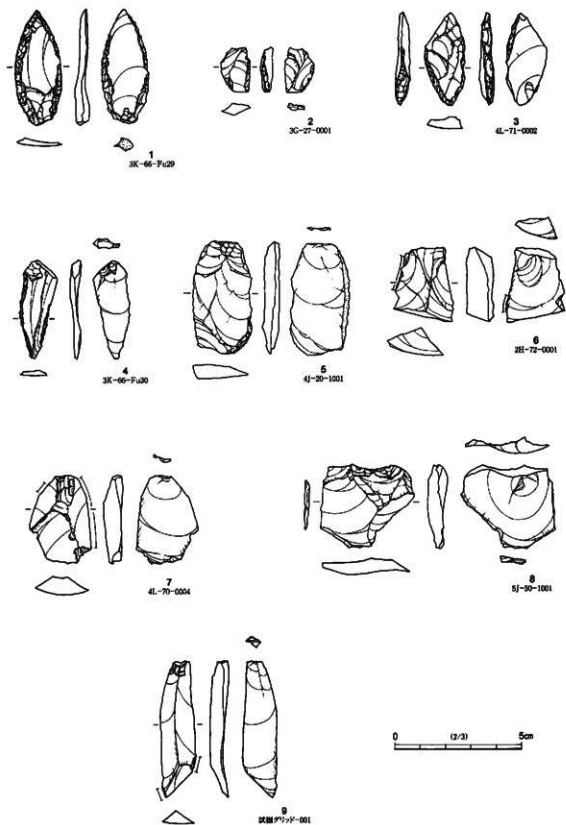
6は、当遺跡最北端にあたる2H-72グリッドから確認調査の際出土した、使用痕のある剥片である。わずかに緑がかった黒色の珪質頁岩で、下部は折れて残存しない。背面に高い稜を持ち、断面は三角形となっている。両側縁には刃こぼれ状の使用痕が看取される。調査時の所見ではVII層に包含される。

7は4L-70グリッドから土器一括として取り上げられた石器に紛れ込んでいたものである。淡い褐色の良質な硬質頁岩製の剥片であり、両側縁に刃こぼれ状の微細剥離痕が看取される。末端部は階段状に終結する。

8は、調査範囲中央部の5J-50グリッドから出土した黒色頁岩の剥片である。風化面は濃灰色で厚みは均一である。背面に残る打撃のほとんどが主要剥離と同じく上方向からであり、打面の調整を意図したもののか。石核から剥片を剥離した際の荒れた作業面を整えるために剥離されたものと思われる。左側縁・末端の一部は折れて欠損している。出土状況時の所見ではVIII層となっており、50mほど離れた第2・3地点からもVIII層～IXa層の遺物が出土するが、石材に共通性はなく、単独の出土であることから同時に形成された集中地点としての生活面は持たないものと認識した。



第44図 地点外及び単独出土遺物分布



第45図 地点外及び単独出土遺物

9はわずかに青緑色を帯びた暗灰色の頁岩である。縦横比は4対1、側縁がほぼ平行に走る石刃である。背面には主要剥離面と同方向からの打撃による剥離面が二面残る。下端部及び右側縁下部に微細剥離が看取されるが、使用の際に付いたと思われる光沢も同時に観察される。なお、この遺物に関しては出土位置が不明である。

第19表 地点外及び単独出土石器属性表

採集番号	遺物番号	器種	発見番号	個人重量	個人体積	個人厚	重量	打削	打削角度	背面構成	本面形状	縦横比	使用痕跡	割れ	欠損
1	3K-66-Fa29	石棒	縄文頁岩	46.00	16.00	600	4300	C	304	I+Ⅱ	-	66-75			
2	3C-27-0001	ナイフ形石器	チャート	18.14	11.43	482	935	-	-	Ⅱ	-	78		B	
3	4L-71-0002	ナイフ形石器	縄文頁岩	37.00	15.30	630	300	-	-	Ⅱ	-	80-87			
4	3K-66-Fa29	二次加工断片	チャート	38.57	14.62	425	1.60	2 (1)	107	Ⅱ	H	62-74			
5	4J-30-1001	二次加工断片	安山岩	44.30	23.32	665	7.50	1	92	I+Ⅱ+Ⅲ	H	76			
6	2H-72-0001	断片(欠あり)	縄文頁岩	29.28	23.46	1056	6.73	1	123	I+Ⅱ	-	-		H	
7	4L-70-0004	断片(欠あり)	縄文頁岩	35.00	24.40	730	5.10	1	105	I+Ⅱ+Ⅲ	-	-	N	H	
8	3J-90-1001	断片	頁岩	32.40	37.40	730	7.61	2	128	I+Ⅱ	H	-		R	
9	3K67-Fa29-001	断片(欠あり)	頁岩	54.00	13.32	720	3.80	3 (1)	86	I+Ⅱ	F	-	N		

## 第2節 縄文時代

### 1 炉穴

#### SK112 (第46図, 図版14)

3L92グリッド付近に所在する。規模は、1.40m×1.35mの円形を呈し、確認面からの深さ0.20mを測る。底面は焼土部分で若干深くなる。覆土は黒褐色土で、ソフトローム・ブロックを含み、人為的な埋め戻しの可能性がある。底面には微細な炭化物粒を含む焼土ブロックが見られる。本遺構は、炉穴の基底面に焼き火の跡かもしれない。

遺物 遺物の出土はなかった。

#### SK113 (第46・51図, 図版14)

4L01グリッド付近に所在する。規模は、長軸0.81m、短軸0.63mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.25mを測る。燃焼部は1か所あり、覆土はテフラにソフトローム粒の混入した黒褐色土が主体である。本遺構は、炉跡の基底面であろう。

遺物 覆土中より条痕土器の胴部片が1点検出された。

#### SK153 (第46図)

4L20グリッド付近に所在する。規模は、1.03m×0.78mのやや不整な楕円形で、確認面からの深さは最も深い部分で0.45mを測る。燃焼部はやや高い部分に1か所確認されている。

遺物 遺物の出土はなかった。

#### SK189 (第46・51図, 図版14)

4L92グリッド付近に所在する。規模は4.41m×4.11mで、3か所の燃焼部が、中央の足場から三方に延びる形で付く。中央の掘り込みは2.18m×1.47mの隅丸方形で二段に掘り込まれており、足場となろう。中央の掘り込みの深さは確認面より1.58m、燃焼部は足場の底面より、北側で0.03m、西側で0.06m、東側では0.40m高くなっている。南側のテラスは中央の掘り込みに対して0.61m高い。中央の掘り込みとそれぞれの

燃焼部との間を区切る立ち上がりが認められる。北側に延びる掘り込みはほかに比べてやや長い。北側の燃焼部は1.08m×0.66mの長楕円形で、0.54m×0.58mの範囲で赤色硬化が認められる。西側の燃焼部は1.03m×0.97mの不整な円形で全面に赤色硬化が見られる。東側の燃焼部は0.96m×0.66mの不整な半円形で、一部に赤色硬化が見られる。3か所とも被熱による焼土化と硬化が著しく、長期にわたって使用したと思われる。また、南側の掘り込みは1.03m×0.97mの浅いテラス状であり、出入口であった可能性がある。

覆土は、暗褐色土を主体とする上層と褐色土及び焼土を主体とする下層からなり、中央の掘り込み及び北側の燃焼部の上には、ハードロームブロックに焼土が混入したものが堆積し、南側の掘り込みからはソフトローム及びハードロームブロックを含む褐色土が埋め込まれた可能性がある。中央の掘り込みの上にはロームブロックと焼土が焼成硬化したものが崩れ込んだ状態で詰まっている。中層くらいまでローム混じりの土で埋め込んでいる可能性がある。

遺物 西側の燃焼部に土器片が集中している。2・3は早期燃糸文系土器で、混入品である。2は口縁部片で、口唇部が三角形に肥厚し、RLの縄文が施文される。井草式Ⅱ式土器である。3・4は胴部片で粗いLの燃糸が施される。稲荷台式となろうか。5～9は表裏に条痕文が施される土器である。5は口径43.2cmを測るが、全体に大きく歪んでいる。内外面とも幅広の条痕が施文され、口唇部には浅い刻みが巡る。6は口縁部で、口唇部に刻みが増えらる。7は刻みを施した隆帯の上部に竹管の押しが施文される。8・9は同一個体であろう。これらの土器は茅山下層式に含まれる。

#### SK203 (第46・51・52図, 図版15)

3J37グリッド内に所在する。1.79m×0.92mのやや不整な長方形を呈し、浅い掘り込みに燃焼部が1か所認められる。足場付近は攪乱により壊されている。燃焼部の深さは確認面より0.11mと浅い。覆土は、赤色焼土粒及びソフトロームの混じったしまりの強い黄褐色土が主体で、燃焼部の上には赤みを帯びた暗褐色土を含んでいる。

遺物 西側の燃焼部付近に土器片が集中している。10は口唇部が肥厚し、無文帯を有する井草Ⅱ式土器で、混入品である。11～16は条痕文土器である。11・12は同一個体で、口唇部にヘラ状工具による鋭利な刻みが巡る。胴部外面の条痕は細かく、部分的にナデが増えらる。内面は器面の荒れが顕著で調整不明である。胎土中に長石粒を多く含む。14・15は幅広の深い条痕が施文される。胎土は緻密で、焼成良好である。茅山下層式土器である。

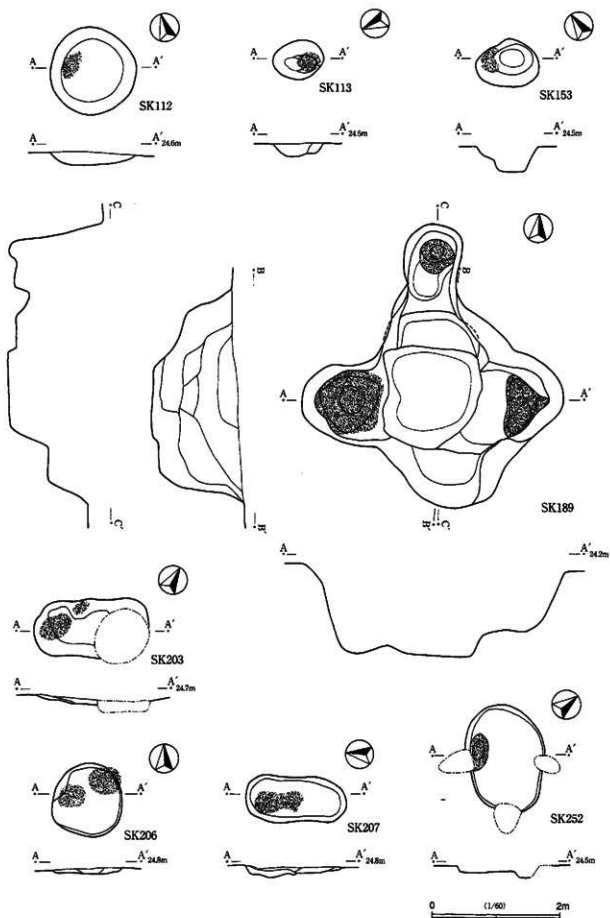
#### SK206 (第46図, 図版15)

3J48グリッド付近に所在する。1.15m×1.10mの略円形を呈し、確認面より0.1mと浅い掘り込みである。底面北側には2か所に赤色硬化している部分が観察される。浅い掘り込みであるが、炉穴の基底部のみの検出と思われる。覆土は、焼土粒を含むソフトローム土主体である。

遺物 遺物は出土しなかった。

#### SK207 (第46・52図, 図版15)

3J57グリッド付近に所在する。長軸1.58m、短軸0.72mの長楕円形の浅い掘り込みで、北側に燃焼部が1か所認められる。燃焼部の底面は0.78m×0.35mの範囲で赤色硬化している。燃焼部の深さは0.15m、足場



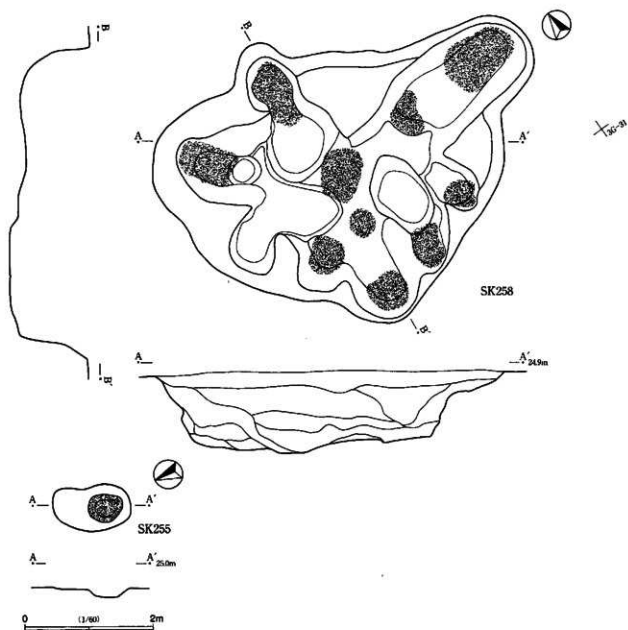
第46图 炉穴 (1) (SK112 · 113 · 153 · 189 · 203 · 206 · 207 · 252)

の深さは0.09mと浅い。炉穴の基底部と思われる。覆土は、ソフトローム粒を含む黒褐色土で、燃焼部の上には焼土粒を含む暗黄褐色土を検出する。

遺物 遺物の出土は少ない。17は条痕文土器の口縁部片で、口唇部に貝殻腹縁による刻みが施される。茅山下層式と思われる。18は無文で、胎土中に長石粒や雲母粒が混入している。19は尖底土器の底部片である。

SK252 (第46図, 図版16)

3K25グリッド付近に所在する。1.70m×1.24mのやや不整な楕円形の浅い掘り込みで、西側に燃焼部が1か所認められる。燃焼部は、0.60m×0.29mの浅い掘り込みで赤色硬化している。燃焼部の深さは0.15m、足場の深さは0.11mを測る。



第47図 炉穴(2) (SK255・258)



遺物 遺物の出土はなかった。

#### SK255 (第47・52図)

3K75グリッドに所在する。長軸1.20m×短軸0.66mの不整な楕円形の浅い掘り込みで、南側に燃焼部が1か所認められる。燃焼部は、0.55m×0.45mの浅い掘り込みで赤色硬化している。燃焼部の深さは確認面より0.15mと浅い。炉穴の基底部と思われる。

遺物 遺物は、燃焼部内より若干検出された。20～23は同一個体と思われ、内外面に条痕文が施される。20・21は口縁部片で、口唇部に貝殻腹縁による刻みが巡る。24は内外面に条痕が施されるが、内面は不鮮明である。いずれも茅山下層式と思われる。

#### SK258 (第47・52・53図、図版16・24)

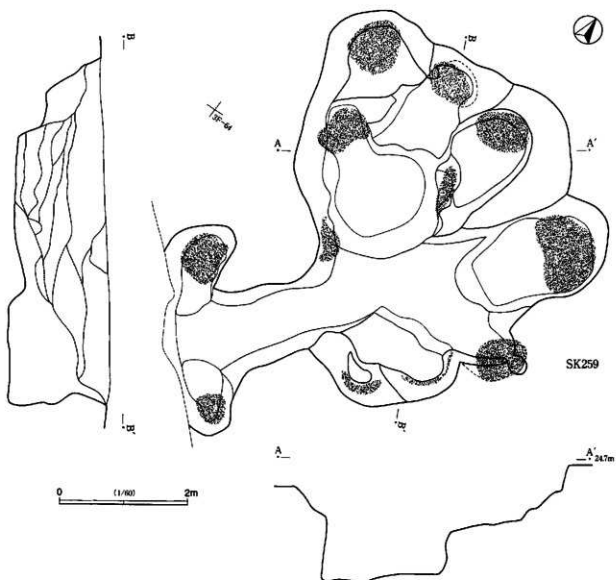
3G20グリッド付近に所在する。規模は東西長6.13m、南北長4.9mを測り、全体的に不整な三角形状を呈する。四方に向けて拡張が行われているようで、蛸足状に炉穴が延びている。各炉穴とも楕円形あるいは瓢箪形を呈し、遺構中央側に足場、周縁に燃焼部を設けている。中央付近の足場に相当する部分が最も深く、確認面より1.2mと深い掘り込みである。各燃焼部とも足場に対して5～10cmほど高くなっている。焼土は10か所確認されているが、外側に位置する7か所の焼土部分がよく焼け、焼土の堆積も厚い。

覆土は、ソフトロームやハードロームブロック及び焼土を多く含んだ暗褐色土を主体とする。後述する土器の分布を考慮すると、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物 検出された土器のほとんどが覆土上層からの出土である。25～36は条痕文土器である。25は推定口径31.3cmを測る深鉢で、文様は二段構成となる。口縁部の遺存が少ないため、明瞭ではないが、波状口縁を呈していると思われる。上部の文様帯は二段に屈曲し、上段は明確な規則性を持っていないが、鋸歯状に近い細い沈線の交点に円形刺突が施され、沈線間には部分的に押し引き文が充填される。下段は、上位は横位の条痕文、下位は上段文様帯と同様の沈線と円形刺突、押し引き文で構成される。胴下部は条痕文をナデで擦り消している。胎土中に砂粒を多く含む。26は深鉢の口縁部片で、口唇部に貝殻腹縁によると思われる刻みが施される。外面には、浅い沈線と円形刺突が不規則に施文されている。下部の縁は突帯状に高くなる。内面は条痕文がみられる。27は胴部片で、沈線で区画された内部に部分的に押し引き文が充填され、沈線上に円形刺突文が配される。胎土中に砂粒を多く含む。以上は轆ケ島台式土器と判断される。28は深鉢の口縁部であるが、胴部に明瞭な段を有しないものと思われる。貝殻条痕の地文の上に、押し引列点文が幾何学的に施文される。口唇部には、棒状工具による刻みが巡る。29～36は内外面に貝殻条痕が施されるもので、茅山下層式と思われる。29の口唇部には竹管状工具による刻みが施される。30は平坦な口唇部に不規則な刻みが観察される。胎土は緻密で、焼成も良好である。31は口唇部に刻みが加えられ、外面の条痕はナデにより部分的に擦り消されている。32・33は胴部片、34～36は底部片である。37～39は燃糸文土器、40は沈線文土器でいずれも混入品である。37は井草Ⅱ式、40は田戸下層式と思われる。

#### SK259 (第48・53～55・62図、図版16・24・25)

3F44グリッド付近に所在する。規模は南北長7.5m、東西長5.7mを測る。南西方向から延びる通路状の掘り込みの先端に、炉穴が拡張を繰り返しながら蛸足状に広がっている。中央の足場を共有しながら、燃



第48図 炉穴・(3) (SK259)

焼部を外側に向けて順次掘り込んでいったものと思われる。通路状部分の両側にも炉穴が存在している。焼部は8か所確認されるが、東側の焼部は先端が煙道部状に立ち上がっている。確認面からの深さは、最も深いところで1.45mと深い。焼部はいずれも足場よりも10cm程高い。覆土は、上層が暗褐色土主体、下層がハードロームブロックを多く含んでおり、中層までは人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

遺物 検出された土器のほとんどが覆土上層からの出土である。41～69は条痕文系土器である。41は液状口縁を呈し、口唇端部に刻みが施される。外面は山形を呈する集合沈線を施文され、内面には不鮮明な条痕がみられる。野島式土器と判断される。42～44は同一個体となる可能性がある。口唇部には刻みが施され、胴部隆帯上部に横位の太い集合沈線を区画するように縦位の2本1単位の沈線が観察される。隆帯以下は貝殻条痕が施されているようである。これらは茅山下層式土器の古い段階と思われる。45～48は2本1単位の押し引き文を三角形あるいは弧状に施文している。口唇部には刻みが施される。これらも茅山下層式土器の古い段階であろう。49は地文の貝殻条痕の上に、縦位の平行な半截竹管の押し引き文を加

えている。これも茅山下層式の範疇に入るものであろう。50～61は口縁部、62～68は胴部、69は底部片である。やはり茅山下層式と思われる。70～73は混入品である。70は燃糸文土器、71～73は子母口式土器であろう。第62図1は土器片円盤である。長径5.1cm、短径4.2cmを測る。無文で、子母口式土器と考えられる。

#### SK260 (第49・55～59図, 図版17・25・26)

3F87グリッド付近に所在する。規模は、長軸8.8m、短軸5.4mを測り、全体的に不整の楕円形を呈する。大きな掘り込みの中に炉穴が順次掘り込まれている。燃焼部は13か所確認され、それぞれ長楕円形状の足場を伴う掘り込みが認められる。土層断面から観察する限り、南東方向から北西方向に向けて拡張していったことが想定される。確認面からの掘り込みは、中央部分が最も深く、1.7m程を測る。覆土中には、ローム粒や焼土粒が多く含まれる。

遺物 検出された土器のほとんどが覆土中層から上層にかけての出土である。74～76は沈線文系土器である。74は口縁部片で、内面の器面調整は丁寧であるが、外面は強いナデによる砂粒の横ずれが顕著に観察される。胎土中に長石等の砂粒を多く含む。75・76は胴部片で、74同様の調整が内外面にみられる。胎土も同様である。これらは、田戸下層式の無文土器となろう。77～146は条痕文系土器である。77～79は口唇部に斜位の刻みが廻り、内外面に弱い条痕が施される。繊維をわずかに含んでおり、子母口式と思われる。砂粒の混入が少なく、焼成も良好である。80は深鉢の胴部の小片であるが、縦区面の沈線間に横位の集合沈線を充填するタイプであり、野島式の範疇に入る可能性もある。81は沈線区面の交点に円形刺突を施し、刺突を充填するもので、鶴ヶ島台式土器である。82は押し引きの列点文に円形刺突を加えており、やはり鶴ヶ島台式となろう。83は波状口縁で、器面を指頭によって強くナデしているため、境が微隆起状を呈している。84～97は押し引きの列点文が口縁部に施文される一群である。口唇部には刻みが施され、有段となる。段には刻みが廻っている。胎土中に繊維を多く含む。茅山下層式に含まれるものであろう。98～125は内外面に条痕を施す深鉢の口縁部、126～140は胴部、141～146は底部片である。141は尖底、ほかは平底となる。

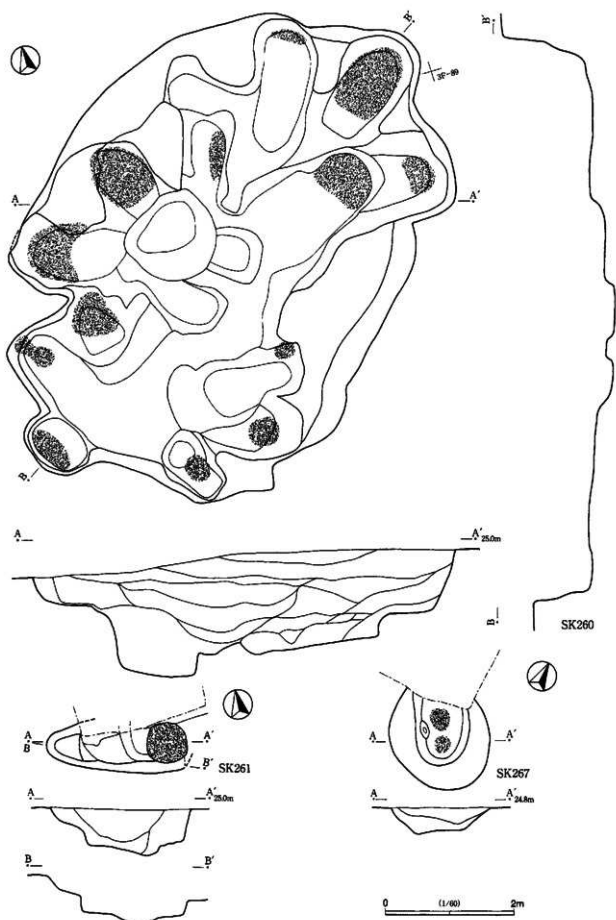
#### SK261 (第49・59図, 図版17)

3H27グリッド付近に所在する。遺構の北側及び東側の壁は攪乱により削平されているが、残存部では長軸2.21m、短軸0.67mの長楕円形を呈する。東側に燃焼部が1か所認められ、西側のやや傾斜しているテラスは足場と考えられる。燃焼部には、0.61m×0.60mの円形を呈する浅い掘り込みがあり、底面は被熱により赤色硬化している。足場の深さは確認面より0.77mと比較的深く、燃焼部は足場底面より0.1mほど高い。燃焼部には黒色土とソフトロームを含む暗黄色土、足場には赤色焼土とソフトロームを含む黒色土が堆積し、上層は赤色焼土とソフトロームを含む黒色土である。

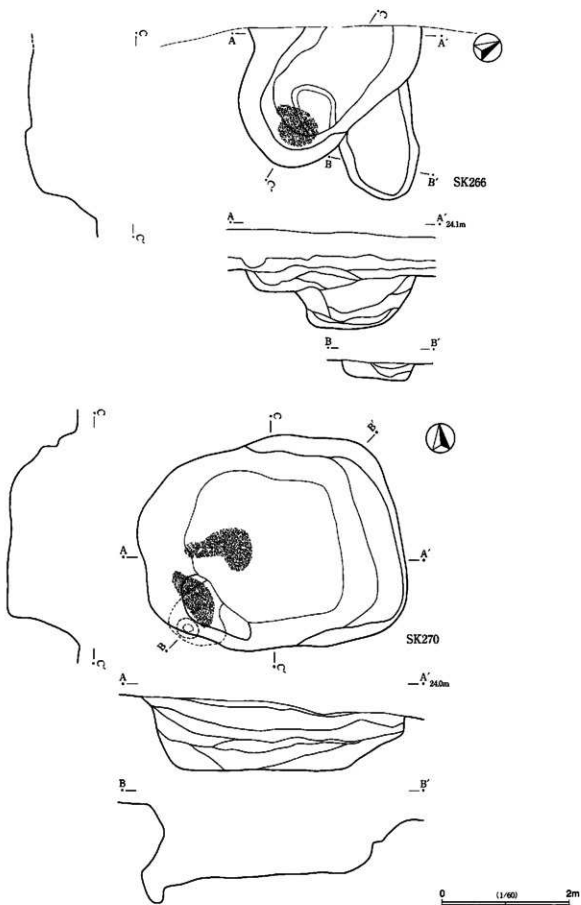
遺物 遺物の出土は少ない。147は燃糸文の土器片で、混入品である。148・149は内外面に条痕文を施す土器である。茅山下層式となろうか。

#### SK266 (第50・59図, 図版18)

2E67グリッド付近に所在する。本炉穴の西側が調査区域外にかかるため、全体は不明であるが、現存部分では、3.22m×1.94mの不整な長楕円形の掘り込みが確認される。燃焼部は南側に1か所認められる。こ



第49圖 炉穴（4）（SK260・261・267）



第50图 炉穴 (5) (SK266·270)

の炉穴と重複するように土坑が東側に延びているが、性格は不明である。中央の足場の深さは確認面より1.5mとかなり深い。燃焼部は0.80m×0.67mの不整な円形の掘り込みで足場より5cmほど深くなっている。燃焼部から壁面にかけて0.79m×0.62mの範囲で赤色化が認められる。東側の掘り込みは深さ0.30m程である。覆土は、褐色土を主体とする上層と黒色土を主体とする下層とからなり、底面近くでは炭化粒・焼土粒を含む褐色土が検出される。自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土はほとんどなかった。150は内面が丁寧に調整され、外面に粗い条痕が施される。子母口式土器であろう。

#### SK269 (第49図)

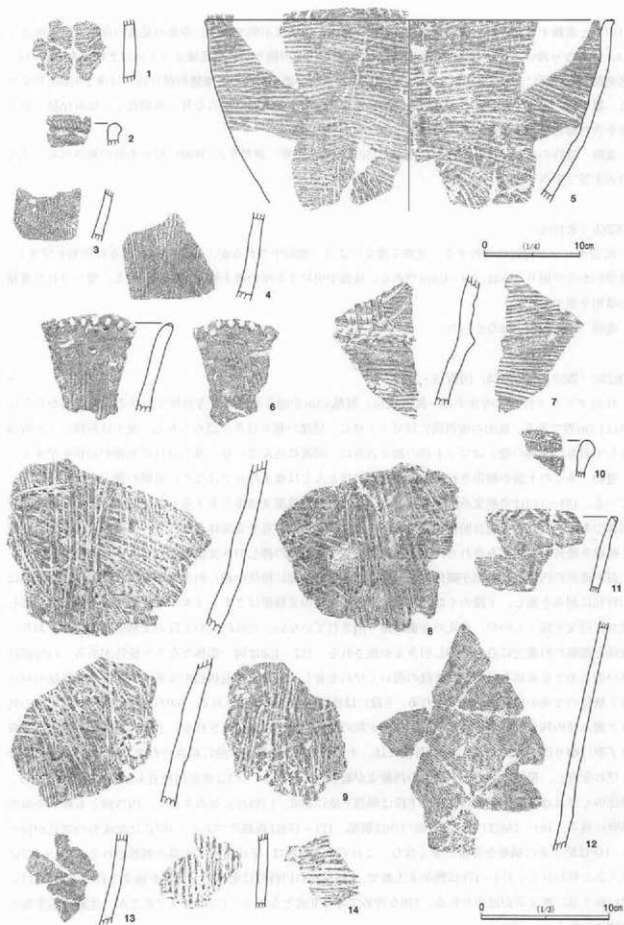
3G57グリッド付近に所在する。北側を攪乱により一部削平されるが、短軸1.5mを測る楕円形を呈する。確認面からの掘り込みは、0.3~0.4mである。底面中央に2か所の焼土範囲が確認される。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土はなかった。

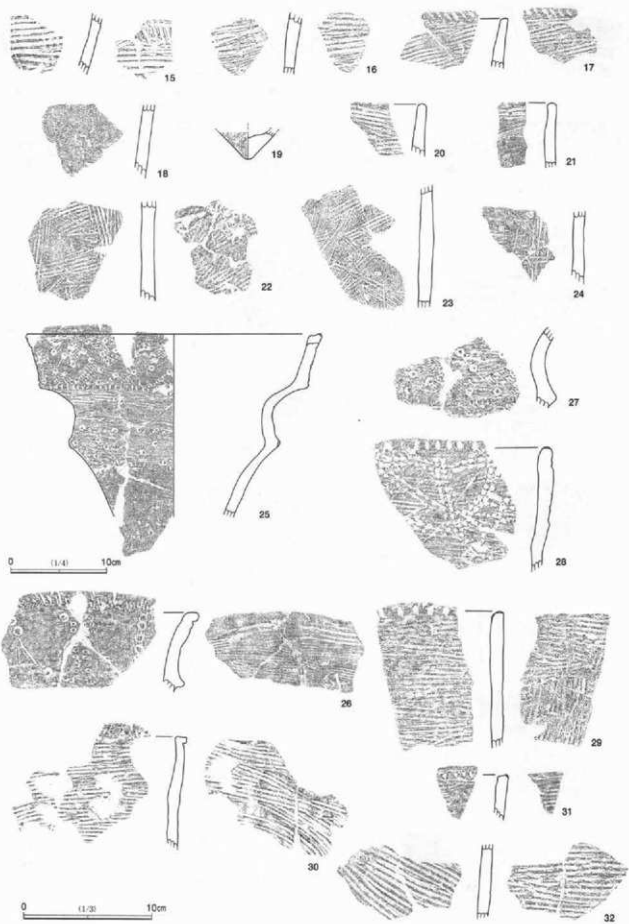
#### SK270 (第50・59~61図, 図版18・27)

4L34グリッド付近に所在する。長軸4.2m, 短軸3.3mを測る不整な長方形を呈する。確認面からの深さは1.1m程である。底面の南西隅にはピット状に一段深い掘り込みが認められる。焼土は西側に2か所遺存しており、南側の焼土はピット状の掘り込みに一部流れ込んでいる。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物 多くの土器が検出されているが、そのほとんどは焼土部分ではなく、東側の覆土上層から出土している。151~173は条痕文系土器である。151~162は口縁部文様帯を有するものである。151~153は同一個体である。これらを総合的に判断すると、2段のくびれを有する深鉢となろう。上段の文様帯は、直線と弧線を幾何学的に組み合わせた浅い凹線文に沿って竹管の押し引き文が配されるものである。下段は、上部が波状の凹線文、下部が縦位区画の押し引き文の内部に横位の押し引き文が充填される。154・155は口唇部に刻みを施し、1段のくびれを有する。口縁部の文様帯は2本~4本1単位の沈線を格子状に配し、交点に円文を描くもので、地文の条痕は擦り消されていない。156は151の上段の文様帯と類似しており、直線と弧線の凹線文に沿って押し引き文が施される。157・158は同一個体となる可能性がある。口縁部は部分的に小さな波状を呈する。2段の弱いくびれを有し、上段には波状部から垂下する3本1単位の列点文と横位の2条の列点文で構成される。下段には格子状の沈線が施される。160の上部には押し引き条の列点と刻み状の列点が認められ、下部にはナデ状の浅い凹線が縦位に施される。上部・下部とも地文の条痕は丁寧に擦り消されている。161の外面には、ナデ状の凹線を幾何学的に組み合わせる施文される。162はくびれを有し、縦位の列点文と横位の凹線文が組み合わせられる。163は推定口径31.4cmを測る深鉢である。胴部のくびれは2段確認されるが、下段は胴部下位にある。口唇部に刻みを有し、内外面とも粗い条痕が明瞭に残る。164~168は口縁部、169・170は胴部、171~173は底部片である。167には焼成前の穿孔が施され、169は胎土中に繊維を非常に多く含む。これらの土器群は、茅山下層式土器と判断される。174~177は混入品と思われる。174~176は撚糸文土器で、174・175の口唇部は肥厚し、原体が施文されている。175には口縁下部に無文帯が認められる。176を含めて井草Ⅱ式となろう。177は無文であるが、沈線文系土器の可能性はある。

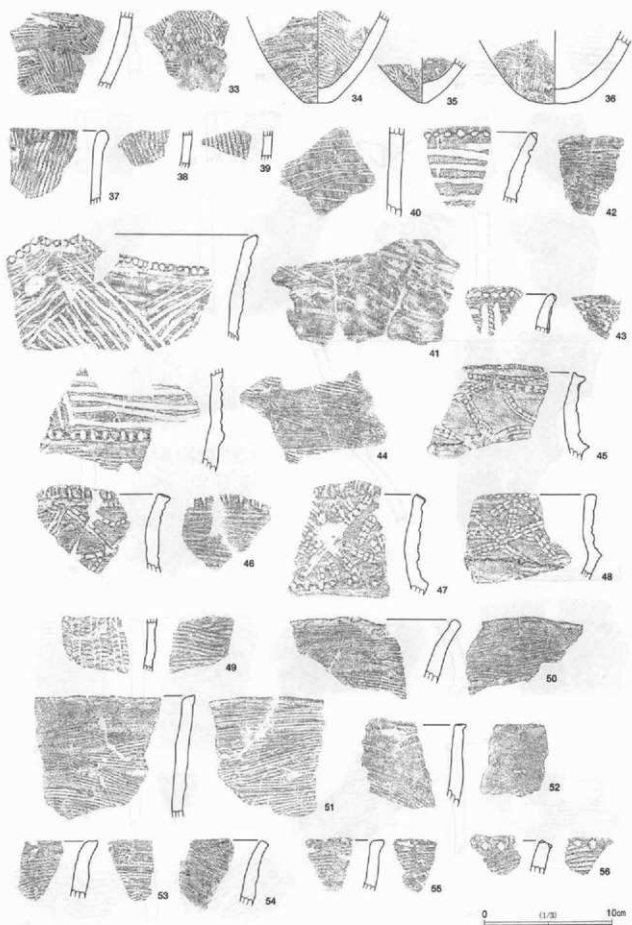


第51图 炉穴出土縄文土器 (1) (SK113:1, 189:2~9, 203:10~14)

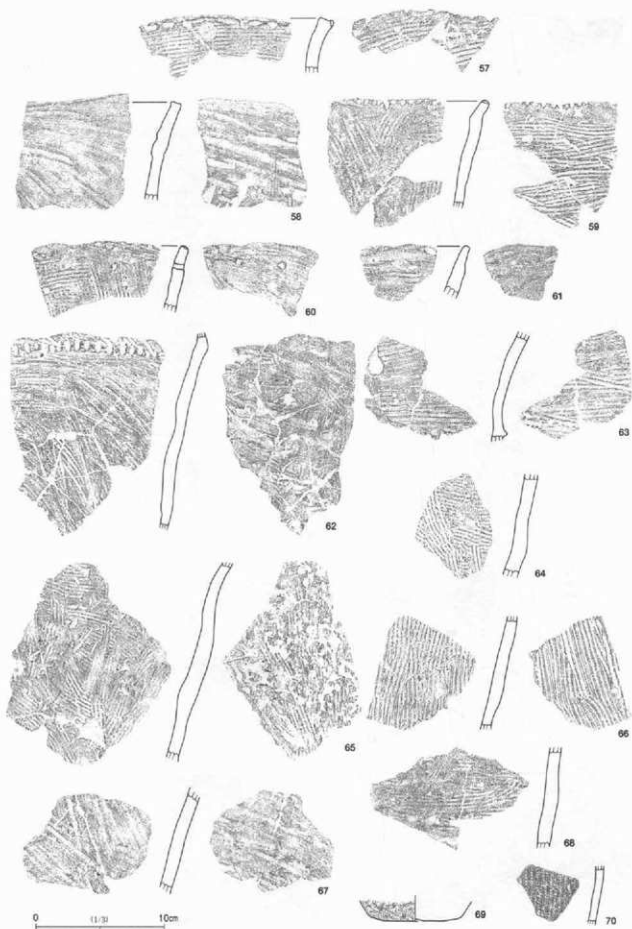


第52图 如穴出土縄文土器(2)(SK203:15・16, 207:17~19, 255:20~24, 258:25~32)

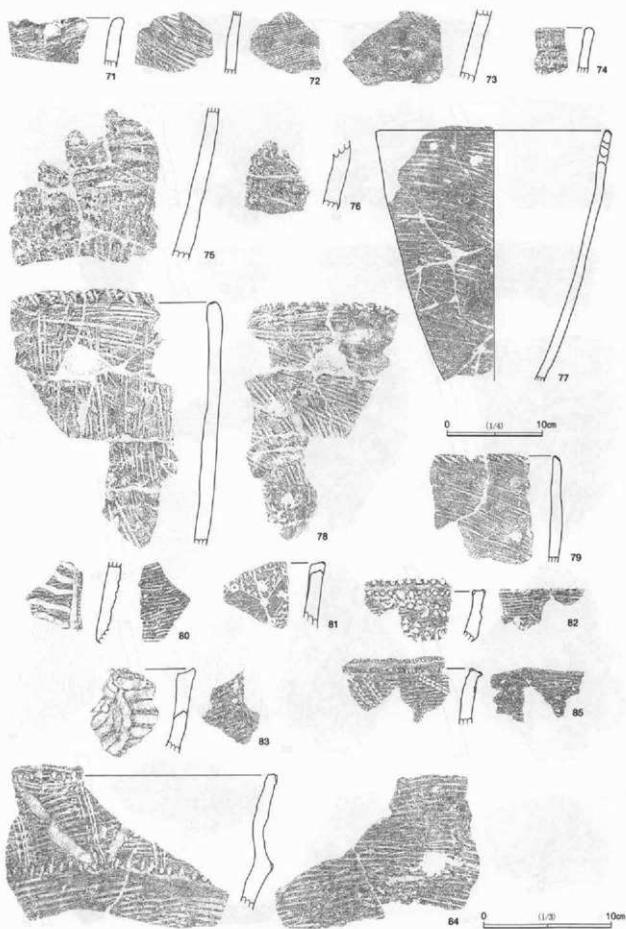




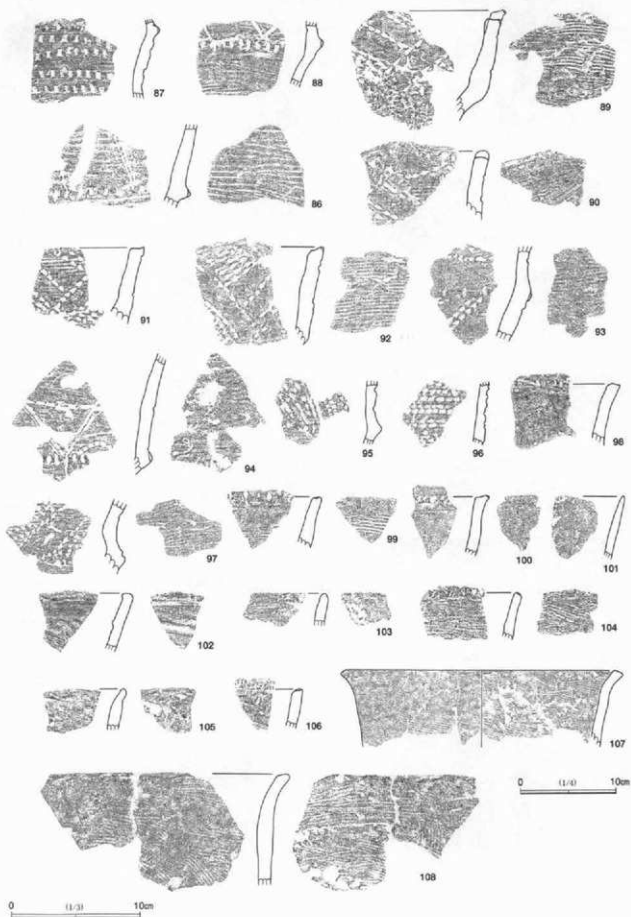
第53図 戸穴出土縄文土器(3) (SK258: 33~40, 259: 41~56)



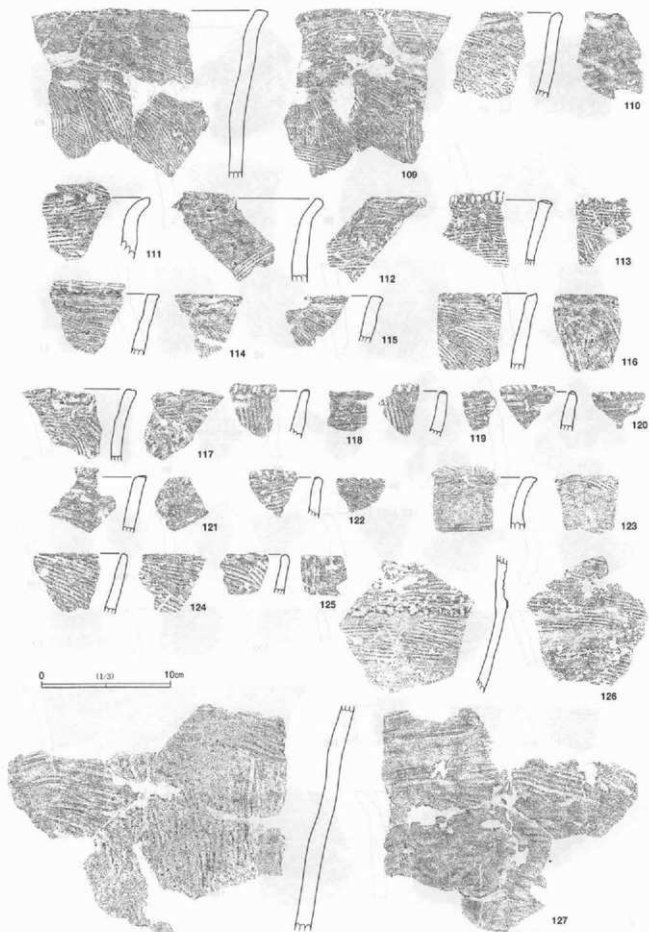
第54図 知穴出土縄文土器(4) (SK259: 57~70)



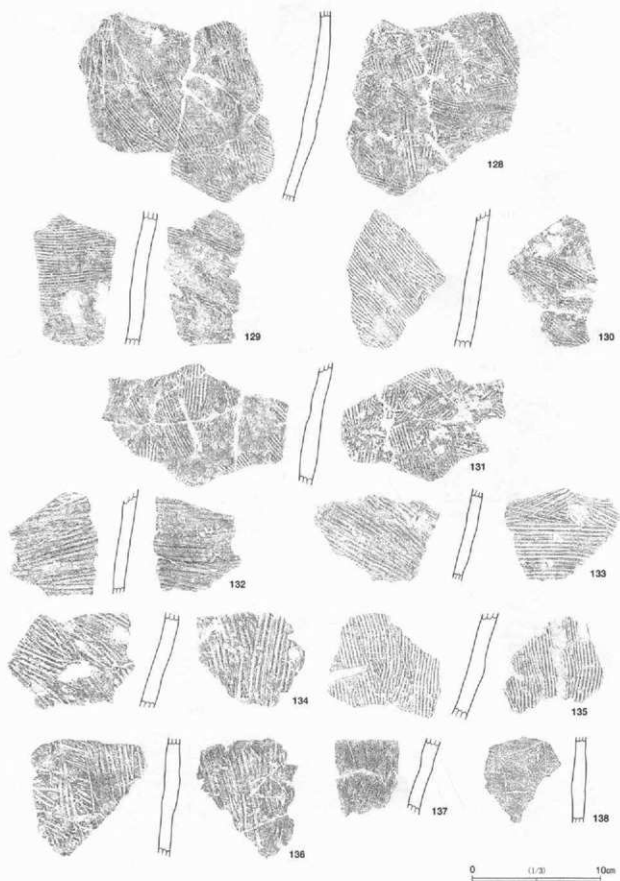
第55圖 如穴出土織文土器（5）（SK259：71～73，260：74～85）



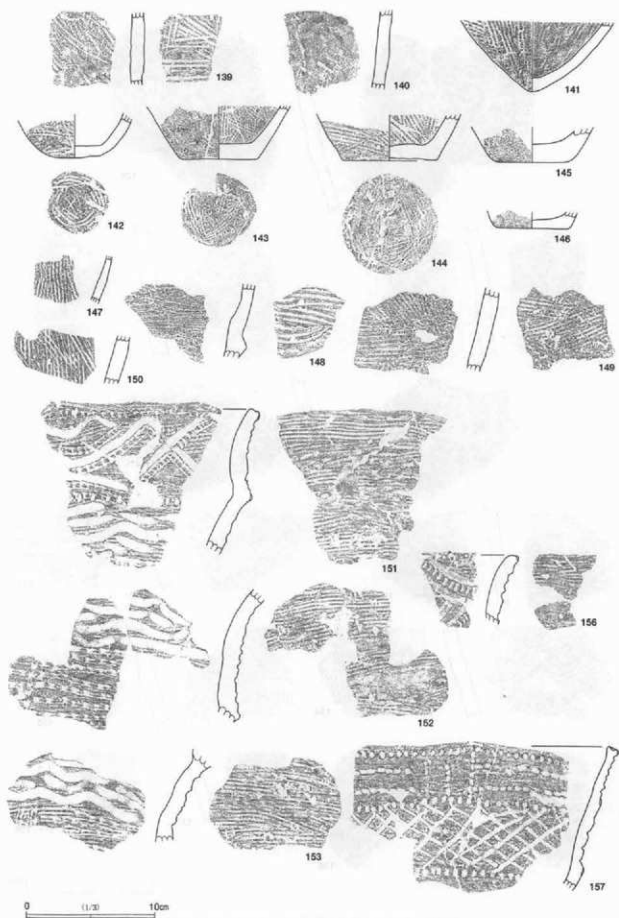
第56图 灰穴出土縄文土器(6)(SK260:86~108)



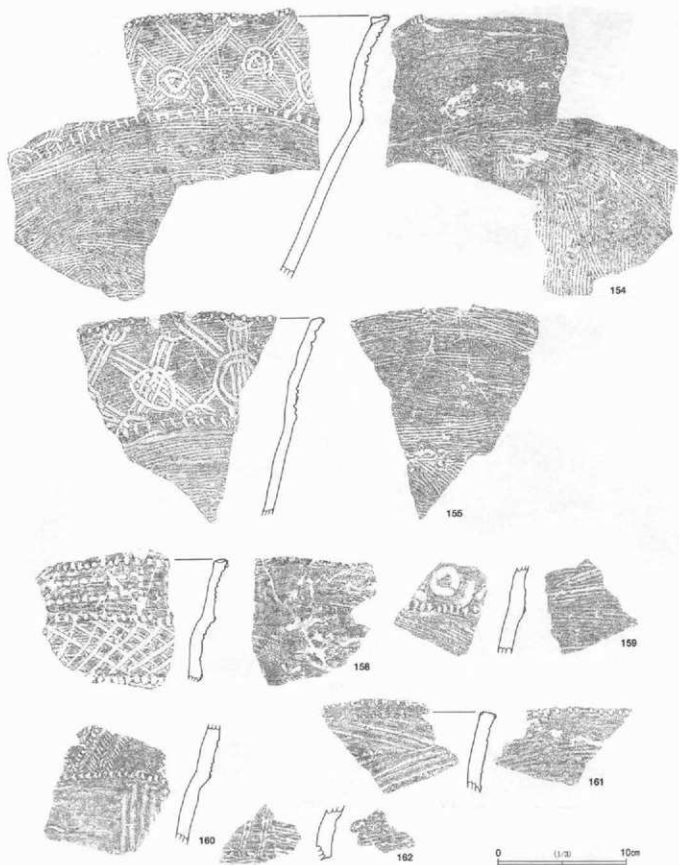
第57图 炉穴出土縄文土器(7)(SK260:109~127)



第58図 如穴出土縄文土器(8)(SK260:128~138)

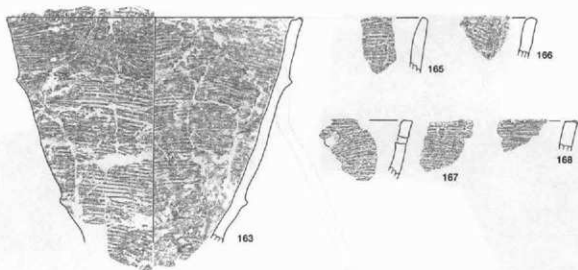


第59图 炉穴出土绳文土器(9) (SK260: 139~146, 261: 147~149, 266: 150, 270: 151~153, 156, 157)

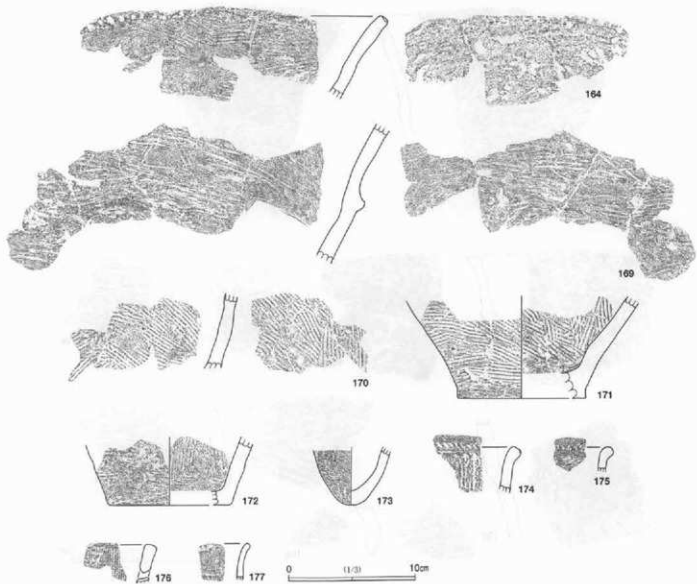


第60图 卯穴出土縄文土器 (10) (SK270 : 154, 155, 158-162)



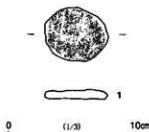


0 (1/4) 10cm



0 (1/3) 10cm

第61图 如穴出土縄文土器 (11) (SK270: 163~177)



第62図 SK259出土土製品

## 2 土坑

### SK102 (第63・65図, 図版19)

4L04グリッド内に所在する。掘り込みは長軸0.93m×短軸0.78mの不整な円形を呈し、確認面からの深さは0.3mを測る。長軸方位はN-69°-Wで、底面は平坦である。覆土は、ソフトロームの流入もしくは埋め込み土と思われる褐色土の下層とローム細粒を含む暗褐色土の上層とからなる。

遺物 遺物の出土は少ない。1は胴部の小片で、胎土中に繊維を若干含み、内外面とも丁寧に調整されることから、子母口式土器の可能性はある。

### SK107 (第63・65図, 図版19)

4L13グリッド付近に所在する。掘り込みは1.39m×1.21mの楕円形で、確認面からの深さは0.32mを測る。底面は平坦であり、長軸方位はN-69°-Wである。覆土は自然堆積の様相を呈し、暗褐色土の上層と褐色土の下層からなる。

遺物 遺物の出土は少ない。2は捺糸文が施されるもので、施文間隔が粗いことから、稲荷台式となろう。第66図1は土器片円盤である。無文で胎土中に繊維を多く含む。

### SK110 (第63・65図, 図版19)

4L22グリッド付近に所在する。掘り込みは2.04m×1.64mの楕円形で、確認面からの深さは0.13mを測る。底面は平坦であり、長軸方向はN-85°-Wである。覆土はソフトローム粒及びロームブロックからなり、埋め戻された可能性が高い。

遺物 遺物の出土は少ない。3は内外面に条痕文が施される。条痕文系土器である。

### SK187 (第63・65図)

4L94グリッド内に所在する。掘り込みは0.50m×0.45mの円形を呈し、確認面からの深さは0.30mを測る。長軸方位はN-60°-Eである。

遺物 土坑内に深鉢形土器が潰れた状態で出土している。4・5は同一個体となる可能性もある。4は推定口径23.9cmを測る深鉢である。口縁部はやや肥厚し、短く外反する。口縁部から胴部にかけて無節の縄文Rが施文される。前期末葉から中期初頭にかけての時期と思われる。

SK199 (第63・65図, 図版20)

3K47グリッド内に所在する。掘り込みは1.81m×1.73mのやや不整な楕円形で、確認面からの深さは0.15～0.08mを測る。底面は平坦であり、長軸方位はN-38°-Eである。覆土は、ローム粒及び炭化物を含む黒褐色土の上層とローム粒を少量含む粘性をもつ褐色土の下層からなる。

遺物 遺物の出土は少ない。6は底部片、7は胴部片で、胎土中に繊維を含む。前期の所産であろう。

SK200 (第63図, 図版20)

3H09グリッド内に所在する。掘り込みは1.29m×1.20mの円形で、確認面からの深さは0.19mを測る。覆土は炭化物粒を含む黄褐色土を主体とする。底面に近い部分には、炭化粒が認められ、やや赤色化及び礫化している。焚き火跡かもしれない。

遺物 遺物の出土はなかった。

SK212 (第63・65図, 図版20)

4J76グリッド付近に所在する。掘り込みは1.89m×0.91mの長楕円形で、確認面からの深さは最も深い部分で0.51mを測る。長軸方向はN-17°-Wである。底面は平坦ではなく、皿状を呈する。覆土は自然堆積の様相を呈し、ソフトロームを多く含む暗褐色土の上層とソフトローム粒を含む黒褐色土の下層からなる。

遺物 遺物の出土は少ない。8は胴部片で、外面に単節LRの縄文が施される。胎土中に繊維を含み、前期の時期と判断される。

SK217 (第63図, 図版21)

6H55グリッド付近に所在する。掘り込みは1.08m×0.88mの不整な楕円形で、確認面からの深さは0.20mを測る。底面は平坦ではなく、覆土は自然堆積の様相を呈する。炭化粒を多く含む黒褐色土の上層とハードロームブロックを含む黄褐色土の下層からなる。底面・壁面には炭化粒が確認される。

遺物 遺物の出土はなかった。

SK227 (第63・65図, 図版21)

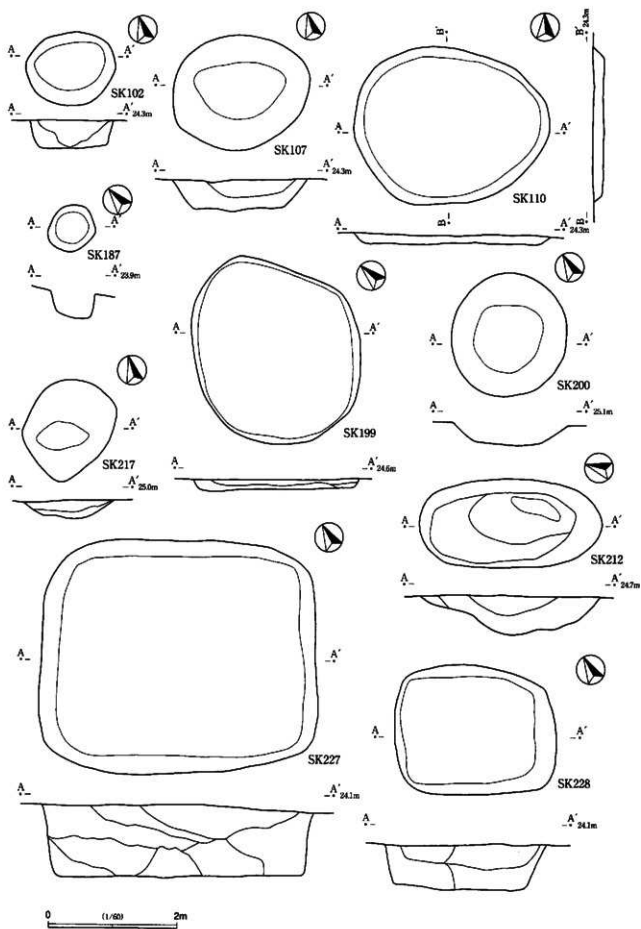
5H38グリッド付近に所在する。掘り込みは2.87m×2.42mの長方形で、確認面からの深さ0.63m～0.77mと比較的深い。長軸方位はN-65°-Wである。底面は平坦で、覆土はハードローム・ブロックを多く含む黄褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

遺物 遺物の出土は少なく、図示した土器は覆土中からの検出である。9は熱糸文系土器、10～12は中期前半の土器と思われる。

SK228 (第63図, 図版21)

5H49グリッド付近に所在する。掘り込みは1.68m×1.35mの長方形を呈し、確認面からの深さは0.42m～0.50mである。長軸方位はN-59°-Wで、底面は平坦である。覆土はハードロームブロックを多く含む黄褐色土を主体としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物 遺物の出土はなかった。



第63図 土坑 (1)

SK232 (第64・65図, 図版22)

5F88グリッド内に所在する。掘り込みは1.43m×1.33mの不整な方形を呈し、確認面からの深さは0.69mを測る。長軸方位はN-43°-Wである。底面は平坦ではなく、全体にすり鉢状を呈する。覆土は炭化粒及び赤色焼土を含む黄褐色土が主体で、床面に近い部分にハードローム粒が混じる炭化物層が検出される。

遺物 遺物の出土は少ない。13はRLの細かい縄文の地文に、2条の沈線で方形に区画している。内面は丁寧に調整される。中期前半と思われる。

SK253 (第64・65図, 図版22)

3K24グリッド付近に所在する。SK254を一部切って掘り込まれる。掘り込みは1.37m×1.33mの円形を呈し、確認面からの深さは0.37mを測る。長軸方位はN-61°-Wである。断面形は皿状を呈する。覆土はローム粒を含み粘性のある暗褐色土を主体とする上層と炭化物とロームブロックを含む下層からなり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土は少ない。14・15とも条痕文系土器であろう。

SK254 (第64・65図, 図版22)

3K34グリッド付近に所在し、SK253に切られる。掘り込みは1.41m×1.37mの円形を呈し、確認面からの深さは0.84mを測る。長軸方位はN-51°-Wである。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とする上層とロームブロックを含む褐色土の下層からなり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土は少ない。16・17は内外面に深い条痕が施される。茅山下層式となろう。

SK262 (第64・65図, 図版23)

3H41グリッド付近に所在する。掘り込みは1.29m×1.14mの不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは0.89mを測る。長軸方位はN-6°-Wである。覆土は暗褐色土を含む黒色土の上層と黒色土を含む暗黄褐色土の下層からなり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土は少ない。18は燃糸文、19・20は条痕文土器である。

SK265 (第64図, 図版23)

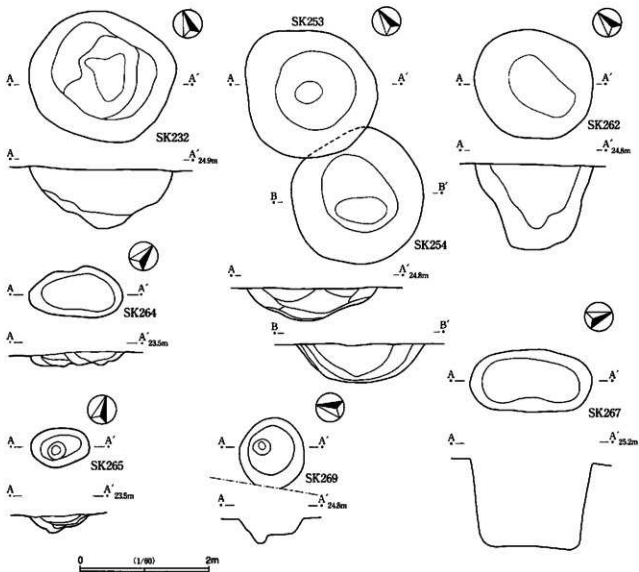
2E59グリッド内に所在する。掘り込みは0.8m×0.6mの不整な楕円形を呈し、確認面からの深さは0.2mを測る。底面には深さ0.1mの小ビットが掘り込まれている。覆土中に焼土粒が多く含まれる。

遺物 遺物の出土はなかった。

SK267 (第64・65図, 図版23)

2H05グリッド付近に所在する。1.26m×0.64mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは0.9mと深い。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土中にローム粒・ロームブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻された可能性が強い。

遺物 遺物の出土は少ない。21・22とも条痕文土器である。21は平坦な口唇部に刻みが施され、外面の条痕はナデにより擦り消されている。

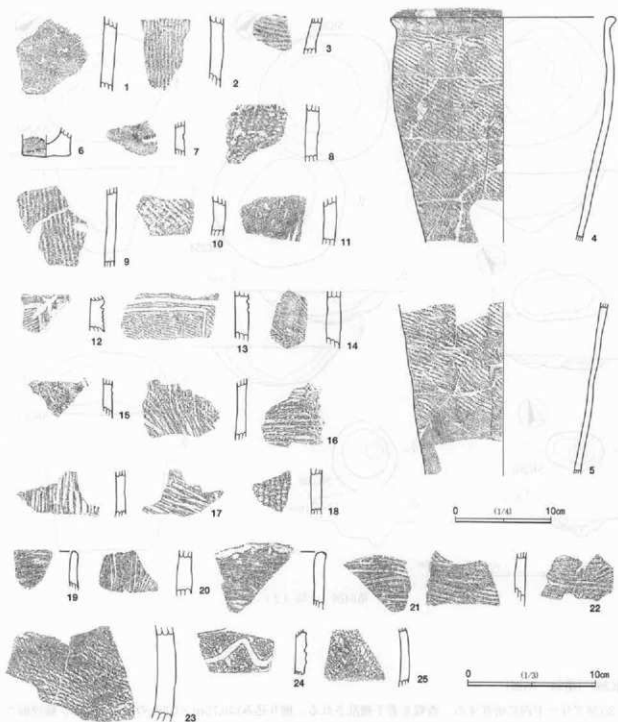


第64図 土坑(2)

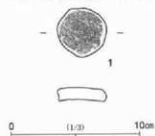
SK269 (第64・65図)

3G58グリッド内に所在する。西側を若干攪乱される。掘り込みは0.75m×0.7mの円形を呈し、確認面からの深さは0.17mを測る。底面は平坦であるが、北側に深さ0.1mの小ピットが掘り込まれる。

遺物 遺物の出土は少ない。23はLRの縄文が施される。24・25は同一個体と思われ、LRの縄文の地文に沈線が加えられる。中期前半の土器と思われる。



第65図 土坑出土縄文土器



第66図 SK107出土土製品

### 3 遺構外出土遺物

#### 縄文土器

遺構外から出土した遺物は比較的多く、縄文早期、熱糸文系土器を主体に台地上の北側及び西側の縁辺部に集中している。土器の分類は、隣接する台地に所在する松崎Ⅱ遺跡に準拠し、以下のように群の大別を行った。

#### 縄文土器分類

- 第1群 熱糸文系土器
- 第2群 沈線文系土器
- 第3群 条痕文系土器
- 第4群 前期末から中期初頭の土器
- 第5群 五領ヶ台式土器
- 第6群 阿玉台式土器
- 第7群 加曾利E式土器
- 第8群 堀之内式土器
- 第9群 加曾利B式土器

#### 第1群 熱糸文系土器（第67～71図、図版28～31）

本遺跡の中では、主体をしめる土器群である。

1は口縁部が大きく外反し、口縁下部のくびれ部に縄文原体の押圧がみられる。井草Ⅰ式となろう。2～129は井草Ⅱ式と思われる。2～4は口唇部が肥厚して外反し、口縁下部に横位のRの熱糸文が施される。3・4の口唇部には熱糸の原体が施文されている。5～42は口縁部が肥厚して大きく外反し、口頸部に無文帯を有する。口唇部文様帯が観察される。口唇部の文様は、LRの縄文がほとんどであるが、19にはRLの縄文が施される。胴部の文様は、縦位のLRの縄文が主体で、一部熱糸文がみられる。43～112は口唇部文様帯を有し、無文帯を持たずに口縁部直下から縦位及び斜位の胴部文様帯が施される一群である。口縁部は肥厚して外反するが、42までの口縁部に比べて肥厚及び外反の度合いは弱くなる。口縁部及び胴部の施文は、LRの縄文が圧倒的に多いが、一部RLの縄文及び熱糸文が含まれる。113～129は口唇部文様帯を持たず、口縁部に肥厚や外反が少なくなる一群で、井草Ⅱ式でも新しい要素を示すタイプである。

130～212は夏鳥式と判断される。口縁部は外反するものもみられるが、主体は直口である。胴部の施文は、縄文（130～153）と熱糸文（154～212）に大別されるが、熱糸文の割合が多く、井草の段階よりは熱糸文が多くなる傾向にある。

213～221は胴部片、222～227は底部片である。底部はいずれも尖底となろう。口縁部がないため、明確な帰属時期は不明であるが、施文間隔が比較的密なことから、井草あるいは夏鳥式に含まれると思われる。

228～239は稲荷台式に属すると思われる。228～230は縄文、231～237は熱糸文が施される。いずれも施文間隔は粗くなる。238・239は熱糸文施文後ナデによる擦り消しが施される。240・241は胴部片であるが、施文間隔が粗いことから稲荷台式の範疇に含まれるものと判断される。

242は口縁部に無文帯を有し、熱糸の横位の押圧と間隔の粗い熱糸文が斜位に施文されており、熱糸文系土器最終段階の花輪台式となろう。



## 第2群 沈線文系土器 (第71・72図, 図版31)

243~247は無文の口縁部で、全体に薄手の作りである。245~247は擦痕状の痕跡を残している。胎土中に長石や雲母の小砂粒を多く含む。248・249は微隆起線と表裏に刷毛状のナデが加えられ、249の微隆起線上位に幾何学的な沈線が施される。250は横位及び斜位の沈線がみられ、焼成前に穿孔される。251・252は沈線間に爪形連続文が充填される。253は沈線間に貝殻腹縁文が施されるタイプである。254・255は縦位の沈線間に横位の沈線を充填するものである。256・257には押し引き状の沈線が施文される。258は無文の胴部片であるが、強いナデツケがみられる。胎土中に長石・石英などの比較的大きめの砂粒を多く含む。259は尖底土器の底部片である。これらは、田戸下層式に含まれるものと判断される。

## 第3群 条痕文系土器 (第72~76図, 図版31~33)

第1群の捺糸文系土器と同様に、本遺跡の中では主体を占める土器群である。

260~262は直線及び弧線を呈する沈線間に刺突文を充填する一群である。刺突は押し引き文が主体であるが、261は円形刺突となる。口縁は平縁となろう。嶋ヶ島台式後葉に属すると思われる。263~266は嶋ヶ島台式末から茅山下層式に移行する段階の土器群であろう。263は胴部片で、押し引きによる区画内に、やはり押し引き文が充填されるタイプである。264は2段のくびれを有するものと思われ、2列の押し引き文を主文様とし、上段には円形刺突が加えられる。265は幅広の押し引き状の集合沈線を斜位に施す。266は2段のくびれを有するものと思われ、押し引き状の浅い平行沈線で施文される。

267~362は茅山下層式土器に含まれる。267~297は条痕の地文に文様が施される一群である。茅山下層式でも古い段階に属すると思われる。267は押し引き状の沈線がみられ、焼成前の穿孔が行われる。268・269は1段のくびれを有し、条痕を擦り消して格子状の沈線を配している。270・271は縦格子状の細い沈線が施文され、焼成前の穿孔が加えられる。272は平行沈線、273は格子の沈線間に貝殻腹縁の刺突が充填される。274・275には押し引き文がみられる。276~280には貝殻腹縁文が斜位に施文される。277には焼成前穿孔がみられる。288~288は平行押し引き文が施文されるが、押し引きの手法は多様である。289は地文の条痕を擦り消し、円形刺突を直線的に配するものである。290~292は、地文の条痕に貝殻文を押し消すタイプである。294・295は、ループ状の凹線文が口縁下に施文される。296・297は条痕を擦り消し、297には刻みが施された縦位の隆起線が加えられる。298~353は条痕文のみで構成されるもので、一部口縁下の条痕が擦り消されるものも存在する。354~362は底部片で、354は尖底である。363は口唇部に刻みを有し、外面にRLの斜縄文、内面に条痕が施される。条痕文系土器末葉の時期と思われる。

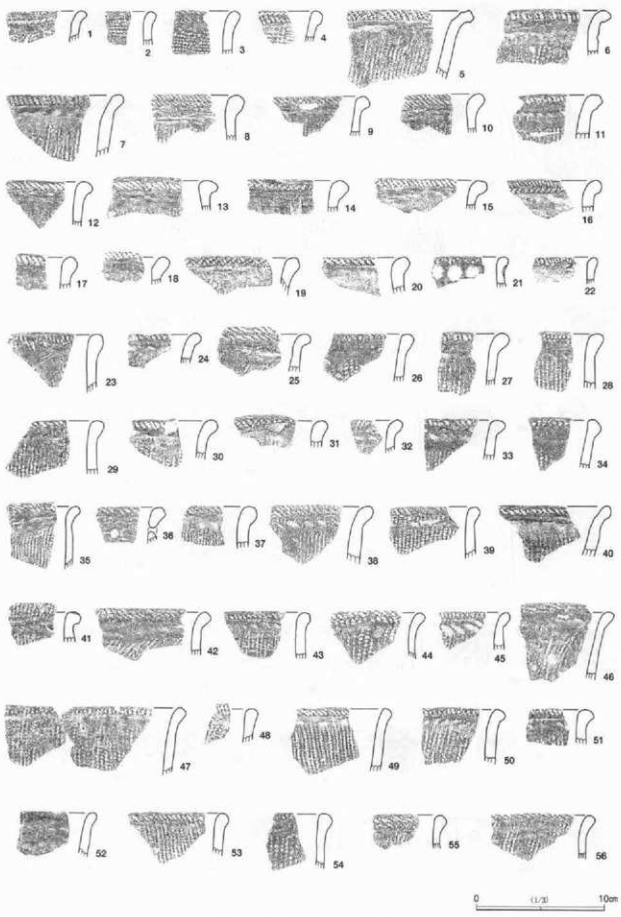
## 第4群 前期末から中期初頭の土器群 (第76図, 図版33)

本群は、出土量がきわめて少なく、客体的な存在である。364は口縁下に強いナデを施して擦り返し口縁状を呈する。口縁外面から胴部外面にかけて無節の縄文が施文される。365は折り返し口縁で、胴部には364同様無節の縄文がみられる。

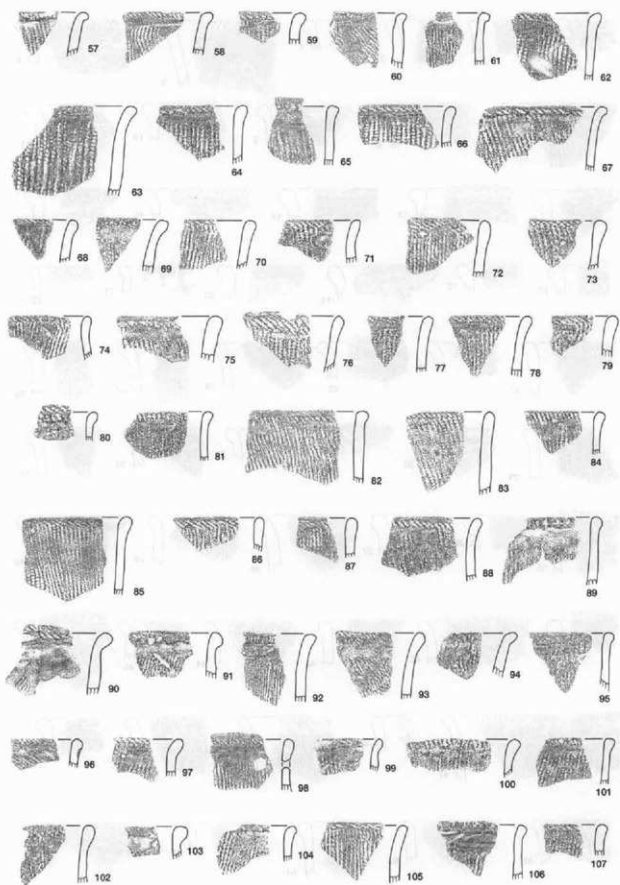
## 第5群 五領ヶ台式土器 (第76図, 図版33)

本群も出土量は少ない。

366・367は沈線間に交互刺突文が配される。

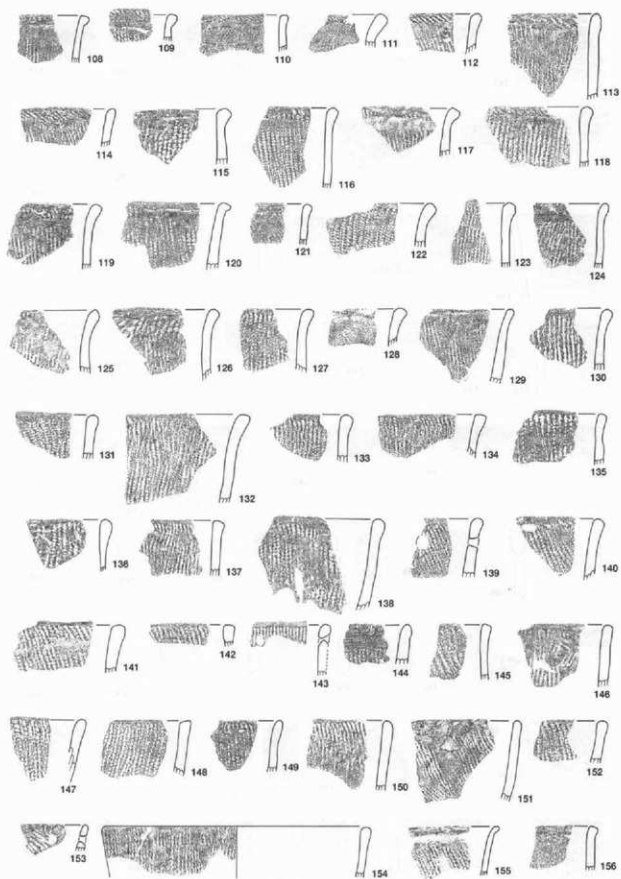


第67图 道槽外出土绳文土器(1)



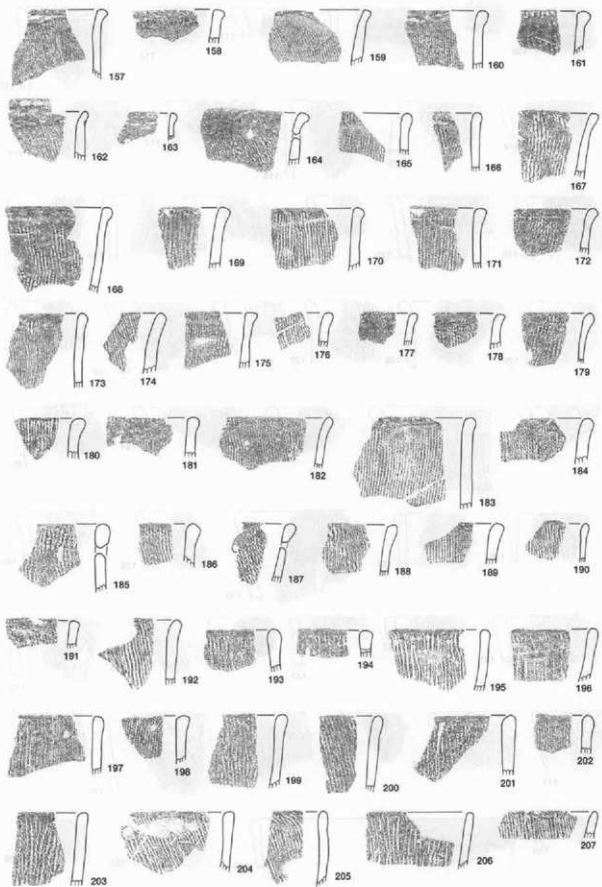
0 (1/3) 10cm

第68图 道槽外出土绳文土器(2)

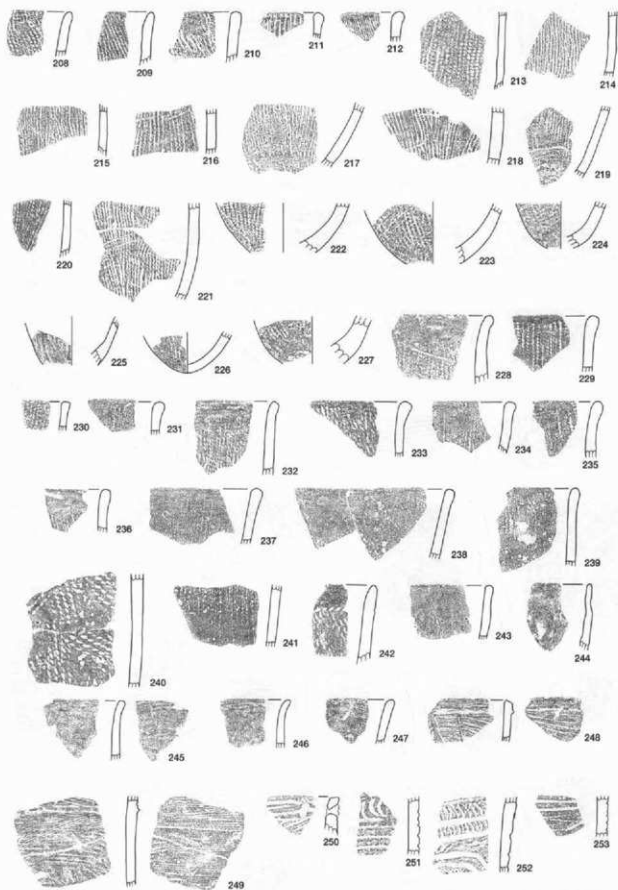


0 (1/20) 10cm

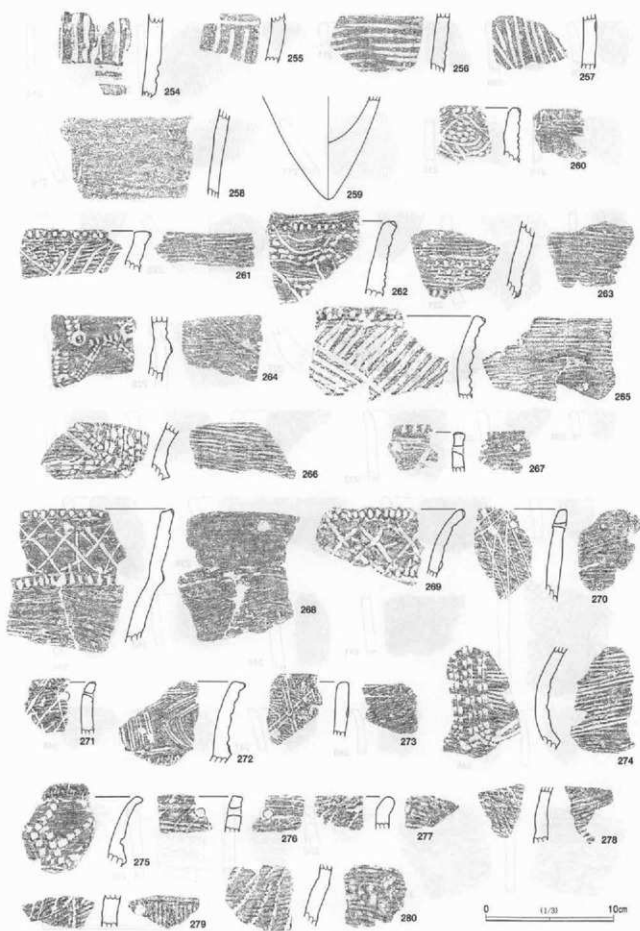
第69图 遺構外出土縄文土器(3)



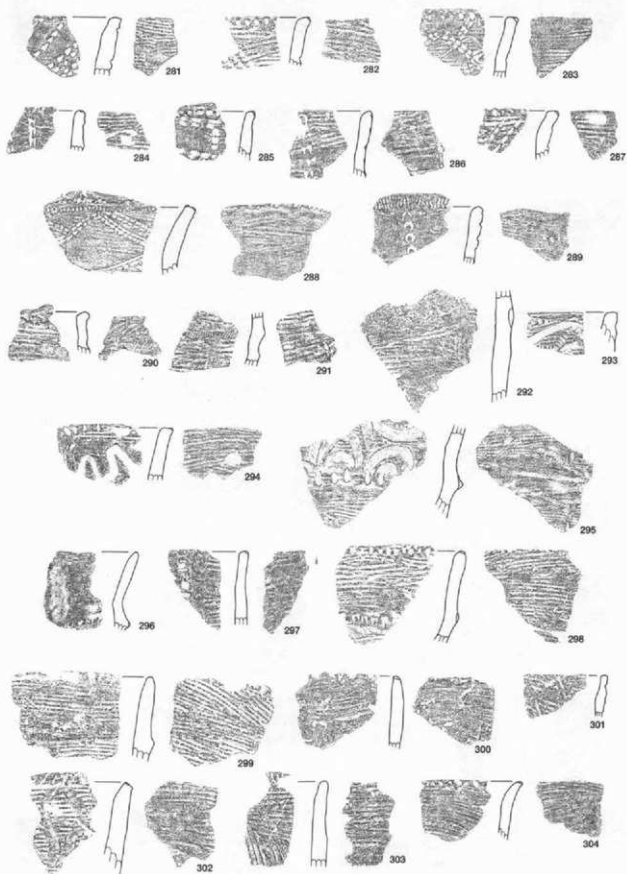
第70圖 遺構外出土縄文土器(4)



第71图 遺構外出土縄文土器(5)

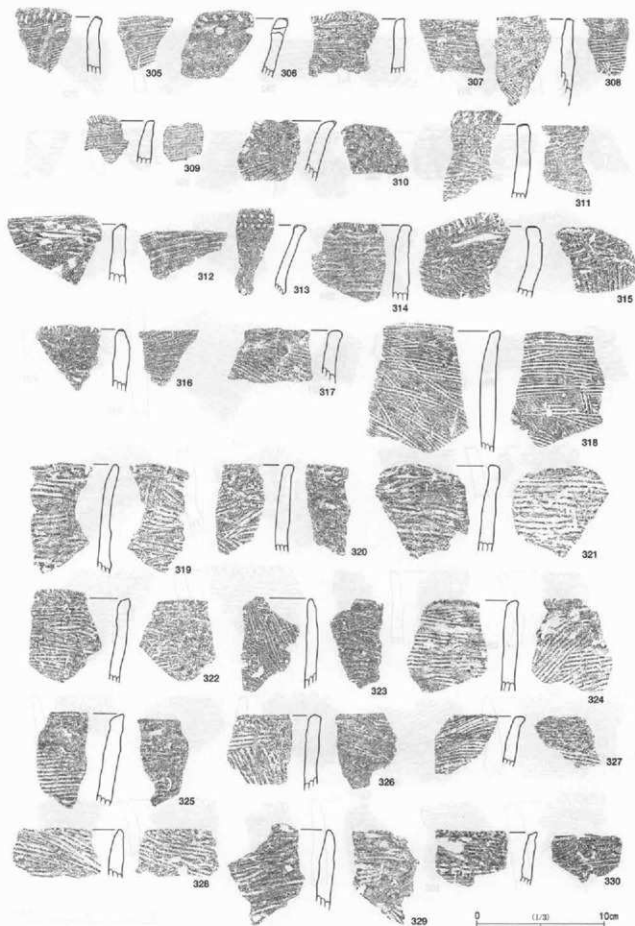


第72圖 遺構外出土繩文土器(6)

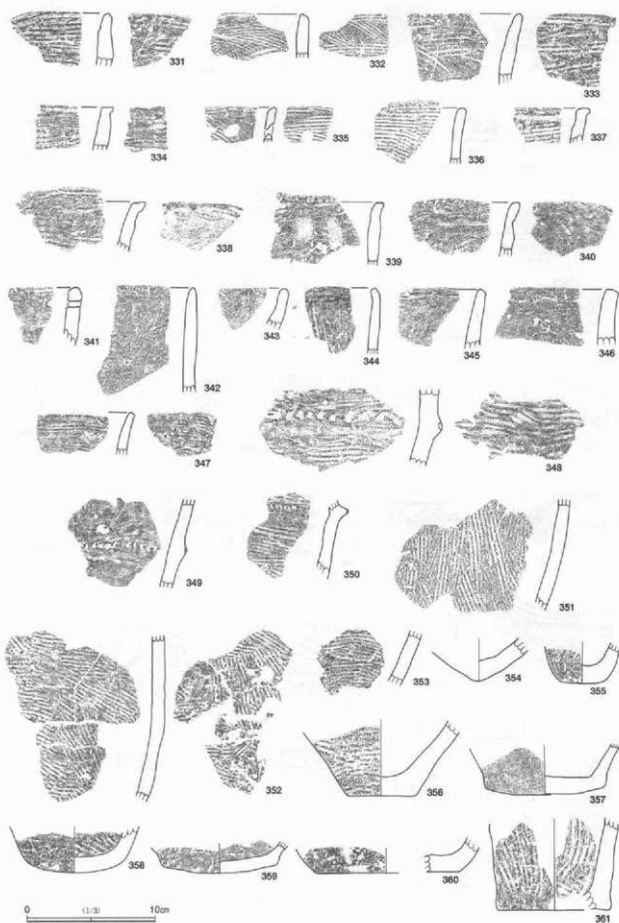


第73図 遺構外出土縄文土器(7)

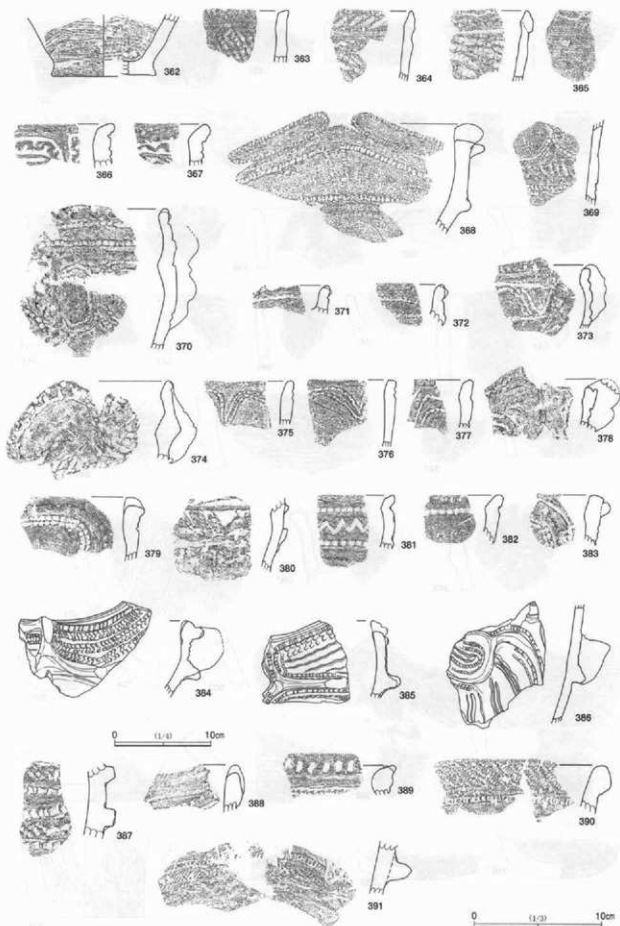




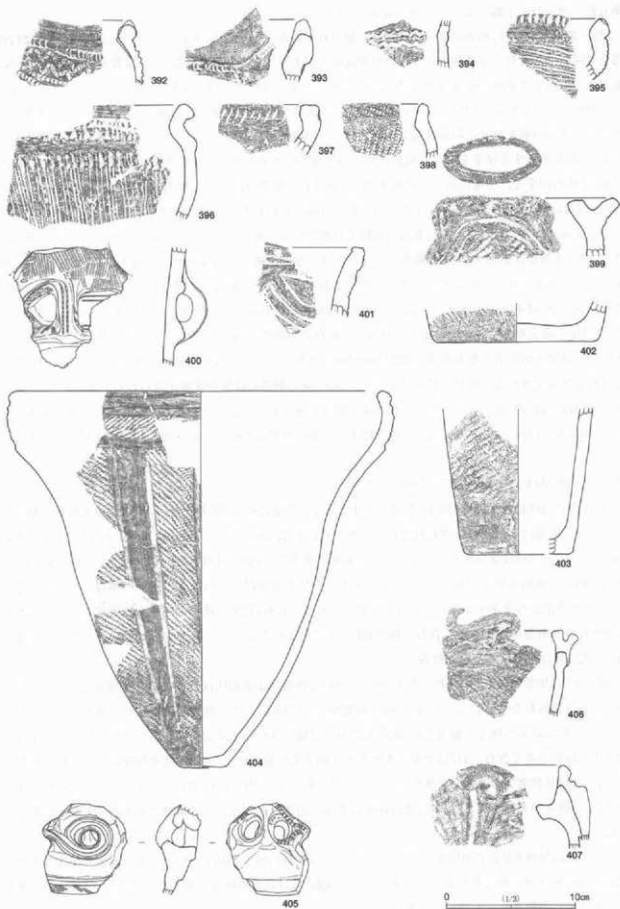
第74圖 遼博外出土繩文土器(8)



第75图 遺構外出土縄文土器(9)



第76图 遺構外出土繩文土器 (10)



第77图 遺構外出土縄文土器 (11)

第6群 阿玉台式土器 (第76・77図, 図版33・34)

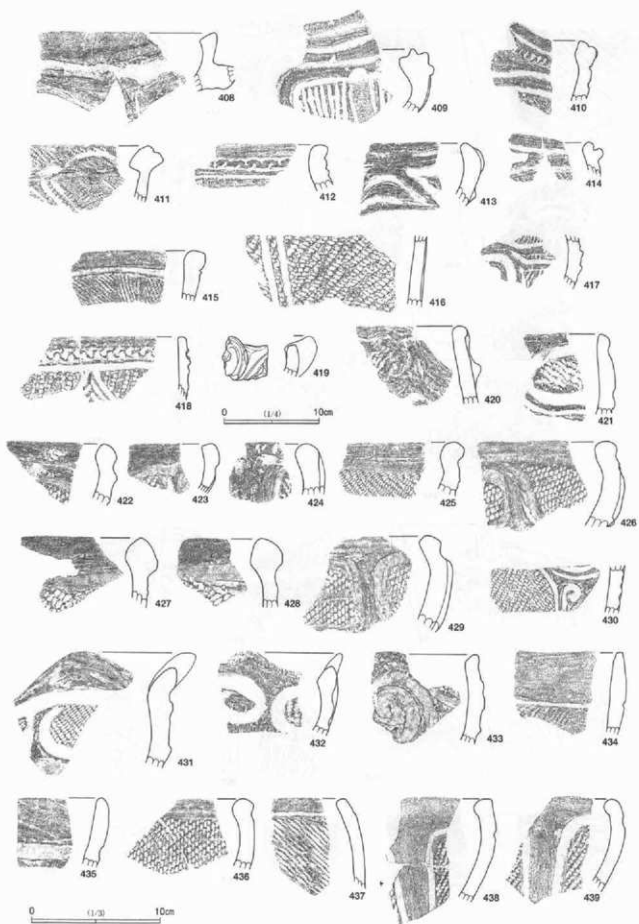
368~373は口縁下に幅の狭い結節沈線文が施されていることから、阿玉台Ⅰ式と判断される。368は口唇部及び隆帯で囲まれた文様体内に1列の結節沈線文が丁寧に施文される。長石・石英粒を多く含む。369は胴部片で、弧状と直線の結節沈線文の組み合わせである。368・369は阿玉台Ⅰa式であろう。370~372は同一個体と考えられる。口唇部は深い刻みにより小波状を呈し、口縁下に間隔の広い2条の結節沈線文、下位に2条の円形を呈する結節沈線文が配される。口縁部から胴部にかけて刻みを施した隆帯が垂下している。373も垂下する隆帯を有し、結節沈線文の区画内に3条1単位の波状を呈する結節文が充填される。374は扇状の把手で、口縁に沿って結節沈線文が刻まれ、隆帯の区画内に数条の結節沈線文が充填される。370~374はその文様から阿玉台Ⅰb式に含まれるものと思われる。375~379は平行する2条1単位の結節沈線文がみられることから阿玉台Ⅱ式の範疇と判断される。378・379は隆帯に沿って結節沈線文がみられる。381は沈線間に鋸歯文、383は隆帯に沿って2条の結節沈線文が施文される。阿玉台Ⅱ式の古段階に属すると思われる。384~391は阿玉台Ⅱ式の範疇であろう。384~386には、隆帯に沿ってキャタピラ文が施され、385・386はキャタピラ文の内部に波状の沈線が充填される。同一個体となる可能性もある。387は隆帯上にRLの縄文が施文される。390と391は同一個体の可能性がある。口縁部にはLRの縄文がみられる。392~401は阿玉台Ⅲ式と思われる。392・393は同一個体と思われ、波状口縁の口縁に沿って幅広の爪形文と角押文が施文される。砂粒の混入は少ない。395・396の胴部には集合沈線がみられる。399はラッパ状の把手の口縁に沿って強いナデが加えられ、LRの縄文が施される。胎土中に長石や雲母などの砂粒を多く含む。400は波状口縁で、RLの縄文と、橋状把手に2条の角押文が配される。402・403は底部片である。

第7群 加曾利E式土器 (第77~79図, 図版34・35・37)

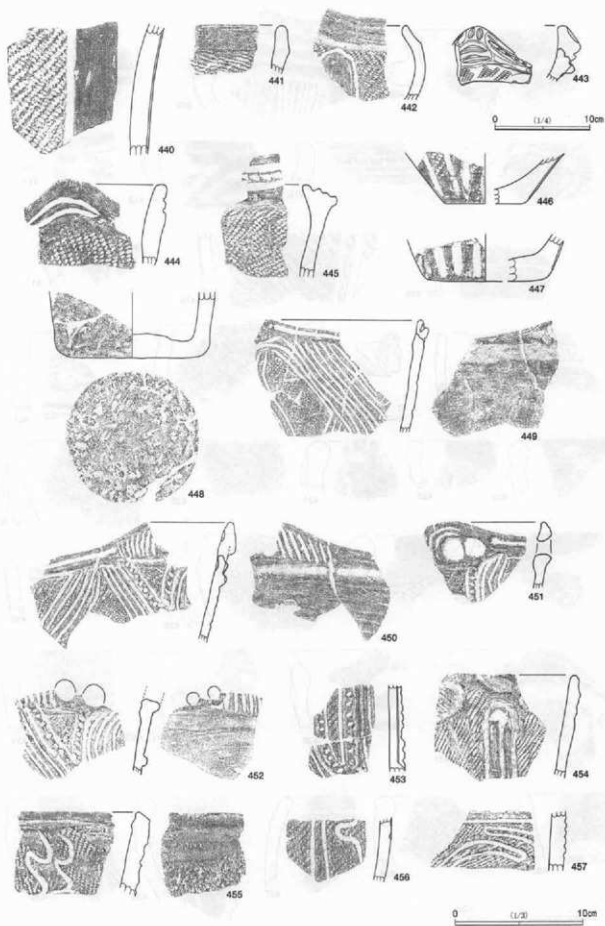
404は推定口径40.3cm, 器高39.2cmを測る深鉢である。地文にRLの縄文を施し、垂下する沈線間を擦り消している。内面は丁寧に仕上げられている。加曾利EⅢ式に属するものである。405~407は把手及び突起の部分である。405は猛禽類をデフォルメした形態の把手で、内面の口縁に沿って押し引き文がみられる。外面下部には無節の縄文が施される。406はS字状を呈する突起で、口縁下に無節の縄文が施文される。407は突起頂部から垂下する隆帯上に沈線が加えられる。408は鐮状の隆帯が巡るものと思われる。これらは胎土中に長石等の砂粒を多く含む。加曾利EⅠ式に含まれるであろうが、405はいわゆる中鉢式から加曾利EⅠ式に移行する段階と思われる。

409~432は加曾利EⅡ式の一群と判断される。409は隆帯による楕円区画内に集合沈線を充填する。胎土中に長石等の砂粒を多く含む。411は口縁部が肥厚し、口唇部にRLの縄文が施文され、弧状の沈線が加えられる。胴部はLRの縄文を地文とし、沈線が部分的に観察される。縄文の擦り消しは行われない。やはり胎土中に砂粒を多く含む。412はややくずれた交互刺突文が施される。413は微隆起線による区画がみられる。418は交互刺突文と連弧文で構成されるタイプであろう。421・429・431・432は太沈線による楕円区画内にRLの縄文が充填される。430は沈線区画内が擦り消されており、その文様から加曾利EⅢの様相がみられる。

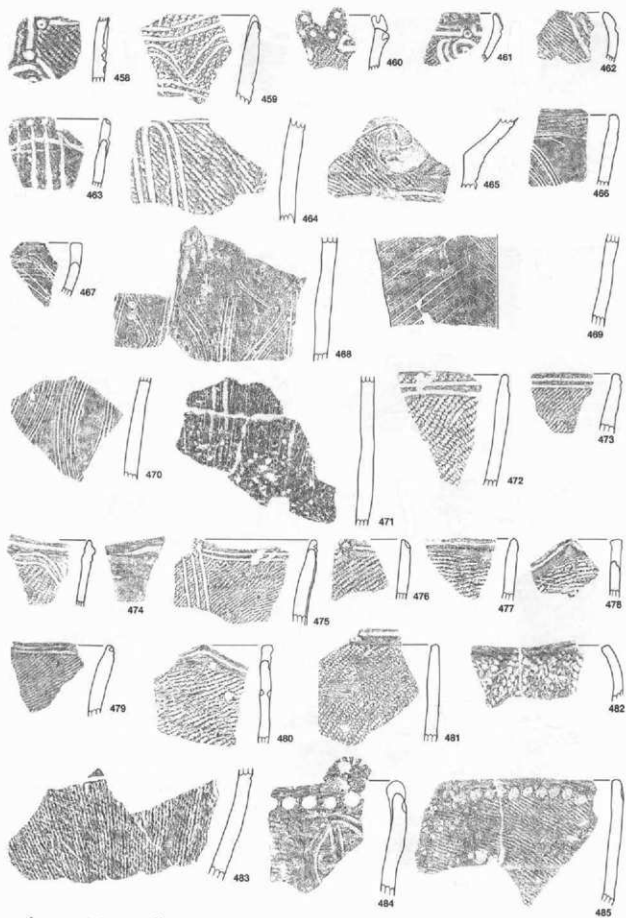
433~442は加曾利EⅢ式の範疇と考えられる。433は波状口縁の頂部で、ナゾリ状の渦巻文が施文される。438・439は擦り消し縄文帯が垂下するタイプで、沈線内にはLRの縄文が地文として残る。442は逆に沈線内に擦り消しが施されるのものである。



第78図 遺構外出土縄文土器 (12)

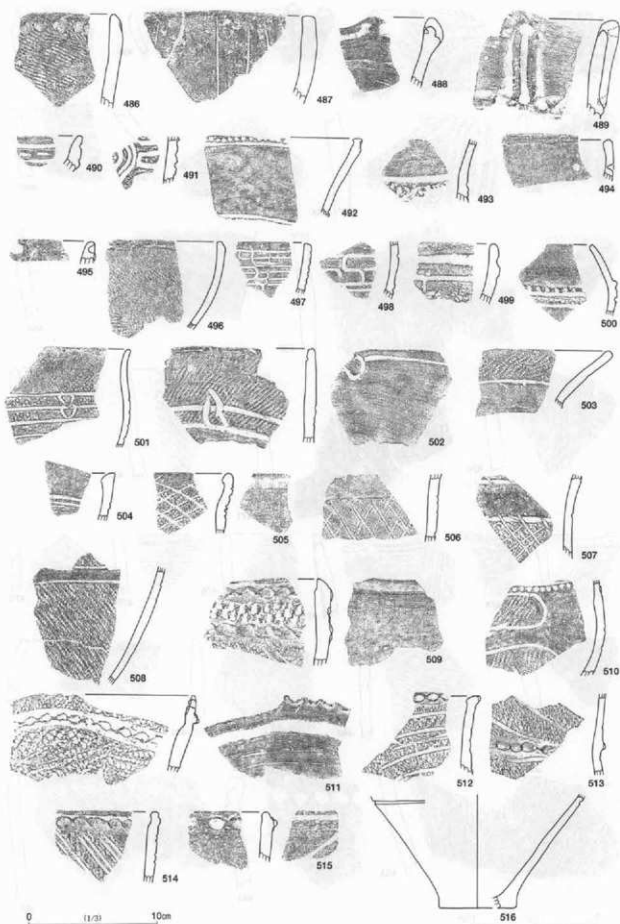


第79図 遺構外出土縄文土器 (13)



第80图 道槽外出土绳文土器 (14)





第81图 遺構外出土織文土器 (15)

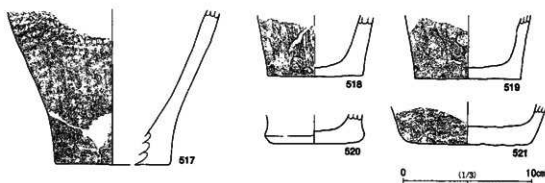
443～445は加曾利EⅣ式と思われる。443・444は波状口縁で、頂部に弧状の沈線が施される。445の口唇部には刺突による刻みがみられる。446～448は底部片で、446・447は垂下する沈線区画が底部近くまで施されていることから、加曾利E後半の時期と思われる。

#### 第8群 堀之内式土器（第79～81図，図版35・36）

出土量は比較的多いが、すべて堀之内Ⅰ式に属すると判断される。449～452は同一個体と思われ、縄文を地文とする。波状口縁を呈し、頂部には穿孔が施され、微隆起線による区画と集合沈線で構成される。頂部の口縁部内外面には爪形状の刻みが施される。453も同様の文様構成を示すものであろう。454はLR縄文を地文とし、ナゾリ状の沈線区画が幾何学的に配される。455～457曲線の細い沈線が施文される。460は凹みを有する小突起が2個みられる。466～471は直線及び曲線の条線のみが施文されるタイプである。472～480は口縁下に沈線を巡らし、以下に縄文を施すものである。475・476・479は小波状を呈し、頂部には円形刺突が加えられる。484～486は口縁に沿って円形の刺突列が巡る一群である。484は突起を有し、外面の調整がヘラケズリ状に粗い。幾何学的なナゾリ状の浅い沈線がみられる。485・486は同一個体で、地文は無節の縄文である。488・489は波状口縁で、489の口縁には凹みをもつ垂下する隆帯と円形刺突が施される。492は内屈する口唇部に刻みが加えられ、口縁部の上下に沈線が配される。

#### 第9群 加曾利B式土器（第81・82図，図版36）

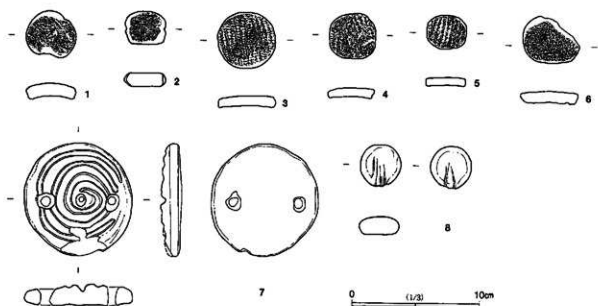
497～500は加曾利BⅠ式と思われる。497・498は変形工字文で構成され、498には地文として細かいRL縄文が施され、部分的に擦り消している。501～507・510は加曾利BⅡ式で、横位の沈線及び格子状の沈線がみられる。510は楕円区画内にLR縄文が残り、ほかは擦り消される。508は加曾利BⅢ式の胴部片である。509・511～515は加曾利B式の粗製土器である。516～521は底部片で、516は鉢の形態を示すものであろう。



第82図 遺構外出土縄文土器（16）

#### 土製品（第83図，図版37）

1・2は土器片鏝である。1は外面に不鮮明ながら条痕が観察されることから、茅山下層式に含まれるものであろう。上下の切り込みは明瞭ではない。2は左右の切り込みが明瞭に確認され、切り込み内は使用による摩耗が顕著である。中期の所産であろう。3～6は土器片円盤である。いずれも周縁が丁寧に調整され、滑らかとなる。3～5は縄文、6は磨り消し縄文が認められる。後期に含まれるものであろう。



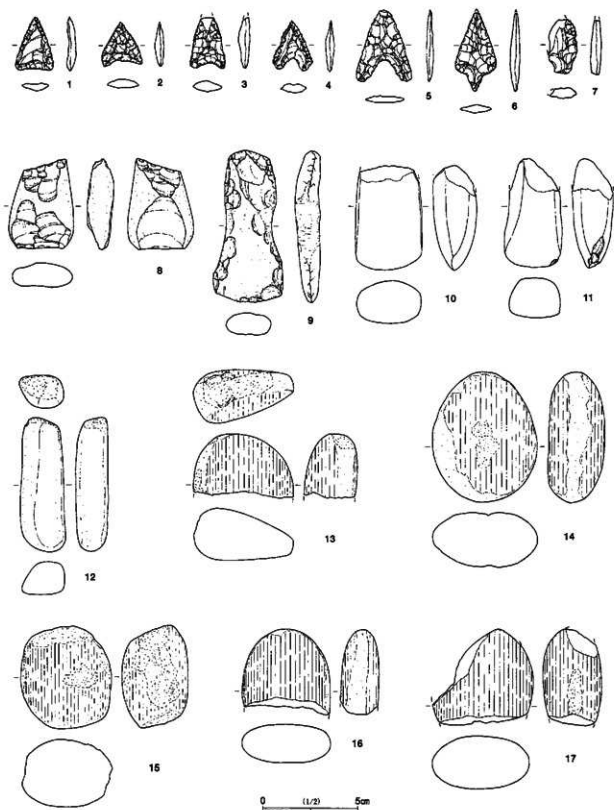
第83図 遺構外出土土製品

7は蓋形土製品であろうか。径8.5cmを測る正円形を呈する。両側に2個1対の孔が穿たれている。文様面から裏に向けて穿孔したようで、裏面の孔の周囲がやや盛り上げている。表面には中央の凹みを起点にして沈線による渦巻文が施文されている。表裏面・周縁とも丁寧に調整されている。松戸市貝ノ花貝塚に同様の類例があり、本遺跡の縄文土器の様相をあわせて考えると、堀之内I式期の所産と思われる。8は性格不明の土製品である。表面から表面にかけて線状の刻みが加えられる。

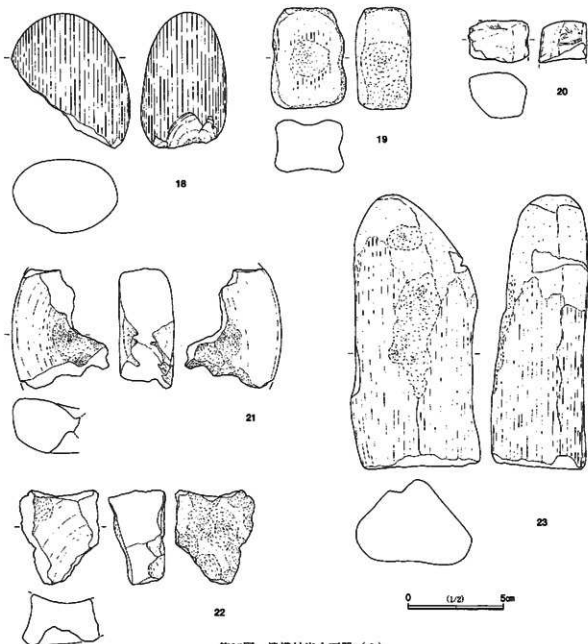
石器（第84・85図、第20表、図版37・38）

遺構外からは、石鎌7点、石斧類3点、磨石5点、敲石2点、石皿2点、凹石2点、砥石2点、ピエスエスキュー1点が出土している。

1～7は石鎌である。石材別にみると、黒曜石3点、チャート2点、珪質頁岩2点と多様である。形態的には、2～5は凹基形であるが、4・5は基部の挟りが深くなる。1は平基、6は凸基形を呈する。7は未製品と思われる。8は上下に調整剥離がみられることから、ピエスエスキューとなろう。9は打製石斧である。刃部を含めたほぼ全面に摩耗が観察され、特に両側面中央部が顕著で、意図的に研磨された可能性が高い。10・11は磨製石斧で、いずれも頭部を欠損する。10は全体に丁寧に研磨され、刃部は蛤刃形を呈する。11も10とほぼ同様の形状であるが、刃部の片面には調整剥離が施されている。12・15は敲石であろう。12は棒状を呈し、片端部に敲打痕がみられる。15は磨石を敲石として再利用したものと思われる。側面部全体に敲打による剥離が顕著に確認される。13・14・16～18は磨石である。14は完形品であるが、他は破損品である。側面に敲打痕が観察される例が多い。19は凹石と思われ、上下を除く四面に堅果類の打ち割り用に使われたと思われる凹みがみられる。20は破損した砥石であるが、形状及び研磨状況から奈良時代以降の所産と考えられる。21・22は石皿の破損品で、石皿本来の磨面として使用した凹みの他に、堅果類の打ち割り用の小さな凹みが表裏面とも複数観察される。23は全体に摩耗しており、極めて平滑な面が形成されている。本来台石としていたものを砥石として再利用した可能性が高い。



第84图 遼博外出土石器(1)



第85図 遺構外出土石器 (2)

第20表 遺構外出土石器

標記番号	アリッド番号	遺構番号	石種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	
第20表	4E-45	4	石炭	柱状風紋	2.1	1.4	0.3	1.1		
2	8H-40	1	石炭	風紋石	1.8	1.8	0.4	0.8		
3	4G-67	1	石炭	チャート	2.1	1.4	0.4	1.1	先端欠損	
4	2H-54	2	石炭	風紋石	2.1	1.8	0.3	0.6		
5	7G-58	1	石炭	チャート	2.9	2.2	0.3	1.0		
6	3F-25	1	石炭	柱状風紋	3.1	1.7	0.4	1.8		
7	5G-64	1	石炭	風紋石	2.2	0.4	1.1	1.2	半割品	
8	4L-14	2	ピエヌエヌキーク	雲出岩	3.6	2.8	1.0	11.9		
9	4H-30	1	打石片	砂状風紋片	11.9	3.5	2.0	289.6		
10	4H-30	1	打石片	風紋片	8.2	4.2	3.4	228.5		
11	3I-70	1	磨製石片	柱状風紋	8.6	4.5	3.2	75.8		
12	3H-13	1	磨石	砂岩	10.4	3.5	3.5	158.9		
13	6H-23	1	磨石	砂岩	5	7.8	4.1	193.9		
14	2E-57	1	磨石	雲出岩	10.1	8.2	4.5	462.8		
15	4E-33	1	磨石	砂岩	8.0	7.1	3.1	417.9		
16	3H-49	1	磨石	雲出岩	6.7	6.9	3.0	204.4		
17	3K-43	1	磨石	砂岩	7.5	7.9	4.5	335.2		
第85図	18	5F-57	1	磨石	雲出岩	10.8	9.2	6.7	688.6	
19	3I-50	1	磨石	雲出岩	8.1	5.9	4.3	224.5		
20	10H	8	磨石	砂岩	3.3	4.8	3.7	79.1	奈良時代以降	
21	2H-75	1	石炭	雲出岩	9.3	7.5	4.4	227.6	西石に転用	
22	6G-78	102	石炭	雲出岩	7.2	6.1	4.4	140.6	西石に転用	
23	2H	1	磨石	砂岩	21.4	10.2	7.7	1342.1	奈良末期制作	

### 第3節 弥生時代～古墳時代

#### 1 竪穴住居跡

##### SI001 (第86図, 図版39)

7H10グリッド付近に所在する。平面形は3.38m×3.17mの方形で、南側の壁は攪乱で削平されている。床面積は8.89㎡を測る。主軸方位は、N-66.5°-Wである。炉は主軸上西側に位置する。径0.48m×0.49mの浅い掘り込みで、底面は赤みを帯び、良く焼けてしまっている。壁溝・貯蔵穴は検出されなかった。床面東側には、径0.38m×0.34m、深さ0.44mを測るピットが掘り込まれている。外側に傾斜する掘り方を示していることから、柱穴ではなく、出入口ピットとなる可能性が高い。

覆土は自然堆積の様相を呈し、黒褐色土の上層と暗褐色土の下層からなる。床面近くには、炭化材が若干検出されているが、焼土の堆積がみられないことから、焼失したものではなく、住居廃絶後に廃棄されたものと思われる。

遺物 遺物の出土は少ない。1は壺の口縁部片である。折り返し口縁の口唇部に単節LRの縄文を施し、下端に棒状工具による刺突が巡らされる。頸部には櫛目波状文が加えられる。弥生時代後期の所産である。

##### SI002 (第86図, 図版39)

8G36グリッド付近に所在する。平面形は5.56m×4.55mの横長の長方形で、床面積は22.90㎡を測る。南東側の壁及び床面は溝SD-002及び風倒木による攪乱で明らかでない。床面はソフトロームとハードロームの境界付近で形成されており、確認面からの深さは0.17m～0.32mを測る。主軸方位はN-63°-Wである。対角線上に主柱穴と考えられるピットが4基あり、深さは0.63m～0.57mである。炉は確認されず、貯蔵穴及び出入口ピットの有無は攪乱のため明らかでない。

覆土は自然堆積の様相を呈し、暗褐色土及び黒色土を主体とする上層とロームの混じった黒色土の下層からなる。

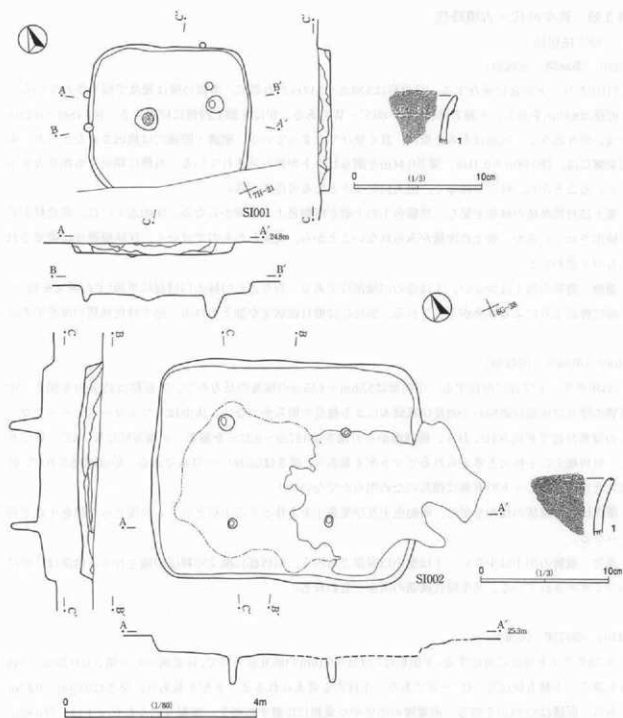
遺物 遺物の出土は少ない。1は壺の口縁部であろう。口唇部に縄文の押圧が施される。内面は丁寧にヘラミガキされている。弥生時代後期の所産と思われる。

##### SI101 (第87図, 図版39)

7G73グリッド付近に所在する。平面形は7.64m×5.16mの隅丸長方形で、確認面からの深さは0.20m～0.49mを測る。主軸方位はN-41°-Wである。主柱穴と考えられるピットが4基あり、深さは0.69m～0.82mである。面積は33.24㎡を測る。南東壁の中央やや東側に位置する壁を一部掘り込んだピットは、径0.83m×0.62m、深さ0.24mであり、その位置から貯蔵穴となる可能性もある。南東壁側に掘り込まれている小ピットは、出入りに伴うものであろう。炉は径1.63m×0.98mの長楕円形を呈し、掘り込みは浅い。底面には、0.84m×0.49mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。床面の南西側の壁沿いには、焼土の堆積が検出された。その状況から、住居廃絶後に廃棄されたものと想定される。

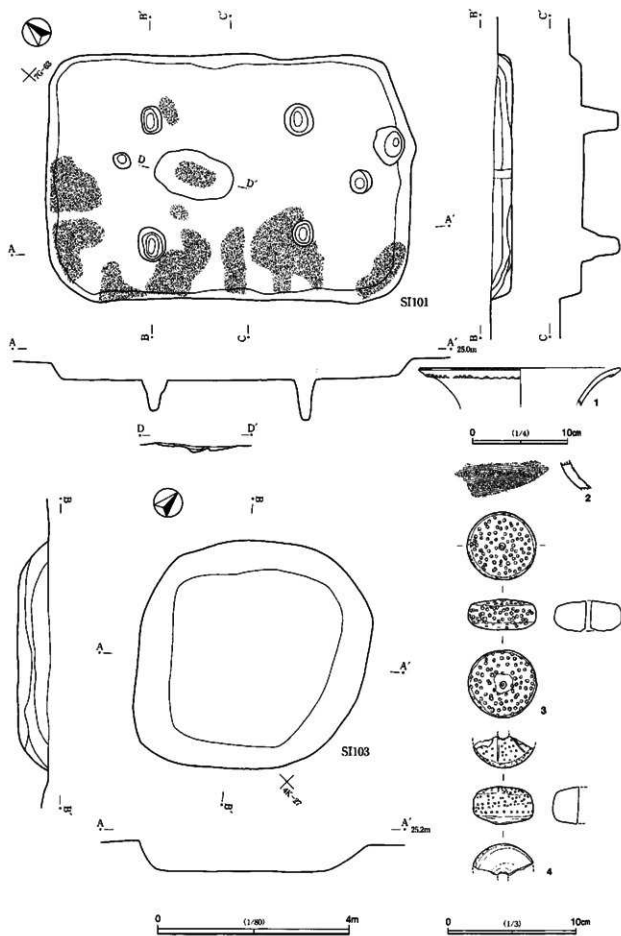
覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物は小破片が多く、図示できるものは少ないが、2点の土製紡錘車が南西側の焼土下面の床面からやや浮いた状態で検出された。1は壺の口縁部で、折り返し口縁の口唇部に単節LRの縄文が押捺され、下端に棒状工具による刻みが施される。2は壺の頸部片で、縦区画の櫛目文に横位の波状文を充填する十



第86図 SI001・002

王台式土器の特徴が伺われる。これらは、弥生時代後期の所産であろう。3・4は土製の紡錘車である。3は完形品で、最大径5.3cm、厚さ2.4cm、重さ66.6gを測る。全面に竹管状工具による細かい刺突が施される。焼成は良好である。4は半分ほどの遺存で、厚さ2.9cmを測る。底面を除く面には、3より細かい刺突が加えられる。上面には、中央の孔から放射状に沈線が刻まれているが、遺存部分から判断すると、上面全体を6つに区画しているようである。



第87图 SI101·103



SI103 (第87図, 図版40)

4K16グリッド付近に所在する。平面形は4.78m×4.79mのやや不整な隅丸方形で、確認面からの深さ0.45m～0.62mを測る。主軸方位はN-32°-Wである。面積は11.28㎡を測る。主柱穴・壁溝・貯蔵穴・炉等は検出されなかった。

覆土は自然堆積の様相を呈し、炭化物及びソフトローム細粒を含む黒色土を主体とし、床面付近には粒子の粗い粘性ロームを含む褐色土層がみられる。

遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。

SI104 (第88図, 図版40)

3K26グリッド付近に所在する。平面形は6.67m×5.20mのやや不整な縦長の隅丸方形で、確認面からの深さ0.19m～0.47mを測る。主軸方位はN-52°-Wである。面積は24.72㎡を測る。柱穴・炉・出入口ピット・貯蔵穴等は検出されなかった。

覆土は炭化物を含む黒褐色土を主体とする上層とローム粒を含む褐色土を主体とする下層からなり、自然堆積の様相を示している。

遺物 遺物の出土は少ないが、床面中央付近から1の甕が出土している。胴下半部のみのものであるが、単節LRの附加条縄文が全面に施文されている。底部はやや突出気味で、外面には木葉痕が観察される。弥生時代後期の所産である。

SI107 (第88図, 図版40)

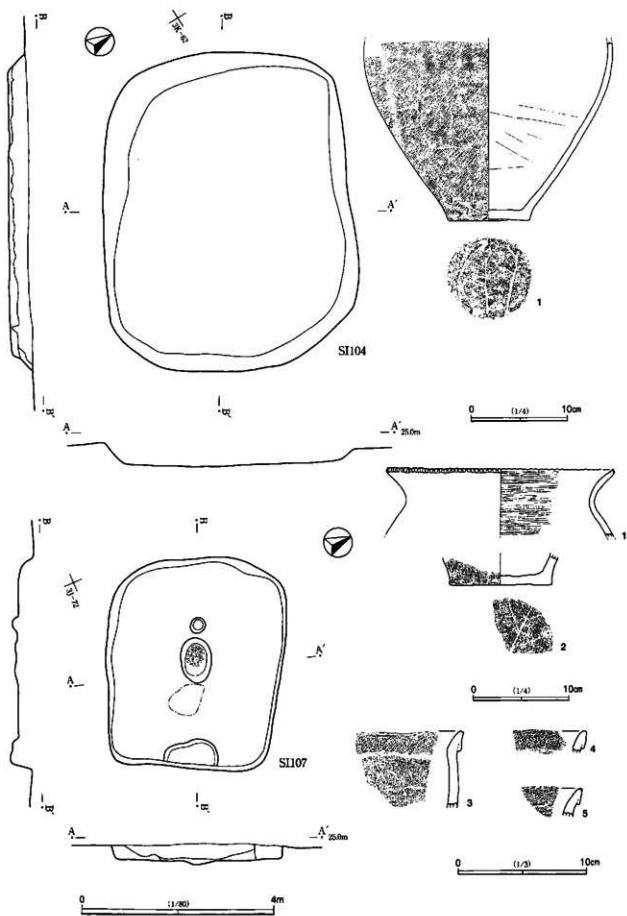
3J62グリッド付近に所在する。平面形は4.47m×3.68mの隅丸長方形で、確認面からの深さ0.16m～0.29mを測る。主軸方位はN-59°-Wである。面積は13.20㎡を測る。壁の立ち上がりは北西側で緩やかである。柱穴・壁溝は検出されなかった。南東壁中央部にあるピットは、径1.11m×0.53mの不整な半円形で床面より0.2mほど掘り込まれる。性格は不明であるが、出入り口に伴うものかもしれない。炉は、径0.94m×0.64mの長楕円形を呈し、床面より5cmほどの深さである。底面には、0.47m×0.37mの範囲で被熱による赤色化と硬化がみられる。炉の西側に近接してピットが掘り込まれているが、柱穴となる可能性もある。床面は、炉の南東側で部分的に著しい硬化がみられるが、ほかに硬化の目立つところはない。

覆土は黒色土を主体とし、床面近くでハードローム粒及びソフトロームを含む黄味を帯びた黒色土が見られる。

遺物 出土遺物はそれほど多くないが、炉の北東側に集中する傾向がある。1は甕の口縁部で、口唇部に棒状工具による刻みが巡らされる。2は甕の底部で、胴部外面にRの捺糸文が施される。底部はやや突出気味で、外面に木葉痕が残る。3・4は小形甕の口縁部片で、折り返し口縁の外面と口唇部に単節LRの附加条縄文が施される。胴部外面は無文となる。5は壺の口縁部であろうか。折り返し口縁の口唇部には縄文の押捺、外面にはLの捺糸文が加えられる。頸部には、櫛目波状文が施されているようである。弥生時代後期の所産である。

SI108 (第89図, 図版41・56)

3H58グリッド付近に所在する。平面形は6.26m×4.88mの略長方形で、確認面からの深さ0.15m～0.45m



第88图 SI104 · 107

を測る。主軸方位はN-47°-Eである。床面積は25.80㎡を測る。主柱穴と考えられるピットが4基ほぼ対角線上に配置される。径0.2m~0.3m、深さ0.15m~0.29mであるが、うち北側の2基は底面が硬化しており、柱の当たりと思われる。壁溝は検出されなかった。貯蔵穴は東隅の壁際にあり、1辺0.52mの正方形を呈する。深さは、0.28mである。炉は、主軸上中央よりやや北側に位置し、径0.73m×0.68mを測る。掘り込みは浅く、底面は被熱による赤色化と硬化がみられる。北西隅コーナー部の床面からやや浮いた状態で炭化材が、南西隅コーナー部からは焼土ブロックが検出されているが、床面が焼けた様相は伺われず、住居廃絶後に飽から廃棄されたものと思われる。

覆土は、黒色土及び黒褐色土を主体とし、床面近くにはソフトローム粒の混じった黒褐色土が見られる。自然堆積の様相を呈している。

遺物 遺物の出土はあまり多くないが、1の高杯と2の壺は炉の近くから、3の甕は貯蔵穴付近からの出土である。1は高杯で、杯部を欠損する。裾部内面から脚部外面にかけて赤彩が施される。脚柱部上半から杯部との接合面にかけてかなり火を受けた痕跡が観察されることから、脚部を炉器台として再利用した可能性が考えられる。2は折り返し口縁の壺の口縁部である。内外面ともハケ目調整され、頸部から胴部にかけてはミガキが加えられる。焼成良好である。3は球形甕を呈する甕である。口縁部はくの字状に外反し、底部はやや突出気味となる。上半部に火を受けた痕跡が観察される。古墳時代中期、5世紀前半の時期と思われる。

#### SI109 (第89図, 図版41)

4J95グリッド付近に所在する。平面形は2.66m×2.38mの方形で、確認面からの深さは0.03m~0.12mと浅い。主軸方位はN-13°-Wである。床面積は5.37㎡と小規模である。柱穴・壁溝等は検出されなかったが、炉はほぼ中央に検出された。径0.67m×0.46mで、掘り込みはきわめて浅い。底面は赤色化しているが、硬化は認められない。床面はソフトローム中に形成されており、全体的に硬化は認められない。焼土ブロックが南東コーナー部に堆積している。

覆土は自然堆積の様相を呈し、黒色土及びソフトロームを含む黒褐色土を主体とする。

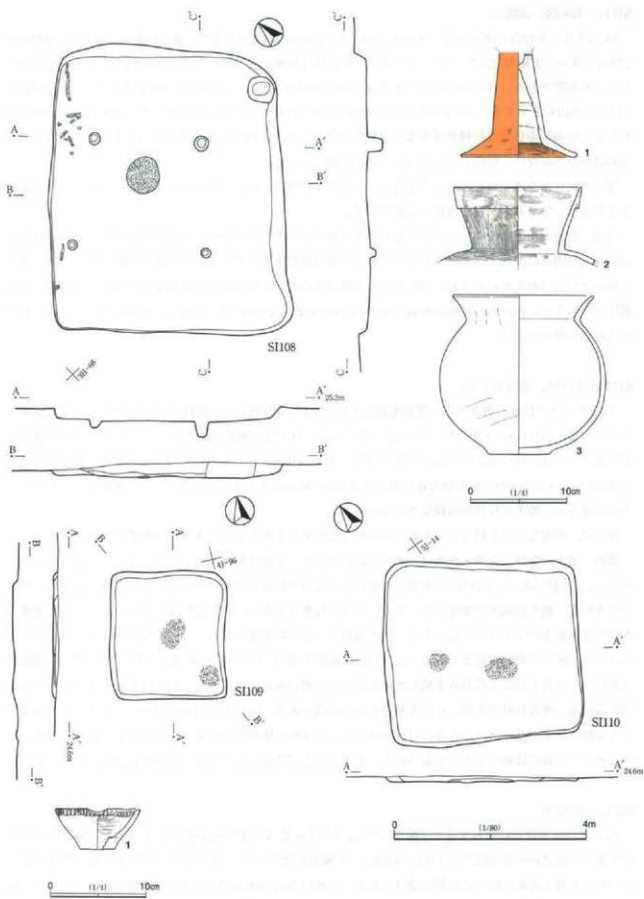
遺物 遺物の出土は少なく、南東コーナーの焼土中よりミニチュア土器が出土したのみである。1はミニチュア土器で、口縁部が内面に折り返されている。口縁部内外面にはヘラ状工具による刻みが巡らされている。外面はナデ調整、内面は丁寧なミガキが加えられる。弥生時代終末から古墳時代初頭の時期であろう。

#### SI110 (第89図, 図版41)

5J04グリッド付近に所在する。平面形は4.06m×3.69mの長方形で、確認面からの深さは0.14m~0.06mと浅い。主軸方位はN-53°-Wである。床面積は13.51㎡を測る。柱穴・壁溝等は検出されなかった。炉は2か所検出された。主となる炉は、床面中央からやや西側に寄った位置にあり、径0.70m×0.44mのやや不整な楕円形を呈する。床面からの掘り込みはほとんどない。主軸上東側に位置する炉は、径0.44m×0.41mの円形を呈し、わずかな掘り込みをもつ。床面はソフトローム中に形成され、硬化した部分はみられない。

覆土は黒色土及びソフトロームを含む黒褐色土からなり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土はなかった。



第89图 SI108~110

SI111 (第90図, 図版42)

3K25グリッド付近に所在する。平面形は4.65m×4.03mの隅丸長方形で、確認面からの深さは、0.10m～0.22mと浅い。主軸方位はN-50°-Wである。床面積は13.87㎡を測る。対角線上に柱穴と考えられるピットが4基配置される。径40cm前後で、深さは0.51m～0.60mである。炉は床面ほぼ中央にあり、径0.60m×0.42mの楕円形を呈する。深さは0.14mで、炭化物を多く含む焼土とロームブロックを含む褐色土が検出されたが、底面の赤色化及び硬化はあまり認められなかった。床面は一部硬化がみられるが、全体的に踏み固めは観察されない。壁沿いに焼土ブロックが堆積している。

覆土は炭化物を多く含む黒色土を主体とし、床面及び壁際にローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積しているが、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土は少なく、弥生土器の小片が検出されたのみである。1は壺の頸部片である。縦区面の飾目文の内部に波状文が充填される十土台式土器の特徴を有している。2は壺の口縁部片で、折り返し口縁の下端部に刺突が巡らされ、口唇部にも不鮮明であるが、刻みが施されるようである。3は壺の口縁部片であろうか。折り返し口縁の外面に単筋LRの附加条状文が施され、下端部に刻みが加えられる。弥生時代後期の所産である。

SI112 (第90図, 図版42・56)

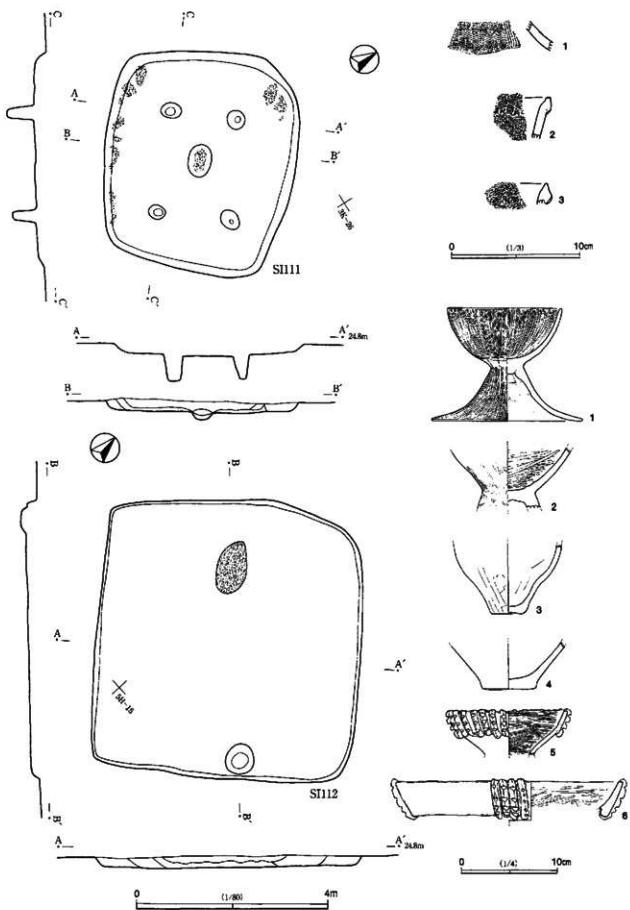
5H04グリッド付近に所在する。平面形は5.58m×5.51mの方形で、床面積は28.86㎡を測る。確認面からの深さ0.12m～0.24m、主軸方位はN-42°-Wである。柱穴等は検出されなかった。東南壁際の中央に位置するピットは、径0.64m×0.58mの円形を呈し、深さは0.16mである。出入口ピットとなる可能性がある。炉は径1.11m×0.63mのやや不整な楕円形を呈するが、掘り込みはほとんどなかった。床面はソフトローム中に形成され、顕著な硬化面は観察されなかった。

覆土は、黒褐色土の上層とソフトロームの混じる暗褐色土の下層から成り、自然堆積と思われる。

遺物 出土遺物は、南西・南東コーナー部に集中する。1の高杯は南西コーナーからの出土である。口径12.1cm、裾径15.8cm、器高11.8cmを測る。脚部内面はハケ目調整後ヘラナデされる。以外は丁寧なミガキが施される。胎土は緻密で焼成良好である。2は台付壺片であろう。胴部外面には幅の広いハケ目調整、内面には丁寧なヘラミガキが施される。胎土は粗く、長石粒を多く含む。3・4は壺の底部片であろうか。ヘラケズリ後ナデ調整が加えられる。5は壺の口縁部である。口径13.1cmを測る。折り返し口縁の外面に、3単位のヘラ状工具による刻みを施した棒状浮文が全面に貼り付けられる。内面は横ナデ後密なミガキが加えられる。焼成良好である。6は大形の壺の口縁部である。折り返し口縁の外面に4本1単位の刻みを有する棒状浮文が貼り付けられる。口縁全体では、4単位の棒状浮文があったものと思われる。外面は丁寧なナデ、内面には粗いミガキが施される。胎土は緻密で焼成良好である。古墳時代前期の所産である。

SI113 (第91図)

4H92グリッド付近に所在する。平面形は5.76m×5.11mで、やや隅の丸い長方形を呈する。床面積は26.61㎡を測る。確認面からの深さは0.24m～0.38m、主軸方位はN-17°-Wである。柱穴等は検出されなかった。炉は主軸上北側に寄った位置に設けられる。長軸1.14m、短軸0.72mの範囲で赤色化がみられるが、掘り込みはほとんどない。



第90圖 SI111・112

覆土は、黒色土の上層及び黒褐色土の下層からなり、床面近くにはソフトロームの混じった黒褐色土の層が検出される。炉に近い部分では赤色焼土粒を含む黒褐色土が検出された。

遺物 出土遺物はそれほど多くないが、図示した土器は南東隅の床面上から検出された。1は口径16.0cmを測る甕の口縁部片である。口唇部には、棒状工具による刻みが巡らされる。2は台付甕の台部で、裾径11.0cmを測る。全体に丁寧なつくりで、内外面ともナデ調整が施される。3は大形の壺の底部であろう。古墳時代初頭の所産と思われる。

#### SI114 (第91図, 図版42・43・56)

5H32グリッド付近に所在する。平面形は4.98m×4.77mで、やや不整な隅丸方形である。床面積は19.79㎡を測る。床面はソフトローム中に形成されており、確認面からの深さ0.15m～0.36mを測る。主軸方位はN-37°-Wである。柱穴等は検出されなかったが、南東壁際の中央にあるピットは、径0.55m×0.49mを測り、深さ0.05mと浅いが、その位置から出入口ピットとなる可能性も考えられる。炉は主軸上北側に位置する。径0.53m×0.44mで赤色化が認められるが、掘り込みはほとんどない。

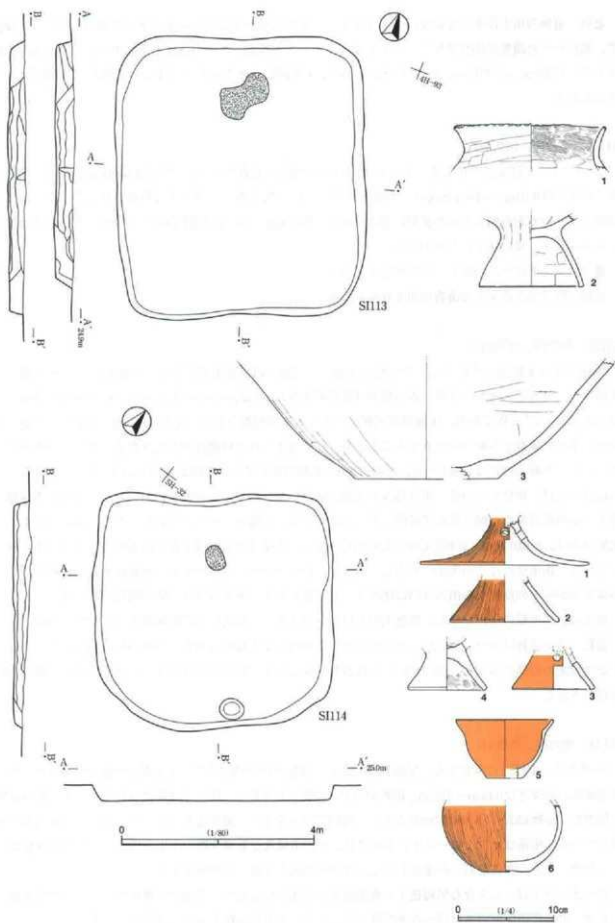
覆土は自然堆積の様相を呈している。黒色土の上層及び黒褐色土の下層からなり、床面近くにはソフトロームの混じった黒褐色土の層が検出される。炉に近い部分では焼土粒を含む黒褐色土が検出された。

遺物 出土遺物は、壁沿いに分布しているが、1・2・6は南西コーナーからの出土で、6の上に2が載った状態で検出された。また、5の鉢は出入口と思われるピット内からの出土である。1は高杯の脚部であろう。裾径17.6cmと大きく、上部に4単位の円形透かし孔が穿たれている。外面は丁寧にミガキ調整され、外面赤彩が施される。2・3は器台の台部と思われる。外面赤彩となる。3には4単位の円形透かし孔がみられる。4は台付甕の台部であろう。裾径8.3cmを測る。外面はナデ調整、内面にはハケ目調整が残る。5は鉢で、口径10.2cmを測る。内外面ともナデ調整で、赤彩が施される。口縁部を中心に火を受けた痕跡が残る。6は小形の壺である。外面はミガキが施され、赤彩となる。胴部最大径付近に二次焼成による煤が帯状に観察される。古墳時代前期の所産である。

#### SI115 (第92図, 図版43・56)

6G25グリッド付近に所在する。平面形は5.13m×4.86mの方形で、床面積は20.20㎡を測る。床面はハードローム中に形成され、確認面からの深さは0.59m～0.67mと比較的深い。主軸方位はN-20°-Wである。柱穴等は検出されなかったが、南壁際の床面には、切り合う2基のピットが掘り込まれている。西側は径0.75m×0.58mの略円形で深さ0.24m、東側は径0.77m×0.58m、深さ0.28mであり、西側が最初の出入口ピットとみられ、ハードローム・ブロックを含む黄褐色土で埋められたのち、東側を掘り直して使用したものである。東側のピットの底部からは、焼土ブロックがまとまって検出された。炉は床面中央に位置し、径0.64m×0.54mの略円形で、床面より5cmほど掘り込まれる。底面はよく焼け、硬化が認められる。床面壁沿いに赤色ブロックが検出された。なかでも、南東隅に近い壁際の床面には1.74m×0.52mの範囲で、南壁際の中央から西壁際付近の床面には3.40m×0.38mの範囲で焼土ブロックの堆積が認められる。床面からやや浮いた状態であり、本住居廃絶後に投棄された可能性が高い。

覆土は自然堆積の様相を呈し、黒褐色土及び黒色土を主体としているが、床面に近い部分はハードローム及びソフトロームの混じった暗褐色土が検出される。



第91图 SI113·114



遺物 遺物の出土は多くないが、2・3のミニチュア土器が北壁下からまとまって検出された。1は堿で、粗いハケ目調整が観察される。2・3はミニチュア土器で、2の内面は丁寧にナデ調整される。4は土玉で、径2.7cm、口径0.3cm、重さ20.52gを測る。全体的に丁寧なつくりである。古墳時代前期に属すると思われる。

#### SI116 (第92図, 図版43)

5G19グリッド付近に所在する。平面形は3.48m×2.82mの長方形を呈し、床面積は8.98㎡を測る。確認面からの深さは0.10m～0.19mと浅い。主軸方位はN-1°-Wである。柱穴等は検出されなかった。炉は床面中央よりやや北西側に寄った位置に設けられる。径0.36m×0.46mの楕円形を呈するが、掘り込みはほとんどみられず、使い込まれた様相もなかった。

覆土はソフトロームの混じった暗褐色土である。

遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。

#### SI117 (第92図, 図版44)

6G00グリッド付近に所在する。平面形は5.93m×5.77mのほぼ正方形を呈し、床面積は30.89㎡を測る。床面はソフトロームとハードロームの境界付近に形成され、確認面からの深さは0.25m～0.32mを測る。主軸方位はN-27°-Wである。床面の対角線上に柱穴が4基配置される。深さは0.47m～0.57mである。東側の2基には重複する掘り形を有することから、建て替えられた可能性が想定される。炉は2か所設けられている。主軸上の炉は長軸1.70m、短軸0.79mの長楕円形を呈し、床面より0.16mほど掘り込まれる。底面は良く焼け、硬化している。掘り込みの北側では、炉を分断するように短冊形に割った大形の甕の胴部片を、炉の底面をやや掘り込んで縦に差し込んでいる。上部は、ロームの混じった土で固定されていた。東側の炉は、長軸0.91m、短軸0.37mの長楕円形を呈し、床面より5cmほど掘り込まれる。底面は赤く硬化している。南東壁際近くの床面にあるピットは、0.32m×0.32mで深さ0.02mで底面は著しく硬化している。小規模ながらその位置から出入り口に伴うピットと思われる。床面はほぼ全体が硬化している。

覆土は自然堆積の様相を呈し、黒色土の上層とソフトロームの混じった暗褐色土の下層からなる。

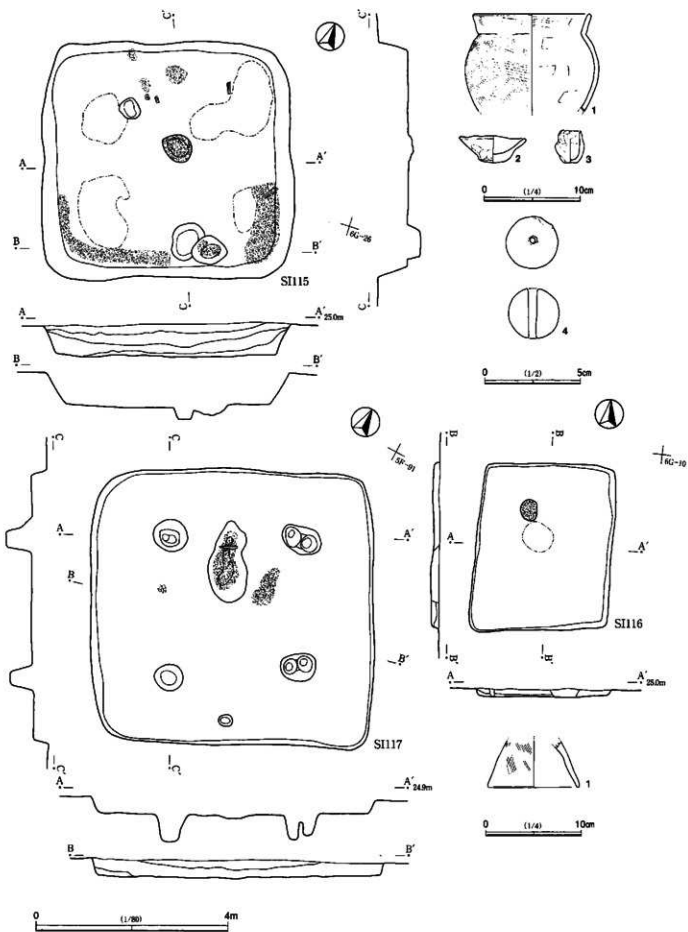
遺物 出土遺物は少ない。炉体土器は胴部片のため図示できなかったが、古墳時代前期の所産である。1は台付甕の台部である。外面に粗いハケ目調整がみられる。胎土は砂質を帯び、外面下部に被熱の痕跡が観察される。

#### SI118 (第93図, 図版44)

6G07グリッド付近に所在する。平面形は3.33m×3.32mの正方形を呈し、床面積は9.49㎡と小規模である。確認面からの深さは0.14m～0.29m、主軸方位はN-19°-Eである。柱穴等は確認されなかった。炉は北側に位置し、長軸0.33m、短軸0.17mと小さい。楕円プランを呈し、掘り込みはほとんどない。底面は赤く硬化している。床面はソフトローム中に形成され、炉の南側及び北側壁際の中央の床面に部分的な硬化が認められた。また、西側壁沿いの床面上から、3か所の焼土ブロックを検出した。

覆土はソフトロームを含む黒褐色土・暗褐色土を主体としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物 土器片が床面中央付近から多数出土している。5の甕が覆土中からまとまって出土しており、住



第92图 SI115~117

居廃絶後に廃棄したものかもしれない。ほかは床面からの出土である。1は器台片である。内外面とも赤彩が施される。2は壺の底部である。3は甕の口縁部である。外面に粗いハケ目調整がみられるが、二次焼成による被熱痕が観察される。4は壺の口縁部で、口径14.0cmを測る。内外面とも粗いヘラミガキが施されるが、外面は一部ループ状のヘラミガキとなる部分がある。5は大形の壺で、口頸部を欠く。最大径40.8cmを測る。肩部に羽状縄文と結節文が施される。文様帯下部から胴部中途にかけて赤彩がみられる。全体に二次焼成による被熱痕が観察される。5は弥生時代後期の所産であるが、混入品と思われ、本住居の時期は古墳時代初頭と推定される。

#### SI119 (第93図, 図版44)

5G77グリッド付近に所在する。西側の一部をSM006の周溝によって切られる。平面形は4.60m×4.26mのやや不整な方形を呈する。床面積は16.48㎡を測る。確認面からの深さは0.22m～0.33m、主軸方位はN-32°-Eである。床面はほぼ平坦で、炉を中心とする部分で著しい硬化が認められる。柱穴等は検出されなかった。炉は床面は中央に位置する。径0.35m×0.41mの略円形を呈し、掘り込みはほとんどない。

覆土は自然堆積の様相を示し、黒色土及び黒褐色土が主体となる。

遺物 出土土器は小片が多く、図示できたのは器台1点のみである。1は器台の台部片である。円形透かし孔は比較的大きく、全体で4単位穿たれていたようである。台上部には、刻みを施した突帯が巡る。古墳時代初頭の時期と思われる。

#### SI120 (第94図, 図版45)

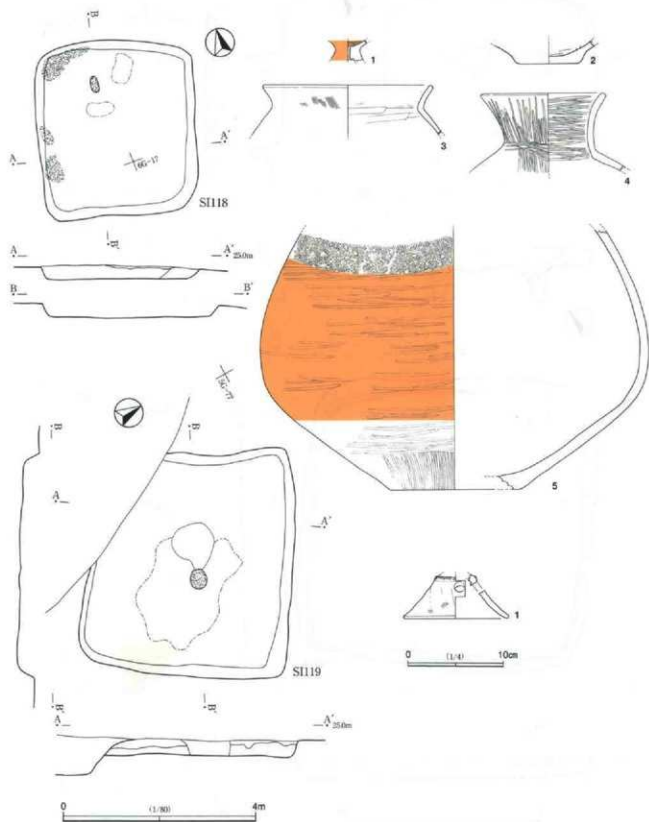
5G65グリッド付近に所在する。南側約3分の1をSM006の周溝に切られるが、本来5.1m×4.4m程度の隅丸長方形であったと考えられる。床面積は現存部分で11.97㎡を測る。主軸方位はN-28°-Wである。確認面からの深さは0.34m～0.40mで、床面はソフトロームとハードロームの境界に形成される。北側の炉周辺及び北東側の主柱穴周辺に硬化面が認められた。柱穴は対角線上に4基配置される。うち1基はSM006の周溝内で底部が確認された。床面からの深さは0.66m～0.85mで、掘り方の上部が広がっており、廃絶後に柱が抜き取られた可能性がある。炉は2か所で確認されたが、南側はSM006の周溝により半分ほど削平されている。主体となる炉は主軸上北側に位置する。径0.61m×0.57mの円形を呈し、深さ0.08mのわずかな掘り込みをもつ。炉の南側に粘土が貼り付けられている。

覆土は自然堆積の様相を呈する。

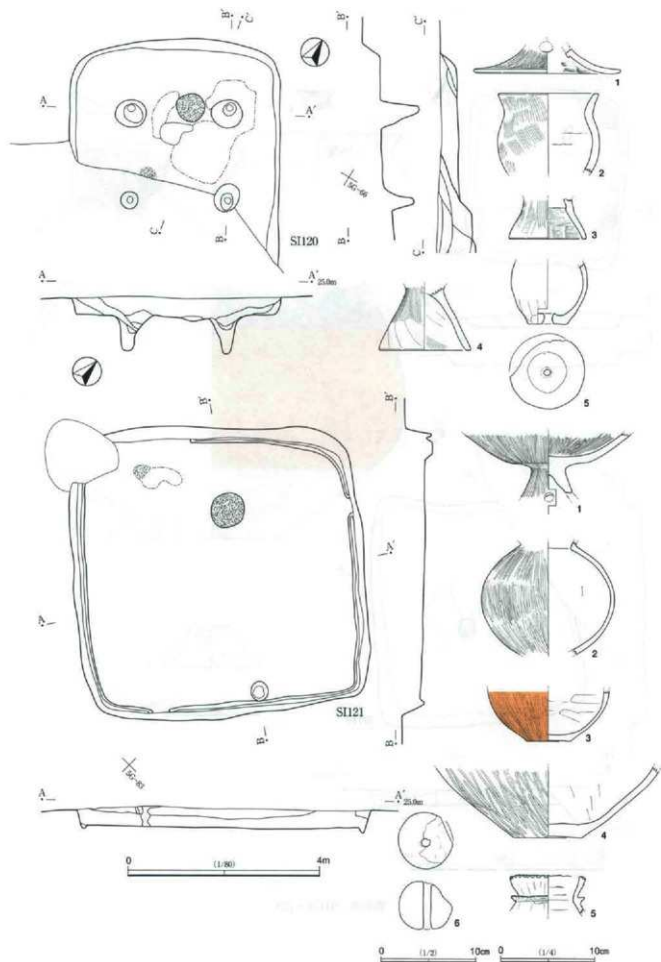
遺物 出土遺物は比較的多いが、破片資料が主体で集中する傾向にはない。1は高杯の脚部片で、裾径15.6cmを測る。裾が大きく開くタイプであろう。内面横ナデ、外面ミガキが施される。2は小形甕で、外面には幅広いハケ目調整がみられる。内面は粗く磨かれる。胎土中に砂粒を多く含む。3・4は台付甕の台部片である。いずれも砂粒を多く含む、二次焼成による被熱痕が観察される。5は小形の壺かミニチュア土器である。底部中央に焼成前の穿孔がみられる。古墳時代前期の所産である。

#### SI121 (第94図, 図版45)

5G72グリッド付近に所在する。平面形は6.1m×5.9mの隅丸方形を呈し、床面積は約29.2㎡を測る。確認面からの深さは0.44m～0.35mで、主軸方位はN-48°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、全体に良く踏み固



第93圖 SI118・119



第94图 SI120·121

められている。柱穴は検出されていないが、主軸上の炉と相対する壁際にあるピットは、径0.42m×0.37m、深さ0.21mであり、その位置から出入口ピットと考えられる。壁溝は、幅20cm前後、深さ5cmほどでほぼ全周する。炉は主軸上の北西側にあり、径0.72m×0.70mの円形を呈し、床面より3cmほどわずかに掘り込まれる。底面の硬化は見られないが、良く焼けている。

覆土は、黒褐色土を主体とするものの、ハードローム粒及び焼土粒が混入しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

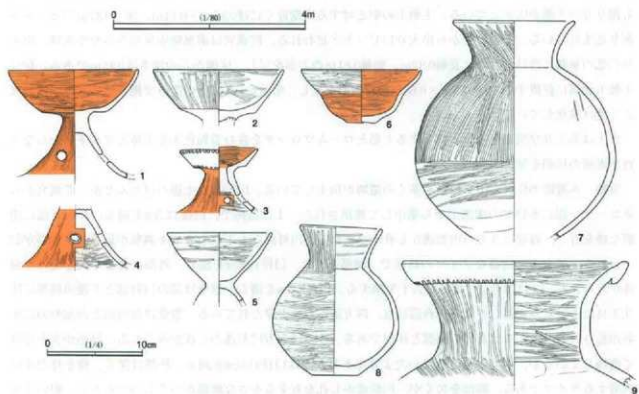
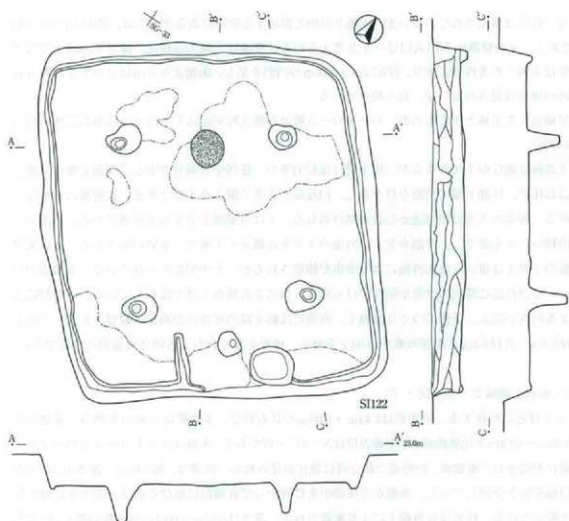
遺物 出土遺物は破片が主体となるが、出土量は比較的多い。住居中央部分を中心に床面全体に分布している。1は高杯で、杯部下端に明瞭な稜を有し、口縁部が大きく開くタイプである。放射状に丁寧なミガキが施される。脚部の3方に円形透かし孔が開けられる。2は球形胴を呈する小形壺である。外面のミガキは比較的粗い。3も壺で、上半部を欠く。外面のミガキは細かく丁寧で、赤彩が施される。4は大型の壺で、外面のミガキは粗い。底部外面には木炭痕が観察されるが、ナデが加えられている。5は壺の口縁部であろう。くびれ部に罎状の突起が貼り付けられる。指による積み上げで成形している。口唇部には棒状工具による刻みが巡る。全体につくりは粗く、内面には粘土紐の接合痕が明瞭に観察される。6は土玉で、最大径2.9cm、孔径0.4cm、現存の重さ19.93gを測る。砂粒を多く含む。古墳時代前期の所産である。

#### SI122 (第95・96図、図版45・46・56・57)

5G33グリッド付近に所在する。平面形は7.44m×6.90mの長方形で、床面積は40.86㎡を測る。確認面からの深さは0.50m～0.68mと比較的深い。主軸方位はN-41°-Wである。床面はソフトロームとハードロームの境界付近に形成され、南壁側、炉周辺で部分的に硬化が見られる。壁溝は、幅0.16m×深さ0.07mで南壁の出入り口部を除き全周している。南壁から床面中央に向かって直線的に延びる溝は、出入り口部を区画するものと推定される。柱穴は対角線上に4基配置される。深さは0.67m～0.81mと比較的深く、いずれも掘り方の上部が広がっている。主軸上の炉と対する南壁近くに径0.50m×0.44m、深さ0.37mのピットが掘り込まれている。その位置から出入口ピットと思われる。貯蔵穴は南東壁中央部からやや東側、出入り口部の東側に設けられる。長軸0.92m、短軸0.81mの方形を呈し、床面からの深さは0.25mである。炉は主軸上北側に位置する。径0.80m×0.68mの楕円形を呈し、床面から0.05mの深さで掘り込まれる。底面はよく焼け硬化している。

覆土は黒土及び黒褐色土を主体とする上層とロームブロックを含む黄褐色土を主体とする下層からなり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 本遺跡の住居の中では最も多くの遺物が出土している。図示した土器のほとんどが、貯蔵穴から東コーナー部にかけての床面上から集中して検出された。1は高杯で、口径13.7cmを測る。杯部下端に明瞭な稜を有し、脚部に3方の円形透かし孔が穿たれる。内外面とも丁寧なミガキ調整が施され、赤彩が加えられる。2も1と同様なタイプの高杯で、脚部を欠く。口径13.8cmを測る。外面に著しく火を受けた痕跡がみられる。3は器台で、裾部を若干欠損する。口径8.2cmを測る。器受け部の口唇部と下端の稜部に棒状工具による刻みが巡らされる。台部には、四方透かし孔が穿たれている。器受け部内面と台部外面に赤彩が施される。4・5は高杯の脚部と杯部である。4には四方円形透かし孔がみられる。外面が火を受けて磨滅しているが、赤彩が施されていたようである。5は口径11.0cmを測る。杯部は深く、稜を持たずに内湾するタイプである。脚部を欠くが、円形透かし孔を有する小さな脚部がつくものであろう。粗いミガ



第95图 SI122 (1)

キが施される。6は口縁部が大きく開く碗である。全体に丁寧なミガキが施される。口縁部外面以外に赤彩がみられる。7～11は壺である。7は口径12.8cmを測る。口縁部から胴部上半のミガキは丁寧である。8はほぼ完形で、口径8.8cm、底径5.2cm、器高15.7cmを測る。口縁部は直線的に外傾し、最大径を胴部下半に有する瓢形を呈する。丁寧にヘラミガキが施され、焼成良好である。9は口径24.0cmを測る大形の壺の口縁部である。複合口縁の下端部に棒状工具による刻みが巡る。内外面とも粗いヘラミガキが施される。胎土中に砂粒を多く含むが、焼成は良好である。10は口縁部を欠く。胴部中央に最大径を有する。外面全体に赤彩が施されているが、二次焼成に器面の荒れが目立つ。胎土中に砂粒を多く含む。底部外面周縁には、使用による磨減が顕著である。12は胴部に最大径をもつ小形甕である。底部には焼成後に周囲を丁寧に研磨した孔が穿たれている。10同様二次焼成による器面の荒れがみられる。13・14は台付甕の台部である。13は粗いハケ目、14はヘラケズリにより調整される。15は手捏ね土器である。小砂粒を多く含む。出土土器は、古墳時代初頭の様相を呈する。

#### SI123 (第96図, 図版46・57)

5G25グリッド付近に所在する。平面形は5.3m×4.9mの方形で、床面積は約18.9㎡を測る。確認面からの深さは0.60m～0.77mと比較的深い。主軸方位はN-45°-Wである。床面は、ハードルームとソフトルームの境界付近に形成される。ほぼ平坦で炉の周辺が良好に踏み固められている。壁溝は、南コーナー部分を除き、幅0.2m、深さ0.02m～0.03mほどで全周する。柱穴は、4基が対角線上に整然と配置されている。床面からの深さ0.76m～0.43mを測る。炉は、主軸上北側に位置し、径0.65m×0.48mの楕円形を呈する。掘り込みはほとんどない。底面は、被熱による赤色化と硬化がみられる。

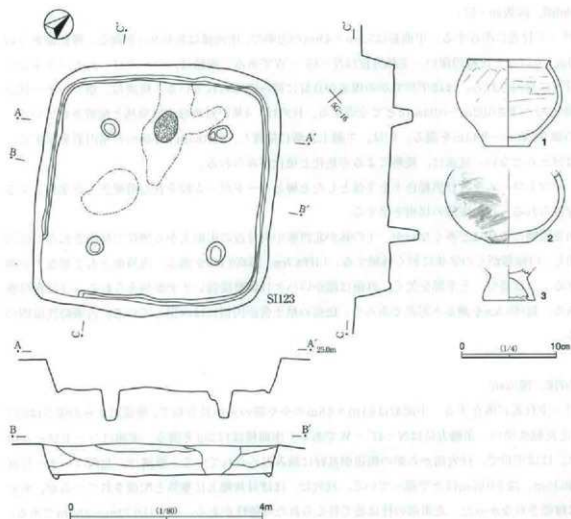
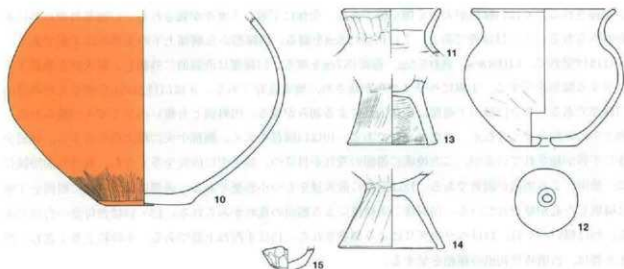
覆土は、ソフトルームを含む黒褐色土を主体とした上層とハードルーム粒を含む暗褐色土を主体とする下層とに分けられる。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土遺物はそれほど多くないが、1の鉢が北西壁中央付近の床面上から倒位で検出された。底部がやや突出し、口縁部がくの字状に短く外屈する。口径8.7cm、器高9.1cmを測る。内外面とも丁寧にナデ調整が施される。2は壺で、上半部を欠く。外面は細かいハケ目調整後弱いナデが加えられる。3は台付甕の台部である。裾径5.6cmを測る小形品であろう。底面の粘土帯が内側にはみ出している。古墳時代前期の所産である。

#### SI124 (第97図, 図版46)

5G06グリッド付近に所在する。平面形は5.1m×4.6mのやや隅の丸い長方形で、確認面からの深さは0.77m～0.66mと比較的深い。主軸方位はN-47°-Wである。床面積は17.2㎡を測る。床面はハードルーム中に形成され、ほぼ平坦で、柱穴間から炉の周辺が良好に踏み固められている。壁溝は、北西コーナー付近を除き、幅0.15m、深さ0.05mほどで巡っている。柱穴は、ほぼ対角線上に整然と配置されているが、南東側の柱穴は確認されなかった。北東部の柱は建て替えられた可能性がある。深さは0.72m～0.60mである。主軸上南側に位置するピットは、径0.42m×0.33m、深さ0.20mであり、その位置から出入口に伴う可能性がある。貯蔵穴は南東壁中央部からやや北側にあり、径0.53m×0.50mの方形で深さは0.20mである。炉は主軸上北側に位置し、長軸0.96m、短軸0.67mの不整楕円形を呈し、床面からの掘り込みはわずかである。底面には被熱による赤色化と硬化がみられる。また炉の南側に径0.37m×0.24mの範囲で同じく被熱により





第96图 SI122 (2) · 123

赤色硬化している部分がある。

覆土全体にローム粒を多く含むことから、本住居は廃絶後人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物 図示した土器は、ほとんどが貯蔵穴周辺から集中して検出された。1は小形の台付甕と思われるが、内外面とも丁寧にミガキが施されている。赤褐色を早する。2・3は甕の口縁部である。3は口径24.0cmを測る大形品で、折り返し口縁の下部部に、縄文原体の押捺が巡る。4は大形壺の底部片である。底部外面に木葉痕が観察される。5は壺の口縁部片である。口縁部外面には、細かい網目状捺糸文が地文として施され、3本1単位の棒状浮文が貼り付けられる。下部部には棒状工具による刻み加えられる。頸部に赤彩がみられる。弥生時代末から古墳時代初頭の所産と考えられる。

#### SI125 (第97図, 図版47・57)

4G88グリッド付近に所在する。平面形は4.32m×3.64mの隅丸長方形で、確認面からの深さは0.67m～0.80mと比較的深い。主軸方位はN-48°-Wである。床面はハードローム中に形成され、ほぼ平坦で、中央部分が良好に踏み固められている。壁溝は北東壁部分に幅15cm、深さ5cmほどで遺存する。南東壁に接して掘り込まれているピットは、径0.51m×0.38mの略円形を呈し、深さ0.13mを測る。その位置から出入口施設に伴う可能性がある。炉は主軸上北側に位置する。長軸0.87m、短軸0.57mの楕円形を呈し、床面からの掘り込みはわずかである。底面はよく焼け、硬化している。炉の内部を区画するように、3の壺の胴部片を再利用して立てている。いわゆる炉体土器となる。床面には、炉の西側を中心に炭化材が多く遺存している。焼土の分布がほとんどないことから、本住居は焼失したものではなく、廃絶後炭化材のみを廃棄したものである。

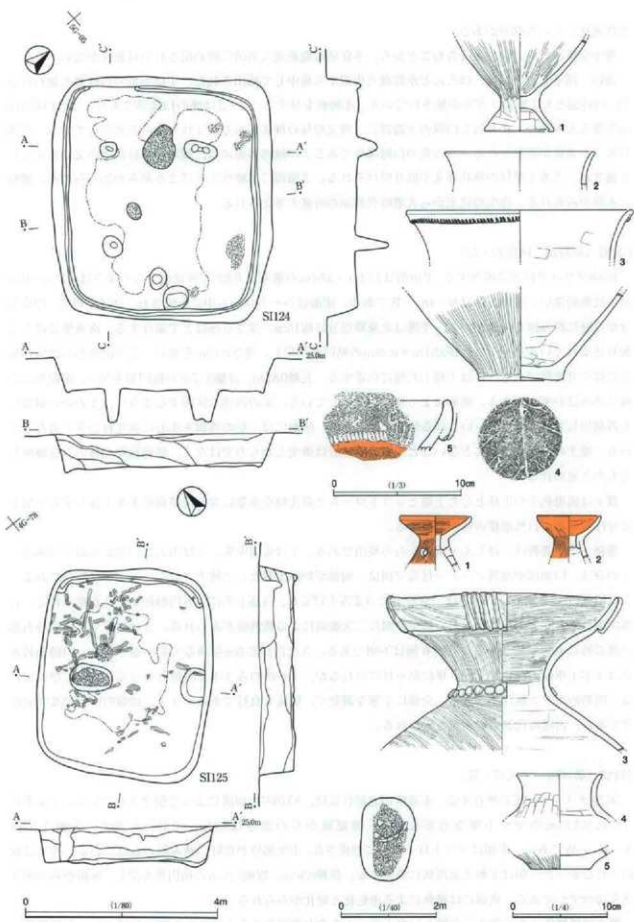
覆土は黒褐色土を主体とした上層とソフトロームと炭化物を多量に含んだ暗褐色土を主体とする下層に分けられる。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土遺物は、ほとんど床面からの検出である。1は床面中央、2は出入り口部から出土である。3の壺は、口頸部が南西コーナー付近で倒伏、胴部が炉体土器として検出された。1・2は器台である。1は口径7.6cmを測る。口唇部は三角形上につまみ上げられ、台部上半に三方円形透かし孔が穿たれる。台部内面以外に赤彩が施されるが、器受け部に二次焼成による被熱痕がみられる。2は破片で、1同様台部内面以外に赤彩が施される。孔の有無は不明である。3は口径25.0cmを測る大形の壺である。口縁部外面には4本1単位の棒状浮文が5単位貼り付けられるが、1か所のみ3本1単位となっている。くびれ部には、円形のボタン状浮文が巡る。全体に丁寧に調整で、焼成も良好である。4・5は壺の口縁部及び底部片である。古墳時代初頭の所産と思われる。

#### SI126 (第98図, 図版47・57)

5G29グリッド付近に所在する。本遺構の北壁付近は、SM007の周溝によって削平されている。平面形は3.67m×3.35mのやや不整形な方形を呈し、確認面からの深さは0.34m～0.46mを測る。主軸方位はN-48°-Wである。床面はソフトローム中に形成され、中央部分が良好に踏み固められている。柱穴は検出されなかった。炉は主軸上北西側に位置する。長軸0.50m、短軸0.26mの楕円形を呈し、床面からの掘り込みはわずかである。底面には被熱による赤色化と硬化がみられる。

覆土は黒褐色土を主体とした層とソフトロームを含む黄褐色土を主体とした層に分けられ、自然堆積の



第97图 SI124·125

様相を呈する。

遺物 出土遺物は少ないが、2の器台は炉の東側からの出土である。1は高杯の裾部であろう。推定裾径15.5cmと大形となる。端部はヘラナデで段を形成している。内外面ともミガキが施されるが、外面は不鮮明である。2は器台で、口径7.6cmを測る。内外面とも赤彩がみられる。古墳時代前期の所産であろう。

#### SI127 (第98図, 図版47)

5H11グリッド付近に所在する。東壁と南西コーナー部が攪乱により削平される。平面形は4.6m×3.8mのやや隅の丸い長方形を呈し、確認面からの深さは0.29m～0.02mと浅い。主軸方位はN-25°-Eである。床面積は14.7㎡を測る。床面はソフトローム中に形成され、中央部分に硬化面が認められる。炉は主軸上北側に位置する。長軸0.67m、短軸0.49mの楕円形を呈し、床面からの掘り込みはわずかである。底面は被熱による赤色化と硬化がみられる。中央部に径0.34m×0.25mのわずかな掘り込みがあり、被熱による赤色化と硬化がみられることから、炉となる可能性もある。南東コーナー付近に0.42m×0.36m、深さ0.1mほどのピットが掘り込まれている。

覆土はソフトロームを含む暗褐色土を主体とした層であり、人為的に埋め戻した可能性がある。

遺物 出土遺物は小破片が多く、図示できたのは器台2点のみである。1・2とも器台片で、三方に円透かし孔が穿たれる。外面に赤彩が施される。古墳時代前期の所産である。

#### SI128 (第98図, 図版48)

4H90グリッド付近に所在する。SM007の周溝に本遺構の南側を切られている。平面形は不整な台形状を呈し、残存部は2.76m×2.08mを測る。確認面からの深さは0.18m～0.26mと浅く、主軸方位はN-46°-Wである。床面はほぼ平坦で、中央部が部分的に硬化している。柱穴は検出されなかった。炉はわずかな掘り込みをもち、径0.47m×0.37mの略円形を呈する。底面には被熱による赤色化がみられる。

覆土は、遺構の残存部では赤色焼土粒及びハードローム粒を含む黒褐色土を主体とした層であり、人為的に埋め戻した可能性がある。

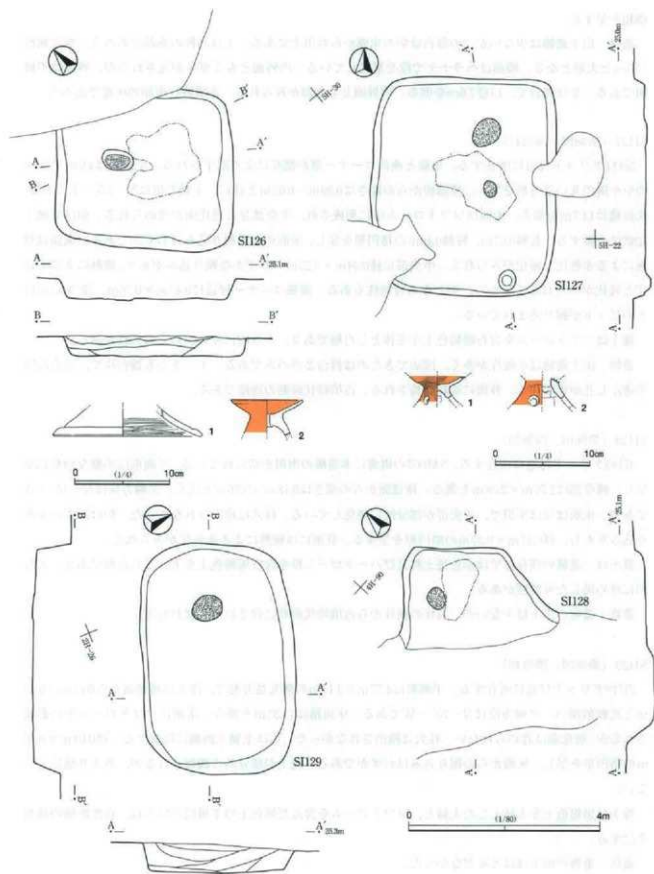
遺物 遺物の出土は少ないが、高杯の破片から古墳時代前期に含まれると思われる。

#### SI129 (第98図, 図版48)

2H16グリッド付近に所在する。平面形は4.77m×3.17mの隅丸長方形で、深さは確認面から0.71m～0.45mと比較的深い。主軸方位はN-70°-Wである。床面積は11.35㎡を測る。床面はソフトローム中に形成されるが、硬化面は認められない。柱穴は検出されなかった。炉は主軸上西側に位置する。径0.64m×0.40mの略円形を呈し、床面からの掘り込みはわずかである。焼土が部分的に観察されるが、あまり焼けていない。

覆土は黒褐色土を主体とした上層と、ソフトロームを含んだ黒色土の下層に分けられ、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土はほとんどなかった。



第98图 SI126~129

SI130 (第99図, 図版48)

2H38グリッド付近に所在する。平面形は4.77m×3.17mの南東方向にやや突出する不整な円形で、確認面からの深さは0.51m～0.24mを測る。主軸方位はN-61°-Wである。床面積は7.3㎡と小規模である。床面はソフトローム中に形成され、やや起伏がある。柱穴等は検出されなかった。中央部からやや西寄りの床面に被熱によって硬化している部分があり、炉となる可能性もある。壁の傾斜は緩やかである。

覆土は暗褐色土を主体とした上層と黒色土・黒褐色土を主体とする下層に分けられ、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土はほとんどなかった。

SI131 (第99図, 図版49・57)

2H46グリッド付近に所在する。平面形は4.14m×3.97mの不整な方形を呈し、確認面からの深さは0.45m～0.25mを測る。主軸方位はN-25°-Wである。床面積は10.7㎡を測る。床面はソフトローム中に形成されるが、硬化面は認められなかった。柱穴も検出されなかった。炉は床面中央に位置する。径0.53m×0.53mの範囲で赤色化しているのみで、底面の硬化はなく、掘り込みもほとんどない。あまり使用されていないようである。

覆土は黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土遺物は多くないが、壺が破片状態で覆土中より一括検出された。住居廃絶後の投棄と思われる。1は壺で、口径14.9cmを測る。口縁部が小さく、胴部中位かやや下位に最大径を有するタイプである。全体に丁寧なミガキが施される。古墳時代前期の所産である。

SI132 (第99図, 図版49)

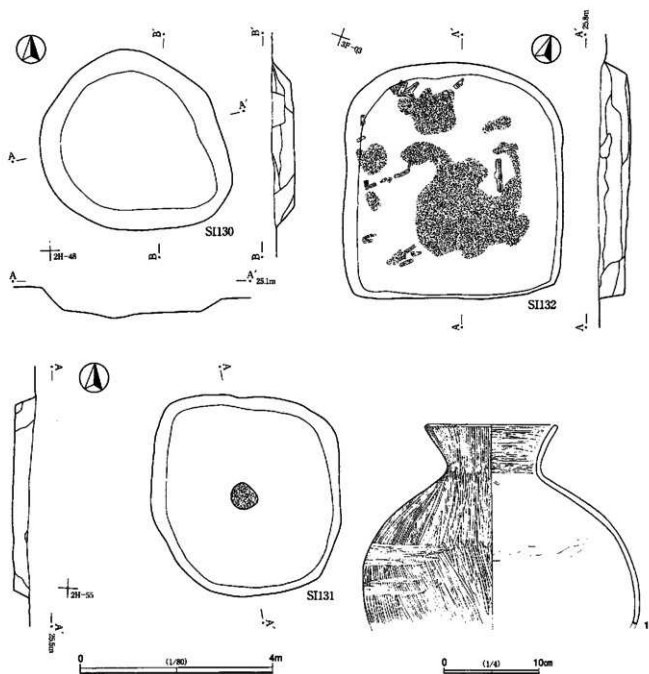
3F03グリッド付近に所在する。平面形は4.95m×4.68mの不整な方形を呈する。確認面からの深さは0.52m～0.23mを測り、主軸方位はN-26°-Wである。床面積は18.0㎡を測る。床面はソフトローム中に形成され、ほぼ平坦であるが硬化面は認められない。炉や柱穴は検出されなかった。床面上には大量の焼土ブロックと炭化材が出土するが、床面には焼けた痕跡が認められないことから、これらの焼土等は、本住居廃絶後に他から廃棄されたものと思われる。

覆土は、床面に近い焼土ブロックと炭化材の層と黒色土・黒褐色土を主体とする上層とに分かれ、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土はほとんどなかった。

SI133 (第100図, 図版49)

2F86グリッド付近に所在する。平面形は不整な隅丸長方形で、南西壁が北東壁に比べやや長く、規模は6.53m×5.29mを測る。確認面からの深さは0.60m～0.44mで、床面積は24.23㎡を測る。主軸方位はN-50°-Wである。床面はソフトローム中に形成され、全体に平坦であるが、硬化面は出入り口付近にみられるのみである。柱穴は、対角線上に4基配置される。深さは0.58m～0.66mである。いずれも柱穴の掘り方が横長の長楕円形を呈し、底面が長方形状となっている。円柱ではなく、板状の柱を建てていたことも考えられる。主軸上の南東側の小ピットは、深さ0.22mで、底面は硬化していない。その位置から出入



第99図 SI130~132

口施設の可能性がある。炉は1.22m×1.18mの円形を呈し、床面からわずかに掘り込まれる。底面には赤色化がみられる。

覆土は、黒褐色土を主体とした上層及びソフトロームを含んだ黒色土を主体とした下層とに分けることができる。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土遺物は多くないが、1の甕が炉の東側から検出された。口径14.0cmを測る。古墳時代前期の所産であろう。

#### SI134 (第100図, 図版50)

3G72グリッド付近に所在する。平面形は北東側がやや外側に張り出す不整な隅丸長方形で、規模は6.20m×5.40mを測る。確認面からの深さは0.39m～0.55mで、主軸方位はN-39°-Wである。床面積は25.90㎡を測る。床面はソフトロームとハードロームの境界付近に形成され、ほぼ平坦で全体に硬化している。柱穴は、対角線上に4基配置される。床面からの掘り込みは、0.67m～0.86mと全体的に深い。南東壁際のピットは、深さ0.10mで、主軸上からややずれるものの出入口施設となる可能性が想定される。炉は0.46m×0.44mの小規模な略円形を呈し、床面からの掘り込みはわずかである。底面には被熱による赤色化がみられる。

覆土は暗褐色土・黒色土を主体とする層からなる。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土遺物は少ないが、床面中央付近から台付甕が出土している。1・2とも台付甕の台部である。1はヘラケズリ後ナデ、2の外面には粗いミガキが加えられる。古墳時代前期の所産である。

#### SI135 (第101図, 図版50)

4G36グリッド付近に所在する。平面形は3.58m×3.05mで、不整な隅丸長方形形状を呈する。確認面からの深さは0.20m～0.33mで、壁の立ち上がりは緩やかである。床面積は8.86㎡と小規模である。主軸方位はN-42°-Wである。炉・柱穴等は検出されなかった。床面はソフトローム中に形成され、西隅付近が硬化してやや高くなっている。

覆土は黒色土を主体とし、床面近くにはソフトロームの混ざった黒褐色土の層が形成されている。自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土は少ない。1は甕の口縁部であろうか。口径9.5cmと小さい。

#### SI140 (第101図, 図版50)

4H82グリッド付近に所在する。平面形は5.07m×4.95mの方形で、確認面からの深さは0.27m～0.41mを測る。主軸方位はN-64°-Wである。床面積は22.06㎡を測る。床面はソフトローム中に形成され、ほぼ平坦であるが、硬化面は確認されなかった。柱穴・炉等は検出されなかった。床面の中央に深さ0.46mのピットが1基掘り込まれているが、性格不明である。

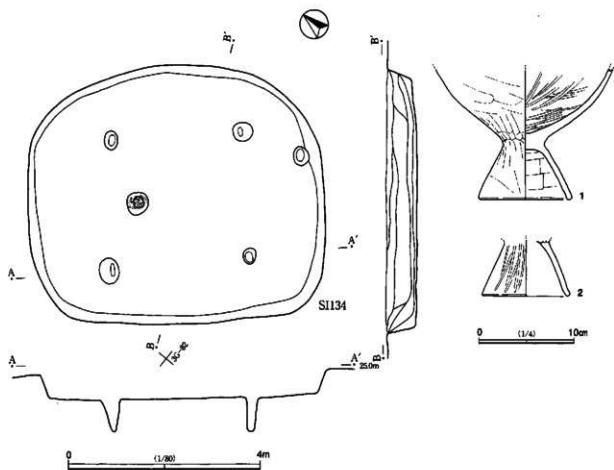
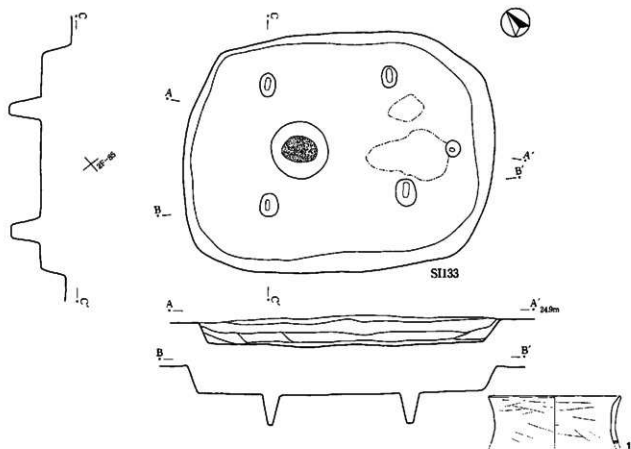
覆土は炭化物粒・焼土粒をわずかに含む黒色土・黒褐色土を主体とし、床面付近にはソフトロームを多く含む暗褐色土がみられる。自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土は少ない。1は高杯の脚部であろうか。外面に赤彩が施される。

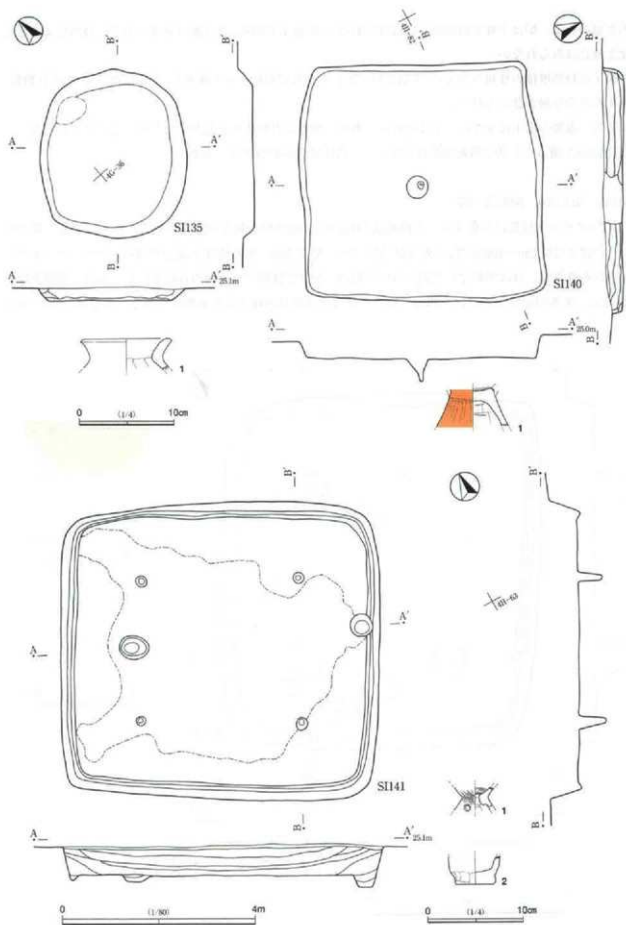
#### SI141 (第101図, 図版51)

4H51グリッド付近に所在する。平面形は6.53m×6.04mのほぼ正方形を呈し、確認面からの深さは0.45m～0.63mを測る。主軸方位はN-65°-Wである。床面積は32.57㎡を測る。床面はハードローム中に形成され、壁際を除き全体に硬化している。壁溝は、幅0.2m、深さ0.1mほどで全周している。柱穴は、ほぼ対角線上に4基配置される。深さは0.51m～0.55mと深いが、径0.2mほどときわめて小さい。柱の抜き取りが行われなかったか、床面レベルで切って再利用した可能性が考えられる。南東壁やや北側に接して径0.60m×0.48m、深さ0.26mの楕円形を呈するピットが掘り込まれている。その位置から出入口施設に伴うも





第100图 SI133 · 134



第101图 SI135·140·141

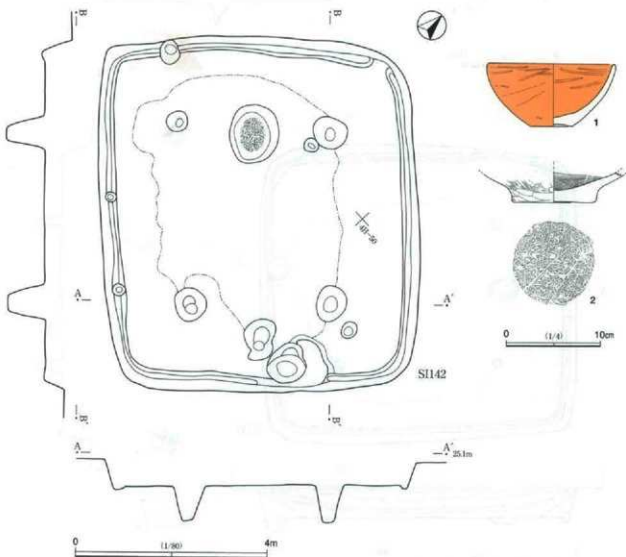
のと思われる。炉は主軸上西側寄りに設けられる。床面より0.16mほど掘り込まれるが、被熱による赤色化と硬化はみられない。

覆土は自然地積の様相を呈する。上層はローム粒を含む暗褐色土を主体とし、下層はローム粒・炭化物粒・焼土粒を含む層が認められた。

遺物 遺物の出土は少ない。1は器台片である。四方に円形透かし孔が穿たれる。2は手捏ね土器で、底径4.3cmを測る。全体に器面の荒れが激しい。古墳時代前期の所産である。

#### SI142 (第102図, 図版51・57)

4G59グリッド付近に所在する。平面形は7.44m×6.68mのやや規模の大きい長方形を呈する。確認面からの深さは0.42m～0.62mで、主軸方位はN-48°-Wである。床面積は38.58㎡を測る。床面はハードローム中に形成され、ほぼ平坦で柱穴間から炉の周辺にかけて良好に踏み固められている。壁溝は北隅を除き幅0.2m、深さ0.1mほどではほぼ全周している。柱穴はほぼ対角線上に4基配置される。深さは0.68m～0.81



第102図 SI142

mと比較的深く、いずれも掘り方の上部が広がっている。主軸上南側に位置するピットは、径0.82m×0.45mの瓠形を呈し、深さ0.48mを測る。その位置から、出入り施設に伴うものと考えられる。、壁溝内の小ピットや柱穴に付属するピットは、それぞれ壁柱穴及び補助柱穴となろう。炉は径1.26m×1.04mの楕円形を呈し、床面より0.1mほど掘り込まれる。底面には被熱による赤色化と硬化がみられる。

覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物 土器片は比較的多く出土しているが、小片が多いため図示できた遺物は少ない。南東壁際を中心に壁沿いに集中する傾向がみられる。1は鉢で、口径13.0cmを測る。内面は丁寧なミガキ、外面はヘラケズリ後粗いミガキが施される。底部外面には木葉痕がみられるが、ケズリにより部分的に残るのみである。内外面とも赤彩が加えられる。2は壺の底部であろう。底径8.8cmを測る。底部は突出し、内外面ともハゲ目調整が施される。底部には木葉痕が明瞭に観察される。古墳時代前期の所産と思われる。

## 2 方墳

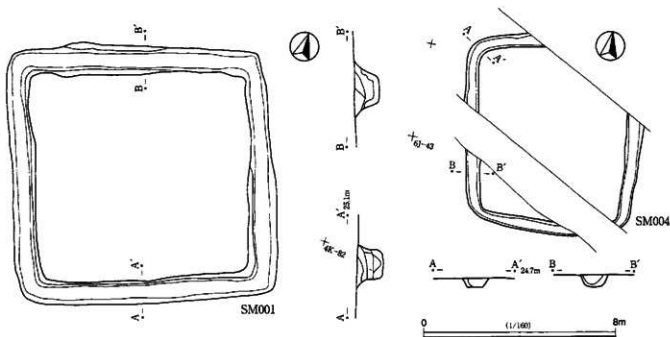
### SM001 (第103図, 図版51)

4K80グリッド付近に所在する。規模は、長軸10.9m、短軸10.7mのほぼ正方形を呈する。周溝の幅は0.8m~1.2mを測り、確認面からの深さは0.4m~0.6mとほぼ一定である。覆土は、暗褐色土及び黒褐色土が主体となり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 遺物の出土はほとんどなかった。

### SM002 (第104図, 図版52・57)

5J11グリッド付近に所在する。SM003と南側コーナー部分で重複するが、周溝間の切り合い関係から本方墳がSM003を切って構築されている。周溝は、内側のプランがほぼ直線的であるのに対し、外側はやや



第103図 SM001・004

弧状を呈するため、四隅が狭くなる傾向にある。底面も、四隅が若干高くなるのも特徴である。これらの特徴は古墳時代前期方墳によくみられるものである。周溝の規模は、外側で長軸13.2m、短軸12.7mを測り、各辺の中央部付近の底面レベルはほぼ同様で、幅2.0m前後、確認面からの深さは0.5m～0.6mを測る。覆土は、黒褐色土の上層とローム粒を含む下層に分けられ、自然堆積の様相を呈する。

遺物 図示した土器は、北西周溝部から3点、北東周溝部から1点出土しているが、ほとんど覆土中層から検出されている。1は完形の高杯で、口径19.4cm、裾径9.2cm、器高14.2cmを測る。脚部が小さく、杯部が大きく開くタイプである。全体にやや雑なヘラナデが施されるが、ミガキは加えられない。脚部内面以外に赤彩がみられる。2は器台の白部である。裾径9.8cmを測る。外面は、ハケ目調整後粗いナデが加えられ、赤彩も施される。三方に円形透かし孔が穿たれる。3は小形壺で、口径7.4cm、器高9.3cmを測る。底部は突出し、焼成前の穿孔がみられる。口縁部内面から胴部外面にかけて赤彩が施される。4・5は壺である。いずれも胴部中位に最大径を有し、底部が若干突出する。胴部外面には比較的丁寧なミガキが施される。出土土器は、古墳時代前期の所産である。

#### SM003 (第104・105図, 図版52・53・57)

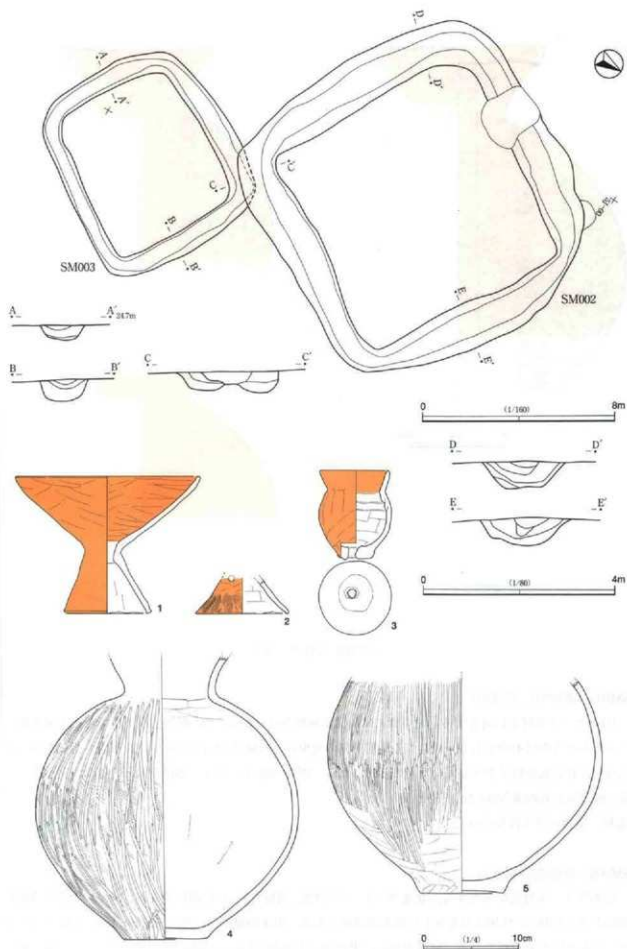
5J42グリッド付近に所在する。SM002に北西コーナー部分を若干切られる。周溝の規模は、外側で長軸8.5m、短軸7.4mを測り、南北方向にやや長い長方形形状を呈する。周溝外側のプランがやや弧状を呈するため、SM002ほど顕著ではないが、四隅が狭くなる傾向にある。周溝の幅は1m前後、確認面からの深さは0.3m前後である。覆土は、暗褐色土上及び黒褐色土主体で、自然堆積の様相を呈する。

遺物 図示した土器は、北東周溝部から2点、南コーナーから1点出土している。いずれも周溝底面より10cmほど浮いた状態である。1～3は壺である。1は底部付近を欠く。口径18.8cmを測る。口縁部は大きく外反し、折り返し口縁となり、下端には、刷毛状工具による刻みが巡る。口唇部には網目状捺糸文が施されるが、ナデにほとんど消されている。胴部は球形を呈し、外面には丁寧なミガキが加えられる。口縁部内面から胴部外面にかけて赤彩がみられる。2は突出する底部を欠く。口径16.2cmを測り、胴部中位よりやや下位に最大径を有する。口縁部内外面とも木口を用いた粗い刷毛状の調整痕が観察されるが、内面はミガキが加えられる。胴部外面は丁寧なミガキが施される。全体に丁寧なつくりで、口縁部内面から胴部中位にかけて赤彩がみられる。3は口唇部と突出する底部を欠く。口縁部の外反度は弱く、直立気味となる。胴部はほぼ中位に最大径を有し、やや扁平気味となる。口縁部から胴部にかけて丁寧なミガキが施されていると思われるが、器面の荒れが顕著で詳細は不明である。口縁部内面から胴部外面にかけて赤彩がみられる。これらの土器は、古墳時代前期の所産である。

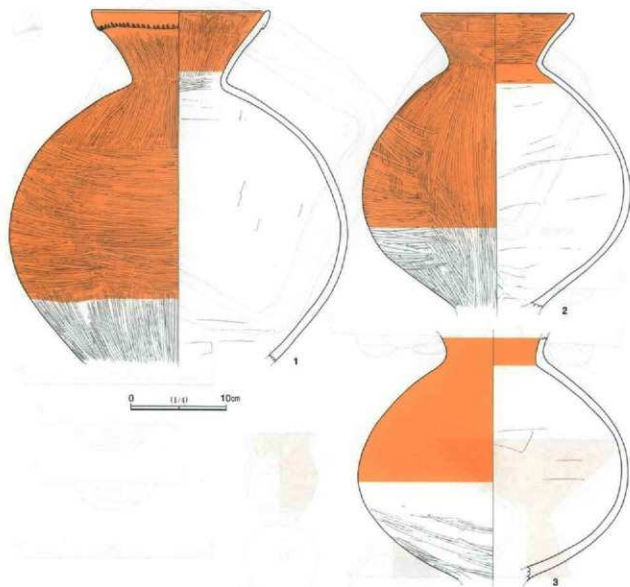
#### SM004 (第103図, 図版53)

6J43グリッド付近に所在する。北東コーナーと南西側を擾乱により削平されている。現存する部分での規模は、周溝外側で長軸8.3m、短軸7.2mを測り、南北方向にやや長い長方形形状を呈する。周溝の幅は、0.6m～0.7mとほぼ一定であるが、南西コーナー部分がやや狭くなる。確認面からの深さは0.2m前後と浅い。

遺物 遺物の出土はなかった。



第104图 SM002·003 (1)



第105図 SM003 (2)

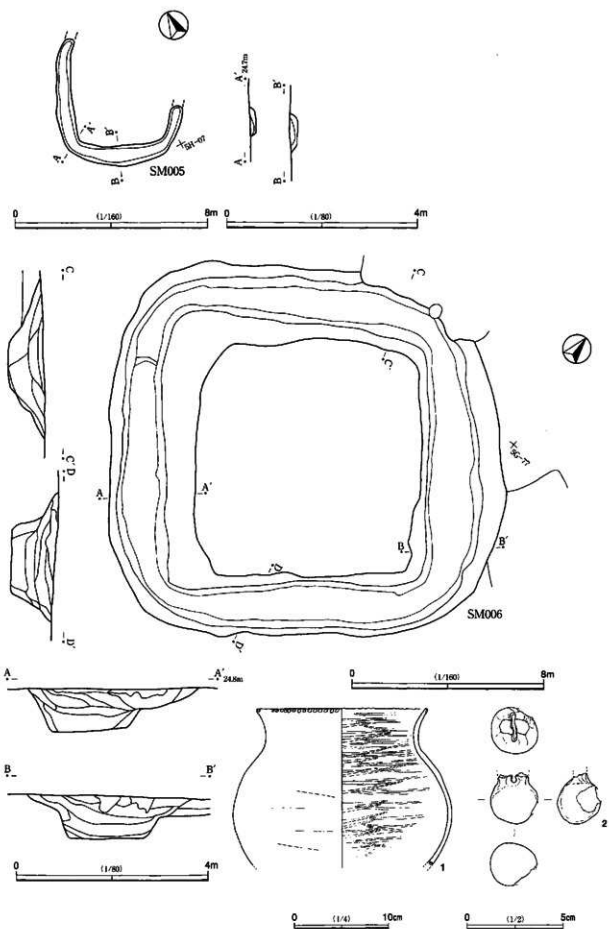
SM005 (第106図, 図版54)

4H96グリッド付近に所在する。北東側には周溝が検出されなかったが、掘り込みが浅いため本来全周していたかどうかは不明である。現存する周溝外側の規模は、短軸で5.2mを測るが、長軸は不明である。南北方向に長い長方形状を呈していたものと思われる。周溝の幅は、0.5m~0.8mを測り、南側がやや広くなる。確認面からの深さは0.2m前後と浅い。

遺物 遺物の出土はなかった。

SM006 (第106図, 図版54)

5G84グリッド付近に所在する。北東コーナーでSI120, 東側でSI119と重複するが、いずれも本方墳が住居跡を切っており、住居よりも新しい時期の所産である。周溝の規模は、外側で長軸8.4m, 短軸7.6mを測り、東西方向がやや長くなる。周溝の幅は、東西辺の中央部で1.8m, 南北辺中央部で1.2m~1.4mと東西



第106图 SM005·006

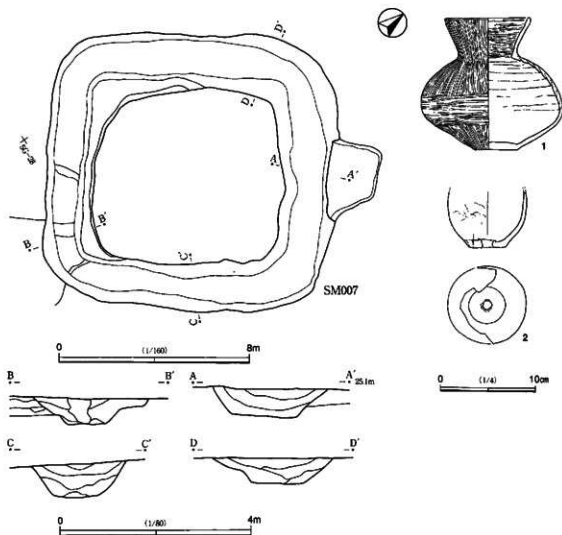


辺が幅となる傾向がある。これは、東西辺の周溝外縁が弧状を呈することからも伺える。底面のレベルはほぼ一定で、確認面からの深さは1.0m前後を測る。覆土は、暗褐色土や黒褐色土を主体とする上層とローム粒を含む下層からなり、自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土遺物は破片が多く、図示できた遺物は少ないが、1の甕が西コーナー付近から、2の鈴形土製品は南コーナー付近からの出土である。1は甕で、口唇部に棒状工具による刻みが巡る。口縁部から胴部内外面には、丁寧なナデが施され、横方向のミガキが加えられるが、外面は二次焼成によるススの付着があり、明瞭ではない。2は鈴形土製品で、紐上半部を欠く。中空とはならない。ほかに図示できなかったが、器台片等もあり、本方墳は古墳時代前期の所産であろう。

SM007 (第107図, 図版54・58)

5G09グリッド付近に所在する。北東辺中央でSI128, 南コーナーでSI126と重複するが、本方墳がこれらの住居跡を切って構築されている。周溝の規模は、外側で長軸6.1m, 短軸5.7mと東西にやや長くなる。周溝の幅は1m前後でほぼ一定である。底面のレベルはほぼ同一で、確認面からの深さは0.3mほどと浅い。



第107図 SM007

覆土は、黒褐色土の上層とローム粒を含む下層とからなり、自然堆積の様相を呈する。

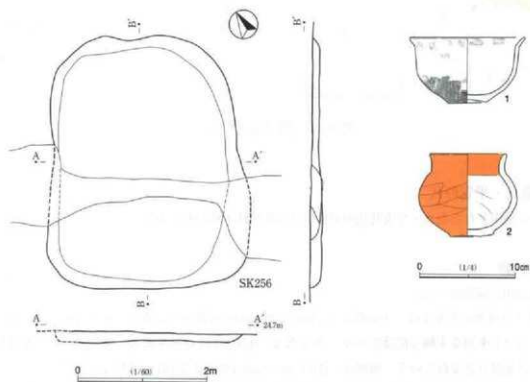
遺物 遺物の出土はそれほど多くないが、1の壺が東側周溝の中央付近、2の小形甕が南コーナー付近から出土している。1は壺で、口径9.0cm、器高13.8cmを測る。胴部下半に最大径を有し、算盤玉状を呈する特徴がある。内面に成形時の輪積み痕が明瞭に残る。口縁部内面から胴部外面にかけて丁寧なミガキが施される。2は小形甕であろうか。全体にナデ調整されるが、雑なつくりである。底部には焼成前の穿孔がみられる。胎土中に砂粒を多く含む。古墳時代前期後葉の所産であろう。

### 3 土坑

#### SK256 (第108図, 図版55・58)

5H91グリッド付近に所在する。遺構の中央で短軸方向に溝が走り、壁・床面とも一部切られている。規模は2.6m×1.9mの長方形で、確認面からの深さは0.1m前後と浅い。床面はソフトローム中に形成され、ほぼ平坦である。長軸方位はN-33°-Eである。覆土は、ソフトローム粒を含む黒色土が主体であり、人為的に埋め戻された可能性が強い。

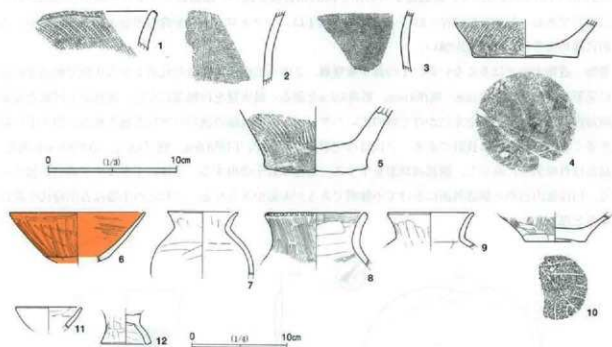
遺物 遺物の出土は多くないが、1の鉢が東壁側、2の小形甕が西壁側の底面上から正位で検出された。1は完形の鉢で、口径12.0cm、底径4.0cm、器高6.9cmを測る。最大径を口縁部に有し、底部が上げ底となる。口縁部内面から胴部外面上半にかけて幅の広いハケ目、下半には幅の狭いハケ目が施される。胎土中に砂粒を多く含むが、焼成は良好である。2はほぼ完形の小形甕で、口径8.0cm、底径4.6cm、器高8.6cmを測る。口縁部は外反気味に直立し、胴部は球形を呈する。底部は若干突出する。全体に丁寧なナデ調整が加えられる。口縁部内面から胴部外面にかけて不鮮明であるが赤彩がみられる。これらの土器は古墳時代中期に属すると思われる。



第108図 SK256

#### 4 遺構外出土遺物 (第109図)

弥生後期の北関東系土器や古墳時代前期の土器が遺構外より出土している。1～5は北関東系の弥生土器である。1は壺の口縁部片で、附加状縄文が施される。口唇部にも縄文原体の押捺がみられる。2・3は壺の頸部であろう。横位の櫛掻き波状文が巡っている。胎土中に石英粒や雲母粒が多く含まれる。4・5は底部で、附加状縄文が施される。4の底部には木葉痕が明瞭に残る。6～12は古墳時代前期の土器である。6は高杯の杯部で、口径14.2cmを測る。杯部下端に稜を有し、口縁部が直線的に開くタイプである。内外面とも丁寧なミガキが施され、赤彩が加えられる。7は小形壺片である。外面はヘラケズリ後ナデ調整される。8・9は壺の口縁部であろう。8は粗いハケ目調整で、口唇部に刷毛状工具による刻みが巡る。10は底部片で、外面にハケ目調整が施され、底部には木葉痕が部分的に観察される。11・12はミニチュア土器である。いずれもつくりが粗く、調整も雑である。



第109図 遺構外出土土器

### 第4節 奈良・平安時代

本遺跡から検出された奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡1軒のみである。

#### 1 竪穴住居跡

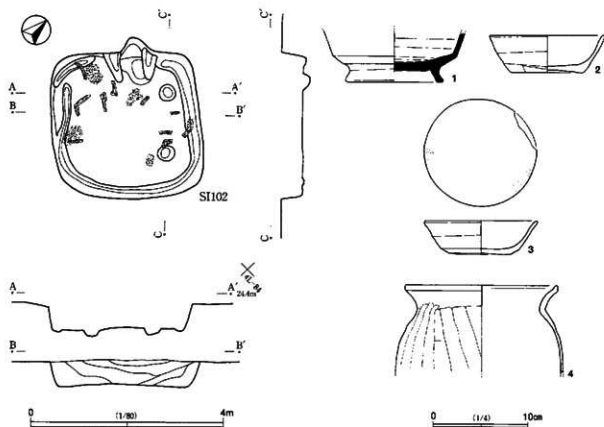
SI102 (第110図, 図版55・56)

4L73グリッド付近に所在する。平面形は、3.51m×3.22mのやや隅の丸い方形を呈し、深さは0.54m～0.43mを測る。カマドを通る主軸方位はN-54°-Wである。床面積は7.61㎡を測る。東側に、柱穴と考えられるビットが2基掘り込まれている。南側は、径0.35m×0.32mで深さは0.91mである。北側のビットは、径0.35m×0.34mを測り、深さは0.15mと浅い。壁溝は幅0.15m、深さ0.05mで全周する。貯藏穴・出入口ピツ

ト等は検出されなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に位置する。燃焼部は、床面より0.1mほど掘り込まれるが、底面にローム土を敷いているようである。煙道部は壁外に0.3mほど三角形に掘り込まれ、燃焼部より急激に立ち上がる。覆土は、ソフトローム粒を含む暗褐色土を主体とし、床面付近には炭化物、ソフトローム及びハードロームブロックの混入土が堆積している。床面全体に、炭化材と焼土ブロックが分布していることから、本住居は焼失したものと思われる。

遺物 遺物の出土はそれほど多くないが、1の須恵器高台付杯が南東側柱穴付近から正位で検出されている。また、2・3の杯がカマド内、4の甕が北東側柱穴付近より出土している。1は須恵器の高台付杯で、高台幅径10.3cmを測る。体部下端に強い屈曲部を有し、全体的にナデ調整される。体部下端に回転ヘラケズリが施される。底部は回転ヘラケズリである。胎土中に雲母や長石粒を多く含んでおり、常陸産と思われる。2・3は土師器の杯である。2は完形品で、口径12.4cm、底径7.4cm、器高3.9cmを測る。全体にやや歪みが認められる。底部は回転糸切りで、体部下端と底部周縁に手持ちヘラケズリが施される。3もほぼ完形に近い。口径11.8cm、底径6.5cm、器高3.5cmを測る。底部は回転糸切りで、体部下端と底部周縁に回転ヘラケズリが加えられる。口縁部の3か所に油煙の付着が認められることから、灯明皿として使用していたことが伺える。4は甕で、口径16.0cmを測る。口唇部が受け口状を呈し、胴部はきわめて薄くヘラケズリされる。口縁部外面には、カマド構築材と思われる粘土の付着が観察される。

これらの土器から、本住居は8世紀後半と考えられる。



第110図 SI102

## 第5節 中・近世

本遺跡から検出された中・近世の遺構は、掘立柱建物・地下式坑・土坑・溝である。

### 1 掘立柱建物跡

#### SB001 (第111図, 図版55)

8G07グリッド付近に所在する。掘り込みが浅いため、検出されなかった柱穴もあるが、3間×3間の建物で、西側に出入り口と思われる施設が伴う。いわゆる妻入りの建物となろう。内部の柱穴は床東と判断される。主軸方位は、 $N-70^{\circ}-W$ で、東西棟に近い。乗行きは全長6.9mで中央部分の梁間が最も広く2.7m、両側はほぼ等間で2.1mを測る。桁行きは全長4.9mで、柱穴間が一定ではなく、北から南に向かって徐々に広がる。柱間は北側で1.3m、中央で1.7m、南側で1.9mを測る。確認面からの柱穴の掘り込みはきわめて浅い。

遺物 遺物の出土はなかった。

#### SB002 (第111図)

7H21グリッド付近に所在する。掘り込みが浅いため、検出されなかった柱穴もあるが、4間×2間の掘立柱構造の建物と思われる。主軸方位は、 $N-73^{\circ}-W$ で、東西棟に近い。乗行きは長さ10.0m前後を測り、ほぼ2.5m等間となる。桁行きは長さ4.2mで、ほぼ2.1m等間となる。西側の柱穴が不規則な位置にあるが、これは出入り口の構造に関係するかもしれない。北側柱の外側に3本の柱穴がみられるが、縁の束柱となる可能性も考えられる。

遺物 遺物の出土はなかった。

### 2 地下式坑

#### SX001 (第112図)

9H28グリッド付近に所在する。長軸4.00m、短軸3.31mを測り、確認面からの深さ1.98mの地下式坑と考えられる。長軸方位は $N-68^{\circ}-W$ である。全体に不整形を呈するが、天井部は崩れているようである。底面は平坦で、入口部分は塹坑で確認面からの深さは1.07mである。底面は0.86m×0.70mの方形で主室部に向かってやや傾斜しており、さらに主室部とは0.40m程の高低差がある。主室部の底面は平坦で、規模は2.80m×1.89mの長方形で、上端は楕円形である。本遺構は武蔵野ロームを削っており、覆土中には天井部を構成した層が検出できず、後でさらったものと考えられる。

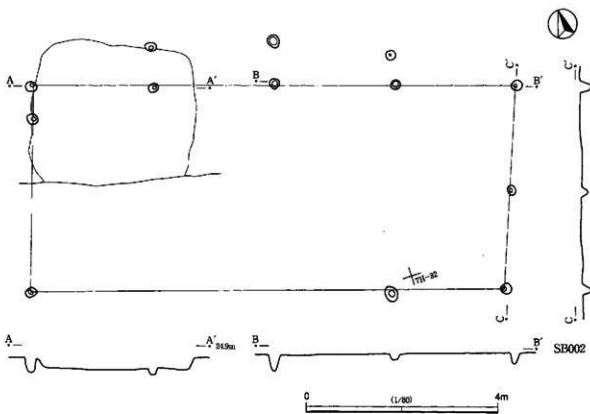
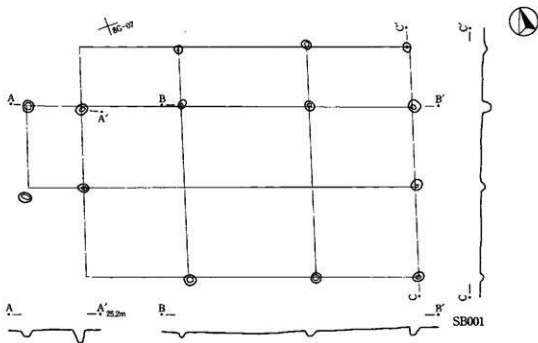
遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。

### 3 土坑

#### SK001 (第112図)

11H24グリッド内に所在する。掘り込みは、1.73m×1.10mの長方形状を呈し、確認面からの深さは最も深い部分で0.6mを測る。底面はほぼ平坦であるが、2段の掘り込みが確認され、その段差は0.2m程である。覆土上部にロームブロックを含むことから、地下式坑となる可能性もある。

遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。



第111图 SB001 · 002

SK002 (第112・113図, 図版58)

11H14グリッド内に所在し, SK001の北東壁に近接する。掘り込みは, 1.7m×1.5mの台形状を呈するが, 底面は長方形となる。確認面からの深さは0.58mを測る。底面はほぼ平坦であるが, 全体にすり鉢状を呈する。覆土は茶褐色土主体で, 自然堆積の様相を呈する。内部から人骨片が確認され, 板碑も出土していることから墓塚として機能していたようである。

遺物 北東壁外側の確認面から2個体分の板碑が出土している。1・2とも緑泥片岩である。1は下部を欠損する。山形状の頭部で, 現存する幅は16cmと小形品である。阿弥陀一尊種子と蓮台が観察される。2も欠損品であるが, 1よりは大形になると思われる。三尊種子が刻まれているが, 後世に種子部分が削られており, その内容は不明である。左下には花瓶が配置されている。

SK003 (第112図)

11H14グリッド内に所在する。掘り込みは, 1.14m×0.9mの楕円形状を呈し, 確認面からの深さは0.5mを測る。底面は平坦で, 壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積の様相を呈する。土坑内から人骨片の出土があるため, 墓塚として機能していたようである。

遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。

SK004 (第112・113図, 図版58)

11H14グリッド内に所在し, SK003の北側に隣接する。掘り込みは, 1.3m×0.95mの不整な楕円形を呈する。確認面からの深さは0.34mを測る。底面はほぼ平坦で, 覆土中にロームブロックを多く含み, 人為的に埋め戻されたようである。内部から人骨片が確認され, 板碑も出土していることから墓塚として機能していたようである。

遺物 北東コーナー壁沿いに板碑が出土している。3は緑泥片岩製で, 頭部は山形状に成形されている。下部は欠損する。SK002の1同様小形品となろう。阿弥陀一尊種子と蓮台のみが現存部分では観察される。

SK005 (第112図)

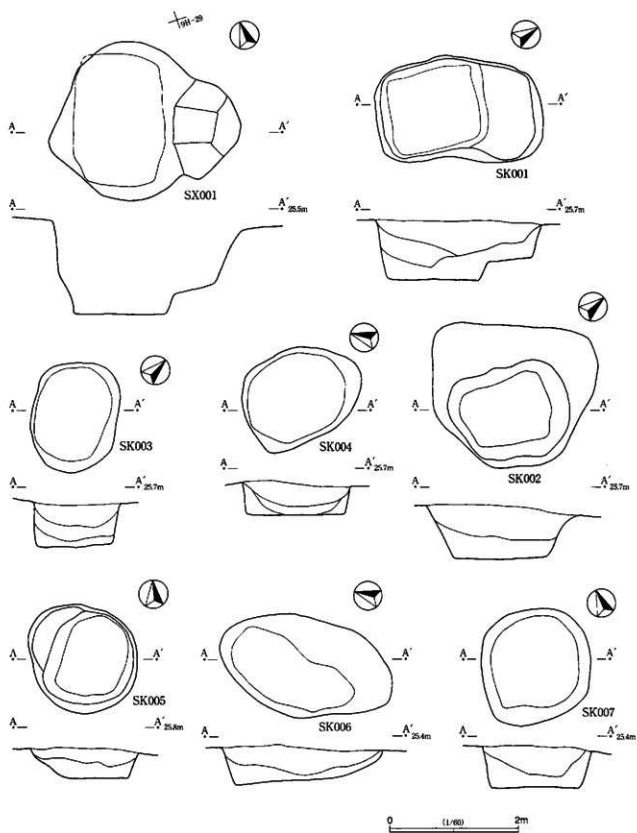
11H15グリッド内に所在する。掘り込みは, 1.23m×1.1mの略円形状を呈し, 確認面からの深さは0.26mを測る。底面は平坦であるが, 2段に掘り込まれている。覆土は自然堆積の様相を呈する。土坑内から人骨片の出土があるため, 墓塚として機能していたようである。

遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。

SK006 (第112)

11H16グリッド内に所在する。掘り込みは, 1.86m×1.07mのやや不整な楕円形状を呈し, 確認面からの深さは, 最も深い部分で0.4mを測る。底面は平坦であるが, 南に向かって徐々に高くなっている。覆土は自然堆積の様相を呈する。土坑内から歯が出土していることから, 墓塚として機能していたようである。

遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。



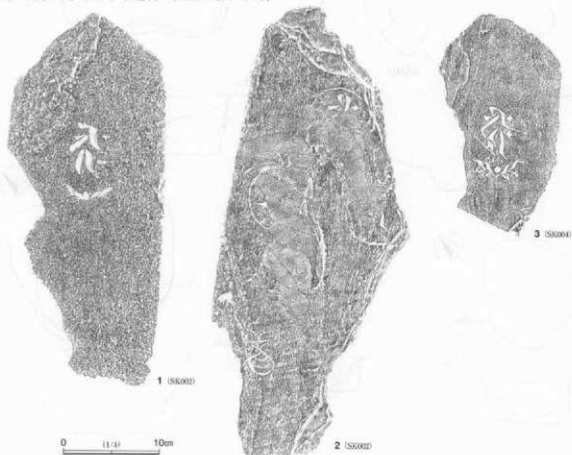
第112圖 SX001, SK001~007



SK007 (第112図)

11H16グリッド内に所在する。掘り込みは、1.18m×1.14mのやや不整な円形を呈し、確認面からの深さは0.43mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積の様相を呈する。土坑内から人骨片の出土があるため、墓塚として機能していたようである。

遺物 図示できるような遺物の出土はなかった。



第113図 SK002・004出土板碑

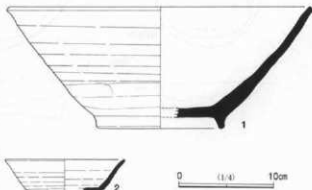
4 溝状遺構

本遺跡の調査区中央やや南側に溝状遺構が纏まって検出された。

SD001 (第4・114図)

7H・8Hグリッドにまたがって位置し、溝状遺構と重複するような状況でピット列が検出された。土層の状況から、ピット列より溝の方が古い時期の掘削である。出土土器等から、溝は中世、ピット列は近世以降と思われる。

溝状遺構内より鉢と杯が出土した。1は須恵質の捏ね鉢で、体部下端に手持ちヘラケズリが施される。2は須恵器の杯で、胎土中に長石・雲母粒を多く含む。混入品であろう。



第114図 溝状遺構出土遺物

## 第3章 まとめ

### 第1節 旧石器時代

松崎Ⅰ遺跡の調査で検出された石器集中地点は9地点を数え、それぞれが4層の異なる文化層に大別された。各々の文化層ごとに石器属性・組成表を添えて報告したが、ここでは特に第2文化層と第4文化層の出土遺物について取り上げ、松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡の立地する台地利用について報告する。

#### 1. 第2文化層における石器製作・利用について

第2文化層に区分された第2・3地点はⅣ層からⅤa層に生活面を持つ。この地点の特徴のひとつには、石材による器種の選別が挙げられる。良質な硬質頁岩からはナイフ形石器1点、搔器1点、石錐1点、楔形石器3点、二次加工剥片11点、剥片・碎片89点（このうち使用痕が観察されるものは17点）、石核11点が作出される。総点数における硬質頁岩の割合は40%であるが、重量の割合はわずかに15%である。11・12・23・26・27・54bなどの最大長20mmに満たないような小剥片にさえ、二次加工痕や刃こぼれ痕がみられ、この石材における利用価値の高さがうかがえる。原礫面は少なく、また有していても直線的な面であることから、搬入時は大きな塊としての原礫、もしくは打ち割られて持ち運びが可能になった素材塊であったものと考えられる。また再利用・再加工の痕跡が観察される石器も多く、大型の剥片の縁辺を刃部として使用した後に、中部から折り、小剥片を得るための石核に転じているもの(42・44)もみられる。

これらの石器組成・剥片剥離工程は他遺跡においても類例があり、香山新田中横堀遺跡(空港No.7)<sup>1)</sup>、油井古塚原遺跡群の滝東台遺跡<sup>2)</sup>からも同様の硬質頁岩を加工した石器が出土しており、近在では、北東に約7km離れた宮内遺跡<sup>3)</sup>においても確認されている。

新田浩三氏が、「下総型石刃技法の定義」として「下総台地のⅣ層からⅤ層段階の石器群のうち、大型・中型石刃を石器素材として搬入し、石刃の縁辺を頻繁に再生し、新鮮な縁辺あるいは、刃部の作り出しを行うものをいう。また、このような石刃の再生が主体的であるが、再生の際に剥離された剥片・小型石刃も再利用するものも副次的に認められる。このような石刃の究極までの再利用を行う技法をさす。」としている<sup>4)</sup>。本遺跡の第2・3地点では、素材となる大型石刃の明確な出土例はみられず、また、遺物を包含する層区分においても若干の違いはあるが、石器群の位置づけとしては「下総型石刃技法」を保有する段階のものと認識される。

この他、接合石片数が多く、原石の大きさまで復元された遺物によって、剥片剥離工程が明確に示される資料の存在も興味深い。ホルンフェルス1は打面・作業面を入れ替えながら外皮を削ぐような剥離工程だが、頁岩1は原礫が2分割され、それにより現れた面を打面にして剥離作業が行われている。ここで接合された剥片には二次加工痕や微細剥離痕は認められず、有用な剥片は使用されて散逸したか、石器として加工され搬出されたとみなすことも可能ではないだろうか。

#### 2. 第4文化層の角錐状石器について

第6地点から出土した角錐状石器は、接合する調整剥片を伴うものである。同一母岩の剥片・碎片は第6・7・8地点全体から37点出土し、その内訳は第6地点で10点、第7地点で24点、第8地点で3点と、第7地点が最も多い。これは第7地点で大まかな粗削り・成形が行われた後、石器を携えて4～5m移動

し、第6地点において最終の調整がなされたものと推察される。また、最大長が99.8mmと大型で背面にわずかに自然面を残すことから、素材標の大きさは、人頭大はあったものと思われる。ただ、遺跡内におけるこの安山岩1は総石片数38点、総重量121.22gであり、点数の割に重量が少ない。これらのことから素材、あるいは大型の角錐状石器を持ち込んで、遺跡内で加工・再生しようとした意図がうかがえる。

角錐状石器の大きさは、九州・近畿・瀬戸内地方では大型・中型の出土例が多く、中部・関東などでは小型化する傾向があり、この第6地点1のような大型の角錐状石器の出土例は、近在の遺跡においてはほとんど類例がない。ただ、本遺跡から東南へ約19km離れた東内野遺跡<sup>3)</sup>中層から出土した、大型の二側縁加工のナイフ形石器には大きさ・形状・加工方法・二か所の折れなど、近似するものがある。

また、東へ約22km離れた取香和田戸遺跡(空港No60遺跡<sup>4)</sup>)第4文化層では、安山岩を素材にして角錐状石器が製作されていたが、当地点のような調整剥片との接合例はない。なお、同時期の石器群としては八千代市に所在する萱田遺跡群の権根後遺跡<sup>5)</sup>第3文化層、ヲサル山遺跡<sup>6)</sup>第1文化層、白幡前遺跡<sup>7)</sup>第2文化層などがあげられる。

### 3. 小結

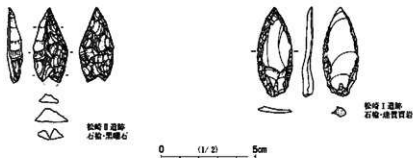
松崎Ⅰ、Ⅱ遺跡は標高24m～26mの台地上に立地し、谷との標高差は現在の水田面から測って15mほどである。その谷を挟んで西側に松崎Ⅰ遺跡が、南寄りの東側に松崎Ⅱ遺跡が展開する。台地の縁から縁までは直線距離にして約100mほどである。

松崎Ⅱ遺跡において、遺物の最多出土層であるⅨc層からⅩ層の集中地点からは、搬入品である再生・加工が繰り返された石斧、在地で調達したと思われる嶺岡頁岩から剝離された石器が目を引く。だが前述のように松崎Ⅰ遺跡では、Ⅸc層からⅩ層の遺物出土数は30点に過ぎず、節理折れした頁岩剥片が大半を占める。

一方、本遺跡の遺物総数の64%を占めるⅤ層からⅨa層出土の遺物は、松崎Ⅱ遺跡においてはわずか6点(2%)のみの出土であった。

このように、隣接するにもかかわらず、両台地には共通する母岩は確認されず、少なくともⅤ層以下においては二つの台地にまたがった生活跡が存在したとは断じがたい。

地点外及び単独出土遺物については時代示準とされる石槍が両遺跡から出土している。まず、松崎Ⅱ遺跡出土の石槍から見ていくと、基部が欠損しているため正確な大きさは不明であるが、残存する長さは39.2mmを測り、外形のラインを延長して得た器長は43.0mmであった。肉眼で観察した限りでは、石器は薄墨を



第115図 松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡出土石器

流したような部分と半透明な部分とが縞模様をなす夾雑物の少ない黒曜石製である。ほかには同一母岩とみなされる遺物はなく、製品として搬入された可能性が高い。このように、良質な信州産黒曜石製で左右対称の形状を持ち、上部から面取り状の剥離痕が入った石槍は、「男女倉型有極尖頭器」と呼称され、Ⅳ層中部にその分布を見る。石器加工の最終段階で槌状剥離を行うものと、槌状の剥離を入れた後に対縁部を加工するものに分けられるが、松崎Ⅱ遺跡から出土した石槍は後者である。

次に松崎Ⅰ遺跡出土の石槍を見ると、板状に剥離された均一な厚みを持つ珪質頁岩の薄片を素材としている。両側縁を粗い加工で成形した後、丁寧な小剥離を施すことで周縁をアーモンド形に整えている。

両遺跡の石槍とも単独出土ではあるが、石器の形態や使用石材などからⅣ層中部から上部にかけて分布するものと認識される。

本遺跡は、隣接する松崎Ⅱ遺跡のような第2黒色帯下部における遺物集積も持たず、Ⅲ層～Ⅳ層に見られる焼礫群も伴わない。生活面としての台地活用という視点に立てば、持ち込まれた石器を加工するための場として機能していたといえるのではないだろうか。

- 註1 西門徹 1984 「No.7遺跡(香山新田中横堀遺跡)」『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』(財)千葉県文化財センター
- 2 田村隆 1995 「滝東台遺跡油井占塚原遺跡群」(財)山武郡市文化財センター
- 3 吉林昌寿 1994 「宮内遺跡発掘調査報告書」「先土器時代」(財)伊藤郡市文化財センター
- 4 新田浩三 1995 「下総型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16—20周年記念論集—』(財)千葉県文化財センター
- 5 篠原正他 1977 「東内野遺跡発掘調査概報」富里村教育委員会
- 6 小久貫隆史 新田浩三 1994 「空港No.60遺跡(取香和田戸遺跡)」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』
- 7 加藤修司他 1984 「八千代市権現遺跡」『萱田地区埋蔵文化財報告書Ⅰ』(財)千葉県文化財センター
- 8 阪田正一 藤岡孝司 1986 「八千代市ヲサル山遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(財)千葉県文化財センター
- 9 大野康男 田村隆 1991 「八千代市白幡前遺跡」『萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』(財)千葉県文化財センター

## 第2節 縄文時代

本遺跡から検出された縄文時代の遺構は、炉穴16基と早期燃糸文及び条痕文系土器を主体とした包含層であり、竪穴住居跡は確認されなかった。炉穴の分布は台地北側の縁辺に集中している。この分布範囲は早期の包含層とほぼ同様であり、早期の活動範囲は台地北側に限定されていたようである。隣接する松崎Ⅱ遺跡では包含層は存在するものの炉穴の検出はなかった。本遺跡の炉穴は、時期的にはほとんど茅山下層式に含まれるが、SK258には縄ヶ島台式が供伴しており、やや古い様相を示すものと思われる。炉穴の中では、台地北西側にまとまって所在するSK258～SK260の3基の大形炉穴が注目される。いずれも10基以上の炉床を有しており、当然人為的に拡張されたものである。一見複雑に重複しているようであるが、全体の形状は円形に近くなり、炉床は中央から外側に向かって展開している。これは、単独の炉穴を構築

する当初から拡張を意識したものと考えられる。足場を中央に固定し、炉の部分は頑丈な天井部を残すために円弧状に広げる意識があったのであろう。

一方、包含層から出土した土器は、燃糸文系土器と条痕文系土器が主体となる。条痕文系土器については、炉穴とはほぼ同時期の所産である。燃糸文系土器は、井草から夏島にかけてが多く、燃糸文系土器の中でも比較的古い時期が主体となっている。また、その分布は台地北側の縁辺部に集中しており、炉穴や条痕文系土器の分布と一致している。おそらく燃糸文の時期も活動範囲は台地北側にあったものと思われる。

### 第3節 弥生時代末から古墳時代前期

松崎Ⅰ遺跡から検出された弥生時代末から古墳時代前期の遺構は、堅穴住居跡37軒、方墳7基である。供伴遺物があり多くないため、帰属時期に苦慮する面もあるが、ここでは、出土土器の変遷と集落の動向について、ほぼ同じ時期の集落が調査された松崎Ⅱ遺跡<sup>1)</sup>を含めて考えてみたい。土器の編年基準は、松崎Ⅱ遺跡の報告に際して使われた草刈遺跡の編年<sup>2)</sup>に準拠している。

#### 出土土器

松崎Ⅰ遺跡出土の該期の土器はあまり多くないが、松崎Ⅱ遺跡には比較的良好なセットがみられる。両遺跡の出土土器を草刈編年に基づいて編年を考えてみる。まず、松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡の中で最も古く位置づけられる資料が松崎Ⅰ遺跡にみられる。北関東系の燃糸文主体の土器が点数は少ないが散見される。SI107には、折り返し口縁の甕がみられ、底部には木葉痕が残る。SI111には十王台系統の節楯文も含まれる。いずれも小破片であるが、これらの土器は、草刈Ⅰ期前段階とした時期より古い弥生時代末葉の所産と考えられる。

草刈Ⅰ期前段階になると、草刈編年では小形器台や元屋敷系高杯の出現が指標とされている。松崎Ⅰ遺跡では、SI112・113・120の出土土器が相当しよう。SI112では、元屋敷系の高杯や口縁部に棒状浮文を貼り付ける有段口縁壺がみられる。また、SI113やSI120には台付甕の脚部が内湾する形態で、台付甕でも古い様相を呈する。古段階でもやや新しくなると松崎Ⅱ遺跡でも集落が出現し、該期の土器群がみられるようになる。SI001・016・034・039などがあげられる。SI001の高杯は、脚部が大きく広がり、脚部に比して杯部が小さい元屋敷系のタイプが主体である。また、SI016出土の台付甕は、口縁部が明瞭な屈曲部を有さずになだらかに外反しており、台付甕の中では古い要素を呈する。ほかに、SI039では複合口縁壺の口縁部に施文が施される。この段階の住居の中では、SI034には口縁部から頸部にかけて輪積み痕を残す甕が含まれており、ほかの住居に比べてやや先行するものかもしれない。

草刈Ⅰ期後段階では、小形器台や有段口縁壺の出現などがあげられる。松崎Ⅰ遺跡では、明瞭に区別できる資料が少なく、後続する草刈Ⅱ前段階を含めて、SI114・121・122・125が当該時期に所属しよう。この中では、小形器台と複合口縁部に棒状浮文や頸部に円形浮文を有する壺が出土しているSI125はⅠ期新段階に含まれるものである。また、SI122は口頸部に刻みを施す小形器台や杯部の深い在地型の高杯が出土しており、古い様相もあるが、小形埴の祖元となる鉢がセットに含まれることから、SI125に後続する時期のものであろう。一方、松崎Ⅱ遺跡では、当該時期の土器群が多く検出されている。Ⅰ期後段階としては、SI005・022・018など9軒の住居が確認される。SI018では、口縁部に棒状浮文の付く壺や有段口縁の甕、瓢型を呈するような胴下半部に最大径をもつ壺などがみられる。また、SI033では強い稜を持って屈曲する小形器台や元屋敷系高杯がみられ、Ⅰ期後段階でも古い様相を呈する。Ⅱ期前段階でも松崎Ⅱ遺

跡ではSI026やSI043・005など6軒の竪穴住居がみられる。この段階になると、高杯は脚部に比べて杯部が大きくなり、脚部裾の広がりも小さくなる。器台は、前段階よりやや大型化し、器受部が深く半球形状を早するようになる。また、SI026の有段口縁壺は、口頸部の外反度が弱くなり、最大径を胴部中位に有する。松崎Ⅱ遺跡では、草刈編年のⅠ期後からⅡ期前にかけて多くの資料がみられるが、1軒の竪穴住居から出土する上器のセットには新しい要素や古い要素が混在しており明確に区別することは困難であるが、後述する集落の動向を考える上であえて分けておくものである。

次の草刈Ⅱ期後段階になると、松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡とも資料が少なくなってくる。松崎Ⅰ遺跡では、明確に当該時期と判断される資料はほとんどないが、松崎Ⅱ遺跡ではSI007・038・040など6軒の竪穴住居で該期の土器が確認される。SI007の広口の埴やSI040の後続するⅢ期にみられるような椀形を呈する杯の出現、SI047・041出土の台付甕の口縁部がくの字状に強く外形するなど、草刈Ⅱ期のなかでも新しい様相と思われる。

次の草刈Ⅲ期になると、松崎Ⅱ遺跡では資料がみられなくなり、松崎Ⅰ遺跡でS I 108・115・142の3軒がみられるのみである。SI108の柱状を呈する脚部をもつ高杯の存在やSI142の椀形土器が当該時期の指標となろう。

集落出土の土器からは、以上のような変遷を示すものと思われるが、松崎Ⅰ遺跡では7期の方墳が検出されている。このうち土器の出土している方墳は4基で、SM002と003の切り合い関係からSM002の方が新しいと考えられる。両者に共通して出土している壺形土器を比較してみると、SM002の胴部が球形胴を呈するのに対し、SM003は球形胴でありながらも、最大径が中位よりやや下方にあることから、やや古い様相とすることができよう。その時期は、SM002が草刈Ⅱ期前、SM003が草刈Ⅱ期後と考えられる。SM007は、算盤玉状を呈する胴部下位に最大径をもつ壺がやや古い様相と思われるが、底部穿孔のミニチュア土器はSM002と類似するものであり、Ⅱ期後とするのが適当であろう。ほかの方墳については、出土土器がほとんどないため時期の確定は困難であるが、草刈Ⅱ期の築造と思われる。

## 集落の展開

以上のような土器の様相から、松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡の集落の展開を考えてみる。

### 松崎Ⅰ期

まず、弥生時代終末期に松崎Ⅰ遺跡に集落の営みがみられるようになる。その分布は、台地北東部縁辺に3軒、南側に3軒の竪穴住居がそれぞれまとまったような状況で集落が営まれている。北側ではSI104、南側ではSI101の比較的大きな竪穴住居が中心となっているようである。この時期の竪穴住居跡の特徴は、主軸方向を北西方向にとる長方形のプランを呈している。この時期には、松崎Ⅱ遺跡での集落の出現はみられない。

### 松崎Ⅱ期

草刈Ⅰ期前段階に相当する。松崎Ⅰ遺跡では、それまでの台地縁辺部の占地から移って、台地中央部に集中して集落が形成されるようになる。土器の様相からは、後続する松崎Ⅲ期との区別は難しいが、SI112・113・120がやや古い様相を持っており、この段階の資料と考えられる。当該時期の竪穴住居は、それまでの長方形主体から正方形に近いプランとなっている。また、炉のみあるいは炉と1・2本の柱穴など、4本の柱穴がそろったものは少なく、住居面積も若干小さくなる傾向にある。この時期から、松崎Ⅱ遺跡にも

集落が展開するようになる。出土遺物から確認できた竪穴住居は5軒のみで、それぞれまとまる様子はなく、台地全体に独立して散在しているようである。比較的床面積の大きいものが主体を占めているが、炬のみの検出がほとんどで、柱穴と把握できるピットは確認されなかった。

#### 松崎Ⅲ期

草刈Ⅰ期後段階に相当する。松崎Ⅰ遺跡では前時期と同様台地中央部にSI119・124・126の3軒が認められる。この時期でも竪穴住居の構造は前時期とほとんど変わらない。ただ、1軒のみ離れて位置するSI134は、台地北西側に存在しているが、この住居は面積が大きく、4本柱が備わっており、特異な印象を受ける。ただ出土した土器が付付臺の台部のみであり、明確に当該時期となるかどうかは断言できない。松崎Ⅱ遺跡では、それまで散在していた住居が集中し、本格的な集落を営むようになる。SI005・015・022など8軒の竪穴住居が当該時期となろう。その分布は、西側の谷を望むように弧状となっており、2ないし3軒の竪穴住居がグループを構成している。SI0281軒のみ離れた状態であるが、弧状の中心に位置しており、床面積は小さいものの、多量の土器が出土しており、興味深い。

#### 松崎Ⅳ期

草刈Ⅱ期（前）段階に相当する。松崎Ⅰ遺跡においては、集落が最も隆盛する時期であり、SI117・121・122など7軒の竪穴住居が当該時期に相当する。台地上における立地は松崎Ⅲ期同様中央部に集中している。この段階になると、竪穴住居の面積にばらつきが生じ、中心的な機能を有するであろう大形の竪穴住居（SI117・122・141）がみられる。これらの大形竪穴住居の構造は4本柱の住居となり、ほかの小規模な竪穴住居にも4本柱が採用され、前代までとは様相が異なってくる。松崎Ⅱ遺跡では5軒の竪穴住居がⅢ期とほぼ同様の位置に一直線状に配置されている。大形の住居が主体となり、4本柱の住居の割合が大きくなる。

#### 松崎Ⅴ期

草刈Ⅱ期（後）段階に相当する。松崎Ⅰ遺跡においては、Ⅳ期をピークとして急激に集落が小さくなり、出土遺物からは、SI1151軒のみの検出である。共存遺物がほとんどなく、時期の不明な住居もあるため1軒のみではないかもしれないが、住居数が急激に少なくなるのは明らかである。一方、松崎Ⅱ遺跡では、6軒の竪穴住居がみられるが、前時期までの集中傾向から変化し、南側と北側の2つのグループに分かれるようになる。松崎Ⅱ遺跡の集落は、当該時期をもって収束する。

#### 松崎Ⅵ期

草刈Ⅲ期段階、いわゆる和泉式に相当する。松崎Ⅰ遺跡では、2軒の大形の竪穴住居がみられ、この時期以降集落は姿を消すようになる。

松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡の集落は以上のような変遷を辿るが、ここで重要となってくるのが松崎Ⅰ遺跡において検出された方墳群である。時期の明確な方墳はそれほど多くないが、出土土器の様相から、松崎Ⅳ～Ⅴ期にかけての築造と考えられる。この時期、松崎Ⅰ遺跡の集落は、最盛期から収束に向かう時期であり、集落の展開よりはやや遅れて方墳群が築造されることになる。これは、どのような状況を示しているのだろうか。そこで、松崎Ⅰ遺跡とⅡ遺跡を含めた集落の動向をまとめてみよう。まず、松崎Ⅰ遺跡において弥生終末期に集落が出現し、次の松崎Ⅱ期には松崎Ⅱ遺跡にも集落が展開するようになる。弥生時代の様相を有した集団が松崎Ⅰ遺跡の開発を行い、次の古墳時代的な文化が流入する段階で、新たな開発地として松崎Ⅱ遺跡の台地を選択し、その後は、集落規模からしても松崎Ⅱ遺跡が中心となってくるようである。

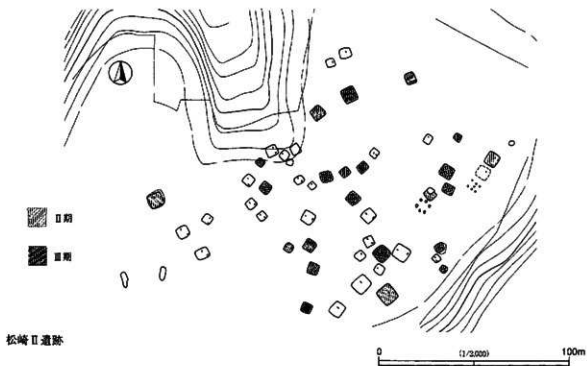
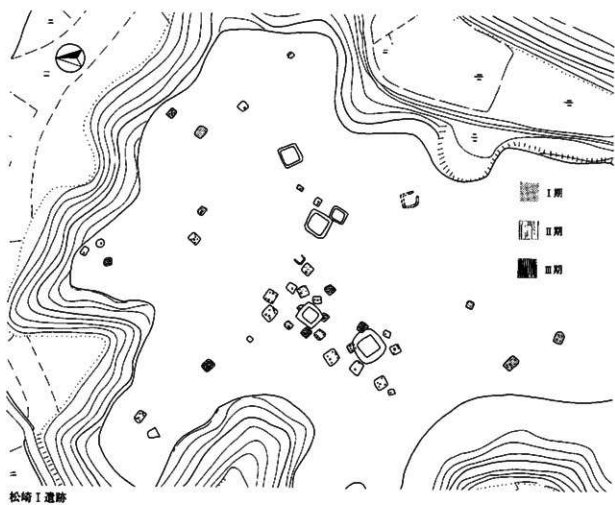
松崎Ⅱ遺跡は松崎Ⅲ期以降も安定した集落を営んでいるが、松崎Ⅰ遺跡は松崎Ⅳ期を最盛期に竪穴住居数が激減してくる。

このような集落の動向の中で、集落が規模を小さくする松崎Ⅳ期以降、松崎Ⅰ遺跡に方墳群が築造される背景には、中心となって活動を行っていた松崎Ⅱ遺跡の集団の墓地として松崎Ⅰ遺跡が利用されていたのではなかろうか。

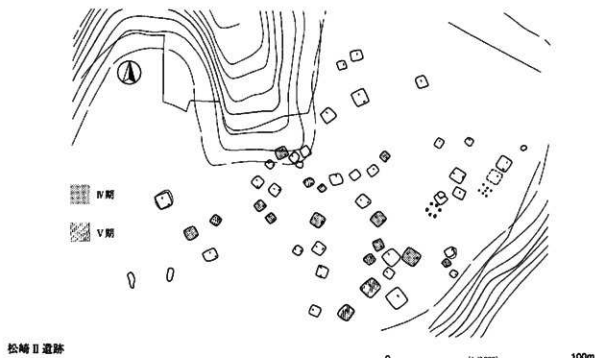
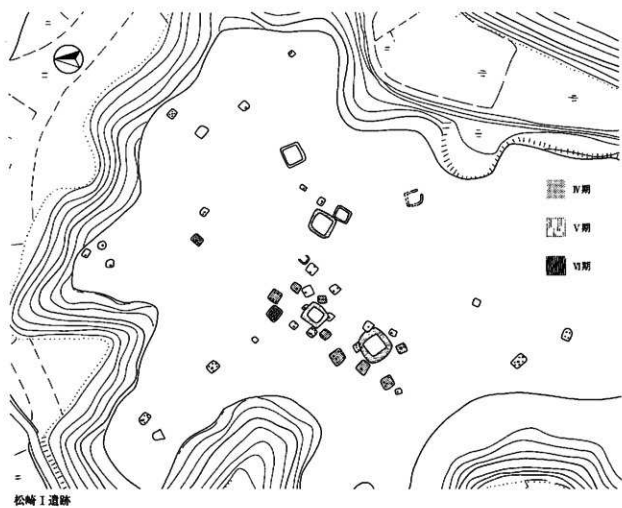
註1 古内 茂・西野雅人ほか 2003 『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書1-印西市松崎Ⅱ遺跡-』（財）千葉県文化財センター

2 加藤修司 2000 「第1章 土器編年案」『研究紀要』21（財）千葉県文化財センター





第116圖 松崎 I・II 遺跡弥生時代後期～古墳時代前期集落変遷圖 (1)



第117圖 松崎 I・II 遺跡弥生時代後期～古墳時代前期集落変遷圖 (2)

# 写 真 图 版





松崎 1 遺跡航空写真



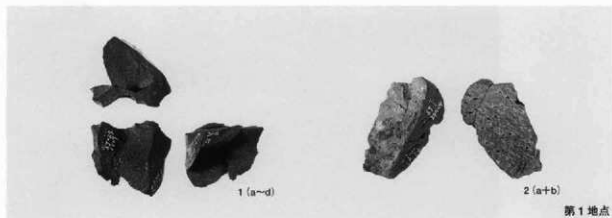
第1文化層  
第1地点  
北西から



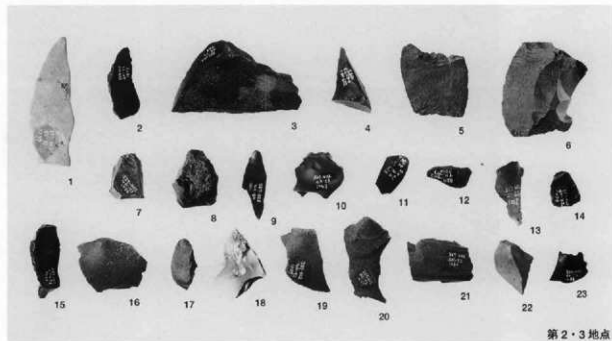
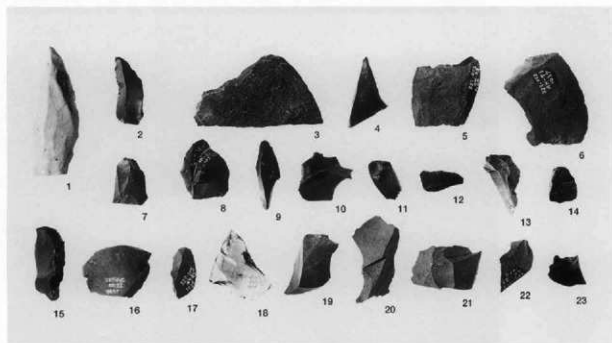
第2文化層  
第2・3地点  
東から



第4文化層  
第6・7・8地点  
南から

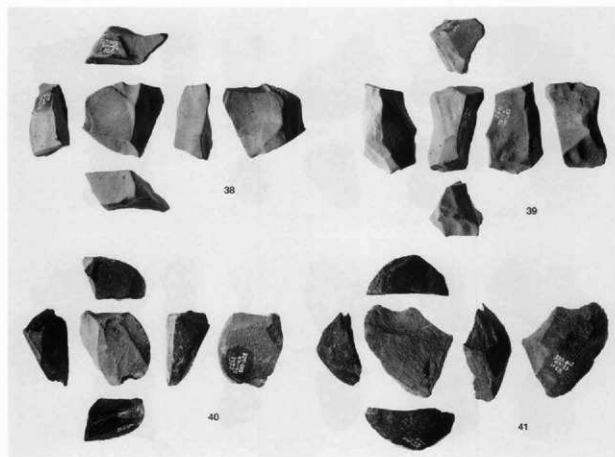
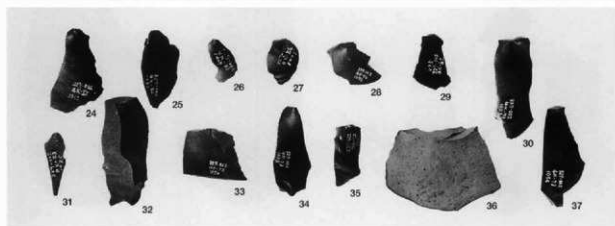
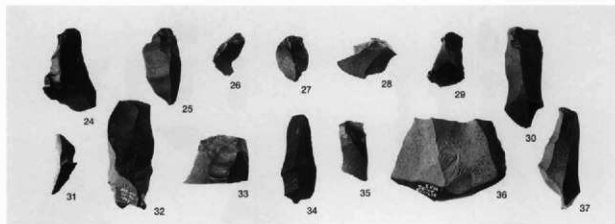


第1地点



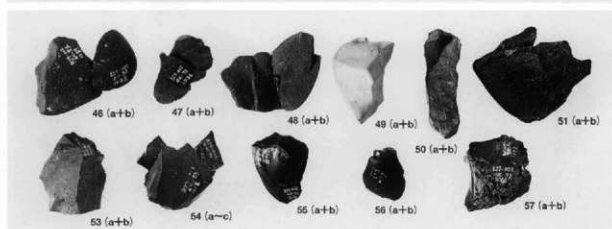
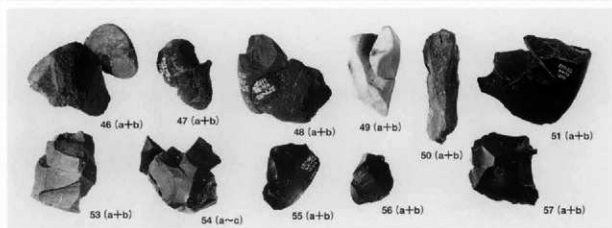
第2・3地点

第1文化層 第1地点, 第2文化層 第2・3地点 (1) 出土遺物

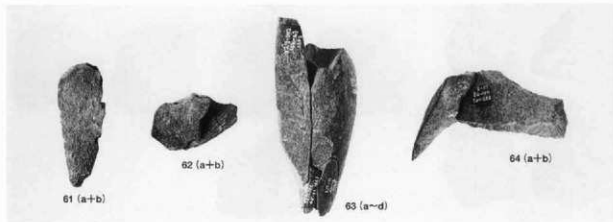
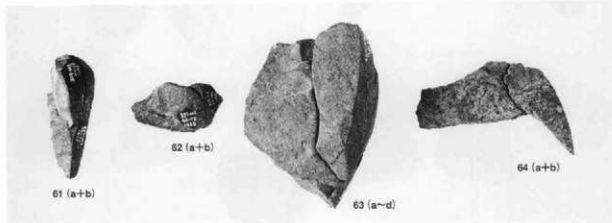
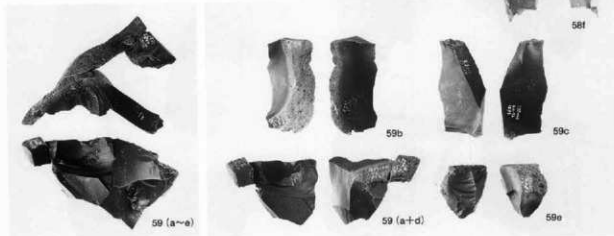
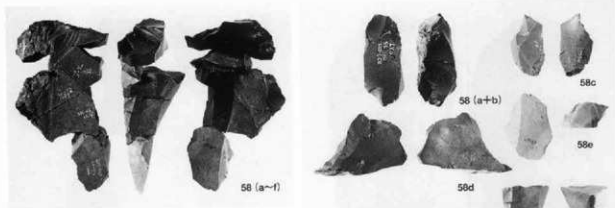


第2文化層 第2・3地点(2)出土遺物



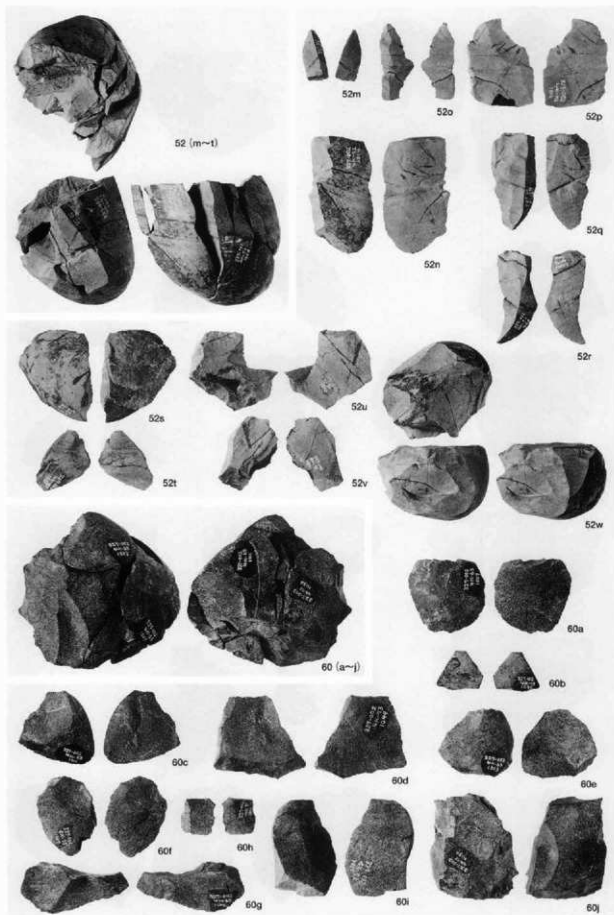


第2文化層 第2・3地点(3)出土遺物

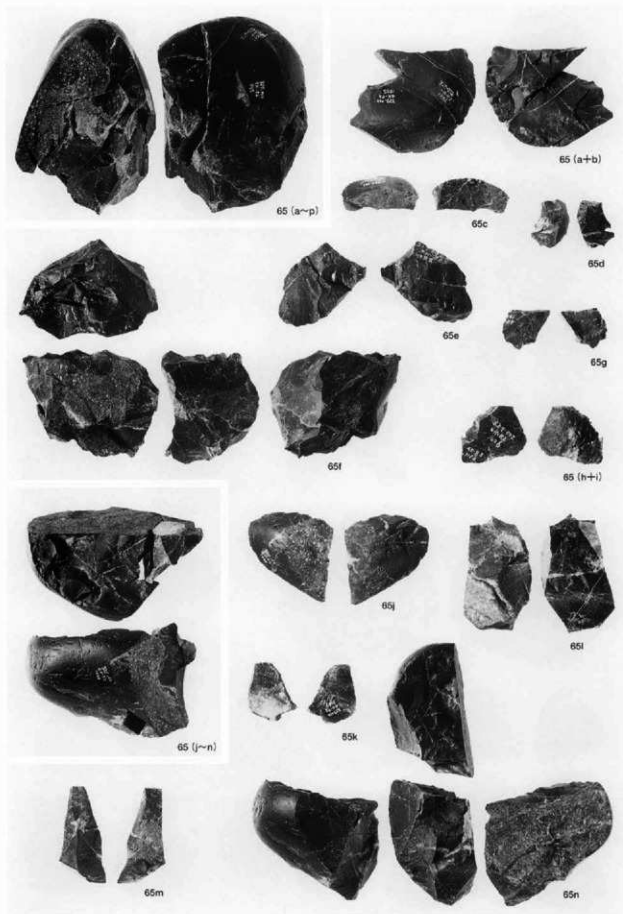


第2文化層 第2・3地点(4)出土遺物

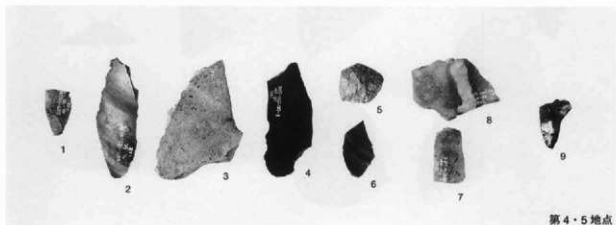
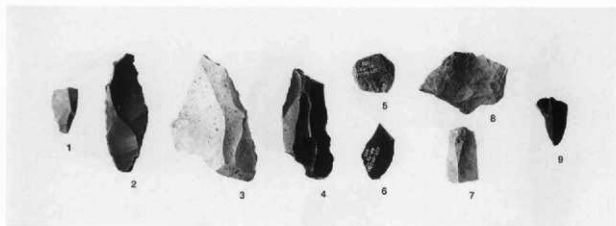




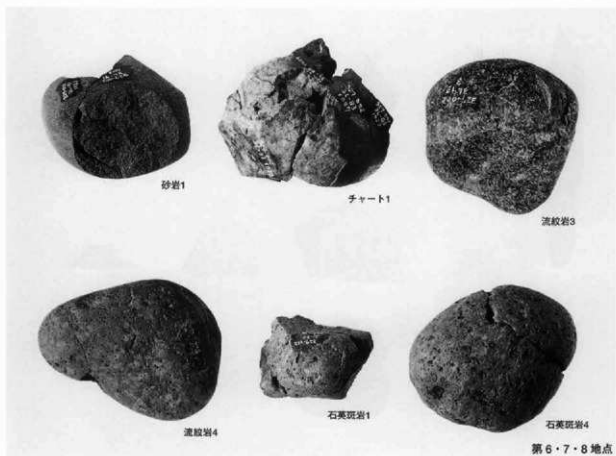
第2文化層 第2・3地点(6)出土遺物



第2文化層 第2・3地点(7)出土遺物

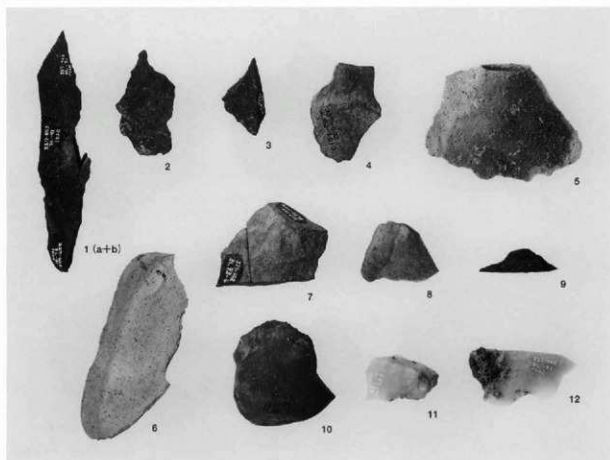
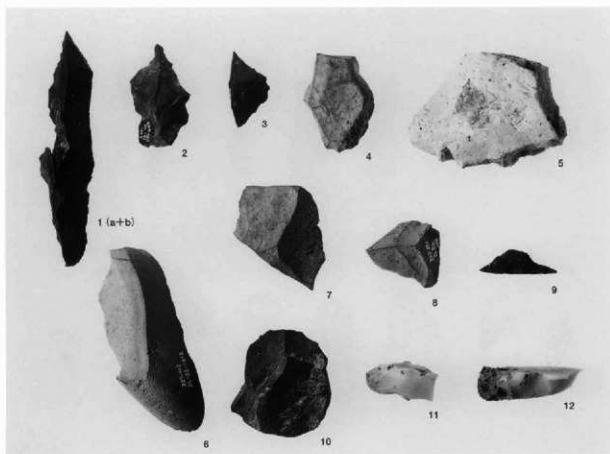


第4・5地点

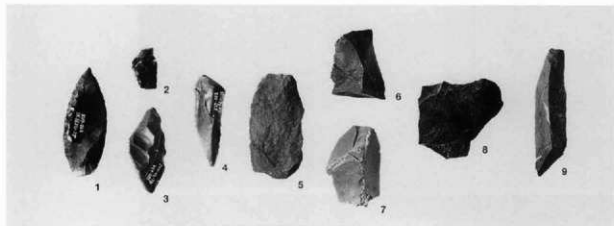
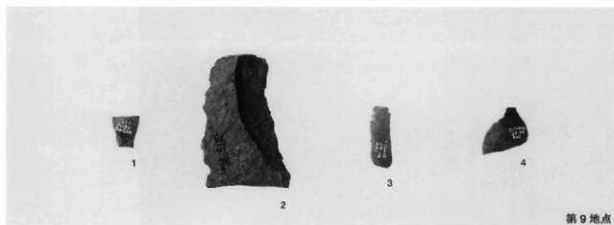
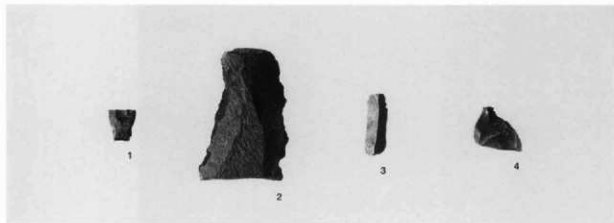


第6・7・8地点

第3文化層 第4・5地点, 第4文化層 第6・7・8地点(1)出土遺物



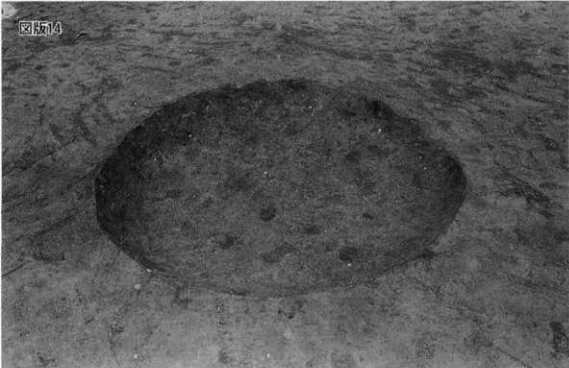
第4文化層 第6・7・8地点(2)出土遺物



第4文化層 第9地点, 单独出土遺物



25714



SK112



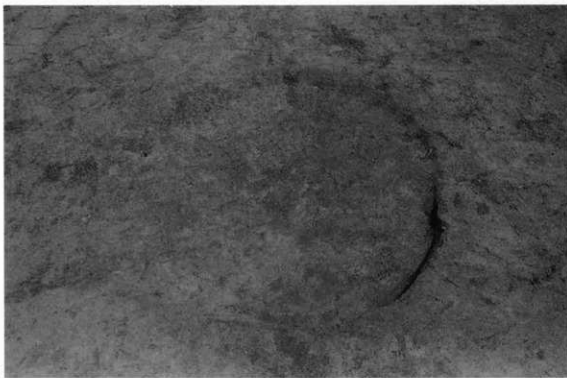
SK113



SK189



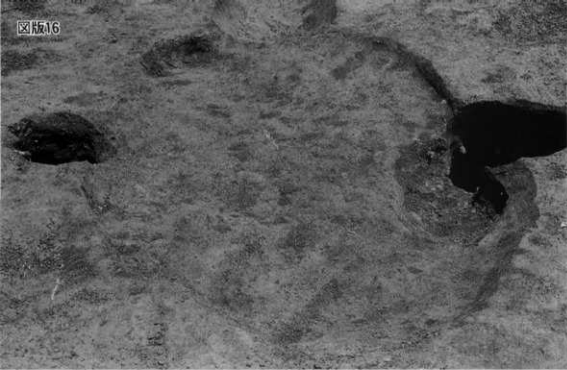
SK203



SK206



SK207



SK252



SK258



SK259



SK260遺物出土状況



SK260



SK261



SK266



SK270遺物出土状況



SK270



SK102



SK107



SK110

520



SK199



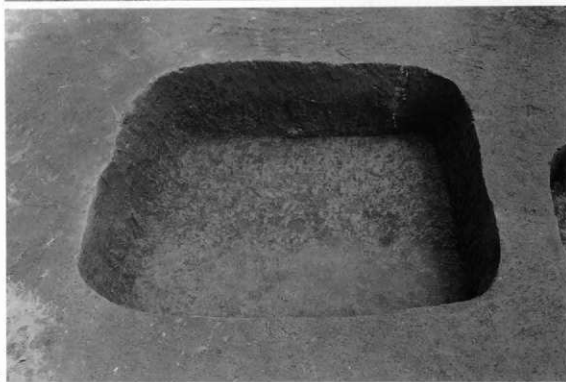
SK200



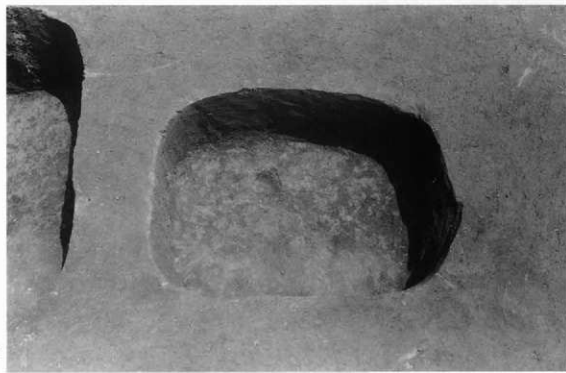
SK212



SK217



SK227



SK228

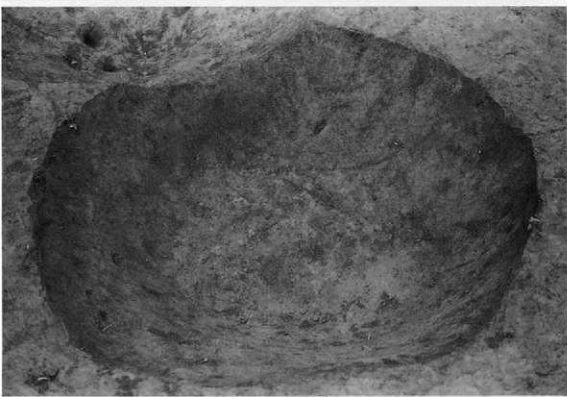




SK232



SK253



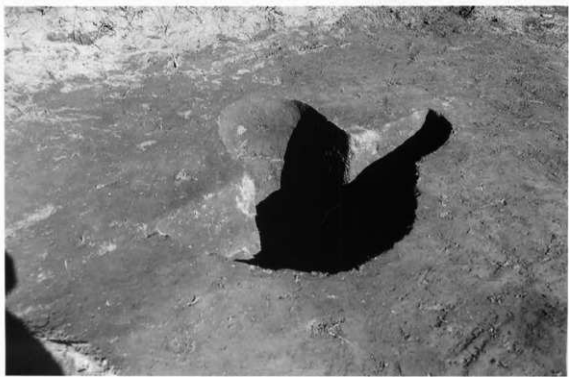
SK254



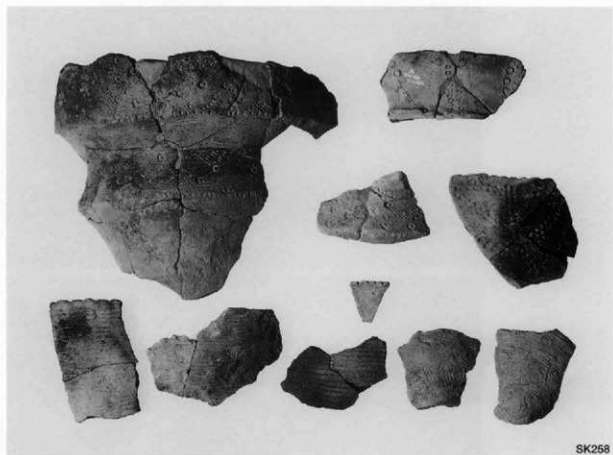
SK264



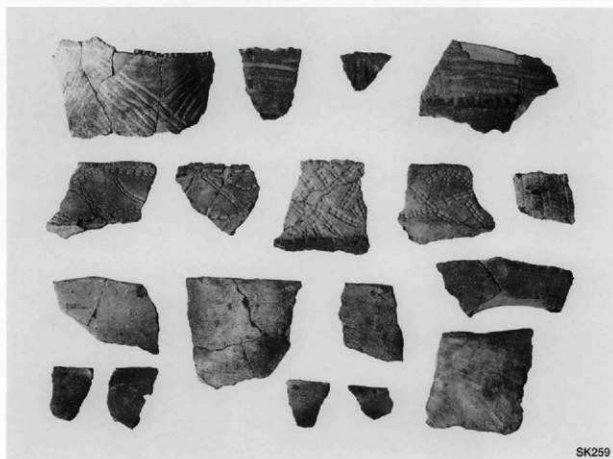
SK265



SK267

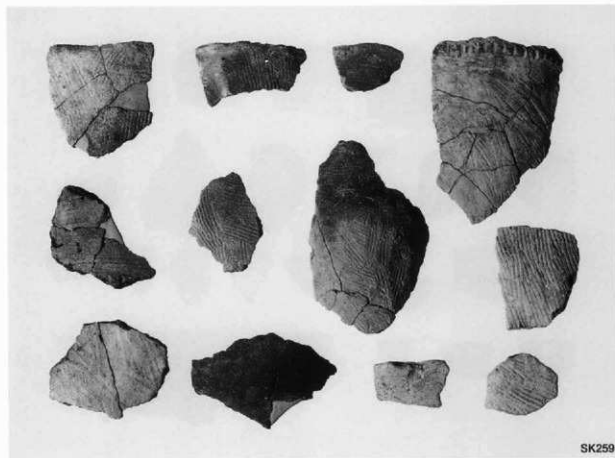


SK258

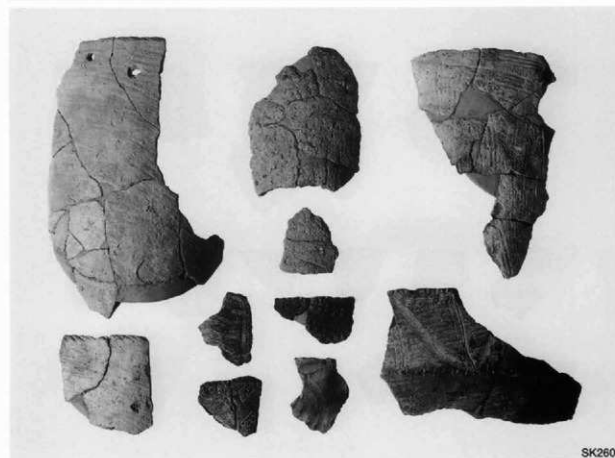


SK259

SK258・SK259出土土器

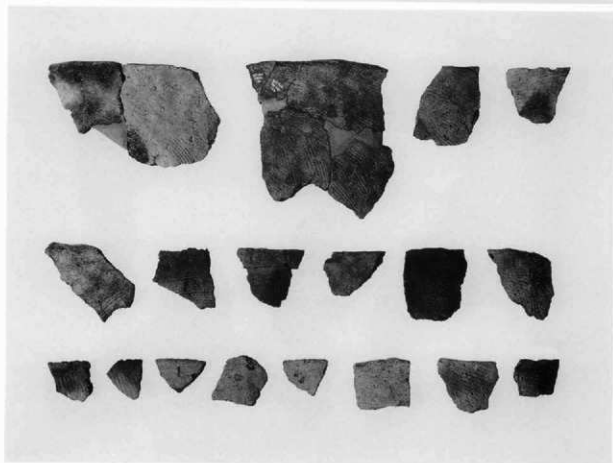
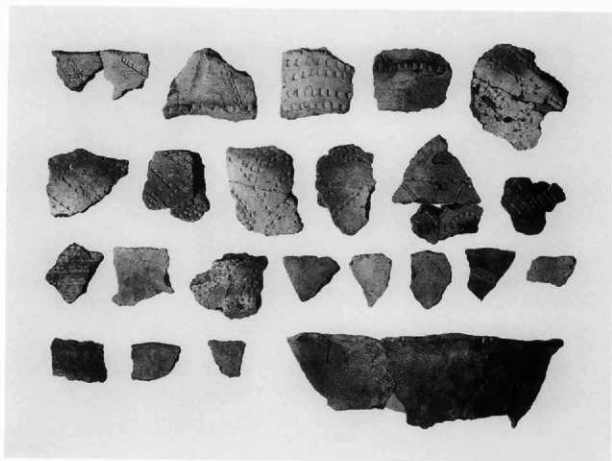


SK259

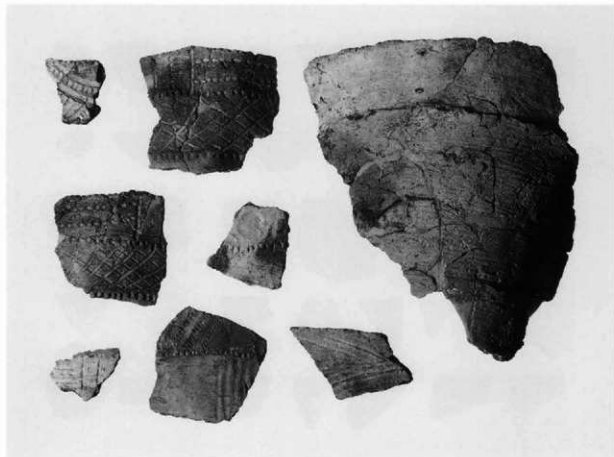
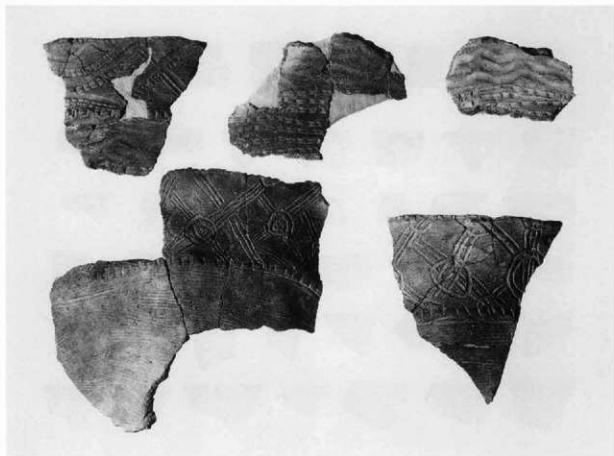


SK260

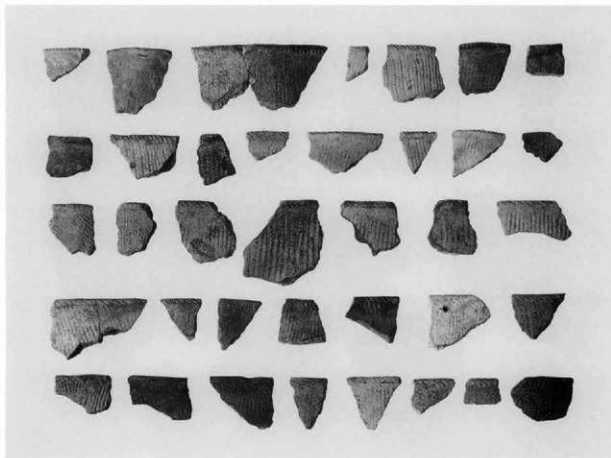
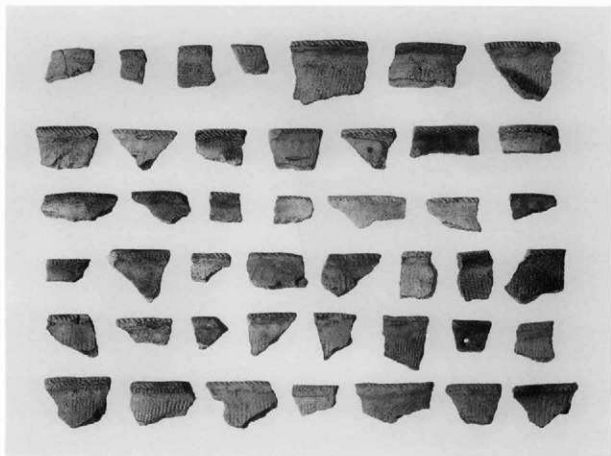
SK259・SK260出土土器



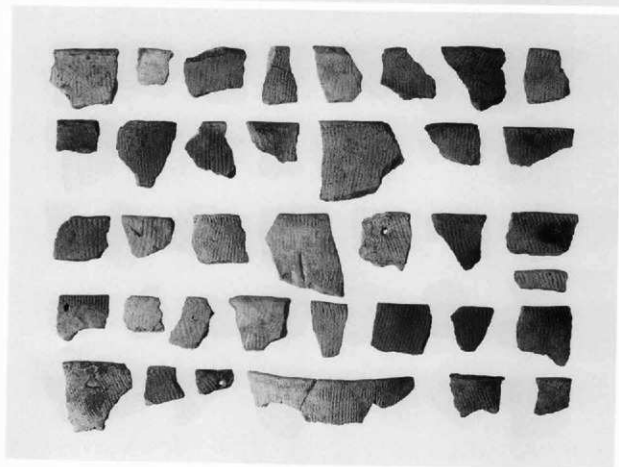
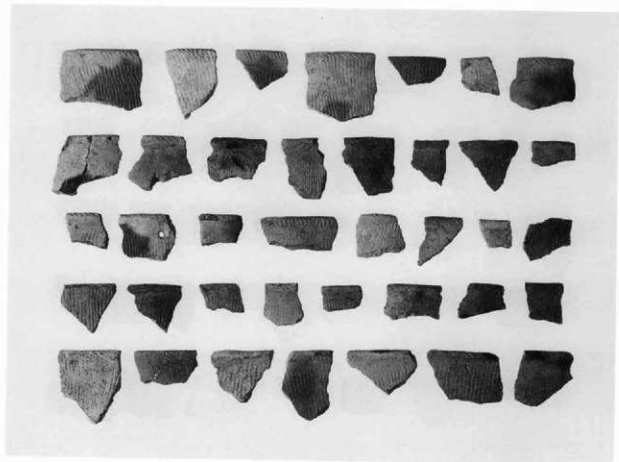
SK260出土石器



SK270出土土器

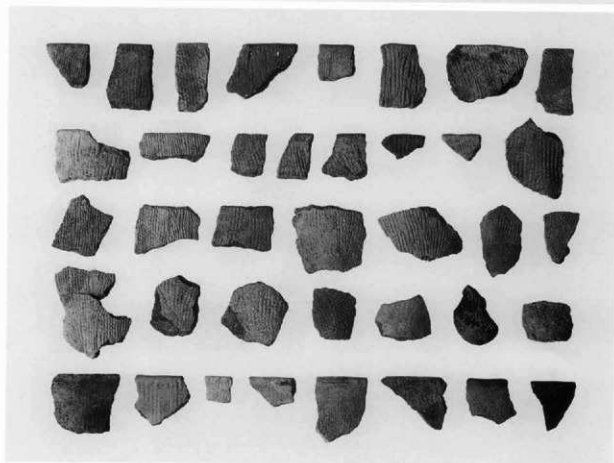
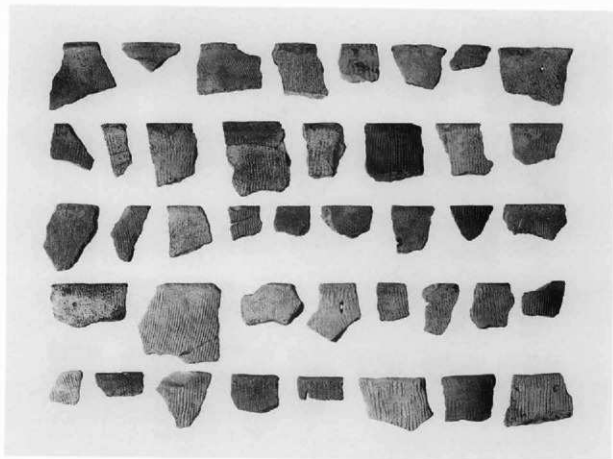


遺構外出土縄文土器(1)

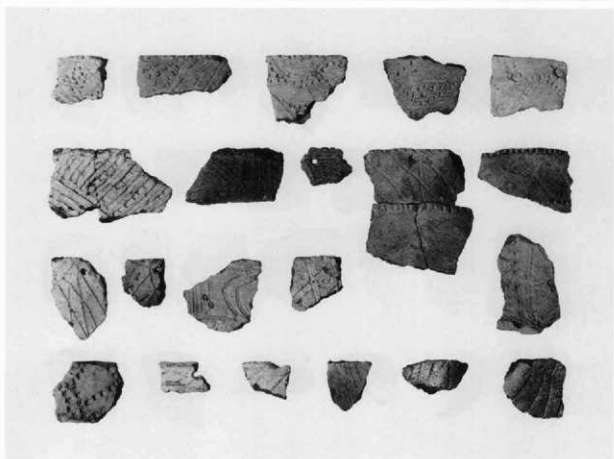
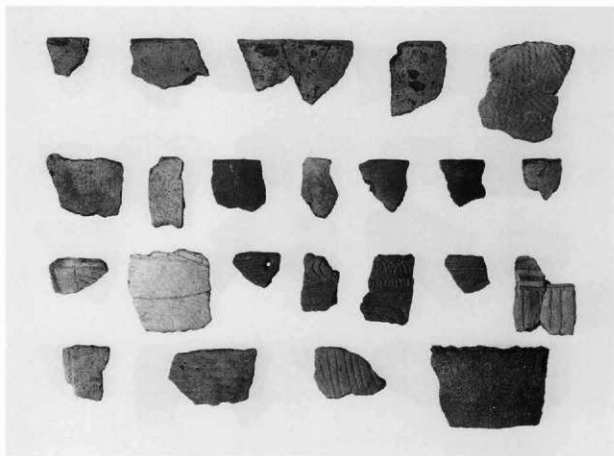


道榜外出土繩文土器 (2)

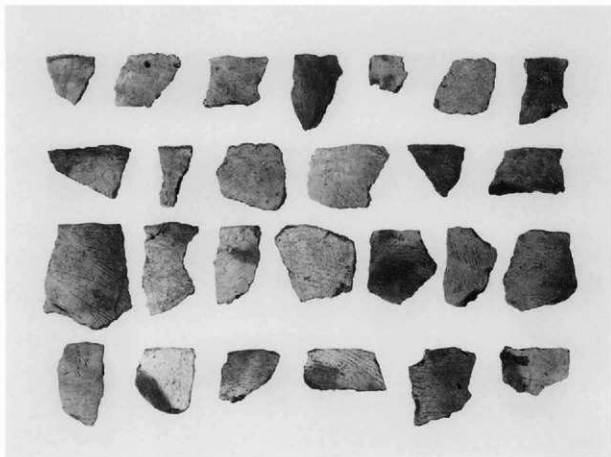
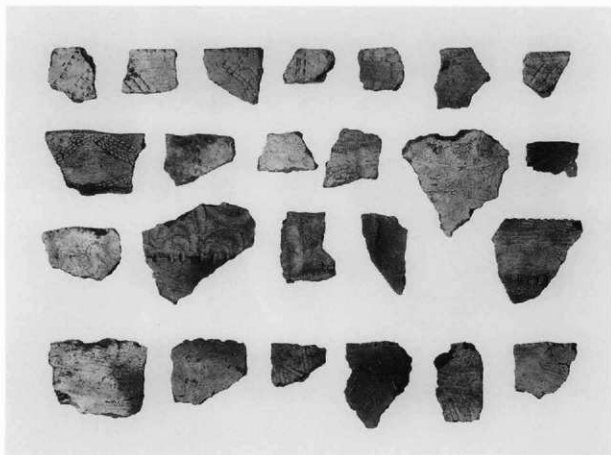




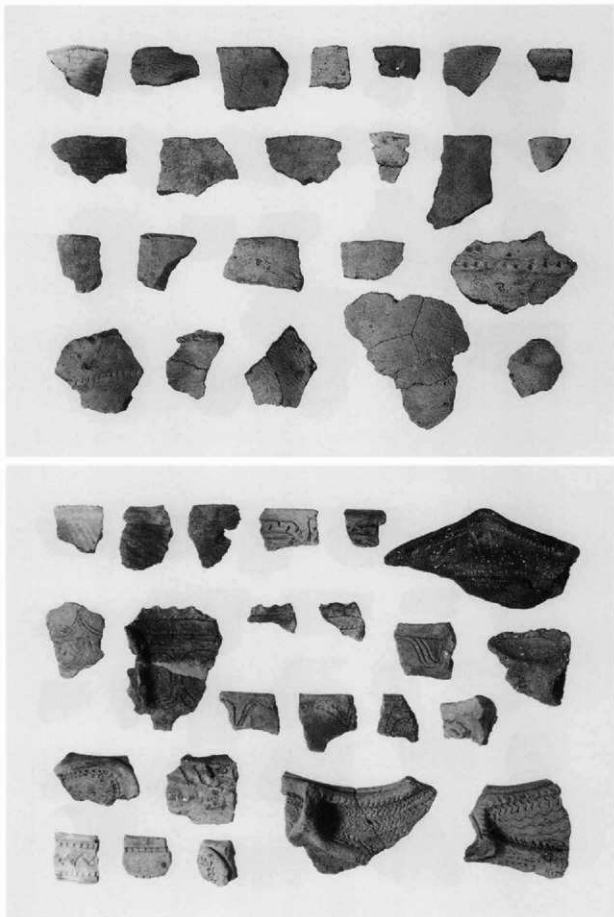
道溝外出土縄文土器(3)



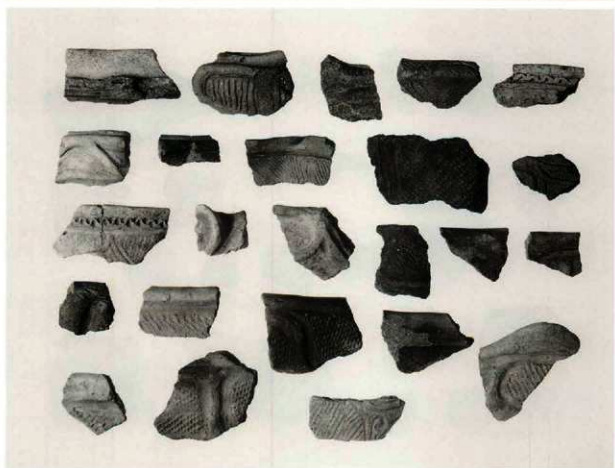
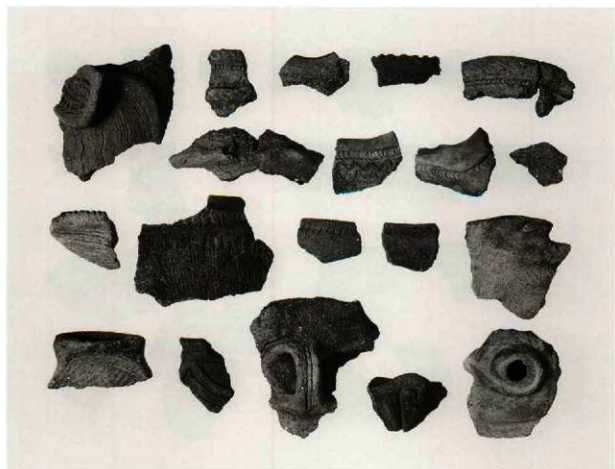
遺構外出土縄文土器(4)



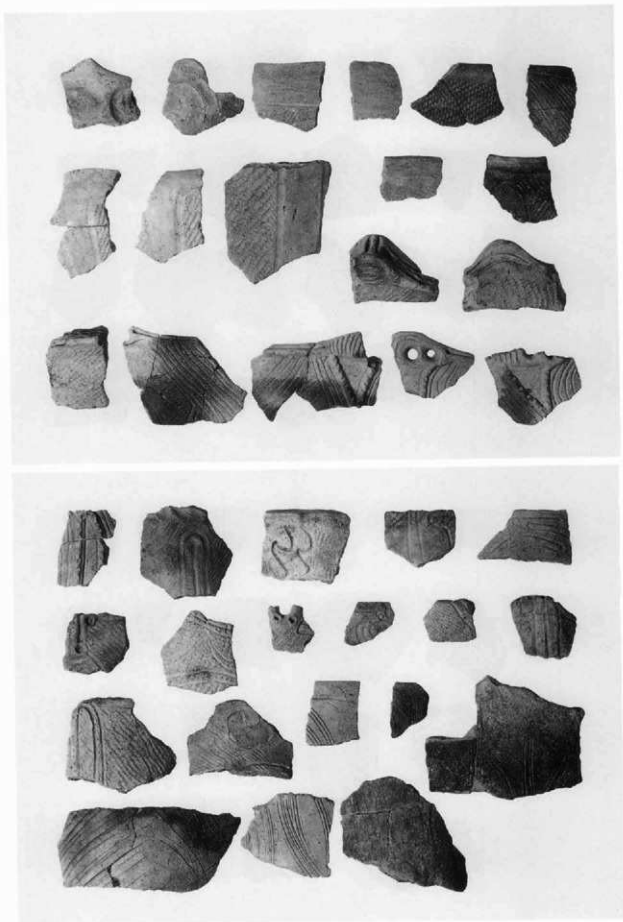
遺構外出土縄文土器（5）



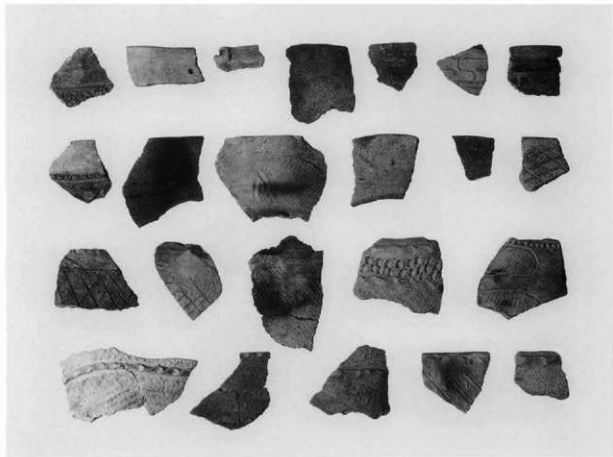
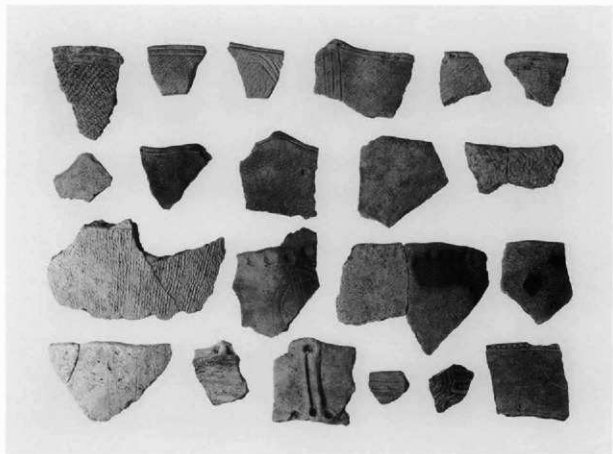
遺構外出土縄文土器(6)



遺構外出土縄文土器（7）



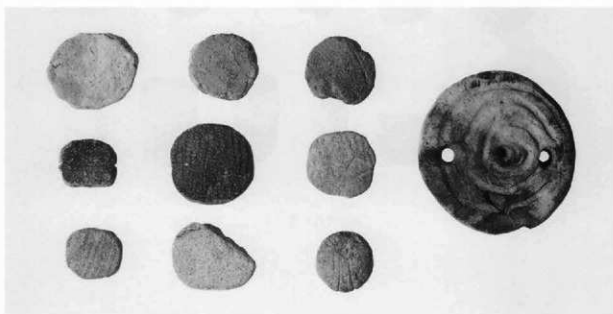
道博外出土绳文土器(8)



造構外出土縄文土器（9）



遺構外出土縄文土器 (10)



縄文時代土製品・石器 (1)





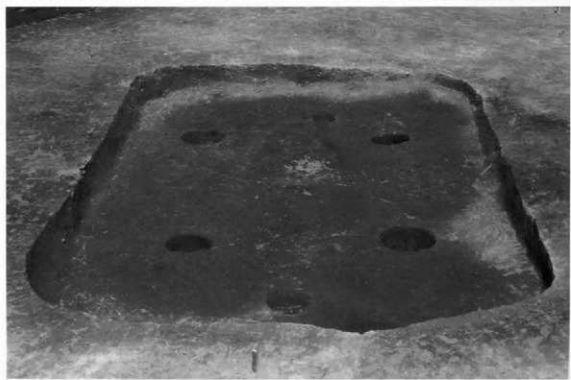
縄文時代石器（2）



SI001



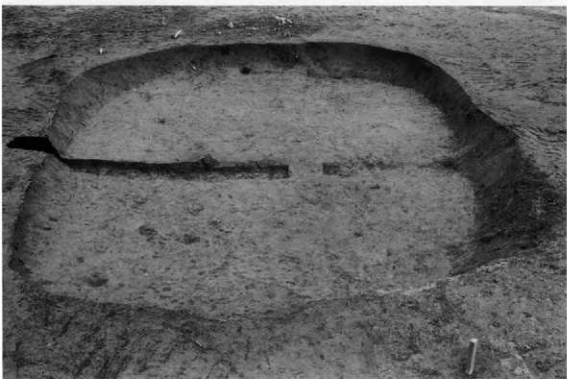
SI002



SI101



SI103



SI104



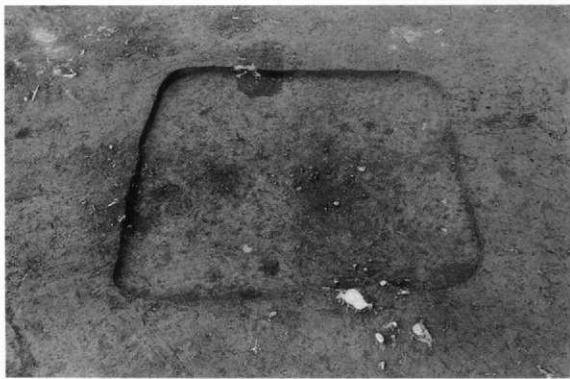
SI107



SI108



SI109



SI110



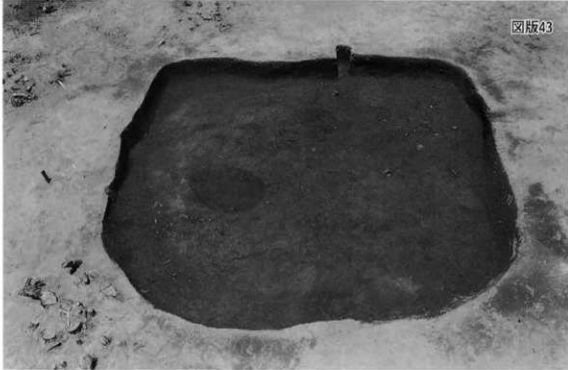
SI111



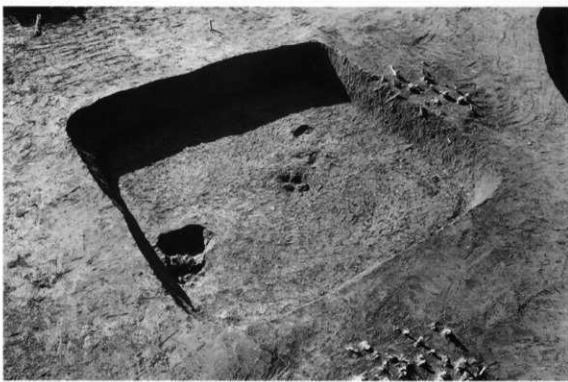
SI112



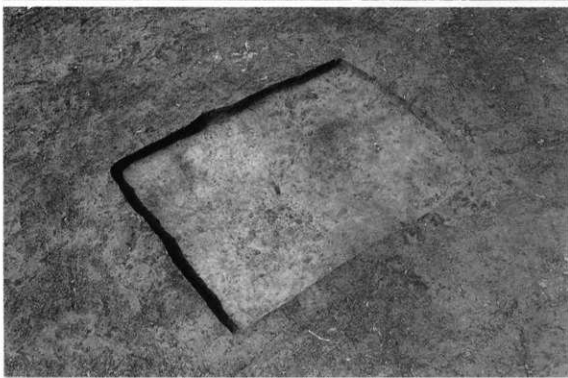
SI114遺物出土状況



SI114



SI115



SI116



SI117



SI118



SI119



SI120



SI121



SI122遺物出土状況





SI122



SI123



SI124



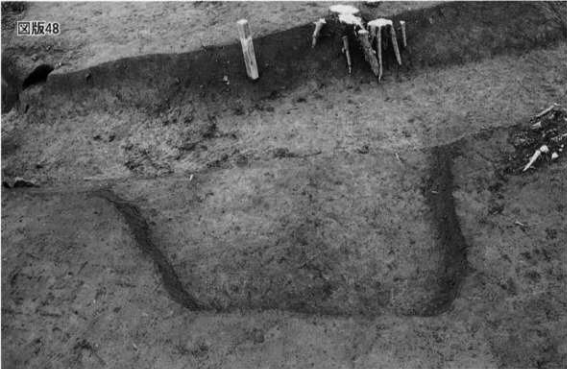
SI125



SI126



SI127



SI128



SI129



SI130



SI131



SI132



SI133

图 50



S1134



S1135



S1140



SI141



SI142



SM001



SM002



SM002遺物出土状況



SM003



SM003遺物出土状況



SM003遺物出土状況



SM004





SM005



SM006



SM007



SK256



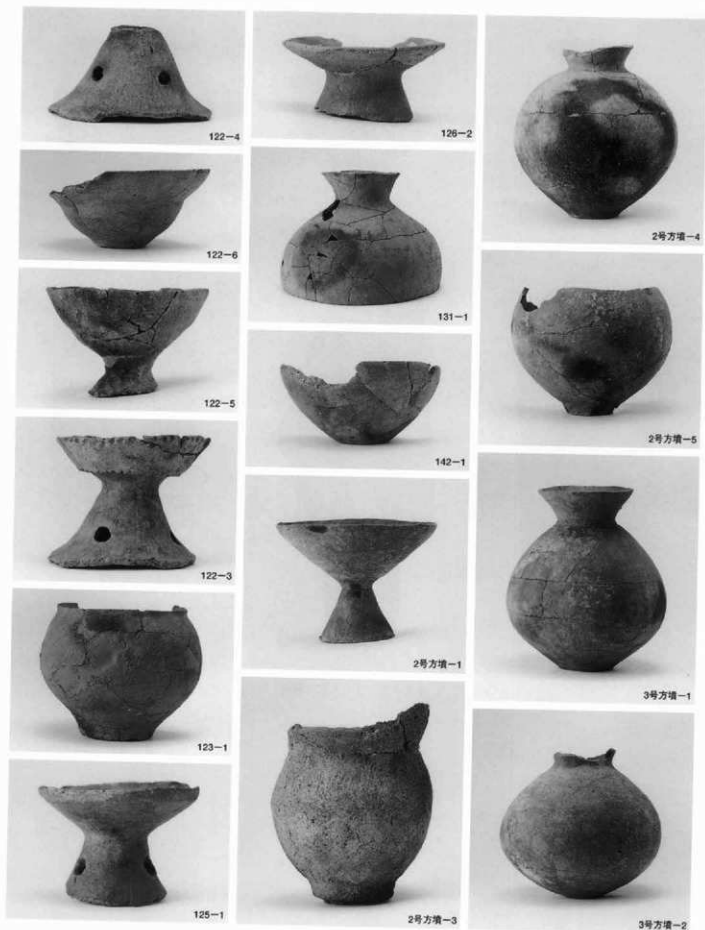
SI102



SB001



出土土器(1)



出土土器(2)



出土土器(3)・出土板碑

報告書抄録

ふりがな	まつぎさちくないりくこうぎょうようちぞうせいせいびじぎょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書							
副書名	印西市松崎Ⅰ遺跡							
巻次	2							
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	471							
編著者名	内田龍哉, 栗田則久, 山岡磨由子							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 Tel.043-422-8811							
発行年月日	2004年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
まつぎさち 松崎Ⅰ	ちばけんいんせいしまつぎ 千葉県印西市松崎 あびのぼろ 字坂東1006-1ほか	327	002	35度 46分 58秒	140度 08分 45秒	19930701 ～19940720 20000403 ～0020216	42.912㎡	松崎内陸 工業用地 造成によ る
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
松崎Ⅰ	散布地	旧石器時代	石器集中地点	9地点	頁岩剥片の接合資料, 削器, 搔器, ナイフ形石器, 角錐状石器, 石槍			
	集落跡	縄文時代	炉穴	20基	縄文土器・石鏃・土錘			
		弥生時代～ 古墳時代	土坑	4基				
			竪穴住居跡	35軒	弥生土器・土師器・土玉			
			方墳	7基				
			土坑	1基				
		奈良・平安時代	竪穴住居跡	1軒	土師器・須恵器			
		中・近世	地下式坑	1基				
			土坑	7基	板碑			
			掘立柱建物跡	2棟				
			溝状遺構	2条				

千葉県文化財センター調査報告第471集

松崎地区内陸工業用地造成整備事業  
埋蔵文化財調査報告書2

— 印西市松崎I遺跡 —

---

平成16年3月25日発行

編 集	財団法人	千葉県文化財センター
発 行	千 業 県 企 業 庁	千葉県中央区長洲1-9-1
	財団法人	千葉県文化財センター
		四街道市廣渡809-2
印 刷	株式会社	正 文 社
		千葉県中央区都町1-10-6

---